

---

# 超魔導機鋼 ゲーティア

neoblack

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超魔導機鋼 ゲーティア

### 【Nコード】

N2245S

### 【作者名】

neoblack

### 【あらすじ】

20xx年。悪の魔術師スライマン率いる秘密結社『バベリア』によって、世界は支配されようとしていた。

ごく普通の高校生である小中鍵次は、魔術によって生み出されたメガロス『ゲーティア』に乗り、彼らの野望を打ち倒した。

その戦いで大事な友を失い、戦いの後で職を失い、妻と別れ、『ゲーティア』にさえ乗れなくなっても、それでも鍵次は生きていかねばならない。

## 銀河の最終決戦：？（前書き）

20××年。悪の魔術師スライマン率いる秘密結社『バベリア』  
によって、世界は支配されようとしていた。

ごく普通の高校生である小中鍵次は、魔術によって生み出された  
メガロス『ゲーティア』に乗り、彼らを倒すべく立ち上がった！  
吼えろ、鍵次！ 行け、ゲーティア！ 平和を掴むその日まで！

## 銀河の最終決戦：？

星光を散りばめた空間に、一際目を焼く閃光が伸びる。赤くもあり、緑にも見え、青く滲むそれは、極彩の柱。

どこまでも伸びて進むはずだったそれが、その途中で断ち切られる。半ば強引に止められたそれは、荒ぶる力を持って余すように四方へ飛び散っていく。

やがてベクトルの全てを使い果たし、光が鳴りを潜める。隠されていた、光を遮る源が顕となる。

かつと開かれた五指は、僅かな星光を照り返すほど研き抜かれた鉄。それを守るように、厚手の白い装甲が覆っている。

「熾きろ、我が剣、小鍵！」

虚空を震わす謎の声に応じて、人型が蠢く。溝のように彫られた幾何学模様が、淡く発光を始める。

それと同期してか、右手の甲に当たる部分に穿たれた穴　まるで鍵穴のようなそれが回転し、目まぐるしく組み変わってゆく。

カロ・コブレイクス  
「暗号参照！　フェニクス！」

右腕が組み合わさり、宇宙に巨大な音響が響く。まるで凱歌のような、荘厳で美しい金属音。

今までは人の腕を模していた右腕が、大身の長弓を携えていた。

肉食獣の牙をそのまま誇張したような、冗談染みた創り。弓と言ふよりは、それ自体が敵の体を突き破る刃に相応しい。

鋼の左手を添えれば、弓は一人でに弦を張る。ただしそれは眩い光の線であった。

引き絞られる矢もまた、自ずから発生する。掴む左の指から、赤々と輝く鳥の飾り尾が伸びていく。

矢に見立てた鳥の飾り尾がぴんと張り詰め、さらに引き絞られる。解き放たれるその瞬間を、今か今かと待ち受けている。

「<sup>ディスプレイアロー</sup>解呪弓撃！」

虚空を突き進む不死鳥の尾は、もう一体の人型へと進む。

それは尾の接近を嫌がるように、極彩の光を再び放つ。

まるで川を遡る鯉のように、光を掻き分けて尾が迫る。意思を持っていいのか、複雑に機動する人型を追尾して離れない。

やがて至近となった矢を、人型が寸でのところがかわしてみせた。しかし、無傷と言うわけにはいかなかった。掠めた左肩をこっそりと抉り、矢は虚空へと消えていった。

あらゆる魔術呪法を例外なく解呪する退魔力の結晶 <sup>ディスプレイ</sup> 不死鳥の尾は、その人型さえも解呪し、装甲ごと抉ってしまった。

しかし、黒き巨人に慌てる様子は無い。傷ついた肩に手を添えもせず、ただもう一体の巨人を見つめている。

「敵性反応、健在。油断しないで、鍵次」

突然割り込む女性の声に、鍵次と呼ばれた青年は頷いた。まだ勝利を確信するには、あまりに淡い手応えでしかない。

「頼むぜ、メディナ。ちゃんとオペレートしてくれよ」

「まかせてちょうだい！……エーテル反応増大中よ」

メディナの声を受けて、鍵次がモニターに映る人型を見遣る。

やがて時間を逆に進めるように、肩の削げた部分に何かが補填されていく。ものの数秒も掛からずに、その人型は元の形態へと復元していた。

白き人型の中 鍵次が苦々しく顔を歪める。

「さすが、魔術の粋を集めただけのことはあるな」

「そう誉めてくれるな。お前の矢こそ、アグノスの装甲を丸ごと解呪するなど、ふざけたものだ」

黒い人型に乗っている者の声であろう。何とも嬉しそうなそれが、鍵次の耳に届く。しかし彼の心境は、男の声とは正反対のものであった。

今の射撃 ディーペルアローは、必殺を期したものであった。そ

れが容易に外され、何の効ももたらしてくれないことを、彼は戸惑いでもって受け止めていた。

やはりと言うべきか、あの黒い人型　アグノスと、それを駆る魔術師スライマンは、只者ではない。

だがそれでも、負けるわけにはいかない。彼らが生き延びて地球に戻れば、世界は彼の手に落ちるだろう。それだけの実力が、スライマンとアグノスには備わっている。その思惑を防げるのは、自分とこのゲイテアを置いて他にいない。

自惚れではない。もはや主だった魔術師は、スライマン率いる魔術結社『バベリア』との戦闘で傷つき、この巨大な人型　メガロスの運用が行えなくなっている。

メガロスの量産型とでも言うべきエラヒストスは、正直言って当てにはならない。まだ開発されて日が浅く、メガロスとの戦闘に耐えるほどの性能には達していないものが大多数だ。

だからやはり自分とゲイテアで、スライマンとアグノスを倒さねばならないのだ。

彼らが世界を手になれば、必ずや良からぬことが起こる。それはこれまでのバベリアの活動を見れば、一目瞭然だ。エラヒストスやメガロスを用いた数々のテロ行為は、世界規模の戦争を引き起こし、数々の地域を荒廃させてしまった。

そんな奴らを、許すわけにはいかない。魔術によって生み出したメガロスで、世界に数々の理不尽を撒き散らしたスライマンを、鍵次は許してはおけない。

「いくぞ。スライマン！」

ゲイテアの背中でエーテルが爆裂し、アグノスに向けて一直線にその巨体を押し出す。アグノスのほうもまた応えるようにエーテルを吹かし、速度を上げながら右の拳を振りかぶる。

魔術によって編み出された鋼鉄同士が衝突し、衝撃波が虚空を揺らす。足や腰からエーテルの火を吐き出し、器用に均衡を保って互いを殴り合う。

握り締められた拳が、分厚い胸部に突き刺さる。いかにも硬質そうだが、まるで水を含んだ雪のように弾けてしまう。

砕けた装甲の欠片が星光を受けて煌き、二体の巨人を包み込んだ。肩が弾け、腹が折れ、頭が碎ける。互いの拳に込められた超威力が、余すところ無く発揮される。

「鍵次、早く直して。エーテルが漏れちゃうわよ」

「言われなくなつて……」

鍵次が僅か意識を集中すると、ひび割れ、抉られた装甲が光に包まれる。やがて光が収まると共に、元の装甲が現れる。過剰なエーテルが変換され、堅牢な合金を形作る。

## 銀河の最終決戦：？（後書き）

最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。

劇的な導入を心がけ、このような形となりました。まだまだ続きま  
すので、よろしければお付き合いいただきたく思っております。ど  
うかよろしく願います。

## 銀河の最終決戦：？

砕いては直し、直しては砕くを繰り返す。永遠に続くかと思われた連環を断ち切ったのは、ゲーティアのパイロット　小中鍵次であつた。

「でえい！」

絶え間なく繰り返されていた殴り合いの中から、鍵次は一つだけを選び出し、ぐるりと両の掌で包み込む。そしてそのまま相手の馬力を殺さず、自分の後方へと投げ飛ばしてしまった。

とはいえここは、空気さえ存在しない宇宙空間。何かに当たる心配は無用であるため、アグノスは全身に備え付けてあるスラスターを器用に使い、余裕を持って態勢を整える。

お互いに優れたエーテル変換効率を持つ以上、並大抵の攻撃では決定打となり得ない。多少は装甲を砕いたとて、すぐに溢れるエーテルが傷を補填してしまう。

「修繕率89%。やっぱり殴り合いじゃ、埒が開かないわね」

「分かっていたけど、こつこつ通じないと凹むな」

「通じてないのはこつこつもよ。それに、増援が来てくれたわ」

「増援？」

虚空より光の尾を引いて新たに現れたのは、灰色の人型であつた。それはゲーティアと形が酷似していた。違ふのは配色と、手に携えた二又の銚だけである。

「ゲーティア!! プセマ。エグゾルか!？」

「悪い、遅くなった」

ゲーティア!! プセマの操縦者　ロン・ミツダ・エグゾルは、ゲーティアを庇うように前に出る。

「兄さん、頼むわね」

「おう、任せとけ」

実の妹であるメディナの通信に力強く答え、エグゾルは鋭く尖つ

た二又の穂先をアグノスへ向けて構える。しかしアグノスはその様を見て怖気ることさえせず、肩を竦めて呆れて見せた。まるで人のような挙動である。

「裏切り者で偽物のお前に、今さら何が出来る？」

「確かに、俺はあんたに育てられて、裏切った。魔術師として半端な野郎さ　でもな！」

エグゾルの一声を受けてか、ゲートティアップセマが力強く二又鉾を構え直す。穂先に宿らせたエーテルが励起され、淡く光を放って残光を引く。

「今の俺なら、鍵次と一緒になら、お前を殺せるぞ！　スライマン！」

二又鉾の間に雷が奔る。紫電に似るほど束ねられた高密度のエーテルが充ち満ちて　真っ直ぐに放たれる。

十分に伸びたところでエーテルの柱は成長を止め、まるで大身の刃のような形状を保つ。

高濃縮エーテル加速器『バルダギスンシス』。ゲートティアップセマから発生させたエーテルをさらに濃縮、加速させ、二又のフィラメントから放つ。

ぎらつくエーテル光を差し向けて、ゲートティアップセマが威嚇する。その間に着々と、ゲートティアは装甲を復元させていた。

「鍵次、精霊を全部呼べ。でなけりゃ勝てないぞ」

回復を見計らったエグゾルが、鍵次へと回線を繋ぐ。

確かにエグゾルの言うとおりだ。素のままのゲートティアでは、アグノスに対抗するのは難しい。ここは全力を尽くすべく、ゲートティアが従えている全ての精霊を呼び出すしかないだろう。

「行くぞ！」

ゲートティアップセマが飛び出し、振りかぶったバルダギスンシスでアグノスに切り掛かる。

その間に、鍵次は準備を整える。あのメガロスに倒すための魔術

を。

「小鍵機関、展開。シエムハムフォラシユ・システム、完全開放！」  
右手の鍵穴が、これまで以上に激しく回る。輪胴式機構が備わったそれががちがちと打ち鳴り、堅き戒めを解いていく。音が鳴る度に、何かが右腕から飛び出していく。

それはゲーティアが身に纏っているのと同じような、白くて分厚い装甲だった。見れば、それらの一つ一つに狼、鳥、獅子、龍などの意匠を施されている。

飛び回る装甲が誘われるようにゲーティアに張り付ていく。それでもなお右腕は回り続け、装甲を吐き出し続ける。

小鍵が司っている全ての封印が、解き放たれていく。数え七十二装甲全てを取り付けたゲーティアは重厚さを増し、進むエーテルが装甲の隙間から溢れ、プロミネンスのように対流しながら吹き上げた。

「テオルギア・ゲーティア！」

七十二柱全ての精霊で武装した、ゲーティアの最終戦闘形態。装甲化させた精霊を纏うことで召喚までのタイムラグを無くし、さらには並列して精霊を使役することを可能としている。

「バシン！」

叫びと共に精霊を活性化し、バシンの魔術が顕現する。素早さに置いてあらゆる精霊の追隨を許さないバシンの力で、ゲーティアが高速で運動を始める。

巨大な質量などまるで無いかのよう、宇宙空間を移動する。凡そ五十メートル近いその体躯から判断するに、移動距離は途方も無いものとなっている。

「フルフル！」

鍵次の叫びに呼応して、ゲーティアの右拳に紫電が迸る。それを生のまま、最大戦速でアグノスに叩きつける。

何も無い空間に、音鳴らぬ音が響き渡る。

アグノスは腕を交差してこれを受けたが、完全には御しきれず、後方へ弾き飛ばされた。

「ドンピシャリだ、鍵次」

その先には、ゲーティア「プセマ」がいた。バルダギスンシスを中段に真つ直ぐ構え、穂先を遙か遠いアグノスへと向けている。

「エーテル充填率、八十、九十……百！」

二又の穂先に満たされたエーテルが、解き放たれる。

「エーテルバスター！ 吹き飛ばせ！」

バルダギスンシスは巨大なエーテル加速砲と化し、極太のエーテルを打ち出した。その直径は、およそゲーティアと同じ程度である。メガロスを丸ごと飲み込むほどのエーテルは、過たずアグノスを捉えた。光の筒に、アグノスの巨体が掻き消される。

「まだまだッ！ くだばりやがれ！」

エグゾルはなおバルダギスンシスに魔力を注ぎ込み、エーテルを加速させる。

銀河を極彩色のエーテルが渡り、長き尾を引いた。

やがて充填されていたエーテルが底をつき、ようやく砲撃が収まる。過剰な運用を強いられたバルダギスンシスがすぐさま冷却を行い、スラグを排出する。

「やったか？」

エーテルバスターの直撃。メガロスのような魔術的大質量さえも蒸発させて余りある一撃である。

すぐにエグゾルは広域走査を開始する。アグノスを倒した痕跡として、残骸か何かを探し出す。

「エグゾル、後ろだ！」

モニターの拡大画面を処理していたところへ、鍵次の怒声がゲーティア「プセマ」のkokopitto内に鳴り響く。それに被せられる、捕捉警告音。

「何!？」

ゲーティア<sup>II</sup>プセマの背後に現れたのは、今しがたエーテルバスターで消し去ったはずのアグノスだった。

即応し、バルダギスンシスを振るうが、明らかにアグノスの方が対応は早かった。流星のように尾を引くエーテルの帯が、袈裟懸けにゲーティア<sup>II</sup>プセマを襲う。

「エグゾル!？」

濃密なエーテルで薙ぎ払われたゲーティア<sup>II</sup>プセマが、装甲を撒き散らして宇宙空間を漂う。

「エグゾル! エグゾル!」

鍵次が何度も呼びかけるが、ゲーティア<sup>II</sup>プセマからの応答はない。気絶しているのか、それとも。

「よくも、エグゾルを……!」

戦友の窮地に、鍵次の身体と心がどうしようもないほど揺れ動く。その振幅が魔力となり、ゲーティアが力に変えてくれる。

鍵次の激情が、ゲーティアの体を駆け巡る。操縦者の心象に相応しい形を選択し、顕現させる。

「テオルギア・ゲーティア! アラギ・リョダリ獅子変化!」

獅子の化身を持つ精霊たちを活性化し、苛烈な闘争本能の全てを魔力に変換して諸害を屠る形態である。

「マルバス、ヴァレフォル、プルソン、アイベオス、サブナク、ヴィネ、アロケル、オリアス、ハウレス」

呼ばわれた精霊が獅子の属性を全開にして、装甲を相応しい形に変化させる。

全身の装甲に獅子の意匠が現れ、それぞれが虚空に向かって咆哮する。立ち昇るエーテルは焰の如くに燃え盛り、操縦者の心象をそのままに現実へと変換している。

「ウオオオオオオオツツ!」

体中に獅子を纏い、心象さえ獅子の如く猛々しくなった鍵次が、虚空に向かって吼え猛る。叫びと共に放散されるエーテルが宇宙空間を震わし、アグノスの巨体さえ揺さぶる。

## 銀河の最終決戦：？

背部スラスタが持て余したエーテルを過剰に吐き出し、ゲート  
イアの体を押し出す。

赤い闘気を纏う獅子頭の巨人の右手が、白々と熱せられる。

「ハウレス！」

右手に宿ったハウレスの魔術。召喚者の意のままに炎を操り、敵  
を焼き尽くす魔術が、ゲートイアの右手に凝縮される。

「だらあああああ！！」

過剰なエーテル推進。その勢いのまま繰り出される超高熱の拳。  
並みのメガロスならば撫ぜ過ぎただけでも装甲のエーテル合金が溶  
解してしまうほどの熱量を、鍵次はスライマンに向けて叩きつけた。  
全てを燃やし尽くし、溶かし尽くすはずだった右の拳を、アグノ  
スの左手が包み込む。

ゲートイアと同じだけの熱量が、アグノスの左手にも宿っていた。

それらは互いに拮抗し、打ち消しあいながら競り合う。

シンパセティック・マジック

共感魔術。相手の魔術に共感して行われる魔術の総称である。

あらゆる魔術に共感し、即座に解析・発現、または対抗する。理  
論上、全ての魔術を行使できるそれこそが、魔術の粹　アグノス  
の力である。

「そんな魔術では、幾らやっても無駄だぞ。水面に石を投げ込むよ  
うなものだ」

確かに、スライマンの言うとおりだろう。こちらの魔術を全て返  
されるのだから、空しい消耗戦になるのは目に見えている。そうな  
れば、鍵次に勝ち目は薄い。

生粋にして世界最高の魔術師であるスライマンに比べ、鍵次はた  
だゲートイアと適合し、偶々動かせるだけの一般人だ。彼自身は、  
魔術師でも何でもない、単なる高校生である。

ゲーティアに、乗らなければ。

「いいぜ。やってやるよ……」

それでも鍵次は、ゲーティアに乗っている。ただの一般人だからといって、最強の魔術師が相手だからといって、今さら逃げ出すつもりはない。

目の前の男を野放しには出来ない。絶対に許せない。

ゲーティアに乗ることもなく、何の力も与えられていなかったら、そんなことすら思わなかっただろう。自分も『バベリア』の魔術テロに巻き込まれて死んでいたかもしれない。

だが、鍵次は生きている。生きて、ゲーティアに乗って、スライマンに対抗する力を持って、今この場に存在している。

それだけが、彼の真実だ。他の可能性は、とうの昔に捨ててきた。

「小鍵機関、総展開」

右手の鍵穴が、また回りだす。それは機械的ななめらかさで滑り出し、高音を上げて速度を上げていく。

「ぬう、うぐ……」

小鍵を回しながら、鍵次は呻く。今までこれほどの重圧の中で、小鍵を展開させたことはなかった。何せ今ゲーティアの右腕に、世界の命運が握られているのだ。

共感魔術を破るには、共感魔術にさえ解析できないような、尋常ならざる魔術を行使するほか無い。スライマンさえ知らない、味わったことのない魔の一撃を、その体に叩き込むしかない。

それはゲーティアにとつて、小鍵機関以外の何物でもなかった。ゲーティアのみに搭載された、未だ誰にも、鍵次にさえ正体の分からない魔導構造物。あのスライマンに楔を打ち込むとすれば、それを行使するべきだ。

しかし小鍵機関さえ解析されてしまったら、鍵次は本当に勝ち目を失う。そうなれば世界は、スライマンの支配に屈することになる。(それでも、撃つしかない)

ゲーティアの右手が、開いた。鎧の継ぎ目に従って、部品が爆ぜ割れて飛び散ってしまう。

「我、鍵にして拳ならず。我、拳にして剣ならず。我、剣にして鍵ならず」

口訣が紡がれ、右手の部品が目まぐるしく入れ替わる。小さなそれらの一つ一つが形を変え、扁平に伸びてゆく。一度は散逸したそれらがもう一度集まり、何かを形作ってゆく。

淡白い光を帯びたものが、今は右腕の代わりとなっていた。握り締めていた拳は既に無く、あるのは長く剣のようになった鍵だけだ。拳のような、剣のような、鍵のような、小鍵機関の真の姿。ゲーティアの最終必滅兵装。

ゲーティアは右腕を引き絞り、左腕を照星に見立てて突き出したまま静止した。この一撃に、世界の、皆の運命が掛かってしまっている。その余韻を、余すところ無く受け止めるように佇んでいる。無論、中でゲーティアを操る鍵次の呪的高揚は、この時最高潮を迎えていた。

ゲーティアを包む光が、これまでとは比べ物にならないほど大きくなる。星の輝きに匹敵するエーテル光を伴って、ゲーティアが轟進する。

右腕の小鍵機関が唸りを上げて回転し、エーテルを巻き込みながら内圧を高めていく。

「行くぞ！」

突進と共に突き出された小鍵が、アグノスの体を貫いた。煌々と照り輝く尖塔が、アグノスの背面から飛び出す。

削岩機さながらに回っているが、当のアグノスには傷一つ見られない。まるで幽鬼か何かのように透けて、小鍵はアグノスを貫いている。

小鍵は物体ではない。ゲーティアの、そして鍵次によって顕現する概念そのものである。

全てを封じ、全てを放つ鍵。

「アペレフセロス、開放！」

鍵次の命令を受けて、右腕が右方に捻られた。敵かな作動音が、アグノスの中から轟く。その瞬間、小鍵に宿る魔術が発動した。

対象の魔的構造を小鍵によって解読し、内側から解き放つ、開放の魔術。

それ自体が膨大な魔術呪法の塊であるメガロスに行えば、文字通り構造が裏返し、実体を保つことが不可能なほどに壊滅する。ゲータィアが持つ、必滅奥義の一つである。

アグノスの巨体が、さらに膨れ上がる。不自然に盛り上がった部分が装甲を押し広げて、断ち割ってしまう。中からはアグノスの使用しているエーテル光とは違う　ゲータィアと同じエーテル光が漏れている。

「あ、が、ぐ、ぎ、が」

オープン回線になったままのスピーカーから、スライマンの呻き声が聞こえる。メガロスの被る感覚は、ある程度まで操縦者である魔術師にフィードバックされる。だとすれば彼は、まさに身体が内側から爆裂しようとしているのだ。

多少は苦しんでもらわねば、奥の手を出した甲斐が無いというものだ。

しかし崩壊寸前だったアグノスの身体が、突如その膨張を止めてしまった。

「な、に!？」

「膨張が止まってる!?　鍵次、もっと小鍵を回して」

「回してるよ!　回してるのに」

オペレーターのメディナさえ困惑している。間近で体験している鍵次のそれは、輪をかけたものだった。

「こんなものかよ、小鍵！」

大きさを戻したアグノスが、傷を修復していく。痺れたように震

えてはいるものの、動くことは出来るようだ。

開放が止められる。必殺を期した奥義が通じない。

そんなことは、これまでもあった。鍵次は思い直し、気を持ち直す。

ゲーティアの力が通じない相手など、これまで幾度も会ってきた。だとしても、ゲーティアは勝って、生き残ってきたのだ。

「こんなもんなわけ、ないだろうがッ！」

鍵次の叫びに反応してか、小鍵の輝きが一層に高まった。

「ゲーティア、アダナクラスイ・スフラギダ反転封印！」

ゲーティアは右腕を、今度は左へと捻った。再びの作動音が、宇宙に響き渡る。

開放と対を為す封印。魔的構造を読み解くまでは同じだが、今度はそれを封じ込めてしまおう。ゲーティアが持つ、必滅奥義の二つ目である。

先ほどは膨れ上がったいたアグノスだが、今度は縮み始める。またもその変化に耐えられず、装甲が弾け飛び、関節が軋む。

「あがあああああ！！！」

スライマンの叫喚が劈くほど聞こえてくる。それでもまだアグノスは形を保っている。封印が完全に行われたなら、既にアグノスは跡形も無くなっているはずだ。

「まだまだぞ、スライマン！」

その抵抗も鍵次にとっては織り込み済みである。まだ奥義は二つしか見せてない。まだまだゲーティアの必滅奥義は残されている。

「封開連環！」

ゲーティアは右腕を、左へ右へと目まぐるしく回し始めた。重苦しい作動音が響くたびに、アグノスの身体が反り返るほどの衝撃に見舞われる。

開放と封印を絶え間なく繰り返す必滅奥義。魔力の断絶と増大の振幅が、対象メガロスを内部から破壊しつくす。

膨張と収縮を繰り返すアグノスが、がくがくと人形のように揺れ

動く。直感的操作を搭載したメガロスは、搭乗者のイメージそのままを挙動に表すことが可能となっている。なのでこの人間味の失せてしまった動きが、今のアグノスの搭乗者がイメージする動きなのだろう。

「消える、消える、消えるおおおおお!!」

もはや魔力の限りを尽くして行なわれる封開連環。例え幾度であろうと、鍵次は放つつもりでいた。スライマンが立っているうちは絶対に屈しない。意地のような、義務のような、どちらともつかない激情が、鍵次の中で激しく燃え盛っている。

## 銀河の最終決戦：？

そのままスライマンごとアグノスを滅するはずだった小鍵は、何の前触れも無く回転を停止させた。

小鍵を動かしていた右腕から輝きが失せ、その動きまで止まってしまう。まるで電源の切れた機械のように、ぴたりと身じろぎ一つ起こさない。

それは明らかに、メガロスの燃料でもあるエーテルの枯渇を意味していた。稼動に必要なエーテル圧が確保できず、右腕は機能停止に陥ってしまった。

言うまでもなく、必滅奥義は大量のエーテルを消費する。封印や開放の一動作でもごっそりとエーテルを持っていつてしまうのだから、それを繰り返す行つ封開連環のエーテル消費量は筆舌に尽くしがたい。

それだけの攻撃を受けてなお、アグノスは形を保っていた。

黒々とした巨体を聳やかし、悠然とゲートイアを見下ろしている。テオルギア状態となったので二体の体格は同等のはずだが、ゲートイアの方はまるで消耗したといわんばかりに小鍵だけをアグノスに差し込んだまま頂垂れているため、幾分も小さく見えてしまう。

事実、操縦者である鍵次は疲弊していた。人の精神から生み出される魔力をエーテルに変換して戦うメガロスにとって、魔術師は操縦者であると同時に燃料元である。そして過剰なエーテル循環器系は、半ば強制的に操縦者から魔力を奪い取る。

心魂の枯れ果てるような虚脱が襲い、その信号をゲートイアが受け取り、相応しい挙動を顕す。

必滅最終を期した奥義が、不発に終わった。その事実を一番に実感しなければいけない鍵次が、呆けてしまっていた。

「耐えた、耐えたぞ！ これで小鍵は、私のものだ！」

「鍵次、起きて！ まだよ、まだ敵は動いてる！」  
スライマンの勝ち鬨とメディナの悲鳴が渦巻くコクピット。その半分も、鍵次の耳には届いていなかった。今自分はどうするべきか。それだけが彼の関心事だった。

ここは一度離れて、精霊をけしかけるか。それともいつそ、この場から逃げてしまおうか。

（違う、違う！）

そのどれも、鍵次は選ぶ気は無い。

まだ動ける。まだ死んでない。まだ、自分の魔を吐き尽くしていない。止まるのはその後だ。休むのも無しだ。自分をそのままそっくり曝け出して相手にぶつけてからでないと、何も始まらないのではないか。

万事をゲーティアに託し、投げ渡す。自分はただ、エーテルの赴くままにすればいい。

そう思えば、心も身体も解き放たれたように軽くなり、自然と背筋が整った。

世界だ何だと、どうやら気負いすぎていたらしい。世界を、皆を救いたいという一心すら、魔力においては濁りでしかない。

魔は単純明快、自分ひとりに由来し帰結するものである。己の欲するところにこそ、魔が宿っている。

世界を救うのではない。皆を救うのではない。打ち倒し、挫いてしまいたいのだ。こんな理不尽の塊を、鍵次はどうしても許してはおけない。この世にあってほしくはないと、魂の底が訴えているのだ。

ゲーティアの頭部が、捕獲される。アグノスの指が、王冠ごとがっちりと握っている。

「さあ、今度はこちらの番だぞ」

喜色を浮かべたスライマンの声が、明瞭に聞こえてくる。その音

も、台詞も、全てが憤ろしい。今この瞬間に、こんな輩が存在しているということ自体に、鍵次の魂は堪えられない。

理不尽を許せない、過剰極まる潔癖。それこそが魔術師ではない鍵次を、ここまで駆り立ててきた。

こいつを倒せれば、全てが終る。全ての理不尽から、鍵次は開放される。

「ただ、ただぞスライマン！」

アグノスの手を払いのけ、ゲーティアの身体に再びエーテル光が宿る。止まっていた小鍵の動きが再開し、ごろごろと歯車が音を立てて走り出す。

「小鍵機関、絶対封印！」

新たな命令を受けて、小鍵が形を変え始めた。剣のように尖った節がさらに伸び、枝のように入り組んで二体の周囲を囲んでいく。

ゲーティアの右腕を中心に、球状の結界が展開する。

絶対封印。小鍵を基点とし、指定した空間ごと封じ込める捨て身の技。本来なら、使うはずの無い技である。何故ならそれは、ゲーティアの封印が前提となっているからだ。

二体の巨人を取り囲むように、光る枝が幾何学模様を浮かび上がらせる。その文字や線の一つ一つに、鍵次の魔力が込められている。スライマンを決して許さない意志が、その定められた空間を占有していく。

「貴様、何をやる気だ!？」

「お前は、もうこの世に残さない。俺と消えろ、スライマン！」

抵抗するアグノスを、小鍵から伸びた枝が絡め取っていく。それはゲーティアにも伸び、同じように身体を縛り上げていく。

絶対封印に逃げる余地は無い。小鍵を刺されている方も、刺している方も、等しく封印してしまう。だからこそ、何人も逃れることは出来ない。

「鍵次、何……の! やめ……!」

メディナからの通信が、不明瞭になってきた。空間の断絶に伴い、通信が届きにくくなっているのだらう。封印が順調に進んでいる証左だ。

急に、心を締め上げられるような悔恨が沸き上がる。この技が成功すれば、勿論メディナと会うことは二度となくなる。

もう彼女の声も聞けない。手も握れない。その存在を確かめることも出来ない。折角、心が通い始めたのに。

ゲーティアの体が、がくりと揺れる。モニターを見れば、アグノスの両手が肩を掴み、こちらに詰め寄ってきていた。枝の拘束が弱まっているらしく、それを振り払っている。

「しまった!？」

自分の悪手に気づいたときには、もう遅い。アグノスはがっちりとゲーティアを捕獲している。

魔力とは、認識である。己の心の内を現実世界に認識さえ、顕現させる精神力が全ての要となる。僅かな動揺、悔恨、空想……。心の隙間に過ぎるそれらは、魔力の純性を下げ、魔術の恣意性を損なう。

「魔術師ではないものに、私が倒せるものか！」

ゲーティアの肩部装甲が弾け飛ぶ。アグノスの指が食い込み、上半身が拉げていく。

同じメガロスだというのに、出力に大きな差が生じる。それも当然だらう。ゲーティアに乗っているのは、単なる普通人。魔術の一つも使えやしない、ただの人間だ。それに対しアグノスを操るのは、生粋の魔術師。史上最悪の魔術師であるスライマンだ。

装甲の割れ目から、蛍光色の煙が立ち昇る。ゲーティアの循環器系が破壊され、エーテルが漏れ出てしまったのだ。早速腕部のテンションが落ち、小鍵の回転が鈍り出す。

## 銀河の最終決戦：？

このままでは、絶対封印の結界を維持出来ない。アグノスを封印することが出来ない。

世界を救えない。理不尽を取り除けない。自分の望みが、叶えられない。

(嫌だ、くそっ！ くそっ！)

腹の底からは沸々と魔力が湧き上がっているのに、アグノスを跳ね除けるまでには至らない。それ以上の力を被せられ、押し潰されてしまいそうだ。

ゲーティアだけではない。鍵次自身が、膨大なエーテルに飲み込まれそうだ。スライマンという類稀なる魔術師に、屈してしまいそうだ。

(だめだ、考えるな！ 考えたら、飲まれちゃう！)

弱気は魔力を削ぎ、エーテルの活性を止める。魔術師にとって、それもメガロス戦闘において、自身の精神を操作することは基礎であり要となる技術である。

心の在り様がエーテルに表れ、メガロスを駆動させる。強く願えば強く、弱く望めば弱く、メガロスは動いてくれる。

やはり、自分が魔術師じゃないからいけないのか。自分が勝ってきたのは、単にゲーティアが優れていただけなのか。

(やめる、やめる、やめる！)

自分の頭から止め処なく、否定的な考えが漏れてくる。

そんなネガティブな雰囲気を持ったのは、体ごと引き裂かれるよくなるとつもない衝撃と、モニターに焼付けを起こすほどの閃光だった。衝撃緩衝材の役割も果たすエーテルに満たされたコクピット内で、鍵次の体が上下左右に激しく揺さぶられた。

「ぐあああああ！」

振られる頭を何とか正常に戻し、ウィンドウを呼び出して状況の把握に努める。しかしそんなことをするまでもなく、けたたましいアラームが全てを伝えていた。

「右腕部破断!? 何が起きたんだ!?!」

警告の通り、ゲートティアは右肘から先が喪失したまま、宇宙空間に投げ出されていた。

さらに異変は続く。破損警告に被せるように、今度は追加装甲の強制廃棄命令が受託された。

「な、え!?!」

鍵次が混乱から回復するよりも早く、緊急解除ボルトに着火され、七十二の装甲全てが飛び退っていく。絶対封印の結界の中へと。

その行き先を見て、鍵次は言葉を失う。そこではゲートティアに似た人型が、アグノスと対峙していたからだ。

「よし。偽典フセマとはいえ、少しは使えるようだ」

精霊の装甲を纏って出来上がったその姿は、先程のテオルギア・ゲートティアそのものだった。違うのは、手に携えた二又の銚。

「エグゾル!?!」

テオルギア・ゲートティアフセマ。鍵次の戦友、ロン・ミツダ・エグゾルの駆るメガロス。

無事であったことを喜ぶよりも、彼の行おうとしていることに鍵次の関心がいった。それだけ切迫した事柄だったためである。

「エグゾル、貴様!」

スライマンが叫ぶ中、アグノスの姿が光に霞んでいく。再び成長を始めた結界が、枝節を伸ばしているのだ。

絶対封印が、継続している。既に小鍵はゲートティアと切り離されたと言っのに、エーテルが注ぎ込まれている。

それを行っているのは他でもない。エグゾルと、ゲートティアフセマだ。ゲートティアの模造であるゲートティアフセマならば、ゲート

ティアの装備を使用できるのは道理だ。

道理、なのだが。

「エグゾル、何する気だ!？」

いちいち訊ねるまでもなく、鍵次には分かっていた。エグゾルは鍵次に代わり、スライマンに絶対封印を施そうとしている。

断たれた腕部からフィールドバックされる痛みも気にせず、鍵次は結界に張り付き、エグゾルに手を伸ばす。

「やめろよ、エグゾル! 馬鹿なことはやめてくれ!」

通信を全開にして呼びかけるが、返ってくるのは雑音ばかりだ。

「鍵……次」

ノイズの中に、エグゾルの声が紛れ込む。鍵次はさらに声を張り上げて呼びかけるが、それらしい反応はない。順調に進む空間断絶によって、もはや相互通信も出来ない状況のようだ。

「こいつ……俺が連れて……メディナ……頼ん……」

「エグゾル、どういうことだ、エグゾル!？」

もうエグゾルの言葉は、ノイズに霞んで聞き取れない。

結界が、真っ白な光の球と成る。重なり合う幾何学模様が完全に閉じ、空間の断絶と封印が完了する。こうなれば外部からの干渉は一切拒絶される。

「エグゾルウウウ!」

それでも鍵次は、叫ばずにはいらなかった。彼の叫びが、星の海に残響した。

間もなく球体はぎゅっと縮退し、一瞬にして跡形も無く消え去った。史上最悪の魔術師も、鍵次の親友も、全てを伴って、道連れにしてこの世から存在を消失させた。

勿論ゲーティアのリーダーには、何の反応もない。倒すべき敵、悪の魔術師スライマンは、彼のメガロスであるアグノスごと、この世から消滅したのだ。これで全てが終った。世界を脅かしてきた諸悪の根源は、今ここで潰えたのだ。

しかし鍵次の心は、間違っても晴れ渡ってなどいかなかった。目標を達成した喜びなど微塵も無い。ただ虚とした空漠を心を感じながら、今しがた起きた出来事に啞然としている。

「メディナ、メディナ……」

縋るような弱さで、鍵次はメディナを呼ぶ。

メディナもまた、つらいはずなのだ。実兄が今正にいなくなった苦しみに、耐えているのだ。

だというのに、鍵次は頼らざるを得なかった。今は声だけの彼女に縋らねば、ゲーティアを動かすことも出来そうに無い。

「鍵次、帰ろう」

その言葉が、聞きたかった。自分からは、言い出せなかった。

## 二十年の時を経て：？

事務所の机の上、がたりと自分の体が勝手に震えてしまい、それによつて鍵次は目を覚ました。ゆるりとまどろんだ白昼夢から覚めてみれば、そこはいつもの仕事場であつた。

「あれからもう、二十年か」

感慨深げに呟いて、鍵次は時計を確認する。もうすぐ昼の休みが終つてしまう。いちいち感傷に浸っている時間などは無い。彼は急ぎ身支度を整えて、建築用エラヒストスであるDKN 8、通称ドケンヤに乗り込んだ。パーソナルキーを差し込んでドケンヤの動力を起こし、起動させる。コックピットのシートに深く腰を沈め、手元の球体にひたりと手を載せると、ドケンヤは徐に立ち上がり、建材を積載したダンプに向かつて歩き出した。

エラヒストスとは、魔術師の生み出す巨大ロボット。メガロスを科学的に分析し、擬似的に再現したメガロスである。本来のメガロスよりも性能が劣るものが多いため、揶揄を込めてギリシャ語の『最小限』を意味する言葉で総称されている。正式名称では長過ぎるので、単にエラヒー、鯉と呼ばれることの方が多い。

エラヒストスの開発が行われたのは、第一次メガロス大戦の少し前のことだつた。当時はスライマンの脅威に対抗する戦力を揃えるつまり魔術師の操るメガロスの代替品という意味合いで開発されてきた。

第一次メガロス大戦の終結後は平和利用が優先的に薦められ、今度はメガロスではなく、人間の代替、あるいはこれまでの産業ロボットの代替として先進国で開発・導入されている。機械工学のみを用いたロボットよりも、格段にエネルギー効率の高いメガロスの技術を流用したエラヒストスは、他の機械にはない人間的汎用性を発揮し、特に建設作業には欠かせないツールとしての地位を獲得した。

建材を脇に抱え、鍵次のドケンヤが歩く。まるで人間の歩行運動と遜色なく、その足取りに危うげな所は見受けられない。エラヒストスはメガロスと同様、操縦者のイメージをそのまま挙動に表してくれる直感的操作クリティカルエモーションシステムを搭載しているため、基本的には操縦者がデバイスに手を当てるだけで思い通りに動いてくれる。それでもメガロスに乗っていた鍵次にとっては勝手が違うため、乗った当初は慣れるのに苦労したものだ。エラヒストスの開発当初は、手から電位信号を受け取るために針を刺したり、パッチを貼り付けたりしていたが、現在ではメガロスのそれを再現するため、球体型のデバイスが多用されている。

そうしたエラヒストスの多くが、建設現場で活躍している。これは第一次メガロス大戦後に多くの都市で行われた復興事業のためだ。

悪の魔術師スライマンが起こした戦争は、敵味方双方でメガロスが多く用いられたことから、第一次メガロス大戦と名づけられている。その復興作業は二十年近く経った今でも行われ、特に戦闘の激しかった日本では、未だ街中にクレーターや壊れたメガロスが残っていることも珍しくない。

その復興は、主に建築業界を潤わせた。メガロスがもたらしたことから、メガロス特需などと業界では言われている。心無い評論家はそれを不謹慎だということもあるが、仕事があるのは基本的にいいことだ。汗水垂らしてビルの残骸やメガロスを退かし、土砂を運んでクレーターを埋め、その上に新たな施設を建てることを、外野にとやかく言われる筋合いは無い。

鍵次の勤めている会社は薄給の割りに重労働だが、中小企業だからか決まりごとに対しての関心が殊更薄く、経歴などをあまり詮索しない。数ヶ月ほどの契約で多くの会社を渡り歩いてきた根無し草の彼だが、その社風が気に入って他よりも長く勤めている。

これ以外に、鍵次は働き口が見つけれなかった。特に勉学に秀

でておらず、運動が得意というわけでもなく、芸術的センスもほぼ皆無。取り柄と言えば、ゲーティアに乗って培ったメガロスの操縦技術くらいのものであった。それでも、仕事は多い。多少のやる気と経験があれば、鍵次のように四十手前の者でもすぐに雇用してくれる。

それに鍵次は実際にメガロスに乗り込み、悪の魔術師スライマンと戦っていた。メガロス同士のぶつかり合いで壊れる街を彼は実際に見てきたし、自分自身で破壊もしていた。北は北海道から南は沖縄まで、山であろうと海であろうと、夏であろうと冬であろうと現れるスライマンからの刺客を、鍵次は仲間と共に迎撃してきた。これらの戦闘がもたらした被害は、二十年経過した今をもっても正確には把握されていないほどの規模である。そうした事情から察するに、建設業界はまだまだ人手不足の状況が続く。当分は正規雇用を望まなくても、食いあぶれることはない。鍵次はそう当て込んで入っていた。

「おっと。まずい、まずい」

建材を積もうとした鍵次は、寸でのところで動きを止めた。

エラヒストスはメガロスと違い、システムの全てを魔術に処理させているわけではない。未だ完全に人の手でメガロスを再現することとは出来ないため、足りない部分はメカトロニクスが補っている。

運んできた建材を所定の場所に置くには、直感的操作では都合が悪い。人間の微妙な認識の差異まで読み取ってしまうからだ。

鍵次はデバイスから手を離し、脇に備えられていたキーボードを引き出した。それと同期して、ドケンヤの操作方式が入れ替わる。デバイスによる感情の直接的入力ではなく、キーボードを用いた入りに切り替えると、ドケンヤの体から、これまで現れていた人間味のようなものが消え失せ、ぴたりと塑像のように固まってしまった。

直感的操作による僅かな震えが消え、ロボットとしての側面が顕

となつたのである。

これがエラヒストスの魔術的欠点を補っている。機体制御の一部をコンピュータに依存することで、エラヒストスはようやく人型ロボットとして運用できるのだ。戦闘のように逼迫した状況下には適さないシステムだが、建設作業などの高い精度が求められる仕事では役に立つ。むしろ最近では、コンピュータ制御を全面に押し出した設計のエラヒストスも珍しくない。

予め入れてあるCADデータに基づき、座標を入力して建材を納める。

ボルトでしっかりとネジ止めし、キーボードをしまつて制御方式を切り替える。単なる運搬や移動は、やはり直感的操作のほうが作業効率が高い。

ここに建てられるのは、ショッピングモールだ。映画館あり、病院あり、アトラクションありと、一つの小さな街のような商業施設である。

つくづく運命とは因果なものだと、鍵次は建設現場で作業するたびに思い至っていた。

ゲーティアに乗っていたころは、こうした建物を壊しに壊しまくっていた。あるときは着地に失敗して転げたり、相手に吹き飛ばされて止むを得なく寄り掛かったり、渾身の必殺技を外して跡形も無く蒸発させたりと色々だ。そうして踏み潰し、押し崩した建物は数知れない。

これまで建物を壊してきた自分が、今は建物を建てる側となっている。それが少しでも罪滅ぼしになるような気がするという理由もあつて、鍵次は建設業界に身を置いている。

二十年の時を経て：？

「小中くん、上がっていいぞ」

「はい、社長」

見れば既に夕方を過ぎ、夜に近くになっていた。鍵次はエラヒストスを所定の位置に移動させ、待機状態にした。チェックシートを持って各部を点検し、異常が無いことを確かめる。

子供の頃は、こつしたロボットを見れば心躍ったものだが、今ではそんな思いは露ほども湧かない。既に鍵次の中では、エラヒストスは実用的な生活の道具でしかない。

こつしてエラヒストスを動かす職に就いたのは、レメゲトンをやめてすぐの頃。彼がまだ二十二歳になったばかりのころだった。そのころから、こつという暮らしを続けている。

十五年前まで鍵次は、レメゲトンという組織に属していた。これは日本における魔術師の管理を行う公的機関である。このような機関は、第一次メガロス大戦前後に魔術師の存在が明るみになったことで、多くの国で創設された。

しかしレメゲトンの本来は、日本国に籍を置く魔術師の管理ではなく、鍵次の操縦するメガロス。ゲートティアの運用であった。

二十三年前、まだ十五歳だった鍵次は、突然にゲートティアに乗せられた。ゲートティアを作り出した一族の血が、鍵次に色濃く発現していることが分かったためだ。

そうして済し崩し的に鍵次はゲートティアのパイロットとなり、日本国、果ては外国で発生する魔術関連の災害の収拾に駆り出された。その傍ら、ゲートティアから散逸したという七十二の精霊を捕獲したり、テロ行為を行なう魔術師たちに戦いを挑まれたりと、全くもって退屈しない日々を送ることになった。

しかし今、鍵次はレメゲトンの構成員でもなく、ゲートティアのパ

イロツトでもない。

第一次メガロス大戦が終結したことで、ゲーティアは一応の役目を終えたと見做され、殆ど封印に近い形で保管されることとなった。これには多くの理由がある。まずは既に落ち着いた世界情勢において、ゲーティアのようなメガロスは運用すべきではないという論調が強まり、それを考慮した国の判断があったことが大きい。それに加え、ゲーティアはスライマンとの戦いにおいて被った損耗が激しく、七十二の精霊全てを散逸し、右腕に搭載されていた小鍵機関連までも喪失した状態だった。

さらにはエラヒストスの目覚しい発展が挙げられる。メガロス同士の戦闘ならともかく、復興作業にはゲーティアのようなメガロスをを用いる必然性がなかった。

かくして鍵次は、ゲーティアのパイロットを解任させられた。自分が役目を降ろされたのは世界が平和になった証拠だと、彼は必死に自分へ言い聞かせた。しかし詰まるところ、勝手に呼びつけて勝手に乗せて、今度は勝手に降ろしたレメゲトンの判断に、憤懣やるかたない思いを抱いたのも事実であった。

そして降ろされてみれば、鍵次には何も無かった。勉学も、スポーツも、芸術も、趣味も、全てをゲーティアに捧げてきた彼は、他に出来ることを何一つ持っていなかった。そのことに気が付いたのは、二十歳を過ぎたときだった。

だが、一つだけ彼に残されていた。それはエグゾルとの約束だった。メディナを頼む。彼は自分の妹であるメディナを、鍵次に託していた。

メディナは鍵次と同じ年で、レメゲトンにおいてゲーティアの専属オペレーターとして活躍していた。彼女の父も母、そして兄であるエグゾルも高名な魔術師であり、その魔術師一家に育った彼女は、これまでに得た豊富な魔術の知識で、幾度も鍵次の危機を救ってく

れた。

やがて二人が恋に落ち、生活を共にするようになったのも、自然の成り行きと言えた。

メディナに不自由な思いはさせない。それだけを胸に、鍵次は働いた。ゲーティアを降ろされたとはいえ、レメゲトンを辞めさせられたわけではない。力仕事の多い整備班への配属を希望し、鍵次はそこで三年近く働いた。世界を救ったメガロスのパイロットが、一整備員へと身を賣ったことで、周囲には物笑いの種となることもしばしばだったが、そうした雑音を努めて振り払い、鍵次は汗水垂らしてメガロスの補修と点検を行なった。

やがて、メディナと鍵次の間に一子が設けられた。出産日も夜遅くまで鍵次は働いていたが、メディナはそんな彼に嫌な顔一つ見せず、そつと我が子を抱かせてくれた。

これからはメディナと、この子を養っていく。それがエグゾルとの約束を果たすことになる。

そんな決意が、三年後の春先になって崩れることになる。

国会に通された法案に従い、レメゲトンの再編成が行われることになった。改善命令として言い渡された組織のスリム化は、大量の解雇を意味していた。

未だメガロス大戦の爪痕が生々しい頃、国庫は復興事業で手一杯となり、レメゲトン、ひいてはゲーティアに回す費用を大幅に削減することになった。レメゲトンは日本国籍の魔術師の管理を主に行う組織となり、それ以外の機能　メガロスの整備などの部署は容赦なく縮小させられた。

他の部署への移転も叶わず、鍵次は再び職を失った。

それから鍵次は苛立ちを紛らわすため、覚えてたの酒を頻繁に呑むようになった。心のささくれ立つままに、メディナに当たり散らすことも少なくなかった。

程なくメディナは娘を連れて別居し、それが一年近く続いたある

日、気が付いたように鍵次宛へ離婚届が送られてきた。

もはや抵抗する気概すらなく、彼は諾々と書類にサインし、親権移譲や慰謝料請求が家庭裁判所で滞りなく行われていった。そうしてもう、十数年が経つ。その間、娘には一度も会っていない。

鍵次は眠い目を擦りながら、事務所で黙々と書類の処理を行っていた。エラヒストスに乗れるからといって、何も仕事はそればかりではない。進捗・工程の管理や余力調整と、工期に間に合わせるためにやることは山ほどある。しかし今日は殊の外捗らない。昼に見た夢のせいで、昔のことばかりが頭に浮かんでしまう。

もう忘れてしまって、気にも留めていないと思っていたのだが、深層心理というのはなかなかどうして自分の思うとおりにはいかないらしい。

結局その日の仕事は終わらず、鍵次は泊りがけで管理業務を行なうことになってしまった。

## 二十年の時を経て：？

次の日は夜半を回っても、目標の作業は終らなかつた。競合入札で安く見積もつた分、突貫工事で工期に間に合わせなければならぬのだ。

この現場には、エラヒストスを操縦できる人物が鍵次ともう二人しかいないため、三人とも朝九時からフル回転でエラヒストスを運用している。

「さて、どんだけ残業代もらえつかなあ？」

間延びした声が、鍵次のエラヒストスの回線から響く。同じエラヒストス操縦者の<sup>かいたとうへい</sup>穎田東平である。

「半分もらえれば、いいほうじゃないですか？ 今回も結構、値切られたそうですよ」

鍵次がそう返すと、スピーカーからは唸り声が聞こえてきた。

「ったくよお。ウチの社長はもうちょっと現場のこと考えてもらいたいぜ」

「そうねえ。はあ、もうねむい。お風呂入りたくい」

<sup>いぬ</sup>穎田に輪を掛けて間延びした、甘ったるいほどの声の主 井<sup>いよつ</sup>曜

<sup>かねこ</sup>周子は、現場作業員で唯一の女性だ。

二人とも鍵次より十歳以上年下だが、会社に置いては先輩なので、敬語を用いている。実際、二人にエラヒストスの操作を教えてもらうことも多い。

二人は同じ大学院でエラヒストスの制御工学を学んでおり、ここにはバイトとして長く勤めている。

「にしても、鍵次さん操縦うまいっすよね。もう俺より上手ですよ、穎田がそんなふうに感心すると鍵次は決まって「前の職場で、ちょっとね……」と濁しながら笑っている。鍵次がゲーティアに乗っていたことは極秘事項なので、日本の魔術師管理組織であるレメゲトンの一部の関係者以外には口外してはならないことになってい

る。そして現在でも、鍵次はレメゲトンの警備部によって監視されている。

情報の漏洩を防ぐためだから、それは仕方がない。一時期は鍵次も警備部の仕事を手伝ったことはあるので、あまり不快には感じていない。彼らは彼らで、自分たちの仕事をこなしているだけなのだ。その辺りのことは鍵次もよく理解していた。

「あんたはもつと練習しなさいよお。免許の更新近いんだから」

やいのやいのと重ねられる二人の会話を、鍵次は好々爺とした面持ちで聞いていた。二人とも何故か鍵次を慕ってくれており、休みの日にもたまに一緒に出かけたりする。むしろ二人水入らずでいればいいと言うのだが、二人は決まって「鍵次さんもいたほうが楽しい」と言ってくれるので、当の本人としては押し黙るほかない。

「鍵次さん、今度エラのイベントがあるんですけど、一緒に行きませんか？」

最近は建設業界以外でも活躍し始めたエラヒストスは、モーターショーのように最新機種を集めたイベントが、日本では年に何回も行われる。

巨大ロボットへの憧れを具現化したようなエラヒストスは、恐竜に継ぐ手堅いイベントビジネスとして注目されている。

エラヒストスは原則として私的運用が禁止されており、購入の続きが煩瑣となっている。一般人がエラヒストスに間近に迫るには、エラヒストスを使用する職に就くか、こうしたイベントに参加するしかない。

しかし、日本では少し状況が異なっている。本邦では条件付きでエラヒストスの個人所有が許可されており、多くを富豪層が購入している。それによってイベントを多く行い、貴重な外貨獲得源にもなっているが、外国に比べてエラによる犯罪件数が多いと言う問題もある。

これには欧米諸国に比べて法整備が遅れてしまい、半ばなし崩し

的に承認させられたという側面もある。建設派閥の議員などの利権も絡み、エラヒストス関連の法整備は強化よりも優遇処置のほうが年を重ねることに増えていつている。

「イベントねえ。でも、いいんですか？ 院生でもレポートや発表があるのでしょうか？」

「げえ！？ 何で把握してんすか？」

「いつも愚痴漏らしてるから、覚えちゃいましたよ」

頼田は照れくさそうに「すみません」と言うと、彼の乗っているエラヒストスも屈んで一礼した。こうした何気ない動作までフィードバックするのも、エラヒストスならではだ。

「そうよ。今年は就職活動もあるし、ゼミの卒業制作もあるし、遊んでる暇なんかないわよ」

声や雰囲気こそ間延びしている井曜だが、性格は実に真面目でしつかりしている。サボり性の頼田とは、いい相性だった。

「周子、レポート写させて！」

「だ〜め。そんなことしたら、すぐばれちゃうもん」

微笑ましいほどお似合いのカップルである。井曜がうまく頼田を操作し、頼田が井曜を頼る。

思えばメディナも、こうして鍵次の世話を焼いてくれたものだ。

彼女の場合は井曜と違って竹を割ったような性格だったため、若干スパルタなところもあったが、敵魔術師のメガロスを倒すため、作戦の立案を一晩中付きっ切りで考えてくれたこともあった。

メディナを女性として意識し始めたのは、恐らくそのころからだろう。それまでは魔術に関して素人の自分を通信越しに詰る、嫌なおペレーター程度にしか考えていなかった。

それからメディナの兄 エグゾルがゲーティア・プセマに乗って現れ、スライマンの尖兵として襲いかかってきたとき、敵方との関係を疑われた彼女を庇ったことで決定的となった。

離婚したての頃は思い出すのも嫌っていたが、今ではそれほど心

騒ぐことはない。実に落ち着いた心地で、思いを馳せることが出来る。

あるいは今の自分の境遇と、過去の自分とを完全に分断できるようになったのかもしれない。もうあの頃とは違うのだと、実感を伴って理解できたのかもしれない。

## 二十年の時を経て：？

それでも娘の写真だけは、肌身離さず身につけている。穎田には「ロリコンですかあ？」などとからかわれるが、例え周りにそう取られても、鍵次は娘の写真を手放す気はない。

娘の名は、ノンネという。日本で生まれ、日本で暮らすのだから日本名がいいと言った鍵次の意見を押しのけてメデイナがつけた名前だ。確かに今思えば、日本名よりは外国の名が似合う容貌をしている。

母親譲りの銀髪に、白磁のような肌。それだけでもう日本人離れしている。唯一瞳孔が茶色いのが、鍵次に似たところだった。

接したのは、生まれてからの三年間だけだった。メデイナと離婚し、親権を失ってからのというもの、メデイナは決して鍵次と娘を会わせようとはしなかった。それでもきちんと思いつけるのは、ノンネと自分とメデイナで写っている写真を持っているからだ。

鍵次が持っている娘のものは、三歳の頃に遊園地へ遊びに行ったときの写真しかない。それ以外のものは、全てメデイナに持っていかれてしまった。

今はもう十五歳になっているはずである。しかし鍵次の中でのノンネは、写真の中の三歳で成長が止まっている。どこの学校に通っているのか、などということを知るのは鍵次が知るはずもない。法律面では何ら問題ないのだが、メデイナはレメゲトンの権益や部署を用い、鍵次とノンネを社会的に完全に分断していた。

繋がりといえるのはこの写真と、あとは慰謝料の支払いくらいのものか。とはいえメデイナは未だに特務機関レメゲトンの構成員として勤めている。振り込んでいる銀行口座のセキュリティは万全で、そこから彼女の個人情報を読み取ることが出来ない。

元より鍵次も、そんなことをするつもりは毛頭無い。

娘には会いたい。確かにその気持ちは常に持っている。今こうし

て仕事をしている間にも、ふと財布に入れてある写真を見たい衝動に駆られる。しかしそれは、写真を眺めているだけで充足してしまふのだ。

危険を犯してまで、娘に会おうという気概が無いのだ。

その程度にしか、彼は娘を愛していない。そして長い間会っていないくとも、確実に鍵次は娘のことを愛していた。

「小中さん、あがりつす。お疲れさんした！」

穎田が威勢良く挨拶し、エラヒストスの駐停所まで走ってゆく。

「結構進みましたね。これなら終わるかも」

井曜の声に、鍵次が頷いて返す。

「そうですね。明日も一日中入ってるから、何とかなる見込みが出てきました」

「すみません。小中さんばかりにやらせちゃって」

「気にしないで。お二人は学生なんだから、学業が優先ですよ」

井曜のエラヒストスがぺこりと頭を下げて、鍵次のエラヒストスの脇を走り去っていく。その日は三人でフル稼働だったためか、比較的早めに仕事が終わわり、夜の八時には自宅に帰ることが出来た。

鍵次の暮らす六畳一間のアパートは、脱いだ服が散らかり放題のありさまである。全体的にくすんでおり、掃除の行き届いていないことが窺える。しかしシンクは意外にも光るほどに綺麗だった。

実は意外でもなんでもなく、部屋を借りてから鍵次が殆ど炊事をしていないだけのことである。ほぼ毎日を外食で済ませ、例外といえばスーパーのタイムセールで買った惣菜。皿の汚れる隙もない生活である。

趣味の類もない鍵次は、ろくに本も置いておらず、テレビも置かず、パソコンもない。あるのは服を入れるタンスと、畳まれた布団。それに一人用の小さなちゃぶ台だけである。

希薄な人間性を如実に現す室内で、鍵次はコンビニで買ってきた惣菜の蓋を開き、割り箸を使って食べ始める。

いただきますも、ごちそうさまもなく、黙々と口に入れて、黙々とゴミを片付ける。食事というにはあまりに味気ない作業である。

こういう生活を続けて、もう十五年になる。寂しい苦しいという感情には、始めの一年を過ごす間に慣れきってしまい、今では省みることさえ稀である。

養育費の分を取られる給料の中から生活費を捻出するには、確かに緊縮が必要だったが、別に鍵次はそれを徹底しているから、このような生活をしているわけではない。

気がついたら、こういう生活以外になかったのである。見たいテレビ番組などない。世間を伝えるニュースもいらない。関心ごは自分の周囲だけである。最新のニュースを知らないで馬鹿にされるのは、倦むほどに慣れてしまった。

インターネットも同じ理由で必要ない。外から情報を仕入れるという作業自体に、鍵次は何のメリットも魅力も感じないのである。

言わずもがな、本など目を通すのも嫌っている。エラヒストスの仕様や、取扱説明書や仕事で必要な書類以外、読もうとは思わない。読まなくても、これまで生きることが出来たから、これからも要らないだろう。

何にも、張りが無い。自分にも、社会にも、世界にも、張りを感じられない。ゆるゆるに撓んだゴムの中に寝そべっているような日常に、鍵次も合わせて緩まってしまっていた。

ならば、鍵次にとっての張りとは、一体何なのか。

言わずもがな、ゲーティアだ。世界を救った最強のメガロスこそ、鍵次の張りであり、生きがいであり、全てだった。

しかしそれはもう、奪われて久しい。十中八九、二度と乗ることはないだろう。もう世界は、ゲーティアを必要としてない。だから、

鍵次もまた必要がない。

世界に必要とされていなくても、人は生きていかねばならない。大切な人と別れても、親友との約束を破っても、生きがいをなくしても、娘と会えなくても、それでもものうのと、生きていけるものだ。

せめて娘が二十歳になり、養育の義務が終わるまでは、生きていなければならない。残念ながらそのあとは、生きていける自信がない。とはいえ、死ぬる自信もない。このままゆるゆるとした生活が続くようにも思えるし、それさえも嫌になって、突然、自殺を図るようにも思える。

そのどちらでも、いいと思う。どちらも、それほど違いがないように思えるからだ。

## ゲーティア、再び：？

その日も仕事を終えて、鍵次は自宅へ帰るために駅へと向かってきた。またも遅くまでの作業となり、今は深夜の二時過ぎである。

申し訳程度の街灯を頼りに、鍵次は駅を目指す。人家よりも田畑が多い場所だからこそ、大型のショッピングモールを建てられるほどに土地が余っているのだろう。

畦道を歩いていると、夏の夜気と共に噎せ返るような草の匂いが鼻を叩く。人気の皆無なためか、虫たちが遠慮なく声を張り上げている。

こんなにも田舎然とした場所を訪れた経験は、あまり多くない。鍵次は親類縁者のいない天涯孤独の身の上であり、メデイナの故郷はイギリスだった。よしんばレメゲトンの仲間達とバーベキューで訪れたくらいだろう。

しかし勿論のこと、こうした景色は嫌いではない。マグマが進る火山地帯やメガロスさえ押し潰す水圧に晒される深海、エーテルまでも凍らせる酷寒の南極に比べたら、何とも牧歌的で心洗われる景色である。例えば月が天頂を過ぎ、今から家に帰ったところで三時間ほどしか眠れなくても。

そんな景色を、二条のアップライトが引き裂いた。舗装されていない畦道を、小石を飛ばしながら荒々しく運転し、こちらに近づいてくる。こんな夜中に、こんな道を通る車を見るのは初めてだ。何とはなしに鍵次が警戒心を強めると、車は彼に横付けして止まってしまった。

一目見て分かる黒塗りのセダン。あまりお近づきになりたくない類の車種である。足早に去ろうとする鍵次を、突然に開いたドアが遮った。

分かりやすいくらいにびくりと跳ねて、じりと後退する。鍵次が

身構える間もなくやおら飛び出してきたのは、蒸し暑い夏の夜にも関わらず、きつちりと一分の隙もなく黒のスーツで身を固めた男だった。

その姿に、鍵次は瞠目する。別段、その男が恐ろしいわけではない。むしろその見覚えのある顔が見れて、嬉しいくらいである。

「……南武さん!？」

あまりに懐かしい顔に、鍵次は頭の処理が追いつかなかった。思いつくのも遅ければ、彼が何故ここにいるのかさえ、全く思い至ることはなかった。

南武慶介はレメゲトンの構成員であり、元は自衛隊に所属していた警備部の人間である。レメゲトンの警備部は、施設内の警備からVIPとして扱われることの多い魔術師の護衛などを行う。

実際、鍵次がレメゲトンに所属し、ゲーティアを操縦していた頃は、南武がつきつきりでガードしていたものだった。鍵次はメガロスを操れるものの、魔術師ではないので、生身で魔術自体を行うことは出来ない。そこに目をつけたバベリアの魔術師達は、度々鍵次に直接襲い掛かってきた。

その魔術師達を退けてくれたのが、南武率いる警備部の者達だった。

あまりいい思い出のないレメゲトンにあって、南武には今でも素直な恩義を感じている。

「ひさしぶりですね。いやあ、懐かしいなあ」

とりあえず当たり障りのない挨拶を交わして、鍵次は南武に歩み寄る。しかし当の南武は身じろぎ一つせず、車の横に立ったまま鍵次を見つめている。

「すみません、小中さん」

鍵次は、南武の手がするりと上がるところまでは見たのだが、そのすぐ後に気が遠くなり、意識ごと夜より黒い幕に包まれてしまった。

暗澹としていた意識から目が覚めると、そこは嫌と言うほど見知った場所だった。

中央戦略発令室。正にレメゲトンの中枢とも言つべき区画だ。魔術テロ等の緊急事態下でのみ開放され、レメゲトンの全セクションの情報を一手に集めて事態の収拾に当たる。

スライマンの起こした第一次メガロス大戦時には毎日のように人が出入りしていたが、大戦終結後からは殆ど利用されることのなかった場所でもある。

二十年近く経つと言うのに、内装は殆ど変わっていない。精鋭のオペレーター数人のためにたっぷりスペースを確保してあるオペレートブース。エーテル力学、魔術工学などの専門家が詰めるアナライズブース。

そしてレメゲトンの長官を据えるコマンダーブースには、やはりと言うべきか、レメゲトンにおいて長官を務める人物が座っていた。

「やあ、久し振りだね。小中くん」

そう声を掛けてきたのは、志田秋成<sup>しだあきなり</sup>。鍵次がレメゲトンに所属していた時から長官を務めていた人物だ。鍵次が初めて会ったときで五十近かったので、今はもう七十過ぎだろう。随分と白髪も皺を増えているのだが、その取り繕った優しげな人柄には、むしろ磨きが増えているようだ。

さらに彼の脇にも、鍵次も知り合いが控えていた。

右脇にいるのはドクター。エーテル力学や魔術史の専門家である。ちなみに本名は誰も知らない。年齢も不詳である。

そしてなにより鍵次の目を釘付けにしたのは、かつての妻であるメディナだった。

フルネームはロン・ミツダ・メディナ。父が著名な魔術師で、魔術に関する知識は玄人裸足である。その能力を買われ、レメゲトン

においてオペレーターを務めていた。鍵次と結婚し一子を設けたが、後に離婚。今は一人で娘を養っている。

「どういうことだよ、これ」

自然と、鍵次の口調に棘が現れる。かつては尊敬していたこともあったが、今では正直言つて嫌いな部類の人間達ばかりである。この極限状況では余裕がなくなり、いつもの態度ではいられない。

「現在、北海道の釧路沖にて、メガロスと自衛隊の北方部隊が交戦中です」

鍵次は、何故自分がこんな状況におかれているのかを聞いたのに、メディナは如何にもオペレーターらしい無謬の口ぶりでは何やら不穏当なことをのたまい始めた。

北海道？　メガロス？　北方部隊？　一切合財、意味も意図も分からない　ということではなく、実のところ心当たりが喉元まで出掛かつてはいたのだが、分かりたくはない。少なくとも自分から口にしたくはない。

しかしやはり、こういうときに過ぎる考えというのは、どうしても存在する。

「まさかバベリア！？　今さらそんな……」

もしそうだとしたら、四の五のとは言っていられない。史上最悪の魔術テロ集団『バベリア』が復活したとなれば、その『バベリア』を直接潰したと言える鍵次に声を掛けるのも頷ける。声の掛け方には多分に問題があるが。

「それも在り得ない話じゃありませんが、未確認の情報ながら、交戦中のメガロスはベールクかと」

「ベールクって、ドミトリイのメガロスじゃないか。どういうことつた？　本当なら立派な侵犯だぞ」

ベールクとは、ロシア語で山を意味する語を冠したメガロスである。ロシアの魔術師、ドミトリイ・ロシユチェンコが有する。ドミトリイ・ロシユチェンコとは、鍵次も知っている間柄である。年の

ころも大体同じで、鍵次がゲートティアに乗って活躍していたときには共に作戦を行うこともあった。

「現在、大使館を通じてコンタクトが取られています。ロシア政府からの回答はありません」

「そんなことしている間に攻め込まれるぞ。一時間くれてやれば、北海道は人が住めなくなっちゃう」

一時間は誇張であっても、決して虚構ではない。ロシアの永久凍土で育まれたベールクの冰雪系魔術は、術式さえ整ってしまえば大規模な環境操作さえ可能とする。

## ゲーティア、再び：？

ベールクの実力を知っている鍵次は、恐々と身を竦ませながら、居並ぶ連中を睨みつけていた。

「しかし、日本に帰属する魔術師を動かすわけにもいきません。相手は国公魔術師なので」

日本では正式に、国家公務員特別職魔術高等官と呼称する。いわゆる国の管理を受けている魔術師の総括である。

先進国ではまず例外なくこのような枠組みが制定されており、アメリカでは『フェデラル・ガバメント・ウィザード』、頭文字をとってF G W。ロシアでは『マジカルクラフト』などと呼称されている。

そうした国に属する魔術師は、言わずもがなその国の重要な財産である。一流の魔術師がもたらす戦略的、工業的価値は計り知れない。

そのため魔術師は、多くの特権によって保護・優遇されている。国によって多少の違いがあるものの、大使官並かそれ以上の特権免除が含まれているものが殆どである。

つまり日本の法律では、外国の魔術師を逮捕・服役させることは出来ない。例え領海侵犯を犯していたとしても、である。

「そこで、ゲーティアを使います。ゲーティアの所属は現在のところ、日本国ではありません。既に破棄されたものとして扱われているので、誰にも所有権がない状況です」

淡淡とした口調で、メデイナは在り様だけを述べる。その後を、志田が大仰に手振りを加えて継ぐ。

「そう。ゲーティアは原因不明の暴走を起こし、一人で動き出してベールクの迎撃を行う」

この迂遠であてつけがましい言い様。かつての記憶を呼び起こし

て余りある。志田のこうした台詞に幾度騙されて、とんでもない作戦行動に駆り出されたことだろうか。

「ゲーティアに乗れるのか？」

そこまで分かっているから思わず勘繰り、返事と思えるような応え方をしてしまった。しかし鍵次にとって、それは看過し得ない重要事である。

青春の全てを捧げて、共に戦った仲間。唯一の生きがいだったメガロス。それが再び、彼の目の前に提示されようとしている。

「あくまで自発的に、頼むよ」

志田はいかにも気安げな口ぶりで言う。彼のこういうところは、何も変わっていないらしい。相手の自発を促して、自分の責任を避ける。

それがレメゲトン長官としての、処世術なのだろう。

とはいえ、彼の詭弁にこちらが付き合う道理は無い。ましてや鍵次からゲーティアを取り上げたのは、長官である志田なのだ。それを今さら勝手な都合で押し付けられ、はいそうですかと大人しく受け取れるわけがない。

黙然と鍵次が睨みつけていると、志田は嘆くような素振りて首を振ってみせる。

「なら、仕方がない。他の者に乗ってもらうことにしよう」

不穏当な言い方に、またも鍵次は反応してしまふ。

「他？ 他が要るのかよ！？」

そんなものは有り得ないという思いが、つい口を付いて出た。

実のところゲーティアは、誰がいつ作ったのかさえも分からない、メガロスかどうかさえも怪しい代物であった。

鍵次が初めてゲーティアに乗ったのは、彼自身がメガロスによる魔術テロ行為に巻き込まれたときのことだった。そのとき突如としてエーテルの光に包まれ、成り行きのままにゲーティアを操ってメガロスを撃退することになった。

当然ながらその後レメゲトンに拘束され、無理やりメンバーに加えられることとなった。メガロスとはほぼ同じ構造を持ちながら、メガロスとは多くの点で異なるゲーティアは、研究者達によつて散々分析されたのだが、結局これといったことは判明しなかった。何故魔術師ではない鍵次だけが操縦できるのか、それさえも分かっていない。

分かっていないというだけで、鍵次以外にも操縦できるものはいるかもしれない。そのように考えた研究者がレメゲトンのスタッフを片っ端からゲーティアにいる人間を乗せてみたが、結果は完全な失敗であった。魔術師を乗せたときでさえ、ゲーティアは寸毫も反応を示すことはなかった。

ゲーティアは、自分以外には動かせない　　鍵次がそのような考えに至るのも、ごく当然のことと言えた。

「ああ、いるよ。君と同じ血を継ぐ、最高の適合者が」  
その言葉に込められた言外の意味を汲み取った時、鍵次の辛抱はものの見事に碎け散った。

志田に飛び掛ろうとする鍵次を、南武が羽交い絞めにする。  
「貴様、ふざけるな！」

しかしなお暴れ回り、南武を振りほどこうともがく。日夜極限まで体を鍛え抜いている南武に、単なる常態派遣労働者の鍵次が抗えるはずもない。

それでも歯を剥き、怒りを踵にして志田ににじり寄らなければ鍵次の気が済まなかった。

志田の発言を意識すると、鍵次の娘をゲーティアに乗せるということに他ならない。天涯孤独だった鍵次と血が繋がっているのは、一人娘のノンネを指していると見て間違いない。

「メデイナ、お前、それで良いと思つてんのか！」

魔術師、しかもメガロス乗りなどというやくざな商売に、好き好んで子供を陥れる親などいない。例外的にそのような家系もあるに

はあるものの、鍵次自身にその気は全くない。

強大な力に見合うだけの報酬と特権を与えられながら、国家や魔術管理組織への従事を義務付けられる。少しでもそこから外れれば、すぐにも処罰の対象となる。

こんなハイリスクハイリターンな職業を娘に薦めるほど、鍵次は腐ってはいない。

そこへ浴びせられたのは、まさに冷水の如き鋭さを持つメデイナの言葉だった。

「だったら、あんたが乗りなさいよ」

これには鍵次も言葉を失い、表情さえ削ぎ落としながら立ち尽くす。

鍵次がメデイナに親権を譲ったのは、自分よりも生活能力が高かったからだ。自分よりも立派に娘を育ててくれるという確信があったからだ。

養育費だけ渡していた身で言えることではないとはいえ、鍵次は憤懣を覚えずにいらなかった。こんな仕打ちを受けるために、親権を譲ったのではない。毎月欠かさず仕送りし、娘にも会おうとしなかったわけではない。

何で、こんなことになってしまったのだろう。どこで間違ってしまったのだろう。そんな考えがぐるぐると頭の中を駆け巡っている。思えばゲーティアに乗ってしまったことが、そもその間違った気がしてくる。ということはゲーティアに乗れるだけの遺伝的特性を兼ね備えてしまったことが、なお間違いだろう。

そうなればもう生まれてきたこと自体を悔いるしかない。その類の行為は、これまで腐るほどしてきた。若い頃はかなり苛まれたが、今では親しい隣人のように接し方に慣れが出てきた。

ここまで至れば、むしろ冷静になれるというものである。

国公魔術師云々の事情はともかく、今正に北海道が戦火に晒されているのは事実だ。無論、それを防げるのなら、防ぎたいとは思っ

ている。そこは問題ではない。

問題は、今さらゲーティアで戦えるのか、ということだ。鍵次がゲーティアを降りたのは十八歳のとき。実に二十年間、ゲーティアに乗っていないのだ。

建築用エラヒストスに乗っていたとはいえ、メガロスであるゲーティアとはその運用も仕様も、何から何まで違っている。そんなブランクを抱えている人間が、いきなり生粋の魔術師が操るメガロスを相手に立ち回れるものなのだろうか。正直なところ、鍵次には全くと言っていいほど自信がなかった。

とはいえ、もしかしたらその心配すら、必要ではないかもしれない。

レメゲトンがすると決めたのなら、それは押し通る。可能不可能の問題ではない。何故ならレメゲトンは、魔術師を統べる組織だからだ。

この世の理不尽を体現し、現実に表出させる魔術師たちを、それ以上の力でねじ伏せ、一応は社会に適応した形で運用するレメゲトン。

そういう組織が乗れと、一般人に言っているのだ。何をどう主張したところで、逃れられるものではない。

「……乗ってやる」

捨て鉢に小さく呟いたのを、志田は聞き逃さなかった。

「そうか、ありがとう」

柔和な笑みを浮かべて肩を叩こうとした長官の手を、鍵次は勢いよく弾き返した。

「触るな、偽善者が」

有り余る怒気を現すように、全員をねめつける。それくらいしなければ、とてもではないが気持ちの収まりがつかない。ただでさえ激しい状況の移り変わりに着いていけず、躁に近い状態になってしまっているのに。

「それじゃあ、こちらへ」

ドクターが案内するのについていくと、既にゲーティアが格納庫内に待機していた。

## ゲーティア、再び：？

格納庫内のゲーティアを見るのは、本当に久し振りだ。まだゲーティアのパイロットとして慣れていないころ、発進シークエンスは全てレメゲトンの施設に依存していた。つまり魔術の粹であるメガロスながら、通常の機動兵器と殆ど変わらぬ運用だったのである。

鍵次がゲーティアのパイロットとして成熟してからは、自身の魔力によって任意の地点に召喚できるようになったが、それまではこうして格納庫からゲーティアのコクピットに乗り込み、航空機で現場まで輸送してもらっていたのだ。

「一応スーツを用意しました。サイズフリーなので大丈夫かと」  
相変わらずそういう手回しだけは周到だ。代わりに肝心なことは抜けてしまうのがレメゲトンの常であることを、鍵次は思い出していた。特に人権意識などというものは、在って無きが如しである。

整備員達がいそいそと動き回るなか、鍵次は恥ずかしげもなくその場で着替え始める。ものの数秒で着替え終わると、ドクターはパソコンを取り出し、

「動かないで下さい。パーソナルデータを取っておきます」  
といって、リズミカルにキーボードを叩き始めた。

「どうやらこのスーツは、パイロットの防護というよりは、生体情報収集が目的のようだ。」

「……魔力値、低いですね。許容レベルぎりぎりだな」

「だったら、降ろすのかい？」

「娘さんに乗せるだけですよ」

「皮肉に皮肉を返されて、鍵次の内圧が上昇する。」

「上がってきました。その調子でお願いします」

「抜け抜けとそんなことを言い放ち、ドクターはパソコンを閉じた。」「コックピットに乗り込んで待機してください。発進準備が整い次

第、パウロスで北海道に向かっていたいただきます」

「まだ動くのかよ？ あれ」

パウロスとは、ゲーティア専用の輸送航空機である。鍵次がゲーティアを魔術的に召喚できるようになってからは、めっきり出番の無くなった輸送メカの一つである。

とつくに廃棄されているものとはかり思っていたら、きちんと残っていたらしい。

「動きます。操縦方法は覚えてますよね」

「はあ？ 何年前だと思ってるんだ。覚えてるわけないだろ」

「ではこちらで遠隔操作します」

「そうしてくれ。ゲーティアのことで手一杯なるからな」

足場を伝ってゲーティアの胸部に寄り、装甲の裏に隠されたレバーを引き倒す。すると大きな排気音と共にゲーティアの胸部が真ん中から断ち割れて、奥へと繋がる道が形成される。緩やかに傾斜した道の最奥には、見慣れたシートとそれを包むデバイス一式。メガロスのコクピットとしては平均的な内装だ。道の端までにじり寄って中に入り、ゆっくりと足を置いた。そのまま身を滑り込ませる前に、ふと鍵次はゲーティアの右肩の辺りに目を遣った。

「右腕、あのままなんだな」

ゲーティアの右肘から先は、見事に欠損している。元よりこのような状態だったわけではない。本来そこには、ゲーティアの代名詞と言つべき兵装。小鍵機関が備わっていたはずだった。

しかしそれはスライマンとの最終決戦の際、エグゾルの駆るゲーティア・プセマに切り取られてしまった。エグゾルは切り落とした小鍵機関を使い、我が身を犠牲にしてスライマンを封印した。

小鍵機関を備えていた、そしてエグゾルに切り離された無残な右腕は、あのとこのままに残されていた。

「改造計画も上がったのですが、如何なる魔術的機械的部品を受け付けられないのです」

「なら切断面じゃなくて、他のところからくつつけちまえばいいじゃないか」

このままではゲーティアは、ほぼ非武装のまま出て行くことになる。かつてゲーティアの主武装だった精霊召喚は、全て小鍵機関のシエムハムフォラシユ・システムによって管理統括されていた。正にその鍵がなくなった以上、ゲーティアはもう精霊を使役することは出来ない。

あとの武器と言ったらエーテル操作しかないわけだが、これはエーテルを基礎としているメガロスならば当然備えている機能なので、何のアドバンテージにもなりはしない。

考えれば考えるほど不安になってくるが、今さら退くことも叶わない。もはや自分でも戻れぬよう、早くコクピットに入ってしまったかった。

鍵次が道の中に足を差し入れると、それまではしごのように段が付いていた道が畳まれ、滑り台のように形を取る。

そこへするりと身を投げ入れて、鍵次は正に滑り降りてコクピットのシートに収まった。着地の際に若干尻を打ちつけたが、それ以外にはこれといって問題はない。

鍵次はそのまま言われたとおり、ゲーティアの状態を全方位ウィンドウで調べながら、発射シークエンスが整うのを待つことにした。中空に現れるウィンドウが目まぐるしく入れ替わる。どれが何を意味しているのか、おぼろげな記憶を頼りに情報を読み取っていく。ゲーティアの状態は、思っていた以上に芳しくなかった。当然だが、ろくにメンテナンスをしてもらえていなかったらしい。とはいえ一応は稼働水準に達している。戦闘となればすぐに問題が起きそうだと鍵次の勘が訴えているが、今の所エラーが無いのも事実だ。

むしろため息をついて、鍵次が頂垂れる。これではもしゲーティアが動かないとなれば、責任が全て鍵次ひとりのものになってしまう。

それを考えただけでも憂鬱だ。そのままエーテル圧まで下げかねないほど心が沈みこんでしまう。そこまで思い至って、ふと鍵次は顔を上げた。

「おい、ドクター」

開けっ放しのハッチから呼びかけると、そこには何やら急がしように整備員達に指示を出しているドクターの姿があった。

「もう三十分経ってるぞ。まだなのか」

ゲーティアの状態を確認するのに手一杯で忘れていたが、今は一刻を争う事態なのだ。鍵次としては猶予があるのはありがたいが、全体的に見れば今正に北海道が蹂躪されているのである。

早く出撃するに越したことはないだろう。

鍵次の記憶が正しければ、当時こうした出撃の際には五分を優に切っていたものだった。

「申し訳ない。当時のスタッフが集まっていないのです」

言われてみれば、整備員達は皆が鍵次よりも若い。どうやら人員再編を行なった後、また雇い入れたらしい。そのために技術の習得が不十分なのだ。

とはいえパウロスのような旧式のエーテル推進ジェットなど、彼らは専門校の文献で習ったくらいだろう。実際に触るとなれば不慣れで当然だ。

こんなことならそもそも解雇しなければよかったのだと思わないでもないが、今さら言っても後の祭りだろう。

「準備できました。ハッチ閉めてください」

漸う整ったらしく、鍵次はゲーティアのコクピットハッチを閉めた。幾重にも重ねられたエーテル合金装甲が折り重なり、強固に接合されていく。

何だか、狭くなったように感じる。最後に乗ったのは十八歳のときなので、今より若干体が小さかったためであろう。

コクピット内に、エーテルが満ちていく。鍵次自身から生み出された魔力を、ゲートイアが変換してその体中に循環させているのだ。コクピット内に満ちたエーテルは、メガロスが被る衝撃を効果的に逃がし、パイロットに伝えないための衝撃緩衝材ショックアブソーバーの役割を持つ。

この万能元素エーテルが、メガロスにとっての動力であり、装甲であり、武器である。メガロスの性能は、大抵このエーテル変換効率と循環能力で決まる。それ以外の機能は、あくまでオプションに過ぎない。無論、そもそも搭乗する魔術師の魔力値が高くなければ、メガロスはエーテルを生み出すことは出来ない。

静かにモニターを見つめる鍵次は、その歯がゆさに舌を打った。起動が遅すぎる。エーテルの循環が芳しくないため、ゲートイアの体の隅々にまで行き渡らないのだ。

「この、ポンコツ」

一応けなしてみるものの、ゲートイアは何も返すことはない。中にはパイロットと会話の形式をとって命令を受けつける、半自立型のメガロスもいるが、ゲートイアはそれに該当しない。

その静けさが鍵次にとって、むしろ自身への非難に感じられた。この起動の遅延は、自分に原因がある。かつてゲートイアを操縦していた時に比べて、今の魔力値は半分にも満たない。魔力の絶対量が少なければ、ゲートイアの優れたエーテル変換能力も発揮されない。

「小中さん、もう発進準備は出来てるんですが……」

まだですか？ 最後の言葉は、言われなくても聞こえてしまう。自分に解釈してしまうほど、身に沁みる言葉である。勝手に呼びつけて、勝手に娘を危険に晒そうとした内の一人が投げかけた言葉でなければ、鍵次も素直に受け入れられたことだろう。

こんなもの、半ば脅迫ではないか。権力を嵩に人の運命を恣にする、最低の行為だ。

デバイスに置いた手が、ぎりりと音を立てる。同時に鍵次は、何

とも懐かしい心地に晒されていた。

ゲーティアに乗ることも懐かしいのだが、この理不尽さ、不条理さが、どうしようもないくらいに懐かしい。

鍵次は、これが嫌いだったのだ。超大なメガロスをもって人を、世界を恣にしようとする魔術師達の行いが許せず、彼はゲーティアを駆り、それらと渡り合ったのだ。普通の人間の身でありながらそれを弁えず、魔の巢食う戦いへと身を投じたのだ。

(そうだ、そうだった……)

人の尊厳が、木っ端の如く踏みにじられる感覚。腸を土足で踏みしだかれる感覚。こういう思いを誰もしないために、誰にもさせないために、自分はゲーティアを操り、ゲーティアは力を貸してくれたのだった。

その憤慨を向ける相手が悪の魔術師ではなく、味方であるはずのレメゲトンなのはさておき、鍵次の心は確実に往年の状態を取り戻しつつあった。

それに伴ってか、ゲーティアのエーテル変換率が、漸く七十パーセントを上回った。

「発進シークエンス、スタンバイ」

ドクターの下知を受けて、作業員達が一層に慌て出す。

ゲーティアごと、連結されたパウロスを載せたエレベーターがゆっくりと上昇していく。程なく巨大な駆動音とともにエレベーターが固定され、真上のハッチが展開する。

「発進」

ゲーティアの背部スラストからパウロスにエーテルが供給され、それが今度はパウロスのブースター内に噴霧、点火される。

液体燃料とエーテルを混合させて推進するエーテルブースターは、今でこそあらゆる航空機やエラヒストスに応用されているが、世界で始めて実用化、そして搭載したのは、このパウロスだった。

パウロスはゲーティアを伴って直上に上昇し、数分で地上三万メ

ートルに達する。そこで漸く巡航状態へ移行した。  
そのころ鍵次は、早速ゲーティアに乗ったことを後悔していた。

旧式とはいえエネルギー効率が高いエーテルブースターは、暴虐的としか言いようのない推進力で鍵次を翻弄した。幸い昨日は朝ご飯以外に何も食べていない。昼は面倒がって食べていない上に、夜は家に帰ってから食べるつもりだったところを、そのままレメゲトンに連れてこられてしまった。

どうあれ、鍵次は胃の中を空っぽにしてある。どれだけ内臓を揺さぶられようと、この狭いコクピット内に吐瀉物を撒き散らす心配はない。

だとしても、エーテルブースターのもたらす高Gは堪え難い。それもこれも、鍵次の魔力値の低さが原因だ。彼の魔力値が十全だったなら、このようなGさえエーテルの衝撃緩衝材ショックアブゾーバーが吸収してくれる。希薄な魔力がエーテルを枯渇させ、その機能を台無しにしているのだ。これがおよそ三十分ほど続くことになる。東京から北海道の道程と考えれば迅速極まるが、鍵次にとっては無限の苦痛と思える時間であった。

## 山へベールク」：？

宗谷岬に、青黒い人影が昇ってくる。よく見れば、その縮尺が妙であった。近くにある建造物は、みな人影の膝にも届かない。

如何にも寒々しい青と黒の色調は、ロシアの魔術師ドミトリイ・ロシユチェンコのメガロス、ベールクであった。

ベールクはレメゲトンの北方部隊による攻撃を排し、宗谷海峡を渡って北海道に上陸していた。ベールクが一步踏みしめるたび、地表には真つ白な霜が広がる。土も、木も、山も、全てを凍らせる魔術で、ベールクが構成されているためだ。

ベールクはその巨体に似合わぬ滑らかな動きで、南に進路を取った。まるで人をそのまま大きくしたように、歩行には危なげなところが見受けられない。

これこそメガロスの直感的操作クリティカルエモーションシステムによる恩恵である。操縦者のイメージそのままに機体を可動させるため、如何な巨体であっても人間のそれと同じく安定して運用できる。

木を薙ぎ倒し、山を飛び越え、ベールクは走る。巨体のために鈍重な印象を受けるが、時速に換算すれば八十キロメートルほど出ている。むしろメガロスの平均から言えば、遅いほうだろう。

ロシア政府から密命を受けたドミトリイは、その命令どおりに北海道を襲撃することに成功した。とはいえ虐殺をしようというのではない。メガロスが北海道を襲撃したという、その事実のみが重要なのだ。

これによって日本政府に、ロシアが北方領土返還に対して積極的であることを改めてアピールすることで、譲歩を引き出す要因となれば御の字である。

この作戦は、一般レベルで誰が操作しているのかなど認知されていないメガロスならではの作戦だろう。大多数の人々は謎のメガロ

又出現に慄きながら、国家の上部構造にいる者達にはその意図が余すところなく伝わっている。

ドミトリイ個人としては、とんと気乗りのしない作戦ではあったが、元より断れるようなものではない。ロシアの国公魔術師　マジカルクラートとして多くの特権を得ている以上、それに見合う働きを要求されるのは当然だ。

突如ベールクは立ち止まり、空を見上げた。一本角のように額から突き出したブレードアンテナが、上空より迫る機影を察知したのだ。

「おおおおあああああ！」

それは、メガロスだった。しかも、全方位通信をオープンにしながら、激しく回転してこちらに近づいてくる。

ドミトリイはすりとベールクの身を退き、空から落ちてくるメガロスの軌道上から遠ざかった。

相当な高度から離脱したのだろう。メガロスはその巨体を半ばまでめり込ませるほどの勢いで地表を揺るがした。神の手が気まぐれに掻いたように天塩山地を大きく抉りながら、そのメガロスは無様に着地した。

その姿を見て、ドミトリイは少なからず驚愕していた。

中身の黒い地金を覆う、白銀の装甲。それは間違いなく、かつて最強を誇ったメガロス　ゲーティアの姿だった。

「ゲーティア……だと？」

何故このタイミングで、これが現れるのか。ドミトリイには分からない。

既にゲーティアはレメゲトンによって廃棄されているはずだ。実際、第一次メガロス大戦終結後、一度としてその姿を現さなかった。しかし今、ゲーティアは往年のままに顕現している。

ゲーティアを細かく走査した結果を見て、ドミトリイはますます

訝しむ。往年のままだと思っていたその体は、見事なまでに右腕が喪失していた。他にも装甲や関節部に亀裂が見られる。

隻腕のメガロスは、残された左腕を器用に使って身を起こす。気づかされたように、ドミトリイもベールクを身構えさせる。

恐らく乗っているのは、あの小中鍵次だろう。彼以外の人間はゲーティアを操縦できない。それはあの時代に生きた魔術師の間では不文律である。

通信を開いてみようかと思ったが、ドミトリイはやめておいた。もし本当に鍵次だとしたら、自分の正体がばれてしまう可能性がある。それはロシア政府としては好ましくない事態だろう。幾ら事情の知れた茶番であるとしても、隠すべきことは隠さねばならない。それに鍵次とは、少なからず交流があった。会話をしてしまったら情が移り、魔術の冴えが鈍るかもしれない。

例えどんな思惑や事情があろうと、誰が相手であろうと、任務は任務。マジカルクラートの特権を逃がしたくなければ、こなさなければならぬ。

今の時勢　魔術というものが殆ど明け透けになってしまった現代、魔術師は一人で山に籠もって真理を探究していられなくなってしまう。時代が、人が、社会が、どうしようもなく魔術を求めているのだ。

それに応え、うまく順応していかなければ、今の時代に魔術師の居場所など存在しない。ならば少しでも歩み寄り、俗世に身を置かねばならぬだろう。

自分の願いを叶えたくて身につけた魔術によって職を得つつも、その自由を奪われるという皮肉。こういう類の煩悶は、とうの昔に捨ててしまった。国公魔術師として体制の犬に成り下がったそのとき、ドミトリイは決断した。

解決したわけではない。ただ置いておいたのだ。解決の難しい問

題を後回しにして、先に解けてしまいそうな、有意義な問題にだけ目を向けることを覚えてただけだ。

今この場で目を向けるべきは、ゲーティアを如何にして沈黙させるか。その一点に尽きる。

## 山へペールク」…？

「ゲーティア、ペールクと会敵。映像、出ます」

言いながらメディナはパネル端末を処理し、司令室の大画面に映像を持ってきた。

そこに映されたのは、地面に突っ伏しているゲーティアの姿だった。

「これは！？ もうやられたのか？」

志田が驚くのも無理はないだろう。足のところから大きな轍を作り、地に倒れ伏せている。

状況から推し量るに、すぐさま敵にやられたと感じるのは当然だった。

「いえ、着地に失敗した模様です」

極力感情を消した無謬の声で、オペレーターのメディナが伝える。途端、気の抜けるような雰囲気は司令室に充ち満ちていく。

「何をやっとするんだ……」

志田長官が呆れたと言わんばかりに顔を覆い、ドクターは知らん顔でアナライズブースのメイン端末を走査している。

「ゲーティアのエネルギー充填率は、現在のところ七十五パーセント。稼働限界ぎりぎりです」

「むしろ、よく動いているほう……か」

「はい。着地の衝撃でよく自壊しなかったものです。やはり彼の能力は計り知れない」

若干上擦った調子で、ドクターは矢継ぎ早に現れるウィンドウを処理していく。ゲーティアの上空で旋回しているパウロスを紹介して送られてくる稼働データや鍵次の生体データを、薄い笑みでもって見つめている。

「まあ、ロシア政府と外交的に決着がつくまでの時間稼ぎになれば

いいんだ。最悪、的になつてくれれば十分だ」

鍵次には伝えていないが、現在のゲーティアは全くメンテナンスが行われておらず、むしろ未だに問題なく稼動していること自体が奇跡なのだ。なので志田長官以下、レメゲトンのメンバーはゲーティアがベールクを倒すなどと夢想だにしていない。

あくまでゲーティアは、日本の外交庁がロシア政府に抗議し、事務レベルで事態の收拾がつくまでの時間稼ぎの意味合いしか期待されてはいない。

他の魔術師に依頼できない状況なのは鍵次に伝えたとおりなのが、レメゲトンに所属している魔術師には、国家緊急事態における任務の従事が義務付けられており、強制的に執行させることは手続き次第で可能である。その気になれば作戦内容などの開示義務もなく、そのまま魔術師を適宜投入することは出来たのだ。

しかし他の魔術師では、万が一ベールクを破壊し、パイロットである魔術師を殺害してしまう可能性がある。それはロシア政府との交渉において、不利に働く材料となってしまういかねない。

なので魔術師を使わず、国土への被害を最小限にするため、志田長官はゲーティアの投入を決断した。

いつまでも封印処理のみで格納庫の場所をとるばかりだった旧式メガロスの処分も、期待していなかったわけではない。

右腕を無くし、全ての精霊の加護を無くしても、一応はメガロスその身の朽ち果てるまで、幾度かベールクの攻撃に耐えてくれることだろう。その間に外交官達がロシア政府とコンタクトを取り、事態の收拾をつけてくれるはずだ。

恐らく、表向きは魔術師の独断専行ということにして無関係を装い、秘密裏に回収させてロシアに送り返すというシナリオになるだろう。それならばどちらの腹も痛まず、ロシアとしても牽制の役割は果たしたことになる。

志田長官とて、好き好んでこのような作戦を遂行しているわけで

はない。だが、もつとも効率よく、被害を少なくと見積もった場合、たまたま鍵次に白羽の矢が立ったただけだ。

勿論、本当に鍵次とメディナを娘を乗せようなどとは考えていない。あくまでブラフ、交渉材料として持ち出したに過ぎない。むしろそれにうまく嵌ってかれて、志田長官は安心したくらいだ。

今は鍵次一人の身を慮っている場合ではない。それに彼にとつても悪い話ではないだろう。事前に調査した結果、今の鍵次の生活は人としての充実に欠けているように志田には思えた。黙々と働き、黙々と養育費を入れ、何の趣味も楽しみも持たず、ただ生きているだけ。

志田は鍵次をそんな状況に陥らせた一助だからこそ、のうのうと暮らす彼を見るのが忍びなかった。

英雄とは、その死を以って完成を見る。あるとき生き延びてしまった鍵次の物語を、ここで英雄譚に昇華させられれば、鍵次自身も、そして彼を庇って死んだエグゾルも報われるというものだ。

ならばこそ、仕方のないことだった。

「仕方ない、仕方ない」

この思想観こそ、志田長官の処世術であった。

各関節部から過負荷を告げるアラートが鳴り響くなか、鍵次は痛みを喘いでいた。

クリティカルエモーションシステム

直感的操作方式では、しばしばこうして操縦者にメガロスが被った衝撃をフィードバックする。それを御しきれてこそ一人前の魔術師と言えるが、二十年近くメガロスを操縦していなかった鍵次に、そのような器用な立ち回りは望むべくもなかった。

「ぬああああ！」

叫びと共にデバイスから信号を入力。アラートを遮断し、ゲートイアを立ち上げらせる。エーテルが希薄なために、まるで酸素が欠

乏しているかのように脚部が震えている。そこまで立て直して、ようやく鍵次は目の前の敵を捉えた。

目の前のメガロス　ベールクは、こちらを見据えたまま動かない。恐らくは動揺しているのだろう。第一次メガロス大戦を終結に導いた最強のメガロスがいきなり現れたのだから、それも止むを得ない。

なんにしても、ありがたい。今は一分一秒でも時間が欲しい。ゲータィアに慣れる時間が。

ゲータィアがベールクを走査したデータを急ぎ参照するが、これといったものはない。相手の弱点など、単なるスキヤニングではまづ見つけられない。相手もそれを承知して、隠蔽を図っているためだ。

そしてこちらも走査されるのも自明に理だ。ただゲータィアの場合は、明け透けにその弱点が曝け出されている。肘から先が失せた右腕は、走査するまでもない弱点だ。

こちらの弱点はばれていても、相手の弱点は分からない。ベールク自身が構造的にメガロスの基本を地で言っているということもあるだろう。

やはり直接手を合わせねば、そうしたことは分からない。鍵次は左手を握っては開き、エーテルの巡りを確認する。反応速度自体は問題ないが、如何せん力がこもっている気がしない。

さて、これでどうやって装甲を破砕しようかと悩んでいたとき、ベールクの肩部装甲が音を立てて爆ぜ割れた。

中から覗いたのは、それぞれ六つずつの、輪胴式の砲身であった。ベールクの肩が白煙を上げると、ゲータィアがスラスターを吹かして横に飛び退るのは、同時であった。

砲身から放たれた氷塊は、山肌を大きく抉りながら突き進む。跳ねて逃げるゲータィアを追って、ベールクの体もその方向へ向けら

れる。

魔術で作り出した氷塊を、エーテルの爆発力で打ち出す。構造としては単純だが、それだけに強力だ。操縦者の魔力の続く限り、氷塊を打ち出せるのだから。

氷塊の水平射撃が、北の大地に尾を引くような傷跡を表す。自国領土が刻一刻と壊されているのも気にせず、ゲーティアは射線に入らぬようエーテル推進スラスタを全開にして走っている。

巨体の生み出す衝撃波は、ゲーティアが切り返すたびに木々を薙ぎ倒し、道路を断ち割り、土を裏返す。だが、これでもまだ被害の少ないほうだ。これが都市部での戦闘だったら、この単なる回避行動だけで阿鼻叫喚の地獄絵図と化したことだろう。

まだ自然の多い場所で人が少なく、既にベールクの襲撃から時間が経ち、避難が完了しているからこそ、この程度の被害 人的被害が皆無で済んでいる。

正面に捉えられれば、あの巨大な氷塊のつるべ打ちを食らう羽目になる。かつて 七十二の精霊を操り、右手に小鍵機関を備えていたときなら、あのような氷の礫など全て消し飛ばし、強引に懐へ入っていったものだ。

残念ながら、今それを行うことは出来ない。推進用以外に使うエーテルなど、ゲーティアに残されていない。高密度のエーテルを左手に形成した瞬間、循環器系のエーテル圧が一気に下がり、人間で言う貧血に陥ってゲーティアはその場に倒れ伏せることだろう。

ゲーティアが新たなアラームを弾き出す。それはまさに、エーテル圧の低下を指し示す警告だった。

なるべく消費を抑えたスラスタ推進でも今のゲーティア、もとい鍵次にはかなりの酷使だったらしい。

「くそつ、くそつ、くそつ！」

毒づいてみても、エーテル圧を指し示すグラフに変化はない。現在のエーテル消費量では、機能の完全停止までおよそ一分半。

鍵次は前転して山を超え、天塩山地を盾にして氷塊の連打を遣り過ぎた。効果なしと見て取ってか、山脈を轟かす砲撃は次第に鳴りを潜めていく。

スラスターを閉じ、ようやくアラームは止まる。エーテル圧も危険域を脱して落ち着いたようだ。逆に鍵次の心拍は早鐘となり、呼吸はぜい鳴を混ぜ始めていた。

ただ避けて回るだけでも、この始末だ。巨大な質量の移動に体を揺さぶられつつ、体内の魔力を根こそぎ持っていかれる。さらに相手の動きに注意し、即応してみせなければならぬ。

二十年前なら、こんなことは特段に意識せずとも出来ていたのに。やはりエラヒストスなどは、操作感が根底から違っている。少しばかりは覚えているかと思っただが、まるで通用しない。

落ち着きを取り戻しつつあった鍵次は、首筋に嫌な冷えを感じた。それに逆らわず、ゲートティアを前に倒すようにしてその場から退かす。

メガロスは直感的操作やエーテル循環によって、まるで人間のよきな挙動を実現する。それと同時に、感覚器官もまた人間か、あるいはそれ以上に鋭敏なのが常となっている。

その情報はモニターによって示される場合もあるが、緊急を要する場合 重大な危機などは、そのまま操縦者にフィードバックして伝達してくれる。

ゲートティアの伝える情報に嘘はない。長年付き添った鍵次は、この信頼によって幾多の危機を乗り越えてきたのだ。

間をおかず、ゲートティアが背を預けていた山肌が内側から弾け飛んだ。土砂を撒き散らして現れたのは、仄かに青づいた巨大な円錐。それが高速で回転し、山を貫いたのだ。

それは紛れもない、切削螺旋錐 ドリルであった。

「中々、古めかしい装備じゃないか」

むしろ感心する思いで、鍵次は呟いた。

メガロスの存在が公になった当初は、メガロスやエラヒストスの装備として重用されたドリルだが、攻撃範囲の狭さ、機構の複雑さからくる重量や脆弱性など、多くの問題が発覚し始め、次第に主力武器群から姿を消していった。

メガロス乗りとして第一線で活躍していた鍵次は、そうした事情を冷めた心地で聞いていた。

分かっている。そういう奴らは何も分かっていたいなかった。魔術に効率だの何だのを持ち出すこと自体、ナンセンスなのだ。

魔術とは、己の心を顕すこと。精神の中身を外へ放出する過程である。そこに効率や損得、果てにはランニングコストなどというものをつ随させることこそ、本来の魔術を蔑ろにする行為である。そんなことをすれば、自らの魔力が濁ってしまう。

汝が欲するところを行う。そこに理屈は必要ない。理屈を振り払って何もかも思い通りにしたいから、魔術師はメガロスなどという途方もない巨人を生み出すのだ。

やりたいことをやっている奴が、一番強いのだ。魔術の世界でも、その理屈が罷り通っている。

右腕に備えたドリルを振りかぶり、ベールクが突っ込んでくる。鍵次はスラスターを吹かさず、その場にゲーティアを留めた。そもそもエーテル圧の薄い今の状態では、逃げたところで追いつかれるのは目に見えている。

相手から来てくれるのだから、間合いを潰す手間が省ける。ここは退くときではない。迎え撃つときだ。

## 山へバールク…？

ゲートティアはゆらりと中段に左手を置き、やや斜に構える。まるで格闘家のように、堂に入った格好である。

(頼む、一度でいい……)

失敗は許されない。あのドリルは、一撃でゲートティアの装甲をこつそりと持っていくだろう。悪くすれば、コクピットまで到達するかもしれない。

あんなのに巻き込まれて死ぬのは、絶対に嫌だ。

「嫌だ、嫌だ、嫌だ」

自分の心の内を反芻し、確認する。意思が言葉呼び、言葉が意思を確かなものにする。死にたくないという意味を、この僅かな時間高められるだけ高めていく。

その高さこそが魔力となり、エーテルとしてゲートティアの体を駆け巡る。鍵次が呟くたびに、エーテル圧を示す針が徐々に傾いていく。

鍵次が徐々に建て直しを図るなか、バールクはそんなことに頓着せずに突っ込んでくる。こちらは膨大なエーテルを迸らせ、あまつさえ氷で形成したドリルをエーテルで回転させている。

甲高いタービン音が、ぐんぐんとその音量を増してくる。それは今にも到達するのではないかと思えるほど、大きくてうるさい。

それでも飛び出すわけにはいかない。下手に飛び出せば、それこそ相手の思うつぼだ。

鍵次は動かない。なけなしのエーテルを掻き集めながら、ドリルの恐怖を前に体を静めている。

またも去来する懐かしさを、鍵次は奥歯で噛み締めていた。こういう武器を向けられるのは、それこそ一度や二度ではない。かつて搭乗していたころは、むしろこうした状況こそ日常だったと言える。

自分はまた、それを味わっている。今さらながら、魔術師と相対しているのだという実感が沸いてきてくれた。

ドリルがさらにエーテルを吹かし、爆発的に加速しながらゲイティアの胸部に吸い込まれていく。狙いは過たず、コクピットだ。

やはり狙ってきたかと、意外に平静な心地で鍵次は受け止めていた。メガロスを沈黙させるには、その搭乗者であり燃料である魔術師を殺してしまうのが、最も迅速であり確実である。

ベテランの魔術師であるドミトリイが、そこを間違はずがない。想定どおりだ。そんなことは分かっていた。全ては申し合わせたとおりだ。何も問題ない。何も間違わない。あとは決められた動きを、決められたとおりになぞるだけである。

ドリルが今にも装甲を抉ろうかという刹那の間。自身の心を必死に奮い立たせ、鍵次はゲイティアを前に出す。

そして唯一残された左手を、回転するドリルへと差し伸べた。当然、ゲイティアの左腕がマニピレーターごと巻き込まれていく。ドリル刃が装甲を削り、ぎりりと火花を散らし、ベールクの体が直上に打ち上げられた。

突進の勢いそのままに宙を舞うベールクは動揺を隠し切れず、思い思いに吹かされたスラストで姿勢制御すらままならない。

ゆっくりとベールクの巨体が落ちてくるなか、ゲイティアは足を踏み変えて必殺の間合いを計っていた。

「だらあ！」

ゲイティアの後ろ回し蹴りが、ベールクの胸部装甲に突き刺さった。遠心力を伴って放たれた鋼の踵が、ベールクを鞠玉のように蹴り飛ばす。

砕けた装甲を撒き散らしながら、ベールクは盛大な水飛沫を上げて海岸に墜落した。

メガロスは人間のような拳動を可能とする以上、人間の行う格闘もこなせるのは当然だ。それを突き詰めれば、メガロスの鋭敏な感

覚と膨大な怪力を前提とした慮外の格闘戦を演じることが出来る。

鍵次が行ったのは、柔術でいうところの小手返しである。ただその馬力が桁外れなため、勢いあまってベールクは宙に投げ出されてしまった。

ドリルの回転力を受け流し、左手で引き込んで投げ飛ばす。直感的操作だからこそ可能となる迅速なメガロスの運用こそ、鍵次の最も得意とする分野である。

五十メートルを超えるメガロスに乗りながら、時には数ミリ単位での作業を、メガロス同士の戦闘という緊迫の状況下で行う。それがもたらすのは、他の魔術師にすら追隨を許さない、緻密にして精妙を極める超絶技巧。

元より魔術師ではなく、単なる相性のみでメガロスの操縦を課せられた鍵次が、生き残るために身につけた技術。

以前は呼吸するが如くにまで高められた技術だが、今となっては心許ないほど危うい。ゲーティアからのフィードバックが伝える左手の感触は、ドリルのいなしが紙一重であったことを教えてくれている。

端末を握る手が、今さらながら震えてくる。この震えが先ほど来なくて本当に良かったと、鍵次は実感していた。

戦闘を行うには心許ないが、ベールクはあれでほぼ機能停止に等しい損害を被ったはずだ。例え諦めてはいなくとも、十分な稼働は出来ないはずだ。あちらの動きが鈍れば、その分こちらは踏み込める。先手先手で押さえていけば、自ずと撤退を選択するはずだ。

鍵次は悄然とした面持ちでゲーティアを海岸に向かわせたとき、目の前の海面がぐわりと立ち上がった。その高さは、ゲーティアの頭部を越えて余りある。

今正に行われている怪奇現象が、鍵次の警戒心を煽りに煽る。その原因はベールクと見て間違いない。しかしベールクの得意とする魔術は、氷を生み出したり対象を凍結させたりといった魔術である。

このような海流操作を行えるなど、聞いたことはない。  
その答えは、立ち上がった海面を拡大描写したことで初めて知れた。

目の前の海流は、水のまま立ち上がっているのではない。大部分は氷で形作られている。それが溶けながら、凍りながら、膨大な質量を流動させているのだ。

分厚く凍りついた海面から、ベールクが起き上がる。その全身に氷を纏い、量感が二倍ほど増えている。

氷の巨人が手掌をゲーティアに向けただけで、鍵次をけたたましいアラームと危険信号が苛む。捕捉されている上にエーテルを向けられているのだから、今すぐ回避行動を取るように促されるのは当然だ。

下がるうとしたゲーティアの体が大きく傾き、背中を地面に打ち付けた。土煙がもうもうと上がるなかで、予期せぬ転倒に鍵次は取り乱す。

「え、ちよ、な」

混乱をきたした鍵次の右足に鈍痛が走る。それが意味するのは、感覚を共有しているゲーティアの右足首部の故障。

急ぎウィンドウを呼び出せば、右足首部アクチュエーターの破断が報告された。どうやら先程の回し蹴りの衝撃が原因のようだ。

エーテルの欠乏は循環器系だけでなく、ゲーティア自体を構成するエーテル合金にさえ影響していたらしい。剛性の下がった状態で同じエーテル合金に叩きつけてしまい、ひしゃげたアクチュエーターが自重を支えきれずに疲労破断してしまった。

攻撃さえもままならない自身の愚劣さを省みる暇すらなく、只々鍵次は目の前のモニターに映るベールクの威容に慄いている。

がくがくと浮動する顎の震えが全身に渡り、端末からゲーティアに送信される。大地に寝転ぶ巨体が震動し、周囲を地震と見紛うほ

ど迷惑に揺さぶっている。

最強を誇ったメガロスの無様をどのように捉えたのか、ベールクはゲーティアに向けた手掌を握りこむ。

すると正に堰を切ったように、氷塊と冷水の相半ばの海水が獣の顎の如くにゲーティアへ降り掛かった。

押し寄せる激流はメガロスごと周囲の建造物や樹木を飲み込み、たちどころに凍結していった。激流は全てを飲み干したところでぴたりと動きを止め、中にあるものはさながら静止画の如く綺麗に納められている。

ゲーティアもまた多分に漏れず、空を掻くように左手を伸ばしたまま分厚い氷の中に閉じ込められた。

「ゲーティア、沈黙」

メデイナが告げずとも、皆がそれを知っていた。海水に飲み込まれて、分厚い氷の中に閉じ込められたのだから、行動など起こせるはずがない。

「小中くんは生きているのかね」

「問題ありません。物理的に行動を制限されただけです。氷さえなくなればすぐにでも動き出しますよ」

「その氷が問題なのだろう。パウロスで壊せないのかね？」

「兵装まで積んでいる時間はなかったの。高高度から衝突させれば、あるいは」

志田長官は、顎に手を当てて悩んだ。

旧式のエーテルジェット機とはいえ、失くすのは惜しい。しかしこのままではゲーティアの中にいる鍵次が凍死し、時間稼ぎの役を果たせない。

「……よし」

素早く対応を決めた志田が、徐に立ち上がった。

「もう少し、様子を見る！」

つまり何の行動も起こさないとということが宣言され、皆は一様に頷いた。何か打開策が司令室にある訳ではない以上、今は鍵次とゲータアを信じて待つほかない。

とはいえ、今のゲータアがこの状況を打破できるなどと、皆は露ほども考えてはいなかった。

## 山へベールク……？

氷塊に閉じ込められながらも、ゲートティアは未だに稼動していた。センサー系は十全に働き、既にベールクがこちらから離れて移動するのを確認していた。コクピット内の機器にも特段の影響はない。よしんば各部装甲内にまで氷が入り込み、固定されてしまっているくらいである。

まだ終わっていない。まだやられていない。この程度の窮地は、かつて幾らでも経験してきた。センサー系を全て殺されながら戦ったこともあったし、下半身が吹き飛ばされても敵に食らいつき、コクピットを拉いだこともある。

右腕以外は揃っているのだから、そうした事態よりは上等と言える。ゲートティアの体をエーテルで満たしてやり、過剰なトルクで氷を砕いてしまえばすぐに脱出できる。

あとは魔力を捻出すれば済む話なのに、鍵次はまだ体を震わせ、微塵の魔力も生み出せずにいた。エーテル圧は既に稼動可能域を下回り、コクピット内の衝撃緩衝用エーテルも薄まっている。

魔力が出ない。心が熱を失い、全く揮えないでいる。それほどまでに、鍵次の精神は冷たく固まりつつあった。

自分でも自覚できる限界だった。これ以上は何も出来ない。何も行えない。

昔取った杵柄。いざ乗れば何となるだろうという考えが大半だったというのを、鍵次は今さら気が付いていた。そんな考えで乗りこなせるほど、メガロスは甘くないと知っていたはずなのに。

そんなことすら忘れたルートルが、漸う自身の見通しの甘さを思い知り、心身を愕然とさせていた。

鍵次はようやく肌に寒さを感じる。分厚いゲートティアの体を通して、氷塊の冷たさがコクピットにまで伝わってきたのだ。本来なら

遮断されるべき厳寒を跳ね除ける力は、鍵次にもゲーティアにも残されてはいない。

モニターの光さえ弱々しく点滅し始める。それは正に一人と一体の末路を暗示していると思えない。

こんなところで、終ってしまうのか。こんな終り方のために、自分はゲーティアに乗ったのではない。魔術師達と戦い、世界を救ったわけじゃない。メディナと結婚し、子を設けて、別れたわけではない。

かつての自分ならと、またも鍵次は昔を思い起こしていた。しかし今、鍵次は三十八歳なのだ。高校生の頃　ゲーティアを乗りこなしていた頃の自分など、もう影も形も残っていなかったのだ。

時は失われた以上、何も取り戻せない。魔力も、技術も、命も、娘も。

全身を弛緩させ、鍵次がシートにどつと倒れこんだ時だった。彼の懐から、はらりと一枚の紙が滑り落ちた。

手垢で薄汚れたそれは、娘が三歳の誕生日を迎えたときに、家族で取った写真だった。鍵次の手元に残っている、唯一の娘の姿である。その他のノンネに関わるものは、全てメディナに引き取られてしまっていた。

これだけが鍵次と、今はもう十五歳になる娘との一方的でなければの絆である。

鼻筋や目の作り、そして目を引く煌びやかな銀髪は、生粋の西洋人であるメディナの特徴が強く現れている。しかし口元と瞳の色は鍵次のそれを受け継いでいる。この写真の頃から十二年も経った今では、より顔の作りがはっきりとして、さぞ美人に育っていることだろう。

写真を見るたびに、鍵次は今のノンネの姿を夢想せずにはいられない。そして、彼女の隣にいられたらどれほど幸福かと、さらなる妄想を膨らませること頻りであった。

例え不謹慎で無責任だろうと、考えたいことは考えてしまう。心の内まで律せられるほど、鍵次は強くはない。

「ノンネ、ノンネ！」

破ってしまわぬように写真の端を握り、鍵次はそれを祈るように掲げ持った。幼い娘に許しを請うため、顔を俯かせている。

別にノンネに一生会えなくても構わない。むしろそのほうが彼女のためだろう。メイナが自分のことをどのように伝えているかもしかすれば伝えてさえいなくてもいいのだから、余計なこととは控えるべきだ。それだけの覚悟は既に備わっているし、事実今までノンネに会うための行動を、鍵次は一切起こしていなかった。

だが、今は違っている。今の鍵次の心は、娘に会いたいという感情で埋め尽くされている。

一生会わないとを覚悟することは出来る。堪えることも出来る。しかし、今生会えないということが確定するのは堪えられない。

せめて会えるかもしれないのだという可能性くらい残してもらわねば、人生がやりきれない。会わないという覚悟も、その淡い可能性の上に成り立つ論理なのだ。

また元の緩んだ日常に戻れば、もしかすればすぐに忘れてしまう感情なのかもしれない。それでも構わないと、鍵次は写真を握る手を強めながら思った。

今この胸中に渦巻いている奔流こそが真実だ。今は、この沸き上がる思いだけを信じていたい。愛する娘に会いたいという気持ちを、何よりも大切にしたい。

そのためにやるべきことを、鍵次は十二分に承知していた。

「我、鍵にして拳ならず。我、拳にして剣ならず。我、剣にして鍵ならず」

ゲーティアの起動詠唱を繰り返し、ゆっくりと染み込ませる。ゲーティアの体に、自分の体に、魔なる言が染み渡っていくのが分か

る。

エーテルを伝って自分の感覚が賦活され、ゲーティアの隅々にまで神経が行き届くようになる。コクピット内がそれと分かるほど光り付き、衝撃緩衝用エーテルが充溢する。同じくして浮かび上がったモニターが、ゲーティアのエーテル充填率の高まりを示していた。「起きろ、ゲエエエティアアアアアアア！」

叫びが魔力を呼び、エーテルを励起する。ゲーティアの全身が、充溢するエーテルによって淡く光を帯び始める。紫電を形作るほどに収束したエーテルが漏出し、装甲の表面を駆け巡る。

循環器系から滲み出たエーテルが、さらにゲーティアの体を包み込む。それは氷に当たるたびに音を立て、空気を激しく爆裂させていた。

それが無数に連なり、巨大な氷塊の奥を白いひびが覆い尽くしていく。程なくゲーティアの姿は、靄に包まれたように判然としなくなった。

一際大きな爆裂音とともに、氷塊の表面がぱっくりと破断した。そこから漏れるのは蛍光色の霧。空气中で靄囲気を保つほど濃密なエーテルの集合体である。

霧は勢いを増し、まるでジェット流のように噴き出して氷を削り飛ばしてしまった。

細かく砕かれた氷を振り払い、ゲーティアが身を起こす。掛かる氷粒はゲーティアの装甲に近づいた瞬間に霧散し、蒸気となって立ち昇っていく。

既に遠く離れていたベールクが、立ち止まってそちらを仰いでいる。望遠モニターでその様を確認した鍵次は、力強くゲーティアを前に押し出した。

アクチュエーターの不調をもともせず、ゲーティアが走る。背部、腰部、脚部からエーテルを吹き出すスラスタが、真夜中の北海道に鈍い光輝の尾を引いた。

一直線に突進してくるゲーティアを前にして、しかしベールクに動揺の色はない。両肩部の輪胴式機関砲を再び開き、氷塊を立て続けに打ち出す。

ゲーティアの頭部ほどはある氷塊の弾幕に、鍵次は進んで身を投じる。背部スラスターの出力を上げて、風切る衝撃波が地表を抉るほど低く頭を下げ、這うような態勢を取る。

如何にも走りにくそうな態勢だが、それは人体力学的な事情である。人を模しつつも人ならざるメガロスに、そのような条理は当てはまらない。

ベールクが氷塊を惜しまないように、鍵次もエーテルスラスターを惜しみなく使用して突進する。低まることで前面投影面積を減らした機体を、さらに左右に振って狙いを絞らせない。

最大戦速を維持しながら、複雑な機動でベールクへと肉薄する。

二回三回と揺れるゲーティアを追って銃身を追従させ　ドミトリーは肩部装甲を折り畳んでしまった。

氷塊が打ち止めたわけではない。その気になればドミトリーの魔力が続く限り、氷塊は生成することが出来る。問題は、氷塊を打ち出すメリットが無くなってしまったということだ。

毎分二百発を誇るベールクの輪胴式機関砲が、その二百発を吐くよりも前に、ゲーティアがその懐へと進入する。これほど近い間合いだと、大規模な射撃兵器は取り回しが悪い。

ここはより近接で効力を発揮する兵器に切り替え、応戦するべきである。

氷塊の射出によって仕留めることを諦めたドミトリーは、ベールクの両腕に氷を纏わせる。それは機械的な正確さで組み上がり、複雑な螺旋錘構造を五秒と掛からずに形成してみせた。

二つの巨大なドリルは、すぐにでも回転を始める。徐々に音階を高めながら唸る切削部が、ゲーティアを掬い上げるように振るわれ

る。

低まっていたゲーティアが、ドリルの尖突を避けるために起き上がる。刃が装甲を抉る寸でのところ、絶妙なタイミングでゲーティアは逃げていく。

ゲーティアの胸部　コクピットを砕かんとするドリルは、コクピットにいる鍵次には止まって見えた。

振るわれるベールクの腕との相対速度を合わせ、ドリルの回転をつぶさに観察する。既に算出されているドリルの回転数を元に、回転方向に沿う形で素早く左手を振り上げる。

接触は一瞬。僅かでも鈍ればドリル刃が容赦なく食い込み、左手を巻き取ってしまうことだろう。

振り上がるドリルをさらに下から叩き、ベールクの右腕が大きく跳ねる。致命的な螺旋円錐は、今やゲーティアの頭上を越えている。

その場からさらに踏み込み、頭を打ちつけるほど近くにゲーティアは切迫する。

## 山へバールク …？

足を組み替え、ゲーティアが縮ませた膝を一気に伸展し、やおら跳躍した。

今度はゲーティアの膝蹴りが、バールクを下から突き上げる。分厚い氷を割り、その奥にある胸部装甲にまで亀裂を走らせる。

左手を引き絞り、鍵次は狙いを定める。先ほど後ろ蹴りを食らわせて弱まった胸部に膝蹴りを命中させたことで、バールクの装甲は相当に脆くなっている。ここは間髪を入れず、左の貫手でコクピットごと刺し穿つ。

伸ばした左手を撓ませて猫手を作り、高まったエーテル圧を開放して打ち出す。蛍光の軌線を残して、ゲーティアの左手がバールクに迫る。

必殺を期して放たれた左手が氷に到達すると同時に、ゲーティアの体が真横にずれてしまった。それに倣い、貫手もまたずれていき、とうとうバールクから大きく離れてしまう。

ゲーティアが直接訴えてくる感覚のフィードバックは、鍵次の体の右腰椎から左脇までの部分を熱く炙ってくれる。つまりゲーティアの右腰部装甲から左脇部装甲に掛けて、何らかの攻撃を加えられたということだ。

遅れて現れたヒステリックなアラームを参照すれば、やはりその部分の装甲が破砕され、中の循環器系にまで影響を及ぼしていることが判明した。

地面に崩れ落ちる直前に態勢を入れ替え、何とかバールクを正面に捉えたまま着地する。見れば、バールクの左手にある長いドリルが中ほどから折れていた。

刀傷のようにゲーティアの体を斜めに走る損傷は、バールクのドリルによるものだった。まさに刀のような振るわれ方をしたために

剛性を保てず破断してしまっただが、折れるそのときまでゲーティアの装甲をドリル刃で巻き込みながら削ぎ取っていった。

傷口から垂れ流されるエーテルが、ようやく固着し始める。固まったその上から流れ出て積層し、傷口をまるごと覆っていく。

まさに人間で言うところのかさぶたである。その下ではエーテルが激しく化合され、循環器系や装甲が再生している。

全盛期の鍵次ならば、かさぶたすら形作ることも必要ないほど迅速に損傷部位を修理することが出来た。しかし今の状態では、この処置が精一杯である。

修理に掛かる時間を算出し、鍵次は小さく舌を打つ。とりあえずエーテルの漏出は止まったものの、若干ながら圧が減ってしまったている。主に右足と左手の挙動に影響が出るだろう。大人しく快復を待っていたら、ベールクに潰されてしまう。

右手があれば防げたものを。今さらながら右腕が失せていることに、鍵次は苛立ちを覚える。

そもそも右腕が健在で、小鍵機関が備わっているのなら、こんな無様な戦いにすらならなかったのか。それとも右腕の有り無しなどに関係なく、鍵次の腕が衰えてしまっているのか。

（考えるな。そんなことはどうでもいい！ 今は、魔力を高めることだけ考えろ！）

後ろ向きな思考を、頭の中から振るい落とす。例え冷静で合理的な判断でも、魔術師 中でもメガロス乗りという人種は、ネガティブな考えを持たないようにしている。そうした考えこそが、人から魔力を奪い取るからだ。

魔力の高低は、そのままメガロスの強さとなる場合が多い。入力が大きければ、その出力もまた大きく、汎用を利かせられるからだ。故にメガロス乗りには独善的な考えを持つ者が多く、そうした気性の人間ほど力を発揮するのが大抵だった。

例え自身の敗北が確定していたとしても、それを頑として受け付

けず、むしろ跳ね除けるくらいの気持ちで事に臨む。己の中にある心象だけがこの世に現されるべきなのだと信じて疑うことすらしない。

そうすることで初めて、魔は現実を侵す。条理を削ぎ落とし、自然法則をかなぐり捨てて、魔の所業が立ち現れる。

独善的で、稚拙で、だからこそ暴虐なまでの魔力は、敗北という確定した未来を捻じ曲げ、勝利さえも無理やり引き寄せてしまう。

ゲーティアが感じている痛みが、鍵次にも与えられる。エーテルを媒介として繋がっているメガロスと魔術師は、正に一心同体である。

その熱く焼けるような痛みが、またも鍵次を往年へと誘ってくれ。痛く、苦しく、もどかしく、払っても払っても消えてくれない痛痒。敵に与えられた熱さが、むしろ鍵次の心を沸き立たせる。

レメゲトンの理不尽を許せない気持ち。ノンネに会いたい気持ち。痛みを喘ぐ気持ち。今の鍵次の手持ちはこれだけだ。この三つでゲーティアを動かし、ベールクを屠らなければならない。

十分だと、鍵次は言い聞かせる。事実はいらない。本当にその三つで足りるのかという考察は全く意味を持たない。

足りるといふ確信さえ心の糧にして、魔力として放出してしまえばいい。自分とゲーティアを取り巻く状況全てを、エーテルの燃料にしてしまうのだ。

この思考法こそ、魔術師ならぬ身でメガロスを操縦しなければならなくなった鍵次が、ゲーティアと共に戦ってきたなかで編み出した技術の一つだ。

単なる人間が魔術師に挑むためには、形振り構ってなどいられない。幸福も不幸を絶望を欣快も、その他諸々の些細なこと。空腹でもいい、少し眠いのもいい、十円を拾ったのもいい。それらを集めて集めて心の中に溜め込み、今にも弾けそうなほど圧を掛けてしまう。

集束と圧縮を行われた心を解き放った正にそのとき、魔術師に匹敵するエーテル出力を得る。

立ち上がったゲーティアに、ベールクが突進する。再び両の手にドリルを現出させ、弓弦のように引き絞ってから突進の威力と共に打ち出した。

風さえも砕いて邁進するドリルだが、ゲーティアの体をまたも挟むには至らない。先ほども行われた左手のパリングが、的確にドリルを弾き飛ばしていく。

二度三度と繰り返すたびに、ドリルの弾かれる距離が大きくなっていく。より早い段階で力が巧妙に逸らされている。

「ゴアアアアア！」

ベールクの循環器系が唸りを上げてエーテルを供給し、ドリルを振るう手がさらに速く、そして力強くなる。メガロスの巨腕が振られるたび、踏みしめる足が地表を砕き、ドリルが荒々しく大気を振るわせる。

一撃を届かせんと躍起になるベールクを、打って変わって冷めた心地で鍵次は観察していた。一見して派手で強力に見える攻撃だが、やっていることは子供の癪癪と変わらない。高いエーテル変換率にものを言わせて、メガロスを暴れさせているだけのことだ。

そこには鍵次が使ったような細やかな技巧は見出せない。元よりそうした整然さは、本来の魔術には似合わない。

別段、そうしたものを一緒に運用しても何ら問題ないし、むしろ強力なのだが、魔術師という人種がそうしたことに頓着しないのも事実だった。だからこそ、鍵次の技巧はアドバンテージとして十二分に機能してきたのである。

ますます作業に慣れてきた鍵次は、精度と速度を高めて致命的なドリルを弾き、またもベールクの懐を取る。

「おっあー!」

咆哮一閃。ゲーティアの左肘がベールクの胸部に突き刺さった。後ろ回し蹴りと膝蹴りの損傷を快復しきれしていないベールクの装甲が、氷のように砕けて弾け飛んだ。

衝撃で後方に倒れようとするベールクの頭部を、ゲーティアは肘鉄を食らわすために折り畳んでいた左腕を伸展させて捉え、その場に踏み止まらせた。

左腕で頭を下げさせると同時に、ゲーティアの左足が跳ね上がる。

火山の噴火にも似た鈍く重苦しい轟音は、ベールクの装甲が耐久限度を超え、無残に粉碎された音だった。

地表から十メートルほど浮き上がったベールクは、膝蹴りの勢いにたたらを踏む。空かさず繰り出されたゲーティアの左順突きを何とか避け、続く右回し蹴りを肩で受ける。さらに弾かれて下がるベールクを、ゲーティアが追い詰める。北海道の町に灯るささやかな光が、二体の巨人を仄かに照らしている。

ここへきて形勢を逆転させたゲーティアは、一気に勝負をつけるために前へ前へと出る。振る払うドリルを弾きもせず潜り、ここたま痛めつけた胸部に拳足を向かわせる。

対するベールクは、胸部の損傷から薄青いエーテルの飛沫を散らしている。ベールクの魔力によって生成されたそれが地表に降りかかると、途端に辺りを真っ白い霜が覆い尽くす。

治りかけの装甲を腕で覆い、何とか直接打撃されるのを防ぐが、メガロスの巨大な質量を前提とする一撃は、ベールクの腕を通してなお胸部の亀裂を揺さぶってくる。

森を踏み潰し、河を凍らせながら、二体の巨人は追走劇を続ける。  
(このまま押し切れれば、あるいは )

状況の不利を嫌がって、相手が撤退してくれるかもしれない。そうなってくれるのが互いのために一番良いとは思いますが、果たして相手が応えてくれる保障はない。

案の定と言うべきか、一際大きく下がったベールクのエーテル反応が、これまでにない高まりを示した。

恐らくは循環器系の耐久限度に近いエーテルの運用である。十中八九、ベールクにとって最大威力を誇る兵装が起動を始めている。ならばこそ、鍵次は残りのエーテルの殆どをスラスターに供給し、爆発的な加速でゲーティアを押し出した。戦闘機の高速機動に匹敵する高Gを、コクピットに満たしたエーテルの衝撃緩衝材が吸い取り、鍵次は実に落ち付いて事に対処できる。

ベールクはやはりこの状況を不利と感じ、ここ一番で最も威力の高い技に賭けたのだろう。己のメガロスを信じるのは魔術師として実に基本的な戦略なのだが、雑な選択であることも確かである。そんなことも予想できないほど、鍵次は落ちぶれてはいなかった。

あとは最大戦速で接近し、脆弱となった胸部装甲ごとコクピットを破壊するだけだ。

「ガアアアアアアア！」

スラスターのエーテルはもはや供給過多となり、噴出口と循環器系が悲鳴を上げる。それを喘ぐように、または押し潰すように、ゲーティアが吼える。

仄かに光りつくエーテルを引きながら、陽炎のように霞むほどの速度でゲーティアがベールクに近づいていく。それに呼応してベールクのエーテルはさらに高まり、寒々しい青色光を辺りに撒き散らす。

北の大地に灯る二つの光が、鏘然とした音を立てて激突した。

魔力を帯びた鋼同士がぶつかり、周辺には衝撃で巻き上げられた土砂が立ち昇る。

やがて土煙が夜風に吹き散らされる。中から現れたのは、二体の巨人が組み合う様。ゲーティアの左腕がベールクの胸部を貫通し、背面から飛び出していた。

深く、肩口まで深く差し込まれた左腕を引き抜くと、ベールクの

中心に空洞が現れた。本来はコクピットなどの重要機関が収まっていた部分は、ゲーティアの貫手によって押し潰され、中にいたであろうドミトリイごと拉げている。

左腕に引かれて、力なくベールクが倒れこむ。地面に当たった瞬間、全身が氷のようにひび割れ、無残に砕け散ってしまった。

操縦者にして動力源である魔術師を失ったメガロスは、もはやその体を維持することは出来ない。そうなってしまっただけは、為す術もなく朽ち果てる道しか残されていない。

むしろ魔術師なしで存在するゲーティアこそが、メガロスにおいては異端なのだ。

一応は周囲を走査し、敵性反応が皆無であることを確かめる。そうして初めて、鍵次は体を弛緩させてシートに深く預けた。

鍵次の戦意が消え、濃縮エーテルによる発光現象も収まると、ゲーティアは膝から力を失くしてその場にくずおれた。気が抜けたことでエーテル圧も低まり、脚部のテンションを保てなくなってしまったのだ。

## 山へへールク」：？

このまま留まっていると周辺の住民や報道機関が来てしまうかもしれないなかったが、鍵次は当然この場から動く気にはなれなかった。この戦闘でたつぷり十年分は老け込んだ気さえする。ゲートニアだけでなく、自分の体を動かすことすら億劫だ。

そう思って佇んでいると、大きな熱源反応が接近してきた。

真上でホバリングしているそれは、パウロスだった。パウロスは下面部のハッチを開くと、鉤爪の付いたプローブを幾つも射出し、ゲートニアの体に取り付けた。

すぐにウインチがワイヤーを巻き上げ、ゲートニアを吊るし上げる。極限まで弛緩したゲートニアは、まさに操り人形の如く不恰好な様で浮かび上がっていく。

見事サルベージに成功したパウロスは、そのまま巡航態勢を整えてレメゲトンの基地へと帰還する手筈となっている。ゲートニアの姿勢が悪いために速度は出せないが、それでも旅客機よりは迅速だ。

行きに比べて快適な空の旅を満喫していると、一枚のウインドウがモニター上に現れた。そこにはオペレーターであるメディナの姿があった。

「やったぞ。言われたとおり、魔術師、倒したぞ」

息も切れ切れに、鍵次は吐き捨てる。役目を無事に果たし、生き延びられたことは嬉しく思うが、嬉々とした表情を見せるような相手ではない。

だからこそ遠慮なく、荒んだ心のままに言葉を吐く。

「やってくれたわね、あんた」

そしてメディナも鍵次と同じくらいに顔を苦くさせて応えた。底冷えするような彼女の声には、間違っても喜色など窺うことは出来ない。

「とつとパウロスで帰ってきなさい。大事な話があるから」

鍵次がせつかく作戦を遂行したというのに、労いの言葉一つなくメディナは一方的に回線を途絶した。

「何だつてんだ？」

昔からキツイ性格ではあったが、何だか磨きがかかっているように思える。当然だが、鍵次は何一つメディナに許されてはいないらしい。

初めて会った頃のメディナも、やはり口と態度が悪かった。自分にも他人にも厳しく、そのせいで周りからいらぬ誤解を招くことがしばしばだった。しかしそれは若くして身寄りを失くし、僅かな伝手を頼って何とかレメゲトンに就職して、思わず肩肘を張っていたが故のキツさだった。

だからこそ誤解が解けてからは、メディナの口の悪さや態度のキツさを、鍵次は優しく受け止めることが出来るようになった。ひどいときには一日に最低でも五回はメディナに罵倒されないと心が不安定になってしまう時期もあった。

年を隔て、あの頃よりも大人になった今では、むしろ心をささくれ立たせる効果しか期待できない。若かった頃にメディナを受け入れられた大らかな気持ちは、むしろ擦り切れて使い物にならなくなってしまったらしい。

これでは何のために歳を取ったのか分からない。過去の自分の方が充実していて、今の自分は明らかに劣っている。年の功という最後の誇りも、先ほど自分がメディナに対して取った態度を見れば、機能していないことは確実だ。

まるで子供だ。いわゆる幼稚で頑固な、否定的な意味での子供だ。人は大人になるべくしてなるのではないのだと、鍵次は痛感した。大人になれるよう、自身が目指した理想へ近づく努力をした者こそ大人になり、子供にとっての模範となるのだ。

自分は努力してきたかと、鍵次は己の心に問う。勿論、答えは否だ。せめてノンネが生まれたときくらいは、そんなことが頭の端を過ぎったのかもしれない。それでも座右の銘にしたり、紙に張り出したりしていないことから察するに、意識することさえ稀だったということだろう。

状況に流されて、流されて、ここまで来たただけだ。さすがに命の危機に瀕したときには全力で取り組まざるを得なかったが、そうでないときにも全力で取り組んだかと聞かれれば、鍵次は俯いて黙り込むしかなくなる。

ノンネが生まれたことで流石に親としての責任を実感し、真面目に仕事に取り組んだ時期もあった。

しかしそれは、メディナと離婚するまでの僅かな期間であり、離婚してからの鍵次の生活態度は、お世辞にも誉められたものではない。理想的な大人であるとは、口が裂けても言えない。

大人という存在を盲信している内は、確実に子供でいられる。パウロスから伝わる振動に揺られながら、鍵次はシートに背を預けてゆったりと寛いでいた。

「どういうことだ、志田！」

鍵次は司令室に入るなり、大声で怒鳴り散らした。それはあの後に超越したメディナからの通信が原因だった。

「俺はあんたたちの言うとおりにしたただけだろ！」

勢いよく詰め寄る鍵次だったが、すぐさま横に控えていた警備部の人間に脇から取り押さえられる。鍵次の体重などないかのように、二人組みはするりと彼を抱え上げてしまう。

「命令どおりにやっていますというのは、能無しの台詞よね。それが通れば警察はいらないわよ」

メディナの辛辣な物言いにぎっときつい視線を返す。鍵次の苛立

ちは数分前、パウロスにて運搬されていた間に交わされた会話が原因だった。

そろそろレメゲトンに到着しようかという時、メディナから告げられたのは、ロシアの国公魔術師であるドミトリーを殺害したことへの問責だった。

てつきりそのような諸般の事情は解決しているものだから思っていた鍵次にとって、それは寝耳に水も甚だしかった。そもそも事情を告げなかった志田に食って掛かるのも無理からぬことである。「ともかく、君の行いは我が機関に重大な損害をもたらした。その分を労働で埋め合わせるのは、大人として当然の責務だろう？」

さらに噴飯ものなのは、国公魔術師殺害の罪状を押し付けておきながら、それを揉み消す代わりにレメゲトンへの従事を義務付けられたことだ。

「またゲーティアに乗れるんだよ。良かったね」

いつそ理不尽に押し付けられたなら、まだよかった。脳みそが蒸発してしまいそうなほど憤慨することはなかったかもしれない。しかしそれをあてつけがましく、恩着せがましく突きつけられたら、鍵次は志田の顔を、形が変わるまで砕いてしまいたい衝動を發揮するよりほかなかった。

「ふざけるなあああ!!」

衝動のままに警備部の人間を振り払い、鍵次が再び志田に詰め寄った。火事場の馬鹿力というやつだろうか、警備部の者たちが手を伸ばすが、既に彼の拳が志田に向かって放たれていた。

ばしりと小気味よく乾いた音が、司令室に響く。しかし鍵次の拳は志田には届いていなかった。それどころか彼は先ほどまでの威勢を忘れて愕然と呆けてしまっている。

「南武、さん……」

鍵次の拳を受けていたのは、南武の頬であった。そして下に目をやれば、代わりとばかりに南武の下段突きが音もなく鳩尾にめり込

んでいる。えづく間さえなく、鍵次は腹の底から猛烈に昇る痛みに気を遠のかせた。

南武の頬を叩いた手を肩にかけるも、鍵次はそのまま足から力を無くして崩れ落ちていく。床に取れる前に、南武が脇に手を通してその体を支えてくれたのが分かった、さらにその奥では、志田がいかにも訳知り顔で頷いている。

今さら自分が喚いたところで、無駄なのだ。魔術師ですらない自分に出ることなど、多くはないのだ。魔術師管理組織として強権を振るうレメゲトンに比べたら、自分など取るに足らない存在なのだ。唯一出来ることと言えば、ゲーティアを操縦すること。だからといってここで暴れさせてみても、自分の嗜虐心を充足させるだけだ。それどころか、誰にとっても迷惑でしかない。

仮にここでレメゲトンを取り潰したら、メディナはどうなる？  
メディナが育てている娘のノンネはどうなる？

誰の得にもならない。自分の怒りを披露することも、被っている理不尽を撥ね退けることも、須らく他人への迷惑でしかないのだ。鍵次一人が耐え忍べば、それで事は足りてしまう。

鍵次は魔術師に匹敵する心を持っている。悪辣と理不尽を振りまく存在を許さない潔癖なほどの正義で、実際に最悪の魔術師であるスライマンと戦ってきた。しかしそれは、己以外の存在を傲慢に廃絶できるほどの代物ではない。あくまで鍵次の、高校生までは人並みに育てられた男の、ささやかな異常でしかない。

正義とは生存をもたらすものであり、悪とは非生存をもたらすものである。鍵次の正義は、自身がより多くの非生存をもたらすという状況を想定していない。だから機能しない。ただただ呻きあげて、自分の中にある鬱屈を持て余すだけである。

潔癖の正義で己を縛り上げ、自己完結した鍵次は諦観にも似た心地に包まれて、意識が遠のくままに任せてしまった。

再び訪れた魔との戦いにさえ目を瞑り、今だけは眠りにつく。仕事のこと、レメゲトンのこと、ゲーティアのこと、ノンネのこと。その全てを、すっぱりと欠落させて。

しかし、それはある。純然たる事象として、鍵次は否でも応じなければならなくなる。夫にも父にもなれず、友との約束さえ守れなかったその体と精神だけで、立ち向かわねばならない。

## 魔道技術者：？

先の一件で理不尽にもレメゲトンへの従事を義務付けられた鍵次だったが、意外にも平常どおりの暮らしを続けていた。

まるであの出来事が、夢か何かのように思えてくる。しかしニュースでは、北海道に現れた謎のメガロス二体のもたらした災害のことで持ちきりだ。

街を歩いていると、嫌でもその情報が入ってくる。

ベールクとゲートティアの戦いは、北海道のテレビ局に撮影されていたらしく、暗がりでも遠巻きながら二体のメガロスがぶつかりあう様が、街頭の巨大ビジョンで延々と垂れ流されている。

ワイドショーでは、突然領海を侵犯して現れた青黒いメガロスベールクと、それを迎撃するかのようには現れた、かつて第一次メガロス大戦で度々目撃された白いメガロス　ゲートティアについての憶測が飛び交い、コメンテーターが如何にも訳知り顔をして得意げに語っている。

しかし、彼らが確信的な情報を掴んでいる可能性は皆無だ。そうした情報は、レメゲトンが確実に秘匿している。

魔術師を管理すると共に、その安全を保障するのが、日本国魔術師管理組織レメゲトンの責務である。安易に魔術を世間に漏出しなために情報を規制するのも、魔術師の存在を守る一環として、ゲートティアの運用が開始されてから現在まで続けられている。

そのノウハウは、かつて魔術師達が自分たちの存在を秘匿するために使った技術を受け継ぎ、魔術師の個人情報や所有メガロスのスペックまで、一切を公表させていない。

無論、鍵次の存在やゲートティアのことも世間は知らない。謎のメガロスであるゲートティアは、白にちなんで昔から白騎士、白熊、はんぺんなどと呼称されている。ベールクの方は氷を使っている映像

が残っていたので、カキ氷と通称されている。

ゲーティアに乗って活躍していた昔は、こうした呼称を聞くと、鍵次は決まってほくそ笑んでいたものだった。それを聞きたび、自分だけがゲーティアを知っていて、やはり特別な存在なのだとは再確認できたからだ。

今は、そんな感情は毛ほども沸いてこない。世間にとってのゲーティアなど、鍵次にはまるで関係の無い事柄だ。

どうせ何も知らないのだから、関心を持つと言っほうが無理な話だろう。

その日は身体検査などを行うとして、またもレメゲトンの施設に呼ばれた鍵次は、そこで昔の知り合いに遭遇した。

整備員達に怒号を散らしている様は、往時を髣髴とさせる。思わず鍵次は、その人物の名を叫んでいた。

「ゴンじい！」

そう呼ばれた老人は、鍵次の方を向くとにっと顔をほころばせた。彼の本名は権田剛三と言う。魔術的装置専門のメカニックである。レメゲトンの発足当時から活躍し、ゲーティアのメンテナンスを一手に行っていたベテランである。

かつて、嚴重に秘匿されてきた魔術が結社『バベリア』の魔術テロによって公のものとなり、魔術は御伽噺に出てくる夢ではなく、現実を侵す理不尽として世に現れた。しかし人間は、それすらも恩恵に変えてしまうほどたくましかった。

秘匿から漏れ出てくる魔術はあらゆる分野に転用され、驚異的な速さで実用化されていった。第四次産業革命と言われる魔術の普遍化は、各分野と魔術とを繋げる専門的技術者がいてこそのものであった。

魔術に通じていながら、魔術師とは異なった方法論で魔術を運用することから、彼らは魔道技術者という呼称で魔術師と区別されている。

権田は最初期の魔導技術者の一人であり、メガロスから転用したエラヒストスの制御・運用技術では世界最高峰の誉れ高い。彼がゲートティアを運用する上で確立した方法論の数々は、全ての魔道技術者にとつての世界的標準であり続けている。

「おう、鍵次。久し振りだな、老けやがったもんだぜ」

伝法な言葉遣いと雰囲気、たまらなく懐かしい。始めてあったころ、ゴンじいは三十五。今の鍵次と同じくらいの年頃であった。つまり今は五十を超えた老人だ。

「やっぱゴンじいも呼ばれたのか」

ゲートティアの運用が本格的に再開される以上、彼を外すわけにはいかないだろう。招聘されるのは時間の問題だと鍵次も思っていたが、やはりこういうところでのレメゲトンの行動は迅速だ。

「最初に連絡があつたときは、驚いたさ。まさか本当に運用するとは思ってなくてな、断つちまつた。悪かつたな」

「そんなことねえよ。でもゴンじい、いいのか？」

また戦いに巻き込まれるかもしれない。それに今は、以前ほど若くはないのだ。無理がたたつて大事に至ることもなくはない。

そんな鍵次の不安を吹き飛ばすように、権田は彼の背中を思い切り叩いた。

「お前の戦いぶりみたら、居ても立つてもいらなくてよ。ありやあひでえもんだつた」

「俺だつて久し振りだつたんだ。勘弁してくれよ」

「おめえは仕方ねえさ。俺が言つてんのは、整備の連中だよ。あんなの動き見りや分かる。まともな整備できてるとは思えねえ」

鍵次は眉根をひそめ、神妙な面持ちで聞いた。

「やっぱり、ひどいのか」

「あつたりめえだ。連中、メガロスはメンテナンスフリーが常識だとか抜かしやがったんだぞ。そういう頭なのさ。整備するって姿勢

「がなつちやいねんだよ」

確かに魔術によって構成されるメガロスは通常の機械とは異なり、人の手によるメンテナンスを殆ど必要としないとされている。しかし実際にはエーテル循環器系のゴミを除去したり、関節部の歪みを調節したりと、色々と人の手を入れてやらねばならない部分がどうしても存在する。

各分野による魔術の転用のため、現在でも求人が多い魔道技術者は、主に大学や養成学校を経たのち、試験に受かることで資格を得られる。

各分野の専門知識と魔術とを兼習しながらという事情のためか、魔道技術者自体の資格は比較的容易に取得できる。広がり続ける魔術の転用に追いつくための需要を賄えるためなのだろうが、同時に技術力の形骸化が問題となっている。

「あんなんで送り出されるメガロスが不憫だよ。お前も大変だな」  
レメゲトンのメカニックも例外ではないらしく、長年ゲーティアの整備を行ってきた権田から見れば、今の整備班は子供の遊び程度でしかないという。

「娘を人質に脅迫されたんだってな。腐れ外道の志田が思いつきそうなことだぜ」

権田はこうした組織への批判を明け透けに言う。そこがまた彼の直情的な気質を表していて、鍵次にとっては好ましい。

「……これから、乗るのか？」

急に権田は声を潜め、真顔で問いかけてくる。

鍵次は厳かに頷いた。

「レメゲトンのやり口は身に沁みてるからな。とはいってもさ、今はバベリアみたいなのはいないから、そう頻繁に出動はないだろ」  
「だな。あんな事件だって、そうそう起こらない。今は他の魔術師もいるから、お前が出る番は少ないかもな」

「そう願いたいもんだよ。やっぱり本職じゃないのに、メガロス乗るのはきついぜ」

鍵次がこれ見よがしに腰を叩いて難儀そうにすると、権田がどつと吹き出した。

「さんざ暴れてきたくせに、よく言うな」

歳は離れているものの、気心の知れたもの同士、こうして会えば冗談も言い合える仲だった。

久し振りに権田と話せて、鍵次はとても満足した心地だった。この荒んだレメゲトンの組織にあつて、せめて彼ぐらいはいてもらわないとこれから先は続かなかつただろう。見通しの甘さを痛感すると共に、それを上回る安心が湧き上がってくる。

「小中さん、もう検診出来ますよ。来ていたなら連絡してください」  
二階の研究棟の自動ドアから、ドクターが投げやりな口調で鍵次を呼びつけた。言葉遣いこそ敬語だが、明らかに苛立っていることが伝わってくるので、むしろ無礼なものとなっている。

そんなことで苛立つくらいなら、事前に時間を告げておいてほしいものだ。そう言ってやりたいところを鍵次はぐつと飲み込み、「ああ、はいはい。すいませんね」と視線も合わさず謝るだけに留めておいた。

ここでいちいち反応しても、ドクターから返ってくるものは何も無い。良くも悪くも何も響かず、人を反らすことしかしないこの男には、同じように人間味の失せた対応をするのが一番楽なのだ。

「んじゃゴンじい、また今度な」

「おう。またな、鍵次」

ドクターに付き従う形で、鍵次は研究棟へ向かう。

ゲーティアに再び搭乗するに当たって、不安が無かったといえは嘘になる。むしろ自信など、先のベールクとの戦いで根こそぎ薙ぎ払われてしまった。そこへきて権田の登場は、諸々の不安を少しでも解消する助けとなった。

これならばメガロスに乗っての働きも、何とかなるかもしれない。  
そのような安心が、鍵次の中で芽生えつつあった。

## 魔道技術者：？

家に帰った権田は、畳に延べたままの布団に腰を下ろした。その近くに置いてあるちゃぶ台には、湯呑みに薬、ワンカップの焼酎につまみのスルメ、晩御飯のファストフードが並べられている。

老人になって、嗜好が老人らしくなるかといえば、そんなことはあまり無かった。むしろ動くことが億劫になると、出来合いの食べ物を提供してくれるお店はありがたいと感じる。

確かに若い頃よりも油にしつこさを覚えたり、胃が重く感じることは多くなったが、まだ許容の範囲である。これまで健康に特段の気を使ってなかったのだから、これからも大丈夫だろうと無根拠に思える間は、生活態度を改める気にはならない。

息子たちからは諫められているが、今のところ聞く耳を持たないでいる。介護が必要なほど弱り、世話にならざるを得なくなったら聞かねばならないだろう。しかし今のところ、権田はきちんと自立した生活を送れている。

魔道技術専門学校で非常勤の職を受け持っているので、生活費には困らない。それだけではなく、エラヒストス制御に関する講演は海外からもオファーが来る。さらに秘密裏だが、レメゲトンの整備班長として復帰することが確定している。

十全に社会生活を全うしている。誰に対しても負い目を感じるようなことはしていない。

ただ権田にとって気がかりなのは、鍵次のことだった。

鍵次との付き合いは長い。彼がゲーティアに乗ったときから、そして彼がレメゲトンを解雇されるまで、共に働いていた。

不幸な男だ。高校生になりたての頃、拉致紛いの方法で無理やりメガロスに乗せられ、そのまま魔術師達との死闘に巻き込まれてい

った。

何度と無く死地に遭遇し、普通人のまま魔術師に挑む鍵次をせめて救おうと、権田は常に全力でゲーティアをメンテナンスしていた。魔術師であれば、戦闘中にでもメガロスを補修することは可能である。しかしゲーティアを操れる以外は普通人である鍵次に、そんな器用な真似を要求するのは酷である。少なくともゲーティアに乗って間もない頃の鍵次にとって、それは死活問題だった。

ならば発進前にあらゆる不具合を失くした状態で送り出さねばならない。僅かな故障が、鍵次にとっては即座に窮地へと直結することになるのだから。

その使命感が、今の権田の技術力を養ったという側面はある。おかげでエラヒストス制御の世界的権威として知れ渡り、この歳になって年金が無くとも暮らせるほどに充実している。

しかし権田は、未だに後悔を引きずっていた。結果論として鍵次はあの戦争を生き残り、ましてや終息に導きはしたものの、その道程は単なる高校生が歩むには険しすぎるものだった。

事実、鍵次はあの戦争を終らせるために全てを捧げつくし、勉強も何も培ってこなかったため、その後の人生を大きく制限されてしまった。

そうした負担を取り除こうと奮起したものの、結局は何の効もなく鍵次はゲーティアを降ろされ、レメゲトン解雇されるに至ってしまった。

これでもうレメゲトンの理不尽な運用に振り回されることはないのだと思いつつ、まるで消耗品のような切り捨て方にも甚だ納得いかず、志田の所まで直談判に行きもした。しかしその判断を翻すには至らず、権田は臍を噛んで鍵次を見送る羽目になった。

しかも聞いた話に寄れば、その後メディナと鍵次は離婚することになったという。

あんな思いは、もうしたくない。

無論、全ての原因がレメゲトンにあるわけではない。元より活発ではなく自己主張の薄い鍵次は、口では反抗していてもずるずると状況に流されていってしまう。そういう彼の性情も原因の一つだ。だからといって、あんな仕打ちを受ける謂れはないはずだ。

むしろ権田は魔術に関係した職に就きながら、そうした魔術に関する諸々に対して疑念を禁じえない。

権田の最終的な目標は、魔術師に頼らない魔術の運用。つまりは魔術の代名詞であるメガロスを、魔術とロボット工学の結晶たるエラヒストスにて簡単安全、そして確実に制圧せしめること。

その方法論の確立こそ、権田の悲願だった。それさえ見つけてしまえば、人はもう魔術師に怯えて暮らすことはなくなる。魔術という理不尽を、人間の制御できる範囲に落とし込めれば、魔術テロの危険性も発生率も、大幅に減らすことが出来る。

早くそれを完成させ、鍵次を負担を取り除いてやりたかったが、開発されたてのエラヒストスではそれも叶わなかった。

その手の悔恨が、ときたま顔を覗かせて権田を苛む。あるときあとしていればと、今でも夜半に魘されもする。

実のところ、案は既にある。机上においてはエラヒストスの短所を補い、現行のメガロスたちとも互角に戦えるだけの仕様を持っているエラヒストスが存在する。

権田は垂れ流していたテレビを消し、書斎へと移動した。ふと思いつき、図面を眺めてみたくなったのだ。

書斎の棚に収まらず、書架に満載している紙束は、全て権田が一人で書いたエラヒストスの図面であった。

対メガロス用エラヒストス。昨今では建築機械としての地位を確立しつつあるものが多いなか、本来の用途に最も忠実なエラヒストス。

エラヒストスはメガロスの代替であり、対抗手段でもある。その

コンセプトの根幹は、言わずもがなゲーティアである。未だ研究が進まず、由来や機構などに多くの謎を残しているゲーティア。その最大の謎は、搭乗者にある。

現在でさえ、ゲーティアを動かせるのは小中鍵次ただ一人である。魔術師としての修行を積んでいない彼だけが、何故ゲーティアを動かせるのか。それは分かっていない。

しかしゲーティアは、一般人でもメガロスを操縦できるという可能性を示してくれた。その機構を分からないまでも何とか模倣して作り上げたのが、エラヒストスであった。

それでも足りない魔術的構造は、メカトロニクスで補う。希薄なエーテルにはオイルを混ぜ、光学センサーを幾重も備え、姿勢制御に最新のCPUを積み、エーテル合金に種々様々の希少金属を組み合わせ、ようやくと体を動かすという段階を踏む。

苦心して開発されたエラヒストスだったが、すぐにメガロスと対戦できるほどのスペックには達せなかった。それでも権田を始め世界中のメカニック、さらには科学者に魔術師も加わり、第一次メガロス大戦末期にはバベリアの魔術師に対して投入され、戦果を挙げらるまでに急成長した。

権田たちが手探りで行ってきた設計は今でこそ体系化され、多くの技術者が精錬してきた。軍用エラヒストスなどは、集団で運用すればメガロスに対して一定の効果を発揮するのが一般的となっている。

しかしそれでも、一個大隊での運用が前提だ。定期的にエーテルを補充するための大型エーテル運搬車や武器弾薬と各部消耗品類は特に生命線と言える。さらに戦車などの砲撃支援。航空戦力による制圧爆撃。空母・潜水艦からの巡航ミサイル攻撃など。後方部隊によって援護してもらわねばならない。

魔術師はそれらの仕事を、たった一人でやってのける。自身の体から膨大な魔力を生み出し、魔術によって遠方の地を壊滅させ、魔

術によって武器を生み出し、消耗品を取り替えるどころか、メガロスの体ごと作り変えて修理する。

未だエラヒストスは、一対一でメガロスを倒してのけるまでには至っていない。しかしそれが出来なければ、魔術師の脅威はいつまでも人類を苦しめ続けるだろう。

メガロスを上回るエラヒストス。それこそが権田の悲願である。人間が作り出せる、人間が制御できるだけの力で、魔術師という理不尽を取り除く。そのためのエラヒストスが今、権田の手に握られている。

これがあの時代に開発できていたらと、見るたびに権田は臍を噛む思いに駆られる。現行のスペックでは間違いなく軍用エラヒストスを上回り、恐らくは 魔術師の生み出すメガロスに匹敵する戦闘力を有するだろう。

これまで培った技術の全てを注ぎ込んだ、権田の考え得る最強のエラヒストス。名は破邪とだけ付けられている。文字通り邪なる魔の術を破るといふ願いの込められた名だ。

開発しようと思えば、出来ないことはない。権田の一声があれば、恐らくスポンサーは確保出来るだろう。その他の人員にも既に当てはある。

しかし、どこか億劫なのも事実だった。メガロス並のエラヒストスを開発するとなると、レメゲトンなどの魔術師管理機関がどう出るか分からない。支援するどころか、彼らや彼らに連なる魔術師の權益を侵害するとして、反対勢力に回られるとも限らない。

歓迎するところも出るかもしれないが、徒に魔術師管理機関同士の間を煽るのを避けたいのも事実だ。

それらは所詮、言い訳に過ぎないのかもしれない。年を取ったことでバイタリティが欠落し、その原因を他に探しているだけなのかもしれない。

作ってみたい。これが本当に、メガロスに対抗できるか確かめた

い。しかし、それを状況が許さない。

それに今開発したところで、鍵次を救えるというものでもない。鍵次がゲートティアを降りてからというもの、一緒に食事をするたびにゲートティアに乗りたい、まだ乗っていたかった、などと愚痴を零していたのを権田は覚えていてる。

この『破邪』を作るということは、今またゲートティアに乗ることが出来た鍵次を、再び降ろすことになるかもしれない。しかし同時に、彼を危険な魔術師との戦闘から遠ざける役にもなれる。

どちらを取るべきか、権田はまだ決心が付かない。それに未だ解決できていない問題点もある。

それは操作方法だ。エラヒストスの操作方法は、基本的に通常の機械と変わらない。

メガロスの直感的操作並のレスポンスが得られなければ、破邪は本来の性能を発揮しきれないだろう。

「権田剛三さんですね」

権田の憂鬱を打ち消すほど画然とした声が後方より響く。一人暮らしの自宅の、それも奥まった書斎で

「何でえ、あんた？」

応じては見たものの、権田の心中は穏やかではなかった。一人暮らしの老人を狙う泥棒かとも思ったが、ならば声など掛けるはずもない。しかも何の物音も聞き取ることが出来なかった。

振り返って見れば、そこにはやはりと言っべきか、一人の男が佇んでいた。まるでそこに元からいたような、不可思議な安定感でもって権田を見つめ返してくる。

「お迎えに上がりました」

言い知れぬ不安に、権田は今度こそ背筋を寒くした。その雰囲気を読みれば、男が魔術師であることは瞭然であった。権田は魔道技術者とはいえ、魔術師のように大規模な魔術を行えるわけではない。これほどの至近距離で対峙すれば、やれることは限られている。

「さあ、こちらです」

男が差し伸べた手に、権田の手が間を置かず重なる。単なる人間が魔術師と対峙したのなら、魔術師の言うがまま、従うほかはない。

## 朱雀、舞う：？

その日、突如レメゲトンに呼び出された鍵次は、現場監督に何とか都合してもらい、仕事を早めに切り上げて直行した。

警察などになら権力をかざして、多少は影響力をもたらすことのできるレメゲトンだが、一建築現場の一派遣労働者を早退させるなどという工作は行えない。その辺りは全て鍵次が負担することになっている。

勤務態度は真面目だった鍵次の申し出を、現場監督は「そういうこともあるさ」とむしろ当然だと言った態度で受け入れてくれた。同僚である頼田が、遅刻や早引けの常習であることも要因の一つだろう。

先ほど鍵次が受け取ったメッセージは、未だ公には公開されていない。

“茨城石油コンビナートにアンノウン襲撃。至急出勤されたし”  
簡素すぎる文体にて送られてきたメールを見て、鍵次はすぐさま早退を決意した。スクーターで都内の地下駐車場へ行き、そこから隠しトンネルを通ってレメゲトン本部へと向かう。まだ未成年のころにはレメゲトンが出資しているタクシー会社からいちいち迎えを寄越してもらっていたものだった。今は原付免許だけ取得しているので、主に自身のスクーターで向かうことになっている。

「一体どうしたってんだ!？」

スクーターを蹴飛ばし、急いで中央戦略発令室に飛び込んだ鍵次が、開口一番叫んだ。既にメディナ、ドクター、志田長官と、いつものメンバーが詰めている。その様子からも、緊急事態であることが伺えた。茨城ならばパウロスで飛ばせばすぐに到着する。今から準備すれば三十分以内に対処できるだろう。

早速ゲーティアの格納庫へ向かった鍵次を、志田が呼び止めた。

「ちょっと、小中くん。何でここにいるんだい?」

「何って、スクランブル掛けられたからに決まってんだろうが」

鍵次は苛立ち紛れに言う。すると志田長官らは一様に顔を見合わせ、首をこれ見よがしに捻ってみせた。

「君、今日呼んでないよ」

その瞬間、鍵次の顔から表情が消え失せた。

「はあ？ おい、何だそりゃ……」

危ういほど目を見開いたまま、鍵次は志田に詰め寄っていく。

「ふざけんなよ。こちら無理して仕事切ってもらったんだぜ」

思い切りドスを利かせた脅しを受けても、志田は如何にも困り顔をして肩を竦めるだけだった。

「それじゃあ、何かの手違いだったのだろう。しょうがない、一応詰めておいてくれたまえ」

はっはっはつと、その恰幅の良い体に良く似合ったふくよかな笑いでもって、志田は鍵次を労うように言った。

しかしそんなことで、今さら毒気を抜かれる鍵次ではない。

「一応！？ 何だそりゃ！？ 人をバカにするのもいい加減にしろ」  
そんな手違いで呼ばわれていたら、仕事がままならない。それも一応などと軽んじられれば、気分を害するのが人情というものだろう。

鍵次がさらに食い掛かろうとした時、その横にずいと割り込む人物がいた。

「賀茂栄修、これより現場に急行いたします」

如何にも若くはきはきとした声を聞いて、鍵次は志田への文句も忘れてはつと息を呑んだ。

「ああ、賀茂くん。それじゃ、よろしく頼むよ」

「はい！」

やはり元気に返事を返し、賀茂栄修と名乗った男は中央戦略発令室から駆け足で出て行った。

「い、今のって、まさか……」

その後姿を見送り、未だ絶句したまま鍵次が誰にともなく問う。しかしその動揺ぶりで要領を得たのか、志田が得心した顔で頷いた。

「そうだよ。賀茂家の新しい当主、栄修くんそんたいだ。尊泰そんたいくんの息子だよ。今回の対応は彼に頼んでおいたのだ。いやあ、悪かったね小中くん」

後半の辺りは、鍵次の耳に届きもしていなかった。彼が聞いているのは、前半の賀茂家に関する下りである。

分かつてはいたものの、鍵次は告げられた事実には慄いた様子で、苦しげな顔を押し隠すために手を広げて覆った。

「そりゃあ、賀茂だもんな。あの賀茂しかないわな」

賀茂家は古来より陰陽道を生業とする、由緒正しい家柄である。

陰陽道に長けた魔術師 陰陽師を幾人も輩出し、その多くがレメゲトンに所属している。鍵次がゲートティアに乗っていたころも、彼ら賀茂家の陰陽師と共に作戦を遂行することがあった。

特に賀茂尊泰は、共に戦ってきた仲間だった。残念ながら彼はバベリアの魔術師テロ鎮圧作戦において命を落としたが、その息子が遺志を継ぎ、魔術師として大成したのだという。

「そうか、尊泰さんの息子さんか。そういや一度、葬式で会ったっけな」

言われればなるほど、尊泰に似ている所が見受けられる。あのときはきとした声など、ついどきりとさせられたくらいだ。顔つきはちらとしか見れなかったが、目鼻立ちが似ていたように思われる。

賀茂家は設立当初からレメゲトンと懇意にしている間柄だ。賀茂家の陰陽師がレメゲトンに採用されるのは、半ば慣例と化している。栄修がメガロス乗りとして働いているのも、何らおかしいことはない。

とはいえ鍵次は、気持ちに沈むのを禁じえなかった。

鍵次よりも十歳ほど年上だった尊泰は、当時既に妻帯していた。

公私共に交流のあった鍵次は、自分の子供にはメガロスに乗ってほしくないと言ふ尊泰が事あるごとに漏らしていたのを覚えていた。

だからこそ賀茂家の慣習を変えたいのだと意気込んでいた矢先、尊泰は作戦行動中に落命した。

別段尊泰の希望を叶えるために行動していたわけではない鍵次だったが、どこか後ろめたい思いを心のうちに沸き上がらせていた。

栄修の登場にすっかり勢いを削がれた鍵次は、悄然とした面持ちのまま余っているアナライズブースの椅子に腰掛けた。

ここに至って家に帰るのも気が引ける。万が一に備え、鍵次は栄修の戦いぶりを見ておくことにした。

映像班の高速度ヘリが栄修を乗せて出発し、石油コンビナートへと急ぐ。

高解像度を誇る遠望カメラが、敵性を捉えた。

石油コンビナートに現れたのは、全身をオレンジに塗りたくった、妙に刺々しい巨人であった。嘴のように尖った頭部で、大きな一つ目が装甲の隙間から覗いている。

「メガロスじゃない、エラだな」

一目見てその特徴を捉えた鍵次が、ぽつりと呟いた。

構造に機械的要素が強く出ている。そして何より、魔術によって生み出されたメガロス特有の禍々しさが窺えない。

「どうやら変形機構を備えているようです。長距離航行用の形態を取り、精密爆撃で一気に制圧したとのことですよ」

寄せられた報告と合わせて既に分析を始めているドクターが、大型モニターに分析結果を提示する。

「爆撃機に変形か。伝統的だな」

飛行機への変形は、可変機構を備えているメガロスやエラヒストスにおいて普遍的と言える。人型の形態よりも高い移動力と機動力を駆使し、フレキシブルな戦闘を旨とするものが多い。

実際、自衛隊の主力エラヒストスである『準魔導機甲78式』も

飛行機への変形機構を備えており、装備によって戦闘機や爆撃機、輸送機など違った機能を発揮するような仕様となっている。

「賀茂栄修、現場に到着。朱雀、顕現します」

映像班の高速度ヘリの後部ハッチから降下。その後メガロスを展開する。

これが今のメガロスでの、魔術師の一般的な投入方法であった。魔術師単体をヘリや自動車で作戦区域付近まで輸送する。

石油コンビナートから離れた山中に、極彩の光が柱となって立ち上がった。そこから現れたのは、燃えるほど赤い装甲を纏った、細身の巨人だった。

尊泰の操っていたメガロス ひれんじやく 緋連雀をより先鋭的にした印象である。全身の至るところから伸びる剣尖のようなフレキシブルバインダーは、緋連雀にも備わっていたものだ。

フレキシブルバインダーの一つ一つが、生き物のように蠢く。装甲表面から放出されるエーテルが、ある力場を形成し始める。

朱雀の巨体が、前触れなくふわりと浮き上がった。

力場内に充溢させたエーテルが物理法則を歪ませて、朱雀の重量をほぼ無にしているのだ。

これにより朱雀は、超高速機動を可能とする。体中に取り付けられたフレキシブルバインダーは超高速機動下での姿勢制御と共に、力場を形成するためのフィラメントのような役割も備わっている。

無論その鋭利な形状の通り、エーテルを高速で噴出することで敵メガロスの装甲を削りながら裁断することも可能である。

朱雀、舞う：？

さらに朱雀は中空に手をかざす。すると力場に満ちていた薄赤いエーテルが集束し、幾何学模様を浮かび上がらせる。

「出る、式神！」

オープンスピーカーで放たれた栄修の叫びを受けて、方陣が輝きを増した。白と赤を緋い交ぜにした眩い光の中から、羽虫のかすれた影が群れを成して勢いよく飛び出してきた。

賀茂家、というよりは陰陽師のお家芸　式神召喚である。エーテル加速器とスラスターを備えた小型機械を大量に召喚する。

それは古来から浮星うきじつと呼ばれ、陰陽師の間で親しまれた代表的な式神である。

「尊泰さんの浮星より、多い……」

目まぐるしく移動しながら、浮星たちがオレンジ色のエラヒストスに殺到する。その数、ざっと三十強。

敵性エラヒストスを射程に捉えるや、浮星は一斉にエーテル加速器を作動させ、細まったエーテル粒子光を吐き出す。

最低限の装備に最低限の機動力。それを数で補い、相手を圧倒するのが、朱雀の基本戦術である。

オレンジ色のエラヒストスも危険を察し、その場から予備動作無く斜め上に飛び上がる。それを追って、浮星たちが急上昇する。さらに朱雀もエラヒストスを追う。

遠距離から精密に、しかも角度を問わず一方的に打ち抜くことが出来る浮星も、やはり万能ではない。限界まで軽量化するために移動と攻撃を最低限の機構で行うため、搭載できるエーテルの絶対量を切り詰めている。召喚主であるメガロスからのエーテル供給が切れれば、それは単なるエーテル合金の塊でしかなくなってしまう。

本来、エーテルは空气中で伝達するのは非常に困難なため、メガ

ロスの装甲に直接連結し、循環器系から分け当たる形が多い浮星だが、賀茂家のメガロスはその問題を既に解決していた。

朱雀と同じくらい刺々しいエラヒストスは、殆ど全身からスラストを吹いて上空を旋回する。その後を、金魚の糞のように浮星たちが追いつがる。

エラヒストスの肘近くの装甲が広がり、中から二門の筒が飛び出す。それは丁度浮星に搭載されているのと同じ規模のエーテル加速器だった。

両腕から細切れのエーテル光がばら撒かれる。銃身を切り詰めた分狙いはタイトだが、コンパクトに収納できるエーテルマシンガンは、浮星に向けて弾幕を形成する。

ほぼ一列に連なっていた浮星は敵の攻撃を感知するや、煙のようにわつと広がってエーテルマシンガンを遣り過ぐす。しかし大半は回避行動の分だけ遅れを取り、エラヒストスとの距離を開けてしまった。

「戦術陣形、四扇」

浮星を集中させて運用するのは効率が悪いと見て取った栄修が、朱雀から指令を伝える。それを受けた浮星たちはエラヒストスを追う数を減らし、残りをその上下左右に大きく展開させた。

エラヒストスに覆いかぶさるように、浮星の群れが追い詰めていく。まるでそれ自体が一機のメガロスのように、統率の取れた挙動である。

しかし移動範囲を広げた分、浮星のエーテル消費量が増大する。次第に浮星の中には、目に見えて動きを鈍らせるものがちらほら出てきた。

そんな浮星の一つが、翻って朱雀へと向かった。

浮星が朱雀に周囲に数秒留まっただけで、またその挙動に澆刺さを宿し、敵を追う群れの中に混ざっていく。

朱雀が形勢しているエーテル力場は、浮星への燃料供給の場でもある。高いエーテル濃度を保持する空間は、居るだけでエーテルを受け取ることが可能となっている。

これによってエーテル供給のための連結・離脱というタイムラグが無くなり、より迅速に、隙を生まず攻勢に出られる。

腕部のエーテルマシンガンだけでは防ぎきれないと思ったのか、エラヒストスが向きを変え、太腿に備え付けられた銃を構えた。人間の持つ拳銃をそのまま拡大したようなそれが、一気に火を吹く。

細切れながらも先程のマシンガンより大粒のエーテルが、浮星の群れを過ぎて奥にいる朱雀へと殺到する。

向かい来るエーテル光を、朱雀は全く避けようとしなかった。全く減衰するところのないエーテル粒子は、見るところ朱雀ほどの装甲ならば易々と食い破るほどの質量を有している。安穩と構えていてよい代物ではないはずだった。

それでも悠然と佇んでいた朱雀にエーテル光が到達した瞬間、それは無残にも弾け散ってしまった。

エーテル力場自体を盾として、同じエーテルを相殺したのだ。性質をいじってやれば、他の攻撃にも対応できる。これによって朱雀はそれ自身の脆さを補い、存分に戦うことが出来る。

さらに朱雀と浮星の両方にエーテルマシンガンを向けるエラヒストスだったが、その悉くを避けられ、あるいは散らされてしまう。

何の効果もないと見て取ったのか、エラヒストスは銃を腰にしまい、腕部のバレルを収納した。

そして姿勢を整えるや、飛び跳ねるようにして一気に上昇した。

天頂に向かって飛ぶエラヒストスが、形を変える。足を畳み、腕を縮め、腰を撓ませて、バインダーを折り畳んで羽根のように突き出す。

数え七本の巨大な羽根を伸ばす、それは戦闘機であった。

後方に集中したスラストが火を吹き、エラヒストスの体を引っ

こ抜いた。その際に起こった轟音が、朱雀のところまで届く。それはエラヒストスが空気の壁を破った音。ソニックブームが発生した際に生ずるものであった。

追隨していた浮星たちを置き去りにして、エラヒストスは雲間に消えてしまった。幾らエーテル推進機構を備える浮星とはいえ、音速には届かない。しかし、朱雀ならば話は違う。

全ての浮星を自身の後方へ移動させ、朱雀もまた変形を始める。敵エラヒストスほど明確ではないが、フレキシブルバインダーの角度や形状が変わっている。より高速で移動するために、最適な態勢を選び出しているのだ。

こちら音速を破り、朱雀の姿がエラヒストスと同じく厚い雲の中に入り込んだ。遅れて続く浮星を連れるその姿は、まさに瑞獣たる朱雀が長き飾り尾をたなびかせて飛ぶ様を思わせる。

赤い光が雲間に入り込むと、すぐに剣戟の音が辺りに鳴り響く。どうやらエラヒストスが接近戦を仕掛けたようだ。

鋼と鋼がぶつかるたびに、朱雀のものと思われる赤きエーテル光が瞬く。それは稲光のようにぱつと雲中を照らしていたが、次第に薄暗く弱々しいものへと変わっていく。

どうやら二体とも、雲の上を目指して戦いながら上昇しているらしい。

「映像班、早く朱雀を捕捉しろ」

音速を超えるメガロスを捉えろというなかなか無理な命令を受けて、映像班の航空機は雲海に向かって上昇を始めた。

何か嫌な予感を感じて、鍵次は司令室を出ようとした。

「どこに行くのかね、小中くん」

「一応、ゲーティアに乗って待機しておく」

それを聞いて、志田長官は肩を竦めて笑った。

「彼は賀茂家の跡継ぎだぞ。変形できる程度のエラに、後れなど取るはずがない」

相変わらず的外の指摘に、鍵次のこめかみに青筋が浮いた。

「尊泰さんもそう言われて、死んだんだぜ」

これには志田長官も言葉を詰まらせ、怯んだように体を下げた。

朱雀を操っている栄修の父親　尊泰も賀茂家の陰陽師として、メガロスに乗って多くの戦場で活躍していた。鍵次も彼に幾度も危機を救われ、共に戦う中で畏敬の念を向けていたものだった。

そんな彼が命を落としたのは、当時急速に普及しつつあったエラヒストスによるものだった。

開発当時、エラヒストスにAIを載せる試みが多くの研究機関で行われていた。実際、市場レベルにまでの実用化に成功した例も少なからず存在した。

それを、悪の魔術師スライマン率いる魔術結社『バベリア』が悪用した。

AIを搭載したエラヒストスに過剰なエネルギーを供給し、暴走を引き起こしたのだ。AI搭載型エラヒストスの暴走テロは、犯行声明を打ち出した『バベリア』の名と共に世界中に広がっていった。

現在でも詳しい因果関係は解明されていないが、どうやらAIの機構に漏出したエネルギーが流れ込むと、論理回路に干渉して、まさに暴走と言うべき行動へと発展するという。

解明されぬまま、現在ではメガロスは勿論、エラヒストスにもAIを搭載するという試みは禁じられている。

暴走エラヒストスの被害を真つ先に被った日本において、暴走エラヒストスの破壊任務を受け持った尊泰は、単独で凡そ百二十体のエラヒストスを相手取った。

急ぎ出勤準備を整えて、鍵次が現場に到着した時には、尊泰のメガロス　緋連雀がばらばらに解体されている最中だった。

残ったエラヒストスをゲートティアで一掃し終えたときには、緋連雀の機体は操縦者不在のためエネルギーとなって解けてしまっていた。

鍵次は無我夢中で、何とか残っていた尊泰の遺体を回収し、レメゲトンの本部へと帰還した。

魔術で尊泰を治してくれと訴えた鍵次だったが、尊泰の死亡は誰の目から見ても明らかだった。さしもの魔術でも、死人を蘇らせる法は確立されていない。泣き叫ぶ鍵次を南武が押し留めている間に尊泰には防腐処理が施され、霊安室へと移送された。

鍵次が再び尊泰を見たのは、葬式の会場だった。

苦々しい思い出を引きずって、鍵次は格納庫へと向かう。あの時にも感じた胸焼けのように張り付く後悔が、今また鎌首をもたげている。

## 朱雀、舞う…？

一際大きく、くぐもった残響を最後に剣戟が止む。どちらか一方の装甲が深く抉られたのは間違いない。

鍵次がいなくなった中央戦略発令室では、皆が皆朱雀の勝利を信じて疑ってなどいない。あの剣尖のようなフレキシブルバインダーにて、敵を貫いている様が目に浮かぶようだった。

志田もまたコマンダーブースの椅子にゆったりと背を預け、映像班のカメラが雲を抜けるのを今か今かと待っている。

雲間を破って競りあがったカメラが捕らえたのは、バインダーに串刺しにされた、朱雀の姿であった。

「な、何!？」

志田長官が椅子を蹴って立ち上がる。映像を見ているほかの者達にも、似たような動揺が現れている。

まるで予想だにしていなかった事態を受けて、多くの者が瞳目のまま大型モニターを睨みつけていた。

「朱雀、健在。まだやられています」

比較的冷静にデータを処理してたメイナが告げる。メガロスが戦闘不能に陥るのは、その巨体の維持が難しいほどに破壊された場合か、パイロットである魔術師からの魔力供給が断たれた場合である。

どちらの場合でも、メガロスの体は単純なエーテルとして変換されてしまい、跡形もなくなってしまふのが通常である。それが起こっていない時点で、未だ致命的な損傷を受けておらず、またパイロットも健在であることは十分に窺える。

問題は、エラヒストスにメガロスが敗北しているという事実である。一般論から言えば、エラヒストスとメガロスが相対した場合、明らかにメガロスに分がある。

高いエーテル変換効率から生み出される法外なトルク。エーテルを用いて顕される、一騎当千の魔術兵装。軽量、強靱を誇る高純度のエーテル合金。どれもエラヒストスでは持ち得ない代物である。基本的な性能の時点で、この二つには大きな開きがある。

しかしメガロスがエラヒストスに対して優れているとは、一概にも言い難い。メガロスを生産・操縦するためには魔術師として一生を掛けて研鑽を積み重ねなければならないが、エラヒストスは基本的な操縦方法さえ習得すれば一般人でも操作が可能であり、魔術ではなく機械的構造も有しているため、大量に生産できる。

そしてパイロットの技術や装備などを工夫すれば、エラヒストスにてメガロスを制圧することは、必ずしも不可能ではない。

その可能性を予期していた鍵次は、既にパイロットスーツに身を包み、ゲーティアのコクピットで待機していた。

「小中くん、大変だ！」

「息子さん、落とされましたか」

慌てて通信してきた志田長官の狼狽振りを鼻で笑いながら、鍵次は口調も軽く答える。

「知ってたのか!？」

「備えただけだよ。あんた、長官のくせに頭回らないよな」

通信越しに志田長官が鼻白む雰囲気伝わってくる。鍵次は片手間に通信を聞きながら、ゲーティアの計器類のチェックに余念がない。

「と、とにかく、急いで出勤してくれ」

「元よりそのつもりだ。尊泰さんの息子を、死なせるわけにはいかない」

尊泰の葬儀のときに浴びせられた言葉を、鍵次は今でも忘れていない。息子を返せと尊泰の母親が、狂乱しながら線香やらを投げつけて言った。鍵次をそれを、ひたすら受けていた。

本来はツーマンセルで向かうはずが、ゲーティアの整備が遅れてしまったのだ。無論、そうした事情は相手も心得ている。だから鍵次も、それをこれ見よがしに振り回す気にはなれなかった。

そんな事情なんて、関係ない。自分の息子が死んだことだけが事実なのだ。その一端を担った鍵次に、言い訳は出来ない。

もう、あんな思いはしたくない。賀茂家の人々にも、させたくない。

「あと十分で発進するわよ。準備はいい？」

メデイナのアナウンスに、鍵次が反論する。

「五分だ。でなけりゃこつちでパウロス奪って発進するぞ」

「無茶言わないで。権田さんがいないのよ。これ以上縮めらんないわ。連結作業が残っているのよ」

「ゴンじいがない？ どういうことだ？」

「何の連絡もないから、無断欠勤ということになるわね。家に電話してもいないのよ」

権田は妻を亡くして以来、一人暮らした。息子夫婦は神奈川の方へ移り住んでいると聞いたことがある。

高齢な権田のこと、何があっても不思議はない。それに助けられる家族もいない。一抹の不安は残るものの、今は尊泰の息子、栄修の救出が最優先だ。

「なら連結はしなくていい。捕まって行く」

「はあ!？」

オペレーターにあるまじき感情丸出しの声を上げて、メデイナは怒鳴った。

「馬鹿なことやってんじやないわよ。そんなことしたら」

「……馬鹿は、てめえらだろうが」

メデイナが言い終わるのを待たず、鍵次が思い切りドスを利かせて被せる。

「尻を拭ってやるって言うてんだ。言われた通りにしろ。何なら、ここでゲーティアを暴れさせてもいいんだぜ」

「このつ、調子に」

「連結作業を十三から二十五まで省略。次いで発射シークエンスに入れ」

割り込んできたのは、志田長官の一声だった。

「長官……」

「本人がそうしたいといっているんだ。好きにさせようじゃないか。頼んだぞ、小中くん」

いかにも爽やかな調子で頼まれ、鍵次は心の中で毒づいた。大した偽善ぶりだ。それが打算から行われていることが伝わってきてしまう。

どうせ失敗すれば先の会話を証拠に、鍵次がレメゲトンの作戦行為から逸脱していることにするのだろう。既に責任逃れの布石を打つてあるからこそ、見た目大らかな態度を取れるのだ。

偽善に塗れた長官の迷惑通りであろうと関係ない。栄修は、必ず助ける。それが尊泰に対しての、鍵次なりの責任の果たし方だ。

「発射シークエンスを開始します。係員は所定の位置に退避してください」

格納庫がエレベーターごと競り上がる間に、ゲートシアはパウロスと連結する。とは言うものの、通常時のように背部ラックに取り付けるものではない。パウロスから引き出したレバーを握り、あるいは足を乗せて置くだけである。

まるでサーフボードに乗るようにして、ゲートシアはパウロスにべったりと張り付く。こうしておかねば第一次加速段階で振り落とされてしまう。

ハッチが開くと同時に、パウロスがエーテルスラストを吹かし始める。ぐらぐらとゲートシアが揺さぶられ、震動が鍵次の乗るコクピットにも伝わる。実際に揺さぶられるのと、ゲートシアからの感覚のフィードバックとで、二重に鍵次の体が揺れる。

揺れが収まったのも束の間、鍵次の体は真上に引っこ抜かれた。パウロスのロックが外れ、エーテルスラスターの推進力が遺憾なく発揮される。

加速Gとフィードバックによる激痛で、意識を手放しそうになる。だが茨城まではすぐに着く。何とか気持ちを建て直し、パウロスに張り付く。

最初の加速段階が一番推進力を要する。ここを切り抜ければ、後の道程はそれほどつらくはない。

中央戦略発令室からの信号を受けて、パウロスの主翼がうねり、旋回を開始する。翼に加えて噴射口まで動かし、一路茨城へと向かう。

「ぬぐ、あがつ」

鍵次は呻きを上げて掌とつま先を突っ張る。今ゲーティアとパウロスを繋いでいるのは、両手で握っているレバーと、足を乗せている脚下だけである。ここで僅かでも端末への入力を怠れば、旋回の遠心力でゲーティアの体は上空に投げ飛ばされてしまう。

何とかパウロスが水平飛行に入り、鍵次は思わず息をつく。しかし安心していられる時間は少ない。埼玉山中にあるレメゲトンの発着場から現場である茨城の石油コンビナートの辺りまでパウロスなら五分と掛からない。朱雀と交戦しながら僅かに南下していったため、恐らく会敵はなお早いだろう。

既に手筈は決めてある。以前のゲーティアならば難なく朱雀を救い出し、敵エラヒストスさえ屠っていたのだから、恐らくどちらかしか行えないだろう。二兎追うものは一兎も得ず。その一兎さえままなるか分からないのが、今の鍵次の状況である。

裏切りの誘い：？

ゲーティアのメインカメラが、最大望遠で敵エラヒストスを捕捉する。右腕から迫り出したバインダーの先には、報告のとおり朱雀が串刺しにされている。

「おおおおお！！！」

ゲーティアはパウロスに乗りながら、背面の全スラスターを吹かし始めた。途端にパウロスの機体が激しく揺れ出し、一層に速度を上げていく。

そのままパウロスは、敵エラヒストスへ真っ直ぐに突っ込んでいった。

堪らず敵エラヒストスが飛び退り、朱雀を貫いていたバインダーが引き抜かれる。

「おっしやあ！！！」

パウロスを突っ込ませたゲーティアが、叫びを上げながら翼を蹴って雲海に飛び込んだ。それに留まらず、背部及び腰部脚部のスラスターを全開にしたまま高速で落下していく。

自由落下に従って落ちる赤い巨人に、隻腕の巨人が真上から迫る。

程なく弾丸のようにして朱雀にぶち当たったゲーティアが、その巨体を抱え込む。

「おおおおおお！！！」

スラスターの出力操作で前宙し、ゲーティアは背中を下に向ける。そして前面にも配しているエーテル推進スラスターを、今度こそ全開にした。

「止まれええええ！！！」

落下Gを相殺しながら、ゲーティアは斜めに落ちてく。なるべくソフトランディング  
軟着陸の態勢を整えるが、その勢いは殺しきれず、海岸線を足裏で大きく抉って突き進む。

朱雀を抱えたゲーティアは海岸を越えて、石油コンビナートの敷地に横たわることとなった。

息もつけないほど目まぐるしいアクロバティックな救出劇に、一番肝を冷やしたのは鍵次自身であった。あんな真似、もう一度やれといわれても御免被る。こんな偶然が、またやってくるという保証はない。

浅い呼吸を繰り返して、鍵次は朱雀の機体を走査する。所々で崩壊は始まっているが、コクピット内の栄修は無事だった。

当初の目的を完遂し、鍵次はようやく安心のため息をついた。また自分の前で賀茂家の人間が死ぬことだけは、防ぐことが出来たようだ。

そんな安心を粉々に打ち砕く轟音。空をどよもすそれに、鍵次は推察がついた。

「パウロスが落とされたか」

小さく舌打ちし、朱雀を地面に横たえる。

相手がパウロスに構っている間に救出するまでは良かったのだが、まさかこうも容易に打ち落とされるとは思っていなかった。

「おいドクター、パウロスが落とされちまったぞ。どうしてくれるだ」

既に敵エラヒストスが空戦仕様であることは明白だった。七十二柱の精霊がないゲーティアが空で戦うには、パウロスの存在が欠かせない。

朱雀を救出後はパウロスにゲーティアを回収させ、敵との戦闘を行う腹積もりだったのが、もう崩れてしまった。

「リモートではあの程度が限界です。むしろ保ったほうですよ」

言われてみれば、メガロスすら圧倒する空戦能力を有した相手である。型落ちのエーテル推進シャトルぐらい、落とすのは造作もないのだろう。

これは鍵次にとって非常にまずい。今のゲーティアは空を飛ぶことが出来ない。跳び上がることは出来るが、巡航することが出来ねば話にならない。このままでは反撃も許されず、地対空攻撃を一方的に被ることになる。

背に嫌な汗を感じた鍵次と同じく、ゲーティアは背をぶるりと揺らす。メガロスの中では高機動型の部類に入る朱雀を、空戦で落としてみせるほどのエラヒストスだ。右腕も小鍵も精霊も失ったゲーティアが、果たして対抗できるものなのか。

これといった打開策など思いつかない。相手が接近してくれたら、その隙を逃さずに打撃して巡航能力を奪う、くらいしかすることがない。

そもそもエーテルマシンガンを使っていた相手である。近づいてこなかったらそれまでな時点で、作戦として成り立たない。

もはや作戦というよりは期待だ。しかも空戦仕様のエラヒストスに地上にいるメガロスが接近戦を求めるとを作戦と言えるほど、鍵次の面の皮は厚くない。

いよいよ雲間から降りてきたエラヒストスは、ホバリングしながら悠然とゲーティアに近づいてくる。思わず後ろへ下がりがりたくなるのを押さえ込み、むしろ一歩前が出る。

そんな鍵次の心意気に応えてか、敵エラヒストスはゲーティアの前に着陸した。

瞠目する間も惜しみ、これ幸いと鍵次はゲーティアを突進させた。相手の出方が分からぬ以上、無闇に接近するのは愚行と言えるが、ここ以外にゲーティアが対抗できる機会はない。

「来ちまつたか、鍵次」

オーブン回線で割り込んできた音声か、鍵次の理性に急激な制止をかけた。直感的操作に伴い、ゲーティアもまたコンクリートを砕きながら停止する。

「鍵次、何やってるの？ 早く敵を殲滅しなさい」

「黙ってる！」

低くくぐもった声をメデイナに浴びせ、一方的に回線を切る。とはいえ、ゲーティアのコクピットは全てレメゲトンの本部でモニタリングされている。今の状況は、あちらにも伝わっていることだろう。

「な、何で、何でだよ？」

こちらもオープン回線を使い、信じられないといった面持ちで鍵次は言う。

「何だよ、ゴンじい！」

嘴のような仮面の奥で、単眼が一際光を増したように見えた。

裏切りの誘い：？

「鍵次……」

またもスピーカーから飛び出した声は、やはり権田のものに相違なかった。

避難警報のサイレンが、二体の巨人の間に割って響く。空漠を助長するようなやかましが過ぎると、再び権田が口を開いた。

「言い訳は、しねえ。だけど、話を聞かないか？」

果たして鍵次は、聞いても理解できるか分からないほどに混乱を呈していた。かといって、他にこの場ですべきことも思いついていなかった。

なので拒むでもなく、促すでもなく、ただ佇んで権田の言葉を待った。

「驚かず、聞いてくれ」

言葉と言葉の間にたっぷりと間を取って、秘中の秘でも明かすかのように権田が告白した。

「バベリアに、来い」

一瞬で、鍵次の頭が純白となった。空しいほど虚ろな空間に、今度は収まりきらないほどの何かが傾れ込む。それは記憶だった。悪の魔術師スライマンが創設した魔術結社『バベリア』との、長きに渡る戦いの記憶だ。

その最前線で、始まりも終わりも体感した鍵次は、再び思い出し  
ていた。

たくさん、戦った。たくさん、殺した。たくさん、殺された。たくさん、死んだ。たくさん、壊れた。

世界が、終りかけた。あの時代を生きたものは、そういう理解を共有している。なかでも、ほぼ全ての現場に立ち会った鍵次には、真に迫るものがあった。

「嘘だ、そんな。あいつは俺が……エグゾルが封印したのに。嘘だ、そんな！」

矢継ぎ早に飛び出す言葉を自分自身が整理できず、鍵次はますます狼狽を深めていった。そんな鍵次を諭すように、権田は出来る限り優しく抑えた声音で語り掛ける。

「別にスライマンが生き返ったんじゃない。跡を継ぐものは、やっぱりいるってことだ」

鍵次は動揺の余り、上手く息が出来ない。こういうとき、ゲートイアはありがたいと思える。これが自身の魔術を由来とする通常のメガロスだったら、集中を乱してエーテルの糸として解けてしまっていることだろう。

「誰だ？ 誰が、またバベリアを起こしたんだ！？」

「知って、どうする？」

俯いて震えていたゲートイアが、ぐわりと頭を起こして権田のエラヒストスを睨みつける。

「決まってるんだろ！ 殺すさ、ぶち殺すよ！ 俺が、ゲートイアが、ぶつ殺してやる！ 今度こそ」

「やめとけ、無駄だ。それに、今のお前じゃそもそも出来んだろ」  
被せられた台詞は、何とも的確であった。

小鍵機関を失い、七十二の精霊を失ったゲートイアでは、適わな相手。昔知り合った魔術師をざっと思い出しただけでも、ほぼ全てがその可能性を有していた。

今のゲートイアでは、倒せない。世界を、救えない。

ゲートイアの体のそこかしこから、ぎちぎちという音がする。鍵次の混乱と怒り、恐れと震えを忠実に表していた。

「バベリアに來い、鍵次」

エラヒストスが、手を差し出す。知己のように親しげで、気軽な仕草だった。

「もうレメゲトンはうんざりだ。お前だって、そうだろ？」

確かに権田の言うとおりだ。鍵次の人生は結局、レメゲトンに振り回されっぱなしだ。若い時分を全て魔術師との戦いに費やされ、今また体のいい駒として奔走させられている。

もう嫌だと、何度思ったことだろう。若い頃もそうやって悩みながら、ゲーティアに乗っていたものだ。

「小中くん、よく考えたまえ」

切っていたはずの回線が再び起き上がり、そこから響いたのは志田の声だった。

「長官……」

「娘さんのことを思い出すんだ。そうすれば、滅多なことは出来ないはずだろう。それとも、ゲーティアを暴れされるかい？ それは困るなあ。そんなことをすれば、君は大犯罪人だ。幾らなんでも、警察の追及は免れないよ」

「なっ!？」

流れるように紡がれた志田の文句に、鍵次は先程までの混乱も忘れて絶句した。

レメゲトンの魔術師は、作戦行動中は超法規的な存在として扱われる。そうでなければ、敵魔術師に対して迅速な対処など行えない。

そのためにも、魔術師の個人情報秘匿されねばならない。作戦行動による止むを得ない被害を悪し様に指摘する者達から魔術師を守るのも、レメゲトンの重要な任務だからだ。

その守護を解くと、長官は言外に伝えている。それは鍵次の社会的な抹殺の宣告に他ならない。

非難された魔術師の最後は、悲惨だ。実際にレメゲトンの発足当時、情報の管理が行き届かず、犠牲になった魔術師は存在する。

作戦行動で犠牲になった者の遺族達が魔術師の自宅に押し寄せ、中世の魔女狩りよろしく理不尽な裁定を勝手に下し、生きながら身を引き裂かれて焼かれてしまったという事件は、当時の社会情勢を

表す出来事として、長くニュースに取り上げられていた。

現在では多少勢いを失っているものの、そうした魔術を排斥しようという運動は確実に存在する。メガロスに乗れるとはいえ魔術師ではない鍵次にとって、それはなおのこと忌避すべき事態であった。「ゴンじい、やっぱ、駄目だ」

魔術が社会的に認知されると同時に、魔術師もまた人の社会と密接に繋がり、依存している。魔術という理不尽を顕しながら、社会的に排斥を恐れ、少なからず人々に阿る形とならざるを得ない。

「俺がいなくなったら、あいつら、娘をゲーティアに乗せる気だ。それどころか、俺を、吊るし上げるって……」

「まさか……」

一応は否定する権田だが、その続きは出てこない。

レメゲトンの精神性の無さは、実際に身を置いていた権田の身にも滲みている。そのようなことは十二分に考えられることだった。

「ごめんよ、ゴンじい。俺、どうしたらいいか、わかんねえよ……」  
言いながら、ゲーティアを構えさせる。左手だけを広げてゆるりと前に出し、足を前後に、肩幅と同じだけ開く。

鍵次と同じく、権田もまた混乱しているようで、無警戒に歩み寄ってしまふ。そこへ振り上げられる鋼の踵が、ぎいっと耳障りな音を立てる。

寸前に後退したエラヒストスの装甲を掠めた右の踵を戻し、ゲーティアは思い切り踏ん張って左拳を突き出す。

「くそっ！」

ゲーティアの拳をすり抜けながら、権田のエラヒストスが舞い上がる。それを追うべく、ゲーティアがスラスターを吹かして飛び跳ねる。

足裏のバーニアで無理に蹴りの形を取り、右足甲がエラヒストスの腹部へ迫る。しかし権田が軽くスラスターを吹かしただけで、ゲ

「ティアの蹴りはするりと下を過ぎていった。

「ゴンじい、遠慮はいらねえ！」

浅瀬へ盛大に着地し、飛沫が高く上がる。しかし鍵次に息つく暇はない。即座に切り替えして走り出し、勢いをつけて再び飛び上がる。

「こうなったら、やるしかねえんだ！」

飛び蹴りが空しく外れるなか、鍵次が泣き叫んで訴える。鍵次とてこんな甲斐のない、一人相撲も甚だしい戦いなどしたくない。しかし今はこうするしかないのだ。例え無様でも戦ってみせねば、志田がどんな決定を下すか分かったものではない。

娘の身もさることながら、自分に迫る危機も恐ろしい。これまで鍵次は魔術テロを鎮圧するため、あらゆる場所で作戦を行ってきた。そこには当然、人口の密集した大都市も含まれる。

そんな場所で意図せず奪った命は、恐らく数え切れない。というよりは、明確な数字という形で理解したくない。如何に魔術テロの被害を食い止めるためとはいえ、そんなものを突きつけられて平然としていられるわけがない。

若い時分にもそのことで悩みはしたが、それでも『バベリア』の行いを看過できず、スライマンを倒し、世界に再び平穏を取り戻すことがせめてもの罪滅ぼしだと納得させ、無我夢中でゲーティアを駆っていた。

そうして目を背けていたものが、足元で冷たく口を開けている。

志田の胸先三寸で、それらが鍵次に食らいつつこうとするだろう。

口では生意気なことを言いつつも、結局のところ鍵次はレメゲトンの、そして志田の掌の上で踊らされているに過ぎない。

「鍵次、そんな調子じゃエーテルがもたないわよ」

「うるせえ、うるせえよ！ 黙れよ、クソが！ てめえらのせいだろ！ てめえらがやらせてるんだろが！」

こうなってはエーテル配分も何もあつたものではない。矢鱈滅法

に飛び上がり、ただ突進するだけである。無論、そんな拙い攻撃が権田のエラヒストスに当たるはずもなく、ひらりひらりと交わされ続けている。

「鍵次、頼む。考え直せ」

しかし権田はそれを撃とうともせず、ゲーティアの飛び蹴りをマタドールよろしくいなしながら、ひたすら言葉を重ねて説得を試みる。

鍵次は聞く耳を持たない。娘と自身とを人質に脅され、憤慨と恐慌の狭間に置かれた鍵次は、他人の声を注意深く聞く作業など出来なくなっていた。

とにかくゲーティアを動かしてみて、暴れまわることくらいしか思いつかない。

「鍵次、増援が着たわよ」

メデイナの報告も聞き流し、相変わらず鍵次は権田のエラヒストスに食らいつこうとする。そして報告のとおり、レメゲトンが要請していた自衛隊のエラヒストス『準魔導機甲78式』編成部隊が、押っ取り刀で到着した。

「邪魔をするな、公僕が！」

鍵次に対しては無抵抗を貫いていた権田のエラヒストスが、マシンガンを差し向ける。間髪居れず放たれたエーテルの粒が、隊を組んで飛行していたエラヒストスたちを引き裂く。回避行動によって編隊が乱され、十二体の準魔導機甲78式が二つのグループに分かれる。

権田のエラヒストスは即座に変形して分断した片割れへと向かい、そのど真ん中を突っ切った。数秒で音速近くに達する馬鹿げた加速性能は、自衛隊のエラヒストスにさらなる回避行動を許しはしなかった。

そうして数え五体のエラヒストスが、ぶつ切りになって空を舞った。七つの可変翼から噴射されていたエーテルスラスタの向きを

変え、通り過ぎる瞬間に巨大な刃を形成し、亜音速で斬り付けたのだ。

権田のエラヒストスはロールしながら切り返し、再びバインダーからエーテル刃を展開して突っ込んでくる。さらに下部に備え付けられているマシンガンで残りの自衛隊のエラヒストスを狙い打つ。

エーテル粒子が、的確に変エラヒストスを撃ち抜いていく。その撃ち漏らしを屠るべく、権田のエラヒストスが加速した。

こんな奴らに構っている場合ではない。早く鍵次を説得しなければならぬのだから

通り過ぎざま、スラスターから噴出されるエーテル粒子がチェンソーの如くエラヒストスを削り飛ばす。七方向に伸びたエーテル刃を、エラヒストスほどの巨大な構造物が至近距離で避けられるはずがない。そしてエラヒストス程度のエーテル合金装甲では、このエーテル刃を防げない。

最後のエラヒストスが今正に断ち割れようとしたとき、そのエラヒストスの影から何かが立ち上がった。それはエーテル刃を避ける形で飛び上がり、高速で通り過ぎようとする権田のエラヒストスの頭上を取った。

高速で飛行する権田のエラヒストスが、その影に覆われる。至近距離から見える白と黒のモトーンは、権田にとっても慣れ親しんだものである。

エーテル刃が影の足先に到達する。だがエラヒストスのように断ち切るには至らない。エーテルの噴流はそこで遮られ、眩い飛沫として四方に飛び散る。

エーテルの蛍光に浮かび上がった姿は、正しくゲートティアに相違なかった。

権田の血圧が一気に下がる。既に至近の距離にまで、メガロスを近づけてしまったのだから、それも仕方ないだろう。これまで窮地

らしい窮地の無かったため、その動揺は大きな空漠となつて現れる。「ガアアアアア！」

唸りと共に振り降ろされたゲーティアの左手が、権田のエラヒストスの背面に突き刺さる。そのままの勢いで、鍵次は左手を振り抜いた。

ベリベリと音を立てて、エラヒストスの背部装甲が剥がされる。スラスターも可変翼も武器も弾薬も、一緒くたにしてかさぶたのように取り去ってしまう。

黒ずんだオイルが血のように吹き上がり、ゲーティアの体を染める。自衛隊の可変エラヒストスと同じくらいに拉げながら、権田のエラヒストスは山間へと吸い込まれていった。

鍵次はスラスターで姿勢を整えて、谷間の斜面へと着地する。小川を岸ごと蹴散らしながら、オレンジ色の残骸に歩み寄る。

混乱をきたしていたものの、やはり鍵次はメガロス大戦を生き抜いただけのことはあつたらしく、権田を討つための方策を的確に選択した。

メデイナの話も聞かず、権田の説得にも耳を貸さないながら、自衛隊のエラヒストスを見た瞬間、この作戦を思いついていた。

航行中のエラヒストスの側面に張り付き、レーザーを欺瞞しながら権田が来るのを待ち、まさにエーテル刃で切り裂かれようという瞬間、近づいてきたエラヒストスの構造部を左手でこそぎ取った。

権田のエラヒストスの特徴は、飛行機形態と人型形態に共通する超高速機動。メガロスさえ追従させぬ機動力で装甲の薄さを度外視し、エーテルマシンガンやバインダーのエーテル刃による波状攻撃で敵を制圧する。

その前提は大出力のエーテルスラスター。全身に備えられた噴射口があらゆる方向へとノゾルを可変させ、複雑にして機敏な挙動を

実現する。

そんな機動力の源が、今はゲーティアの左手に握られている。一番出力の大きい背面スラストを根こそぎ取り去ってやった鍵次は、むしろ落ち着いた心地だった。

もう権田のエラヒストスに戦闘力は皆無である。少なくとも先ほどのように取り乱す必要はないだろう。あの機動力さえ潰してしまえば、とりあえずゲーティアの拳は届く。

そしてゲーティアの手が届くほど近くに寄った時、うつ伏せだった権田のエラヒストスが俄かに持ち上がる。装甲の剥げた背中からエーテル混合オイルが噴き出し、足元に流れる小川を汚す。

「ゴンじい。もう、いいだろう」

立ち上がるうとしてるのを止めようとせず、今度は鍵次が諭すように言う。しかし権田は聞こえていないかのように、立ち上がりながらなお一歩を踏み出す。

「何言つてやがる。これの凶面を引いたのは、俺なんだぜ。そんな柔く造っちゃいねえよ」

見せ付けるように腕を動かすたび、むき出しの背中からオイルが飛び散る。その痛々しさに、鍵次の良心が呵責を受ける。権田は鍵次の年の離れた親友であり、恩人であり、仲間である。幾ら裏切ったとはいえ、素直に打ち据えられるものではない。先ほどの志田に脅され、混乱したゆえの積極性だ。鍵次はまだ権田への情を振り払らえたわけではない。

「お、恩をかけてくれたことは、ありがたいよ。でも、俺にだって事情があるんだ。手加減は、しないからな」

息浅く、声を震わせながら権田に語りかける。こう話しかけている間に攻め立てればいいのだが、もしかすれば翻心を促せるかもしれないという思いが、寸でのところで鍵次を思いとどまらせる。

しかし先程の鍵次と同じく、権田は聞く耳を持たない。その証拠にエラヒストスの体を撓ませ、今にもこちらに飛び掛ろうとしてい

る。

「さあ、行くぞ鍵次！」

壊れかけとは思えぬ素早い踏み込みで、エラヒストスは肘に取り付けてある可変翼を刃に見立てて突き出す。

それを右肩越しにいなして、ゲータィアが屈みながら潜り込む。そしてすかさず、左の逆突きで腹部を突き上げる。さらに左の膝頭が同じ箇所を打ち据え、装甲が爆裂するように弾け飛んだ。

真つ向から打ち返されるも、権田のエラヒストスは山肌に手を掛けて踏み止まる。

地上であれば、その挙動は大幅に制限される。元より高速機動を主眼に置き、軽量化を図つてある機体でメガロスと正面から殴り合うのは、無謀の誇りを免れないだろう。

その上、機動力の要である可変翼、そして背部大型スラスタも剥ぎ取られた今、その戦闘能力は激減している。

往年の力を取り戻したとは言い難い鍵次とゲータィアでも、十分に対処出来るほどの脅威ではない。

エーテルをオイルで水増しした体が、ぐったりとくずおれる。必要な圧力が確保できず、全身のテンションが落ちてしまったのだ。

こうなつては、エラヒストスは魔術と機械を組み合わせた、歪なオブジェへと成り下がる。鍵次は早々にとどめを刺すべく、大きく踏み込んで左手を引き絞つた。

その動作に合わせて、抉れた背部大型スラスタが不協和音を掻き鳴らして点火された。

「なに！？」

思わぬ機動に、鍵次は完全に虚を突かれた。まさかまだスラスタを機能するとは考えてなかったのだ。

吹き上がるバーニアで我が身を焼きながら、権田のエラヒストスが真つ直ぐに飛び出してきた。

突き出た胸部装甲をぶち当てて、そのままゲータィアを押し倒す。

浅い谷川が高く飛沫を上げ、二体の巨人が完全に水の流れを塞ぎ止める。

裏切りの誘い：？

体を押し付けてくるエラヒストスに、殆ど成す術なくゲーティアは組み敷かれてしまう。

「このっ！」

引き剥がそうにも、左手一本ではエラヒストス一体の質量は動かし難い。権田もまた手足だけでなく可変翼やアームラックを器用に巻きつけ、ゲーティアにしがみ付いている。

この状況で有効な作戦に、鍵次は心当たりがあった。

恐らくは、自爆だろう。最早それ以外に、このエラヒストスに武器が在るとは思えない。

鍵次が顔を青褪めるなか、蔽かな駆動音を立ててエラヒストスの胸部装甲が一部だけ開かれる。

その様を恐々と見つめる鍵次の目に、信じがたい光景が飛び込んできた。

「ゴンじい、それ……」

歳の離れた友人の変わり果てた姿を見て、鍵次は歯の根も合わせられない有様だった。

そこにいた権田は物々しい金属チューブやフィラメントを体中に取り付けられ、幽鬼のように顔だけを浮かび上がらせている状態だった。

このようなコクピット、及び操作は鍵次にも覚えのある代物で、さらに言えば人道に悖るものだった。

まるで機械に人体を食らわせるようなおぞましい設計。恐らくは超高機動を行うために、操作のレスポンスを向上させる必要があったのだろう。

だからこそ意のままに駆動し、メガロスさえ凌ぐ戦闘能力を得られた。

「組み込まれ、ちまつたよ」

権田は小さく、恥ずかしそうに呟いた。

「……外れないのか？ それ」

「そんなふうには、作ってねえよ。知ってるだろ、これのことは」  
鍵次はただ、押し黙るほか無かった。

かつてエラヒストスが開発された当初、世界中の技術者が躍起になつて性能の向上を競っていた。

その中で編み出された手法の一つ

クリティカルイミテーションシステム

擬似直感的操作と名づけら

れたそれは、パイロットの体中の神経とエラヒストスとを外科的処置によつて接続し、メガロスの直感的操作に匹敵する反応速度を得ようというものだった。

その試みは、見事に成功した。米国の国防高等研究計画局「DARPA」の魔導技術研究所「MTO」を中心として進められた開発によつて十機の試作機が製作され、耐久テストの様子を見た全世界の兵器開発及びエラヒストス開発関係者に衝撃を与えた。

しかしその試作機は、耐久テストでは見えない部分に重大な問題を抱えていた。擬似直感的操作の施術は、不可逆なものだった。

被験者である海兵隊員たちのことは一切公表されず、試作機に体を組み込まれたまま、まるで寝たきりの重病患者のような生活を送つたという。

そんなものに若く健康な人間が耐えられるはずもなく、被験者たちは間もなく発狂し、試作機は暴走を始めた。

その鎮圧作戦には鍵次も参加した。数え十体ほどしかないエラヒストスを相手に、世界中から選りすぐつたメガロス二十体でもつてようやく制圧した。

それらのエラヒストスを倒すために確実に期すには、それほどの戦力を用意しなければならなかったという事実は、図らずも擬似直感的操作の優位性をさらに高める役を果たした。

甚大な災害を引き起こした擬似直感的操作の開発は表向き凍結されたが、その優れた技術に目を付け、流用する人物・団体は後を絶たない。

「何が、何があったんだよ、ゴンじい！」

まさかそれを権田が行うなどと、鍵次は露ほども考えてはいなかった。

「誘われて、な。つい、乗っちゃったよ」

「誰だそいつは！ そいつが、あんたを……」

設計は権田とはいえ、彼だけでこれほどのエラヒストスを開発することは出来ないだろう。その資金、材料、人員を提供した人物がいるはずだった。

そいつが唆したに違いない。権田の体をこんなにして、どこかでほくそえんでいるに違いないと思うと、鍵次の魔力がぐんぐんと内圧を高めていく。

「鍵次、違うんだ。全て、俺が望んだことなんだ」

「その仕打ちが望みだったのか！？ そんな、そんなの……」

弱々しく首を振って、権田は否定する。

「一対一で、メガロスを倒せた。尊泰の息子には悪いことをしたが、満足だ」

「ゴンじい……」

「あとは、お前がレメゲトンを抜ければ、言うことは無かったんだがなあ」

金属チューブとその他機械に囲まれながら、権田は虚ろな笑いを浮かべていた。

「悪いな。あてつけがましい言い方になっちまって……」

擬似的直感操作の施術によって、もはや通常の社会生活を送れない身の上で、それはあまりにも優しすぎる笑顔と台詞だった。

「理由はどうあれ、レメゲトンに敵対した。やるこたあ、分かっただらう」

ぞわりと、鍵次の背中に怖気が走る。こんな状況でやることと言

えは限られている。

「せめて、お前がやってくれ。他の奴らじゃ、諦めがつかねえよ」

鍵次は呻きながら、権田のいるコクピットにゲーティアの左掌を宛がう。まるで権田を押し隠すように、もうこんな痛々しい姿など見たくないと言いたげに

「うっ、うっ……」

ゲーティアの左手が俄かに発光する。循環器系を伝ってエーテルが集束を始め、装甲の隙間から滲んでいる。

エーテルブラスターの一撃にて権田を蒸発させるべく、鍵次はぎりぎりの精神状態を何とか立て直しながら、残った魔術を掻き集める。

「また、お前と、呑みたかったなあ」

通信から、権田の声が聞こえる。あの快活な声が見る影もなく、それは一人語りのように儂い。

鍵次もまた、権田と一緒に酒を呑みたかった。聞いてほしいことが沢山あった。聞きたいことも沢山あった。それらを今、自分の手で霧散させようとしている。

「ゴンじい。向こうで、俺の席を取っといってくれ。片がついたら、すぐに行く」

一拍遅れて、スピーカーから苦笑が漏れてきた。

「おう。エグゾルの野郎と、気長に待ってるぜ」

極まった感情がエーテルとして伝い、今まさに放たれる。

「ゴンじい、ゴンじい……」

いよいよ高まったエーテルが、ゲーティアの掌から放出された。少ないエーテルを掻き集めてようやく行われたエーテブラスターはエラヒストスの背部まで撃ち貫き、山間から僅か煌いた程度で減衰した。

権田がいた場所　コクピットを的確に蒸発させ、ぼっかりと開けた穴がオイルと焼けたエーテル合金を垂らしている。

嘴型の顔から覗いていた単眼は光を失い、とうとうテンションの失せた体がゲーティアの横へとくずおれていった。

起き上がる気力など、あるはずがない。友を手に掛けた今、鍵次の精神はどん底を這いずっていた。

こんな仕打ちが許されるのか。何がどうなつて、こんな仕儀と相成ったのか。心はゆつたりと凪いでいるようで、分水嶺の間までいっばいっばいの有様だ。いちいち考えていられる冷静さなど、水底に沈みきつて用を成さない。

静かな動揺を呈して、鍵次は呆けたままゲーティアのコクピットに背を預けている。メディナからの通信が鳴り響いているらしいが、そんなものは一切耳に入ってこない。その心象と同じく水がいつばいまで張り詰めて、外界から遮断されてしまっている。

しかし、そんな心象においてさえ看過し得ないほどの言葉が、突然ゲーティアの通信に割り込んできた。

「さすが、さすがはゲーティア。さすがは小中鍵次。スライマンを倒し、世界最強のメガロスとなった実力、まだまだ健在というところかな」

鍵次は自分の心を満たしていた水が、一気に引いていく音を聞いた。代わりに心を満たすのは、御し難いほどの熱。その鼻につくほど芝居がかつた声が煽る熱である。

「お前か！？ お前が、ゴンじいを！」

友人を殺したばかりの鍵次にとって、その声は忌み言葉に近しかった。

「いやいや、僕じゃない。僕ではないのだよ。僕らはあくまで背中を押しただけさ。望むままを汲み取って、そつと押しただけなのだよ」

そんな理屈は関係ない。こちらの知ったことではない。

「名乗りが遅れたね。僕はイステカーマ。スライマンの息子だよ」

一瞬、はつとしたように鍵次は顔を上げた。最強最悪の魔術師スライマン、その息子など聞いたことがない。しかし一方で、腑に落ちるところもあった。

どうりで権田がバベリアに来いなど言っていたはずだ。なるほどバベリアほどの力があれば、エラヒストス一体を作ることなど造作も無いだろう。

「出て来い、バベリア。目的は俺だろうが！ とつと姿を現せ！」  
「そう急いてはいけない。まず勘違いを正そうか、小中鍵次。我々の目的は君ではない。そして我々は、バベリアではない」

あくまで生徒を諭す教師のように、根気よく言い聞かせるためにたっぷりと間を取って話す。

「我々は、イガーサ。世界を救済する者だ」

権田をあんな目に合わせておきながら、救うも何もないものだ。

「救済だあ？ 戯言を吐くな、気狂いどもが！」

「君は魔術師ではないのだったね。ならば分からないのも無理はない。嘆かわしいが、仕方の無いことだ」

自分の言葉に煽られて、イステカーマの声がさらに熱を帯びていく。

「我らイガーサは、その名の通り、世界を救うのだ！」

その声は、ゲーティアのコクピットだけでなく、周囲からも聞こえた。

「魔術師たちよ！ 超常の理に身を置くものよ！ 今こそその力を揮い、約束の地へ世界を誘うのだ！」

強烈な震動が、ゲーティアを襲う。しかし見れば、揺れているのはゲーティアだけではない。海が、山が、町が、全てが何かに揺さぶられている。

濃密なエーテルが、大気を伝播してやってくる。これほどの反応は、メガロスでさえ有り得ない。

すぐさま鍵次はその根源を観測しようと、海岸線まで走り出す。

ゲーティアのモニターが最大望遠で捉えたのは、太平洋上に浮かぶ巨大な島であった。この揺れは、それが原因であることは明らかだ。

間欠泉のように吹き上げるエーテルが、フレアのように帯を引いている。単なる地殻変動による隆起ではなく、魔術的な恣意を含んでいるのは明らかだ。

「ふざけるな！」

残されたエーテルの限りを振り絞り、ゲーティアは左手から進らせた。

エーテルの砲弾はその途中で減衰し、島に届く遙か手前で跡形も無く散ってしまう。だがその程度で、鍵次の心が収まるわけがない。悪の魔術師スライマンの息子が作った魔術結社。それを思うだけで、腸が煮えくり返る。

（また、あれを繰り返すのか？）

それはかつて、バベリアが世界に対して行った宣言のときと酷似していた。違っているのは、その内容だけだ。

その宣言が引き起こしたのは、世界中を巻き込んだ未曾有の大戦争。第一次メガロス大戦である。

あれを繰り返すことは、断じてあってはならない。かつてその只中にあり、始まりも終わりも見届けた鍵次にとっては、まるで他人事ではない。

「うあああああ！」

ゲーティアから進むほどの叫びを上げる。これは宣戦布告だ。イガーサが世界に対して行ったのだから、今度は鍵次がイガーサに向かって宣言する。

思い通りにはさせない。必ず、必ず阻止してみせる。

## イステカーマ：？

権田のエラヒストスによる襲撃の後、全世界に対して魔術結社『イガーサ』からの声明が発表された。

『世界救済計画』などと恥ずかしげもなくのたまわれたそれは、魔術の力で世界中の諸問題を解決してしまうというものだった。

魔術によって世界を救う。そのために、全ての魔術師に参加を呼びかけた。

当然ながら、世界は『イガーサ』に対して非常に冷静に対処していた。

実はこのような騒乱、近年では殊更に珍しいわけではない。鍵次が壊滅させた魔術結社『バベリア』や、その頭首だったスライマンに憧れ、世界を手にとんとして立ち上がる魔術師は後を絶たない。

その一方で国公魔術師のように、魔術師でありながら他の存在に阿る輩も多い。現在の魔術師は、そうした恭順者と、それに対する反逆者という構図を取っているのだろう。

二十年近く経っているとはいえ、『バベリア』が起こした魔術テロや第一次メガロス大戦の記憶は確実に残っている。それがむしろ魔術師の戦術的・工業的価値を高める結果となり、己の価値を自覚している魔術師は不敵にも単体で国家に挑むこともある。

しかし昨今ではエラヒストスの技術も発達し、先進国の戦力は魔術師に互するものとなっている。さらに、そうした先進国は共通して優れた魔術師管理機関を有しており、魔術テロに対して適宜投入する体制が整っている。

魔術師の起こす騒乱に対しては、第一次メガロス大戦にてノウハウが確立している。レメゲトンを始めとする管理機関が主導となり、実際に魔術師と戦う中で、鍵次のようなメガロス搭乗者が身を以って試し、工夫してきたのだ。

単一、あるいは数人の魔術結社は確かに脅威だが、人はいつまでも魔術に対して無力ではない。魔術さえ社会の仕組みの中に取り入れ、利用するシステムが出来上がりつつある。

現在『イガーサ』は、太平洋上に島状の巨大な施設を出現させ、そこを拠点としている。公海上に魔術的手段にて突如現れた浮島は、次の日には豪軍の海軍によって海上封鎖され、『イガーサ』の宣言から一週間後には、国連軍の出動が決定した。

米英を中心とした国連編成軍は、海軍戦力にてその島を全方位から包囲していた。包囲当初もその後も殊の外衝突などもなく、島は不気味な沈黙を保っていた。

牽制すらしてこない相手に、皆緊張の糸が緩みつつあった。

それはレメゲトンも同様で、当初は警戒処置や攻略作戦まで考案されたが、専守防衛論が主流を占める国会側の決定に添う形で、それらはいつしか立ち消えとなっていった。

しかし国民の中には鍵次と同じく、先手を打つべきだという論調が根強い。未だ第一次メガロス大戦のことが生々しく感じられるため、多くの国民の間でそのような危機感が共有されているのだろう。

あの戦争が繰り返されるくらいなら、先に敵を討ってしまったほうがいい。そう考えるのも無理からぬことだった。鍵次としても今回ばかりは、自分からゲーティアに乗りたいたいと言いつくすくらいだ。だが志田長官がそれを許すはずもなく、レメゲトンからの連絡がないまま徒に時が過ぎていく。そしてその間も、鍵次は生活のために働かなくてはならない。

ショッピングモールの建設も相当進み、エラヒストスによる作業が少なくなると、鍵次は主に事務仕事を任せられた。書類とパソコンのデータを照らし合わせて、間違っていないかを探すが、言うまでも無く退屈極まりない作業である。

これならばエラヒストスに乗っているほうが何倍も増した。無理を言つて頼田かいたや井曜いようと変わってもらつべきだったと、鍵次は悔やん

だ。

今回のシフトは、大学の期末テストでこれまで入れなかった頼田と井曜が、鍵次を気遣ってくれたものであった。今まで押し付けていた分の、恩返しということらしい。

正直言っただきなお世話なのだが、まさかそれを面と向かって言うわけにもいかない。そして鍵次は事務所で一人、パソコン画面と向かい合う羽目となった。

事務仕事は別に初めてではない。むしろ十分に要領は心得ている。だからといって慣れたり、楽しめたりするようなものでもない。

嫌だ嫌だと思えば思うほど、目の前のパソコンが憎らしく思える。最近は頓にこうしたパソコンの技術も上がっているのだから、書類くらい勝手に確認して勝手に直しておいてほしいものだ。

すっかり日が落ちて、工事現場に光源が灯されたころ、ようやく鍵次は今日の分の作業を終えた。無論、時間外労働であることは言うまでもない。

とりあえず現場の人達に挨拶してから帰るため、鍵次は支度を整えた。粗方の書類をカバンに仕舞い終えたとき、からりと事務所の引き戸が開け放たれた。

「あ、おつかれさまで」  
挨拶を半端なところで切り、鍵次は引き戸に目を向けたまま立ち竦んでしまった。

そこにいた男に、鍵次は見覚えがあった。出来れば忘れたくて、思い出したくない類のものであった。

「ス、スライマン!？」

途端、あの戦いの日々がまざまざと浮かび上がってくる。胸が張り裂けそうなほど、腹の底から得体の知れない蟠りがこみ上げる。

それほどに男の顔は、鍵次がかつて戦った悪の魔術師スライマンと酷似していた。

鍵次の動揺を軽く流し、男は涼しげに笑いかけた。

「そうです。スライマンは、僕の父です」

気品のある若い声で、男は言う。その声、その情報、ともに鍵次には心当たりがある。

「お前が、イステカーマか」

それは権田のエラヒストスを破った後、通信に割り込んできた人物だった。実際に姿を見てみると、なるほど息子というのも窺えるほどに、イステカーマはスライマンの面影を踏襲している。

違っているのは、一見して人当たりの良さそうな雰囲気と、その取り繕うような気品だけだ。纏っている邪な気配。他の魔術師よりも群を抜いて暗い闇の気配は、父親の生き写しだ。

「何しに来たんだ？」

こちらも洞穴の底からにじむような声を出す。というより今は吐き気が勝ってしまった状態で、そのような声しか出すことが出来ない。「そうですね。少し、訂正をしたいと思います」

「訂正？」

鍵次が混乱をきたすなか、イステカーマは悠揚とした足取りでこちらに近づいてくる。

「以前、あなたのことを目的ではないと僕は言いました。しかし、あれは少し違うのですよ」

どうやらあのとときの通信のことを言っているらしい。イステカーマに気圧されつつも、せめて鍵次はその場に留まった。

元より鍵次は普通人で、イステカーマは魔術師。この狭い室内を後退させたところで、何の逃避にもなりはしない。そんな少しの間合いで、魔術の効力がなくなるはずもない。

ならばせめて、退きはしない。心で退けば、本当に負けてしまう。魔術師と言う理不尽に、屈服してしまう。鍵次がこれまで培ってきた経験が、かろうじて下からせなかつた。

「僕個人としては、あなたこそが目的なのですよ」

しかしイステカーマは、そのようなことに関心はない。元より魔術師は、己が欲望の赴くままに魔を振るう、それ自体が災禍の塊なのだ。

振りかぶった彼の右手に呪文が走る。薄く施されたエーテルの膜は、容赦なく人の肉を引き裂く鋭い刃を形成する。

単なる人間を相手に非効率極まる殺傷方法は、正に魔の所業。しかし、それでよいのだ。魔術においてはそれこそが正解なのだ。迂遠で、不明瞭で、余人の理解など捨て置いてこそ、魔術は冴えを増す。己が心象の発露として、現実を明確に侵す。

そこまで分かっても、鍵次は動けない。このように魔術師と間近で対面し、敵意を向けられるのは初めてではない。これまでも、このような窮地は何度となく味わってきた。しかし、かつてとは明らかに違う条件がある。

鍵次は、年を取った。若い頃なら、あの充実した自分なら、ここで拳を振るうくらい胆力は持てただろう。実際にそうして返り討ちにあり、死に掛けたところを南武に助けられたことが幾度もあった。

その度に、南武はこっぴどく説教をしてくれたものだ。あのときは正直滅入るものだったが、今ではむしろ欲する気持ちが強いかもしれない。

こんなところで死にそうな自分を、強く叱りつけてほしいのかもしれない。

淡くしか光らないはずのエーテルが、照り付けるほど眩しくて、鍵次は目を細めた。その光が、自分の胸へと誘われていく。

イスカターマの持つ光が、どうやって肉を破り、骨を砕き、内腑を食うのか、鍵次には分からない。分かりたくもなかった。

そんな情けない弱気を断ち切ったのは、耳を聳する甲高い騒音だった。

事務所のガラスが盛大に割れ、破片が鍵次の顔を打ち、ようやく

我に返る。自分は今、殺されかけた。しかしまだ、五体は満足にくつついている。

我が身の無事を噛み締めていたのも束の間、目の前には壁のようなものが立ちはだかり、鍵次の視界を遮っている。

実に慣れた光景だ。初めて見たのは十五歳のとき。今から二十年以上前のことだ。ゲーティアを通してしか魔術師と戦ったことなかった鍵次は、初めて『バベリア』の魔術師と生身で会い、殺されかけた。

その彼を救った男は

イステカーマ：？

「な、南武さん！？」

レメゲトンの警備部に所属する南武は、油断無く拳を構えてイステカーマの前に立ちはだかった。

「イガーサの首領、イステカーマとお見受けします」

南武とて魔術師ではないが、こちらは実に落ち着いた声音である。鍵次のような動揺は毛ほども見受けられない。

「これはこれは。確か、南武恭介、でしたか？ お噂はかねがね、父から聞き及んでいましたよ。魔術師ならぬその身で幾人もの魔術師を殺してきた、対魔術戦闘の先達」

南武に分断された形のイステカーマは、エーテル刃を引っ込めて慇懃に話す。

スライマンの起こした世界征服により、当時の先進国では魔術師に対する危機管理の充実が叫ばれた。つまり、魔術師という脅威を迅速かつ確実に排除できる力が必要とされたのだ。

その一つが国公魔術師のだが、これは根本的に魔術師の脅威を排除するには至らない。より違った側面からのアプローチによる魔術師の制圧が研究されたのは必定だった。

それが対魔術戦闘。現代の科学技術や格闘技術の粋を集め、魔術師ならぬ身で魔術師を制圧することを目指した技術体系である。

南武はイステカーマの言うとおり、レメゲトンにおいてその雛形とも言うべき人物であった。

「どのようなご用件でしょうか？ 私が代わって受け付けますが」  
イスカターマに劣らぬ慇懃な口調で、南武は拳を向けている。

「いえいえ、それには及びません。ついでにあなたへの用件も済ませてしましましょう」

またも手にエーテルを纏わせて、イスカテーマが振り上げた。

南武の喉を引き裂くかと思われたエーテルの刃は、そこへたどり着く前に揮発してしまった。

「あざむきいいい！」

遅れてイステカーマが叫ぶ。引き戻された右手は、歪に抜くられていた。

まさか一人で折れたのではない。イスカテーマが腕を振るうのに先んじて、南武が彼の腕を折り曲げていたに過ぎない。残念ながら、彼の感覚では到底追いつかないほど素早かっただけのことである。

エーテルの流動さえ感じ取る鋭敏な感覚。魔術の組成を上回る迅速な攻撃。対魔術戦闘における初歩である。

「些か遅めと見受けられます。お父様には及ばぬようですね」

擲撃を受けてイステカーマの顔が歪む。たったそれだけの動きですら、対魔術戦闘に置いては値千金の空白である。

その理に従い、南武の足蹴がイステカーマの首を薙ぐように振り抜かれた。

イステカーマの顔が床に叩きつけられるより先に、さらに繰り出された南武の二段突きが到達。イステカーマの頭部が、事務所の床材をぶち抜いた。

振り返った体が力を無くし、だらりと伸ばされる。今しがた人間の顔を打ち砕いた拳を引き戻し、南武は残心を済ませる。

対魔術戦闘においては、徒手が主流となっている。銃器などの近代兵器は、殊の外魔術に対して脆弱であり、利かないどころか逆に利用される場合がある。対して人体というのは、その人の意識が行き届いた、言わば一つの魔術兵装と考えることが出来る。これを破壊することは比較的容易だが、奪い操るとなればそれなりの術式を組み上げねばならなくなる。

だからこそ対魔術戦闘者は、その人体を鍛え上げる。魔術によつ

て操られぬ体を極限まで改造し、魔術さえ届かせない反応速度と俊敏性を手に入れる。その修練は、魔術師を目指す修行と互するほどである。

せめて武装するとしても、構造の単純な刀剣類、そして対魔術用に開発された特殊な兵器である。

とどめを刺すべく南武が構え直した時、イステカーマの体が、タールのようにどろりと溶けた。どうやらいつの間にか、本体と入れ替わっていたらしい。

「逃がしました。やはり、やるようです」

淡々と言いながら、南武は鍵次の傍に寄り添う。

昔も、こうして守られたことが何度もあった。魔術師ではない鍵次は、生身の状態で魔術師に襲われればひとたまりもない。その危険を受け止めてくれたのが、南武だった。

「傍を離れぬよう、お願いします」

言われずとも、足が竦んで動かない。そもそも魔術師でない鍵次が、生身で魔術師に立ち向かえる道理はない。

南武が懐に手を差し入れると、かちりと硬い作動音が聞こえた。ほどなく南武を中心に広がった不可視の力場が、鍵次さえも包み込む。

これぞレメゲトンが総力を結集させて開発した、対魔術用特殊兵装『ディスプレイザー解呪装置』である。対魔術用特殊兵装の代名詞とも言うべきもので、現在では軍隊や警察などにも導入されている。

軍用モデルでも半径一メートルが限界である中、南部の持つ最新の試作機は、なんと半径二メートル以内のエネルギーを霧散させる。

とはいえ、解呪装置も万能ではない。バッテリーにもよるが、南武の持っている試作機はコンシールド性も重視しており、連続稼働では二時間ほどで使用できなくなる。それに高密度のエネルギー構成物 例えばメガロスやエラヒストスの装甲に使われているエーテ

ル合金などは、さすがに解呪しきれない。

しばらく張り詰めていた南武の気配が、不意に揺るんだ。そして解呪装置の力場も切られる。

「どうやら撤退したようですね」

南武が指で額の汗を拭う。戦略上優位に立つために平静を装ってはいるものの、やはり魔術師と相対するという行為は、極度の重圧を強いられる。それに南武は、鍵次よりも五年ほど年を食っている。四十を過ぎた体には、あの若くて生きのいい魔術師の相手はなおのことつらいだろう。

「ジョージ・フォアマンのようにはいきませんな」

南武なりの格闘技ジョークなのだが、この類のことに関心のない鍵次は、この手の冗談を理解したことが一度も無い。なので、いつも軽く笑ってとりあえず合わせている。

よりゲーティアを上手く運用するために格闘技を習ったこともあったが、それを好きになり、興味を持つかどうかは別問題だった。

「一応はレメゲトンに連絡しておきますから」

含みを持たせた言い方に、鍵次は頷く。このような事態は、学生の頃から経験済みである。取り繕い方も心得ている。

鍵次は大きく息を吸うと、それを思い切り吐き出した。

「うあああああああ！」

それも飛び切り甲高い、悲鳴のような裏声である。声を聞きつけて、騒がしく駆け寄ってくる気配がある。南武はそれを確かめると、割れたガラスから夜の工事現場へと飛び出した。

「だ、誰だ!？」

「ドロボーだ、ドロボー！」

同僚達の声が、幾つか遠ざかっていく。南武を追いかけけているのだろうが、まさか彼が捕まるようなヘマはしないだろう。

まさかこの場の全てを正直に、会社の同僚に話せるわけがない。ならば畢竟、ごまかすしかない。

強盗にでも入られたことにして、鍵次が被害者、南武が強盗の役になり、周囲をごまかす。実際に警察が動いてもレメゲトンが捜査に制止を掛ける。その辺りの因果は、既に鍵次が学生の時に確立されている。

「小中さん、大丈夫ですか!? って床抜けてる!? なんじゃこりゃあ!？」

いの一番に入り込んできた頼田は、いきなり大声を上げた。

目に止まったものを手当たり次第に叫びまくる辺り、あまり物事を深く考えない頼田らしいと言える。

「怪我は無いんですね。よかったです」

遅れて入ってきた井曜は、のんびりと漏らす。この期に及んで崩れぬ口調は、彼女の大物ぶりを如実に表しているだろう。

「大丈夫ですよ。大声出したら逃げていきましたから」

手を上げて心配しないように言いながら、如何にも辛そうに立ち上がる。こういう演技のさじ加減は、きちんと体が覚えている。

そして井曜や他の同僚が、警察に連絡しそうなのを押し留める。

でなければこちらの通報で警察がミスリードしかねない。そうなる と少々手続きが面倒なことになってしまう。

自分が既に通報したことにし、今日は疲れているため、明日改めて事情聴取などを行うと言い繕い、皆を先に帰した。井曜と頼田が最後までまごついたが、大丈夫だからを連発してとにかく帰らせる。まずは床を拭いて南武の靴跡を消しておく。残っけていても問題はないのだが、見逃すと言い含められている警察としては、あまり露骨な証拠がないほうが手続きを省けて楽なのだ。

一通り事務所を走査して、南武の痕跡が無くなると、ようやく鍵次はまとめておいた荷物を持って事務所を後にした。

警察に連絡されて、すぐさま事情聴取とならなかったのは、鍵次としては何よりだった。責任者の親方がいなかったおかげで、対応が相当緩んだのが助かった。一応は年長で、皆からそれなりに信頼

されていたのも要因の一つだ。  
仕事を終えた鍵次が帰ろうとしたとき、出入り口に妙な人影があった。

まだ穎田か井曜が帰ってなかったのかと思つて駆け寄つた鍵次は、すぐに足を踏み留めて慌しく立ち止まった。

「イステカーマ……」

慄然としながら呟き、足を引きずつて後ろに下がる。てつきりいなくなつたと思つていた魔術師が、再び彼の前に現れた。

「あのSPは、もういないようですね」

ちらりと辺りを見渡し、イステカーマは確認する。

今度こそ本当に警察に連絡しようと、鍵次が懐の携帯電話に手を伸ばし　そこで、動きを止めた。

別に金縛りの術を食らつたわけではない。ただ単にイステカーマの持つ雰囲気に吞まれ、携帯電話を取るといふ僅かな挙動さえ取れないほど痺れてしまつたのだ。

「魔術師のくせに狡いな。逃げたふりに、待ち伏せとは。エーテルが濁つちまうぞ」

とりあえず口は動くので毒づいてみるが、冷や汗が止まってくれない。そして手も動いてくれない。

「金言、痛み入ります。肝に銘じておきますよ。それじゃあここからは、その濁つたエーテルで遊びましょうか」

イステカーマが、手にエーテルを集中させる。単純なエーテル球の投擲だろうが、それは手榴弾とほぼ同等の破壊力を持つ。否、イステカーマほどの実力を持っていれば、掌の分だけでこの一帯を焼き尽くすほどに濃縮することも可能だろう。

煌々と光るそれが振りかぶられるのと、鍵次が背を向けて走り出すのとは、ほぼ同時だった。ようやく動いてくれた体で、形振り構わずイステカーマから離れる。

それを悠然と見送ってから、イステカーマはエーテル球をふわりと放り投げた。

緩やかな放物線を描くエーテル球が地面に触れたとき、その場所を基点として光が拡散する。暴虐的なまでに土を抉り、風を裂き、空間を押しつけて広がっていく。

地面を舐めるように迫る爆風に押され、鍵次の体が宙を舞う。

「うああああ!!」

背を屈めて丸まり、せめてもの防御態勢を取って出来かけのシヨツピングモールの床を転がってゆく。

嵌めたばかりのテナントのガラスを破り、セメントがむき出しの通路に出る。

「あご、うおがあ……」

呻いた拍子に垂れる涎に、赤々とした血が混じる。しかしこれは口を切った際の血だ。動くのに支障はない。

これが内臓からの出血だったら、呻くことすらままならない。痛みを遠のかせて、そのままの世行きだ。経験上、そういうことが分かってしまう。

十六の頃、路上でいきなり魔術師に襲われた際、鍵次はどてつ腹に思い切りエーテル刃をぶち込まれたことがあった。そのまま気絶し、再び目を開けたときには救出され、施術が終わったあとだった。

南武の迅速な救助と、レメゲトンの医療魔術がなければ、鍵次は確実に絶命していた。

たった一発の爆発で節々が軋み、体中を万力に掛けられたような激痛が断続的に走る。しかしそれでも、死ぬには至らない。まだ生きられる。生きていける。

イステカーマ：？

立ち上がり、鍵次はシヨツピングモールの奥へと、手を付きながら逃げていく。拉ひしゃげた壁から入ってくるイステカーマには目もくれない。

「おやおや、はしたない。仮にも世界を救った、最強のメガロスを駆る魔術師でしょう。悪の魔術師、スライマンを倒した魔術師でしょう。あのメガロス大戦を終らせた、正義の魔術師でしょう」

喜色を満たした声で、イステカーマは言う。鍵次が魔術師ではないことを知った上での煽りだ。

魔術師相手に隠れている暇などない。その気になれば赤外線や電磁波までをも知覚することが出来る魔術師の眼を前にして、姿を隠すと言うことは逃げるのを諦めることと同義である。

今はただ物理的に距離を開けるほかない。必死をこいて浅ましく油断を誘わずにいられないほど無様に尻を巻くしかないのだ。

後方からは荒々しい破砕音が立て続けに響いている。イステカーマが所構わずエーテルを振りまいているのだろう。せっかく立てた建造物を壊されるのは噴飯ものだが、ここで短気を起こせるほど鍵次の性情は率直ではない。

鍵次が走り抜けた直後、脇にあった柱が突然に爆裂した。その勢いに煽られて、横に大きく突き飛ばされる。

コンクリートの壁をぶち抜いて、エーテルバスターが届いたのだろう。見た目には頑丈で分厚い壁だが、高密度のエーテルにとっては病藁同然である。

とうとうイステカーマが、当てに来たようだ。やはり今までののは単なる余興、戯れる程度の意味しかなかったらしい。

「うっ、くそ、くそ……」

吐き出す言葉も弱々しく、鍵次は右足を引きずって進む。間近で爆発した柱の破片が衝撃波と共に鍵次を直撃し、右半身を徹底的に痛めつけていた。

特に大きな破片の当たった大腿部は服ごとざっくりと抉られ、赤々とした筋肉が顕となっている。

同じく赤々とした血で線を描き、鍵次はとにかく前に進む。この先は何があるわけでもないが、留まっただけという道理もない。いざとなれば変わるものだ、と、鍵次はいつそ清々とした心地で自身を鑑みていた。

ノンネのためだけに生き、それ以外のことはどうでもいいと思っただけの自分が、今はこれほどしつこく生に執着している。

それさえもノンネのためと言えれば美談となるのだろうが、言い切れるほど鍵次は不埒ではないし、自分の生がノンネのためになっているという確信もない。

やはり自分は、死にたくなどないのだ。レメゲトンに翻弄され、利用されっぱなしの人生でも、まだ終ってほしくはないのだ。

生きていけば、またゲーティアに乗れるかもしれないから

そんな鍵次が大きな吹き抜けの部分に至った途端、その顔をにわかには晴れやかなものとした。天啓を受け取った宗教家のように、息を呑んで目の前のエラヒストスを見つめていた。

建築用エラヒストス『DK N8』。通称ドケンヤは、エラヒストスの待機ブースに片膝を立てて座っていた。

既に鍵次の専用機として扱われているそれに、彼は食らいつくように装甲を這い登ってコクピットへと入り込む。

端末に手を当てて静脈認証をクリアする。起動シークエンスの衛星同期もデータインストールも省略。ただ稼動するためのだけの情報量を詰め込む。

「動け、ドケンヤ!!!」

爆風に晒された痛みなど既に意中になく、鍵次は自分の中の魔力

をこれでもかと放出する。エラヒストスにとっての許容量を大きく上回るエーテルが迸り、機構の隙間から煙のように立ち昇る。

長く続ければ循環器系が故障するだろう。しかしそれは同時に、エラヒストスの性能を爆発的に向上させる役にも立つ。他の魔術師でもこのような芸当は可能だ。元よりエラヒストスは一般人の希薄な魔力でも動くように設計されている。その許容量の次第で、魔術師の魔力による運用も当然行える。

一般人ながらも長年メガロスに乗り、操縦方法、さらには魔力の捻出方法を培ってきた鍵次だからこそその芸当だ。

「行くぞ、スライマンの息子ッ！」

ドケンヤに乗り込んだ鍵次が、お返しとばかりにイステカーマ目掛けて気を吐いた

限界まで屈んだ前傾姿勢　クラウチングスタートの勢いのまま、ドケンヤがイステカーマに掴みかかる。

両の手でしつかとイステカーマを捕獲し、滅多矢鱈に振り回して所構わず叩きつける。ドケンヤのマニピュレーターから僅かに飛び出した頭を、特に痛めつける。

まるで子供の人形遊びの様相だ。まだ力の加減など知らない幼児が、おもちゃを振り回して悦に入るように、エラヒストスが魔術師を振り回す。

「死ね、死ね、死んじまえ！」

千載一遇の機を逸さんとして、ここぞとばかりに鍵次はエーテルを捻出する。

「だらあああああ！！」

三階建ての吹き抜けを突き破るほど、ドケンヤが跳び上がる。スラスターも何も付いていない単なる建築用エラヒストスでは有り得ない挙動だ。

逆手に持ち直したイステカーマを、ドケンヤは落下する勢いのま

まにホールの床へ叩き落した。衝撃で敷き詰められていたタイルが根こそぎ裏返し、砕けたコンクリートの破片が土煙のようにもうもうと立ち込める。

煙を掻いて、ドケンヤが現れる。その足取りは定まらず、酩酊しているかのように倒れこみ、ホールの壁に寄りかかった。まるで待機状態のように力を失くし、一時は眩しいくらいに輝いていたエーテル光さえ鳴りを潜めている。

単に鍵次が疲労したのではない。過剰に供給された魔力がドケンヤの許容量を上回り、エーテル循環器系がオーバーヒートしてしまったのだ。

しかし、それだけのことをした価値はあつただろう。

「これで、やったか!？」

大きく息を吐きながら、ドケンヤのカメラで立ち込めている煙を見つめている。

過剰供給のエーテルが生み出したトルクを、遠慮なく魔術師に発揮した。イステカーマは全く抵抗する素振りを見せず、鍵次は十二分に攻撃を行うことが出来た。

多少無様ではあつたが、魔術師相手ということを考えて上出来な対応だつただろう。ここで終わってくれと願いながら、煙の向こうにいるはずのイステカーマを必死に探す。

「何を、ですか？」

モニターを見ていた鍵次の目が、かっと大きく見開かれた。

ぞろりと、舌が脳漿を這うような音。耳孔から入り込み、頭蓋の中を舐めあげられるような不快感。

本当の意味での、魔術師の声。その一言を聞いただけで、鍵次の四肢が力を失ってしまう。

見れば、ドケンヤの集音マイクに寄り添う形で、イステカーマが張り付いていた。

音声による感染魔術。倒したと思った心の空白を見事に突かれた形である。イステカーマはさらに言葉を重ね、鍵次の脳を犯していく。

「このまま発狂させてもよいのですが、それは何と云うか、味気ない。とても、とても味気ない。そうは思いませんか？」

何だか本当に、そんな気がしてくる。洗脳が順調に進んでいるのを、鍵次の心はどこか冷めた調子で受け止めていた。洗脳されている部分と本来の部分とが切り離され、体がまるで言うことを聞かなくなる。

脳髄を操られながらも絶望が過ぎり、それどころか停滞して膨れ上がっている。そのとき、不意に自分を呼ぶ声を鍵次は聞いた。

「小中さん！」

聞き覚えのある怒鳴り声とともに現れたもう一体のドケンヤが、巨大な鉄材を鍵次のドケンヤに向かって振るった。

丁度イステカーマのいる部分目掛けて振るわれた鉄材だったが、当のイステカーマは先んじてひらりと飛び退ってしまった。

勢いは止まることなく、鉄材が鍵次のドケンヤを襲い、真横に倒される。

「ぐあっ!？」

衝撃で鍵次の頭に火花が幾つも瞬く。代わりにイステカーマの聲が頭から抜けて、心が元の平衡を取り戻す。

額を押さえて一振るいし、火花を頭から取り除く。これでようやく体も動かせるようになる。

「鍵次さ〜ん、大丈夫ですか？」

未だ倒れこんでいる鍵次のドケンヤを、新たに現れたドケンヤが支える。

「頼田さん!? それに井曜さんも!？」

先程の怒声、そして今の間延びした台詞。どちらも鍵次の友人  
頼田と井曜のものと見て間違いない。

「二人とも、どうしてここに？」

「小中さん、夜遅くまで残ってるから、差し入れしようと思って…  
…」

「そしたら爆発とかしてるから、急いでエラヒストスに乗り込んだ  
んですよ」

爆発を目撃したら即エラヒストスに乗り込んで現場に向かうとい  
う思考回路は非常の危ういが、今の鍵次にとってはありがたい。

片膝に手を付いて、鍵次がドケンヤを立て直す。頼田のドケンヤ  
が鉄材を掲げて、宙に浮いているイステカーマと対峙している。

「何なんですか？ こいつ、もしかして……」

人が宙に浮く。この超自然の怪異を目にして、既に頼田の頭には  
一つの答えが導き出されていた。

出来ればその先は言わないでほしいと、鍵次は心の底から祈った。  
しかし現代のように魔術の普及した世で、その答えに辿りつかない  
人間はむしろいないだろう。

「そうだよ、青年。僕は魔術師だ。スライマンの息子、と言えば少  
しは分かってくれるかな？」

頼田の確信を先回りして、イステカーマが相変わらず慇懃な口調  
で言う。その落ち着いた声音が、むしろ動転する頼田と良い対比と  
なった。

「ス、スライマンって、あのスライマンか！？」

直接にメガロス大戦を体験していない世代とはいえ、最悪の魔術  
師スライマンの名は知れ渡っている。

「こんな若い人にも知られているとは。息子として鼻が高い」

「何でそんなやつが、ここにいるんだよ？」

当然、その疑問が沸き上がるだろう。そしてあの喋りたがりな魔  
術師のことだ。殆ど洗いざらい、この場で話してしまうだろう。

イステカーマがここにいる理由、さらには自分との関係が、白日の下に晒されてしまう。

「やめる、やめる！ それ以上、聞くんじゃない！ それ以上、喋るんじゃない！」

それはつまり、これまでレメゲトンが嚴重に保護してきた鍵次の個人情報漏洩ということ。彼がゲーティアというメガロスに乗っていたという事実が、一般人に知られてしまう。

それは阻止しなければならぬ。絶対に起きてはならない事態だ。個人情報の漏れたメガロス乗りの末路は悲惨を極める。

超法規的緊急事態という大義名分を失ったメガロス乗りは、それ自体が社会的に憎悪される存在なのだ。レメゲトンの強大な権力で保護されている内は、魔術テロを未然に防ぐために発生した被害の一切を問われることはない。だからといって、その遺族や関係者の心が立ち消えることも、また有り得ない。それは絶えず持たれ続け、憎しみの捌け口を貪欲に探し回っているのだ。

そんなものを向けられて、耐えられるはずがない。ましてや鍵次は魔術師でもない。たまたまメガロスに乗れるだけの一般人だ。膨大な憎しみの奔流に、抗う術など持っていない。

半狂乱のまま鍵次は飛び掛るが、ドケンヤの脚部テンションは十分ではなく、イステカーマに届く遙か手前で盛大に転んでしまった。「何故ですか？ 教えてあげましょうよ。あなたが世界を救ったことを、あなたが巨悪を挫いたことを、あなたがゲーティアに乗っていたことを。私の父、スライマンを倒してのけたことを！」

もうそれだけで十分だった。穎田はせっかちであり物事を深く考えない性質だが、決して頭の回転が鈍いわけではない。この状況にイステカーマの台詞が加われば、察せられて余りあるものだった。無論、穎田より数段聡い井曜は言うまでもない。

イステカーマ：？

二人とも、何の反応も示さない。もしかすればコクピットの奥で驚いているのかもしれないが、鍵次のスピーカーは何も拾わない。

「ねえ、最強の魔術師、小中鍵次さん」

「貴様アアツッ！！」

壊れかけのドケンヤにエーテルを注ぎ込み、無理やり駆動させる。振りかぶった拳がイステカーマを直撃し、そこで停止した。

イステカーマが構成した濃密なエーテルが壁となり、パンチの衝撃を全て防がれてしまった。

「エラにさえこれほど干渉するのか。これで魔術師ではないのだから、未恐ろしいな」

エーテル壁の向こうで、イステカーマは手榴で髪を撫でつけながら涼しげに言う。

元よりこれだけの力があつたのだ。それを隠していたのは、こうして鍵次の絶望感を煽ろうという嗜虐心の表れだろう。

幾らエーテルを捻出して拳を押し出しても、寸毫たりともイステカーマには近づかない。こんなことを続けていけば、先にドケンヤの循環器系がいかれるのは火を見るより明らかだ。

それでも鍵次はドケンヤを休ませようとせず、さらに前進させる。「まあ、エラであることを考慮すれば、十分かな」

イステカーマは思わせぶりに言うと、軽く手を払ってみせた。ただそれだけの動作で、目の前のエーテル壁が鍵次に向かって叩きつけられた。

まるで破砕用のハンマーを食らったように、鍵次のドケンヤはホールを横切り、迫り出した廊下に体をめり込ませた。

「う、くそ、があ……」

まだ呻くだけの元気があるのは、咄嗟に鍵次も前面に濃密なエー

テルを形成したからだ。エーテル同士が相殺し、衝撃を僅かに和らげた。

それは本当に、僅かではなかった。衝撃は十分ドケンヤにも鍵次にも徹っている。

「さあて、もうとどめが欲しいですか？ 何から壊してほしいですか？ 肉体が先ですか？ 精神が先ですか？ もしくは魂？ いや、それとも部位ごとなか？ 脳髓、眼球、耳孔、頸椎、肺腑、心臓、臍、睾丸とよりどりみどりだ。はて、それともそれとも……」

「小中さん！！」

恍惚と語るイステカーマと鍵次の中に、穎田のドケンヤが割り込んできた。壁にめり込んだ鍵次のドケンヤを庇うようにして、鉄材を掲げ持っている。

その様を見つめるイステカーマは半月のように口を撓ませ、にんまりと喜色を浮かべていた。

「それともあなたは、自分以外を傷つけられると苦しむ性質なのですか？」

言った時には、イステカーマの掌にエーテルが集束していた。それが一体誰に向けられるのか、鍵次には痛いほど理解できていた。

「やめろおおおッ！！」

鍵次の叫びは、イステカーマが撃ち出したエーテルブラスターの轟音に掻き消された。元より叫んだところで、ドケンヤではゲーターのように力には変えてくれない。

耳を聳する轟音が、眼前で炸裂した。

「穎田さん！！」

鍵次の真横まで吹き飛ばされた穎田のドケンヤは装甲が抉れ、中の構造部分が剥き出しになっていた。それさえも、エーテルブラスターの熱で焼け爛れている。

すぐさま井曜も寄り添い、コクピット部を引き剥がす。

「あれれ？ エーテルが上がっていませんよ？ 折角その人が身を挺して、あなたを守ってくれたんだ。少しはその心意気に応えてあげたらどうです？」

そんなことはとつくにやっている。大切な友人をこのような目に合わされて、エーテルの上がない者などいない。実際、鍵次は自身の魔力の高まりを実感している。しかし鍵次の魔力を受け取るべきエラヒストスが、既に限界を迎えていた。

循環器系のオーバーヒートは至る箇所及び、生み出したエーテルは片っ端から駄々漏れていく。どれほど心を震わせ、魔力を高めようと、その思いは大気に霧散して用を成さない。

もう、戦う術が無い。魔術師を相手に、抗う術が無い。魔術師と幾度と無く戦ってきた鍵次だからこそ、その回答は重苦しい確信に満ちていた。そのような思いこそ、勝利を遠ざける敗北への近道と知りながらも、思考は止め処なく悪い方向へと転がり落ちていく。

鍵次の視界の片隅に、見覚えのある黒い人影が見えた。朦朧とする意識でも、それが南武であることが窺えた。

(遅いつての。南武さん)

心の中で毒づきながら、南武がこちらに向けて何かを投げつける様が見えた。何を投げってくれたのか、目が霞んで判然としない。掌大くらの箱のようなもの、としか見て取れない。

「ぬああああ!!」

しかし鍵次は、心を渾身振り絞って、ドケンヤをもう一度立ち上がらせる。

南武が何を投げたのか、それは知らなくてもいい。南武が投げるものが、自分にとって不利になるようなものではないと鍵次は確信できる。それどころか、自分にとって益となる、この場を脱するに最善の一手であるということ盲信できる。

自分を何度も救ってくれた人なのだ。これまでもそうだった。これからも、今この場でも、それは変わらない。



イステカーマが打ち付けられた柱に、ぱつと赤い色が咲く。まるで体の中身をこっそり搾り出すように、彼は獅子をこれでもかと伸ばして張り付いていた。

ドケンヤの足元に、南武の投げたものが転がっていた。

それはレメゲトンが開発した対魔術特殊兵装『ディクスレイザー解呪装置』だった。

(なるほど。こいつは、効くはずだ……)

合点のいったことで気の抜けて、鍵次の魔力はとうとう底をついた。それに伴い、ドケンヤは前のめりにばったりと倒れこんだ。

解呪装置の有効範囲に、魔術師が入ればどうなることか

エーテルが打ち消され、いかなる魔術も顕現しなくなる。濃密な壁を生み出すことも、空中に浮遊することも行える道理がなくなってしまう。イステカーマが無防備に拳を食らったのも、なるほど道理と言えた。

「がっ、はあっ……」

完全に機能を停止してしまったドケンヤのコクピットハッチを中から蹴り破り、雪崩れるように外へ飛び出す。無理やり魔力を捻出した反動か、全身が痺れてしまっている。若い頃にはいくら魔力を出そうとこのような変化は起きなかったが、やはりもう体のつくりからして違うのだと思ひ知らされる。

「チームワークの勝利、ですね」

蹲る鍵次に、頭上から声が掛かる。そこには赤い斑のずだぐくろ頭陀袋が浮かんでいた。

解呪装置の圏内から出るや否や、破損した体組織を治癒せしめたのだろう。治療専門の魔術師でないというのに迅速にして精妙な治癒は、さすがスライマンの息子と褒め称えるべきだろう。

勿論イステカーマも無傷ではない。回復の兆しを見せているのは頭部と体幹のみで、それ以外の手足、そして皮膚や筋膜はでろりと抉れて中身を曝け出している。

「今日のところは、私の負けです。いやはや、まさかエラに負ける



いいのかもしれない。

だが鍵次は魔術師ではない。しかし単なる一般人でもなく、半端な存在だ。

いつの間にもやら病室の前まで着いてしまった。しぼんだ心そのままに取っ手に手を描けたが、僅かに力を込めただけで病室のドアは滑り開いてしまった。

思いがけぬ軽さに、みつともないほど動揺してしまう。

「あ、小中さん」

その言葉を聞いただけで、鍵次は涙腺が緩まるのを感じた。いつも会社で会った時に掛けられるのと変わらぬ声音で、井曜は挨拶してくれたのだ。

頼田は薬が効いているのか、気持ち良さそうに眠っている。

「これ、どうぞ。二人で食べてください」

百貨店で見繕ってきた果物の盛り合わせを机に置き、井曜が出してくれたパイプ椅子に腰を下ろす。

「えっと、お加減はどうですか？」

「治るのに三ヶ月はかかるそうです」

「それじゃあ、卒業式には出られないんじゃない？」

「いや、そもそもこれじゃあ卒業試験を受けられないんで」

尻すばみに「ああ……」と漏らし、ついでに視線も逸らす。

「それなら、僕の知り合いの医療魔術師を紹介させていただきます。勿論、治療費は僕が持ちますので」

せめてその程度はさせてもらおうと、鍵次は心に決めていた。

鍵次が感じるレメゲトンの利点は、一つに金払いがいいということだ。日本における魔術師の管理を行なうと言うことは、今や魔術なしには運用できない各種産業の需要を賄うということである。

物理法則などあって無いがごとき魔術の生産性は計り知れない。

魔術の利用が進むにつれてレメゲトンの重要性も高まり、而して生

み出される需要膨れ上がる。第一次メガロス大戦よりも以前に発足し、魔術師の産業的利用を独占しているレメゲトンは、資金だけは潤沢である。

メガロスパイロットという危険な職ともなれば、それだけ手取りも多い。友人の入院費くらいなら十分に賄えるだけの給料は貰っている。若い頃にはバブル期のサラリーマンよろしく散財していたが、今は堅実に貯金するようにしているため問題もない。どのみち、使えない生活をしているのだから、有意義なくらいだ。

鍵次の言葉を聞いて、井曜は得心したように深く頷いた。

「小中さん。魔術師だったんですね。しかも、あのレメゲトンの井曜の言葉に反論できない。何も言い訳できない。鍵次はただ、俯いて黙り込む他なかった。

「小中、さん……」

いつの間にか目を覚ました穎田が、首だけを起こしていた。しかし全身を強く打撲し、右腕が折れている状態なので、うまく起き上がることが出来ないらしい。

「穎田！ だめよ、寝てなくちゃ」

寝かすつけようとする井曜を払い、左腕だけで器用に起き上がると、穎田は鍵次を正面から見据えた。

こういう目は、苦手だ。まるで昔の自分を見せられているようだ。「教えてくれ、小中さん。あのメガロスに、あの白騎士に、乗ったのか？」

白騎士とは、世間がゲーティアにつけた俗称の一つだ。

鍵次は答えられない。だから代わりとばかりに、穎田の目をしっかりと見据えた。その視線を押し返さんばかりに力強く、怪我人を見つめ返した。

「この世界は、小中さんが、守ってくれたんだね」

他人の勝手な解釈までは、鍵次には止めようがない。それがどれほどのを得ていたとしても、翻すことは出来ない。

「ありがとう、小中さん」

ここまでが、鍵次の限界だった。頼田の言葉を浴びた途端、鍵次は顔を両手で覆い、堪らずぐうつと身を縮ませた。

「うぐ、ぐぐ、ぐうつ……」

今の自分に、こんな台詞を受ける資格なんて無い。正義の味方を装うなんて、とても

歯を食いしばり、鉤爪のようにして指を食い込ませて、呻きが漏れてしまう。そんな表情のまま耐え切れず、鍵次は席を立った。

「それじゃあ、私は、もう行きます」

井曜が席を立とうとするのを手で制し、そそくさと病室を抜け出した。もう二度と鍵次は、この部屋のなかに入れそうになかった。

もう会えそうにない。やはり合わせる顔などなかったのだという確信を胸に、鍵次は病院を後にした。

## クセフェヴゴ・イロアス：？

鍵次は一人、河原近くの道路脇を歩いてきた。着古されたジャンパーに手をつ突っ込み、首を窄めている。春だと言っのに、まだ長野は寒い。だが、南極で作戦を遂行した時に比べれば、こんなものは天国だ。

あのとき、敵メガロスを撃破したが、気力体力共につき、ゲートアのエーテルを維持できず、猛烈な吹雪の中で立ち往生してしまった。

ゲートアに乗ってさえ伝わってくる冷気は、加速度的に体力を奪う。

他に何もすることが無くて、外の吹雪をじっと眺めていた。心の底まで寒々しくなりそうなほど激しくて白い雪の流れくらいしか、慰みになるものがなかったのだ。

もはや通信さえ耳が届かないほど憔悴しきったそんなときに、突き刺さる冷気が体中を包み込んだ。

とうとうハッチまでいかれたかと思上げたそこには、特徴的な銀髪がたなびいていた。それが目に入った瞬間、入り込んでくる吹雪など彼の意中から消え失せた。

「メディナ、メディナ！」

コクピットハッチを開けて入ってきたメディナの体を、鍵次は無理やり引き寄せて抱きしめた。そうでもしなければ、心細さが埋まりそうになかったのだ。

「倒したよ。敵、倒したよ」

メディナの耳元でうわ言のように繰り返す間、彼女は鍵次を優しく抱きとめてくれた。あのときちらりと見えた雪は、こんなに優しげに落ちてきやしなかった。

とうとう降り出してきた雪の一片を掌で掬い、溶け入った水が温みを帯びるまでじっと見入る。同じ関東だというのに、東京とはこ

れほど違うのかと素直な驚きが漂う。

こんな風に一人で出かけることなど、ずっとなかった気がする。よく外国に行きはしたが、どれもレメゲトンの作戦のためだった。ゲーティアを降りた後はなおのこと、そんな機会はない。メディアと出掛け、娘が生まれてから行ったのは、せいぜい遊園地くらいのものだ。

離婚し、一人身になってからは、出かける気すら起きなかった。しかしそれが急に、遠くへ出かけたくなくなってしまった。原因は無論、先だつてのイステカーマとの邂逅である。あの一件で、鍵次の素性一般人にばれてしまったためである。

メガロスパイロットのような魔術師の個人情報は秘匿事項である。魔術が社会に浸透してきたとはいえ、魔術師の価値は一生命体が有するには余りに大きく、社会に与える影響もまた甚大である。行政機関、あるいは魔術師管理機関にとつても徒に魔術師が闊歩するようなことは好まれず、また魔術師のほうも好まない輩が多い。

魔術師ではないながらも例外的にメガロスを操縦している鍵次の個人情報も同じだけのセキュリティで秘匿されていたのだが、稀代の魔術師スライマンの息子であるイステカーマによつて詳らかにされてしまった。

このままではまともな生活は送れない。そう判断した鍵次は仕事先にもレメゲトンにも何ら告げることなく、気が向くままに中央線に乗って長野県に訪れていた。

今まで住んできたところから離れて、今さら不安が募る。何の思入れもないと思っていたが、何だかんだと居心地が良かったらしい。そこへ過ぎること頻りなのは不安ばかりではない。鍵次の素性を知ってしまった一般人 穎田と井曜のことがしつこいまでに頭を巡る。

彼らに知られたことをきっかけに家を出た鍵次だったが、実のところ世間に素性が知れ渡るといふような心配とは無縁だった。誠実

な井曜と正直者である頼田の性格からすれば、そんなことを徒に吹聴はしないということを確認することが出来た。

それが何故、半ば失踪と言えるほど危うい逃避を始めたのかといえば、何のことはない、鍵次はただ逃げ出したかったのだ。友人を傷つけたと言う事実から。友人に自分のことを知られてしまった事実から。友人が向けてくる眼差しに、自分はまるで見合わないという事実から。

首を巡らせて、当たりを窺う。南武さんの尾行も無い。他の警備部の人間の気配も同様だ。

レメゲトンの警備部との付き合いは、もう二十年近い。そのやり口は嫌と言うほど知っている。裏を掻こうと思えば、こうしていつでも掻くことは出来た。今まではそんな必要も、気概も無かっただけだった。

おそらくレメゲトンは大慌てだろう。それとも、今さら自分ひとりになくなったところで、何の痛手にもならないのだろうか。どちらでもいい。どちらでも、構わない。

もう頼田には医療魔術師を斡旋したあとだ。治療費も都合がついた。なので一応、けじめはつけてきた。

それでも存在する心残りは、娘　ノンネのことだ。

もう自分は、あの子に会う資格が無くなってしまった。今までも無かったのかもしれないが、これでとどめを刺された形だ。

(今さら、俺がしてやれることなんて無い。メデイナが、立派に育ててくれるさ)

今までは自分も養育費を捻出していたため、そういう考えは振り払うことが出来たが、今となっては無理な話だ。これから過去を捨てて生きようというのだから、養育費など払えるはずも無い。

「小中くんが失踪した？」

メデイナからの報告を受け取った志田は、淡々とした口調で反芻した。

「はい。警備の裏を見事に搔かれました」

「一時期は警備部の仕事も手伝っていましたがね。手口はバレていたでしょう」

横にいたドクターが淡白に述べる。レメゲトンの魔術師というよりは国公魔術師の失踪は、実のところ珍しいものではない。己が欲する所を行う魔術師は、元より社会的通念などものともしない。居たくないから出て行く。ただそれだけである。労働責任など持ち合わせていないのが殆どだ。

勿論、かように御し難い魔術師を御するのがレメゲトンである。その辺りには抜かりなく、長官の承認なくレメゲトンを抜ける、あるいは理由なくレメゲトンの要請に応じない場合、無期または五年以上の懲役が科せられる。

まるで殺人罪に匹敵するような罪科を設けるのは、一重に魔術師の戦略的重要性故である。そして脱走理由の八割が、他国への亡命だからである。

魔術師という貴重な国財をむざむざ流出させ、あまつさえ他国に与えるとなれば、国家間のパワーバランスを崩す要因となりかねない。

しかし鍵次はメガロスに乗るとはいえ、魔術師ではない。国公魔術師のように峻烈な対応は必要ないだろう。志田は一齣考<sup>シウキウ</sup>えを巡らせると、すぐさまメデイナに下知を下した。

「魔術師に捜査を依頼。遠見から割り出すんだ」

遠見とは、千里眼や透視<sup>クレヤボンス</sup>などと呼ばれている魔術、予知やダウンジングなどの占術の総称である。

魔術もまた専門化が進み、捜索だけの専門にした魔術師もレメゲトンには登録されている。国公魔術師の資格を有するほどの魔術師

となれば、その的中率は実に98%を超える。

だが志田は国公魔術師へではなく、単なる魔術師へ依頼するようメディアに言いつけた。

「それでは確実性に欠けますか？」

魔術至上主義の現代で、魔術師と名乗る者はそれこそ玉石混合である。世界を危機に陥らせるほどの者もいれば、道端で手相を見て糊口を凌ぐ者もいる。

国公魔術師ではない、いわゆるフリーの魔術師にも素晴らしい実力を備えたものはいるが、そうしたものは一握りである。きちんと国公魔術師のように実力を証明されていなければ今のご時世、魔術師としての信用というものが得られない。無論、そんな下賤な評価など気にしない古風な輩も少なくない。

「一応、して見せねばならんだろう。候補地に捜査員を二人ほど派遣。それで駄目なら打ち切る」

諸々の事情は、志田も心得ている。捜索はあくまでポーズ。対外的な意味でしかない。それはつまり、今の鍵次にはその程度の価値しかないことを示していた。

「了解しました」

もはや何も言わず、メデイナは志田との通信を切った。そして早速フリーの魔術師に捜索の依頼を出し、傍らでは捜査員二人の確保を警備部に通達していた。

メデイナは志田の命令に、何の不服もなかった。むしろ彼女個人としては、形だけの捜索すら省いてもいいのではと思っていた。

医療魔術師の斡旋を頼んできた矢先の失踪であった。幸いにして混乱のようなものはない。今さら彼一人いなくなっても通常業務には何の支障もない。

問題は緊急事態での対応だ。他の国公魔術師が出られない場合の次善の策がそのまま無くなってしまった形だ。

自分の都合しか考えず、メガロス乗りとしての責任や自覚が全く

欠如している。レメゲトンのオペレーターとして日夜発生している魔術関連の事件事故の解決に尽力してきたメディナだからこそその憤慨であった。

昔の鍵次のほうが、まだしっかりとしていた。メガロスに乗って戦い、国や人々を救うことに誇りを感じ、無為に損なわれる人命には落涙することもあった。そして何より魔術による理不尽なテロ行為を許さない、潔癖なまでも正義感があった。

メディナは鍵次の最近の働きぶりから、少しはその正義感も戻ってきたかと思直していた。このままメガロス乗りとしてまた活躍してくれて、生活基盤をきちんとしてくれたなら、よりを戻してもいいとさえ考えていた。

女親一人子一人では、何かと気苦労が多い。母子家庭手当やレメゲトンの高給でとりあえず不自由ない生活を遅れているが、親子の時間があまり取れなかつたりと、嫌な思いをノンネにさせてしまっている。なのでやはり男親が居たらいいと思うことがしばしばあった。

別に鍵次である必要は無いのだろうが、メディナとて人付き合いが上手い性質ではない。残念ながらこれまで付き合った男性は、結婚した鍵次だけである。それにノンネのことを考えれば、血の繋がった鍵次のほうが苦労が少なく済む。

そうした打算と愛情が、今回の一件で無残に砕け散った。やはりあの男は、人の親になる資格さえなかったのだ。

娘に対する思いは、所詮この程度だったのだ。この程度で怖気づき、何もかも投げ出してしまうような男に、メガロスに乗って戦うことも、ノンネを育てることも出来やしない。

(やっぱり、早めに別れといてよかった)

それとも、兄が生きていたならば、もう少し違っていただろうか。

メガロス大戦が終わり、親友であった兄を目の前で亡くした鍵次

は、メデイナから見ても明らかに気負っていた。

兄にメデイナのことを頼まれ、ゲーティアを降ろされ、働き口を失っても、不自由させまいと必死に働いていたのがよく分かった。

しかしレメゲトン解雇させられたら、その頑張りも続かなかつた。

その人生には十分同情するが、やりようが無かったわけではない。メガロスの整備ではなく、エラヒストスの整備関係ならば仕事は民間でもあった。それに実際、今の鍵次は建築会社でエラヒストスを操縦している。

レメゲトン辞めさせられたところで、何もかも終わったわけではないのだ。それでもあの男は、一度投げ出してしまった。

結局のところ鍵次は、レメゲトンで働けない自分を許せなかったのだ。そしてゲーティアに乗れない自分も、許せていなかったのだ。

そして今回、またゲーティアに乗る機会を得たというのに、今度は自分からそれを投げ出してしまった。タイミングから窺うに、入院した同僚とやらが原因なのは間違いない。

確かに自分に近い人物が傷つくのはつらい。しかしそんなことにいちいち頓着しているようでは、メガロス乗りは勤まらないのも事実である。以前の鍵次ならば、その辺りのことはきちんと割り切れていた。嘆きはすれど、それで自分の職務を放り出すなどしなかった。

あれから二十年も経っている。人が変わるには十分な時間だ。あの頃の正義感に燃えていた鍵次は、ゲーティアを降りたときに消えてしまっていたらしい。

もはやなけなしの養育費さえ、あの男には払わせない。自分から放り出したのだから、父親面など間違ってもさせはしない。ノンネは自分一人で育ててみせる。今は亡き兄のためにも、自分のためにも。

## クセフェヴゴ・イロアス：？

太平洋上、魔術結社『イガーサ』の居城では、一人の男が物思いの耽っていた。ビロードの内張りを施した漆黒のローブは赤々とした染め抜きが施され、さながら返り血を浴びたかのようなようだ。しかし赤い文様は不規則ではなく複雑に入り組んだ文様を描いていた。

古式然とした魔術師の様相の男は、魔術結社『イガーサ』の導師モアツウエズである。彼の住まう孤島の中心にある城から臨む景色は、見渡す限りの海原にずらりと並ぶ戦艦だった。仕掛けてきはないものの、常に艦砲射撃の届く射程内に停留している。

せつかくの壮観を蹂躪されていると言える有様だが、モアツウエズの心は慈しみに満ちていた。

彼らとて職務で仕方なく行っているのだ。だが、それももうすぐ終る。彼らどころか、世界中の命がその宿痾から開放される。この『イガーサ』が、その名の通り救済してみせる。

「失礼するぞ、導師！」

水母のように浮かんでいた思考が、荒々しく開かれたドアの音で寸断された。入ってきた若者　カルツオはずかずかとモアツウエズの元まで歩み寄り、形ばかりの拝礼を行なった。

その様子をモアツウエズは素気無い眼差しで見つめていた。目上の者への気遣いなど感じさせない彼の凶太さには、頼もしささえ感じてしまう。だからこそ何の遠慮もなく、モアツウエズはひたすら物憂げな表情を崩さない。

「カルツオ、導師は今お休みになられているのだぞ。もっとゆっくり、静かに入ってこないか」

横で諫言を呈したのは、モアツウエズの影に控えていたイステカームだった。彼と年の頃が変わらないカルツオはよほど言い様が気に入らないようで、これ見よがしに顔を歪めた。

「俺は導師と話してるんだぜ。親の七光りは黙ってな」

「いやはや、親を噛み殺した不心得者は言うことが違う」  
売り言葉に買い言葉で、お互い譲るところを知らない。

そんな言い合いを断ち切ったのは、モアツウエズであった。彼がゆったりとした動作で手をふらりと上げる。ただそれだけの動作で濃密な魔力が流動し、まるで内臓まで透過して攪拌されるような心地を二人に与えた。

「用件は何だ？」

今の仕草だけで冷や汗を隠せないカルツォだったが、それでも立ち直って上申する。

「ゲーティアの力、俺も味わいたい」

思わずイステカーマが顔を曇らせる。その役はイステカーマが担い、この前行なってきたばかりだ。それを他のものに行なわれたのでは立場が無い。顔つきが優れないのも当然と言えた。

何か言い募ろうとするが、横に鎮座するモアツウエズのことを考えれば、甚だ短慮な行いである。まだ導師の意を窺ってもいないのに翻意を促そうというのは、導師の御心を試そうという不遜な心得だ。

「殺すなよ。皆、救わねばならぬ」

その少ない言葉は、カルツォの上申が通った証だった。彼は徐に立ち上がり、肩を聳やかして扉へと向かった。

「努力するよ。だが、多少はしょうがねえだろ」

立ち去り際にそんな言葉を残し、カルツォは部屋を辞した。

また二人きりに戻った部屋で、顔を曇らせたままのイステカーマはすぐさまその心中を吐露した。

「良いのですか、導師？ 私と違って、彼は戯れが出来ませんよ」  
イステカーマの言うとおり、あのカルツォは、彼と違って激しい性情を有していた。

カルツォ・スカルツアルーピ。彼は自身の魔術の成就のために、師である魔術師を殺した過去を持つ。伝法な雰囲気を感じながら、ある種魔術師という生き物の苛烈な面を煮詰めた峭刻な面を持つ。今時では珍しいほど魔の道に正直な男だった。

そんな男がゲーティアと立ち合えば、単に実力を計るだけでは済まない。確実に殺し合いになる。自身の秘奥を尽くしての大魔術戦となるのは火を見るよりも明らかだ。

カルツォの性情を思えば、イステカーマの懸念も止む無しだった。しかしモアツウエズは彼の申告を吟味する暇すら持とうとせず、「あれはあれで、律儀なところもある。救いたいと言う使命は、守ってくれるさ」と気だるげに言った。

イステカーマの心配を先回りされた形の発言だが、それでも彼の心は晴れない。

「万が一ということもあります。ですから」

「だからこそ、君らがいるのだらう」

モアツウエズに被せて言われ、イステカーマは諦めたように嘆息し、額を押さえる。そう言われるだらうという予想が、彼の中にあつたのだらう。

カルツォの後を追うようにして、イステカーマが早々に扉へと歩き出していた。

「いつでも止められるよう、備えておきます」

「そうしておいてくれ。そのほうが、安心して楽しめる」

モアツウエズはまたも視線を窓へと戻し、物憂げな表情のまま言った。

「もう、心が揺らぐのは、嫌だ。そうだらう、イステカーマ」

「はい。全ては導師の御心のままに」

頭を下げたまま器用に扉を閉め、イステカーマは部屋を辞した。一人残されたモアツウエズは、何事も無かったかのように水平線と、取り巻きの戦艦を見つめている。

その目は漠として漂い、限らない水平線への爽快さも、厳しい戦

艦への不快さも映さない。ただひたすらに、見ているだけだった。「もう、揺らぎたくない。惑いたくない。ただ、ここにありたい。皆、そうだろう。ここにこのまま、こうありたいのだろう」

誰に言うともなく、言う。まるで景色の向こうへと投げかけるような、虚ろな一人語り。それでも満足げに、当のモアツウエズの口には淡い笑みらしきものが浮かんでいた。

ノンネは一人、テーブルで朝食を取っていた。一枚のトーストに自分で作ったマーマレードを塗りつけて、何も言わずにもそもそと口へ入れる。

母であるメディナは仕事で帰ってきていない。兄弟もいないため、今この家にはノンネしかいない。

そんなことは別段珍しくはない。シングルマザーであるノンネの家庭では、メディナこそが稼ぎ頭なのだ。都合がつかなければ今日のように朝が来ても帰ってこない。母の仕事が時間に不規則だということも、ノンネは幼いころから承知している。父がいなくなつたその日、母と二人で暮らすようになる前から、ぼんやりとそのことを分かつていたように思う。

ノンネの家に、父はいない。彼女が三歳くらいのころ離婚したためだ。それ以来、父とは会っていない。

父には、少し会いたいと思っっている。しかし会いに行こうとは思わない。心がどうしようもないほど父を求めているわけではないし、母も良い顔をしないのが目に見えているからだ。

ノンネは少ししか、父のことを愛していない。それも当然だろう。今となつては顔も声も覚えていない父親を無条件で愛せるほど、ノンネは素直な性格ではない。

父とノンネが過ごしたのは、三歳までのことだ。なんとなく、ぼ

んやりと一緒に過ごしたような思い出が頭の端にひっかかっているような気もする。しかしきちんと像を結ぶほどではない。

では恨んでいるかと言えば、それも判然としない。父親がいないせいで家計が苦しく、母がたくさん働かねばならないのは確かに心苦しい。だからといってノンネは、バイトなどをして家計を助けているわけではない。母が苦勞していると知りながらその上に胡坐をかいているのだから、父親に恨み言を言える立場ではない。

今までも、逢わないで暮らすことが出来たのだ。これから逢わなかつたって、何の不都合があるのだろうか。

トーストを食べ終わったノンネは、壁掛けの時計を確認する。学校が始まるのは九時ちょうど。まだ時間に余裕がある。これもいつもの通りだ。

食器を桶に漬けて、冷蔵庫から取り出したペットボトルでコーラを一口飲む。口の中に残る甘みを取るため、ノンネは戦洗面所に向かった。

歯を磨いた後、洗面所の鏡で身だしなみを確認しながら、軽くリップを塗り、髪型を整える。母が頑張つて入れてくれた高校は相当の進学校で、校則も厳しい。厚めのファンデでも付けようものならすぐに生活指導の教師に呼び出され、内申に響いてしまう。

今どき小学生だって化粧をするというのに、何とも初心いことだと呆れる。しかしノンネは身だしなみに気を使うほうではないので、むしろ助かるくらいだった。

元よりノンネは日本人の父とイギリス人の母とのハーフで、目鼻立ちは一般的な日本人のそれより深く整っている。化粧で主張を強くするまでもなく、顔の彫がくつきりとしているのだ。

そして何より目を引くのは、母から受け継いだ銀髪である。これのおかげで化粧云々が、良くも悪くも関係なくなってしまうている。これはノンネにとっての、数少ない自慢の一つだ。なので昔から大事に伸ばし、今では背の中程まで垂れるくらいになっている。

洗面所の窓から外を見やると、何とも爽快な青空が広がっていた。こういう天気の良い日には、闊達な装いが相応しい。ノンネは長髪をゴムで一房に纏め上げ、すっきりとしたポニーテールにした。

「行ってきまーす」

しやなりしやなりと髪を揺らして、ノンネは玄関を開けた。

「ノンちゃん、おはよー」

いつもの通り玄関前に立って挨拶してきたのは、友人の有村香苗だった。

「おはよ、かなちゃん」

香苗の家は斜向かいなので、二人はいつも待ち合わせて一緒に登校するのが日課となっていた。電車通学のものが殆どの中、母がわざわざ高校に合わせて引越してくれたので、ノンネは徒歩十五分ほどで高校に着いてしまう。その間は友人との大切な語らいの時間だ。

「今日はポニテなんだね。いいなあ、私も髪伸ばそうかな？」

香苗は羨ましげにノンネの髪を見ながら、肩の辺りでくるりとカールしている自分の髪をくりくりと弄る。

ノンネは二日続けて同じ髪型をすることが殆どない。自分の自慢の髪で色々と遊ぶのが数少ない趣味なのだ。

「そんなことないよ。かなちゃんのもいいと思うけどな」

これは案外と本心からの言葉である。髪型で色々と遊ぶために長く伸ばしているノンネだが、そうするとやはり短い髪型には縁がなく、時たま羨むことがある。

「二人ともおっはよー！」

「おはようございます。ノンネさん、香苗さん」

快活な声と、しっとりとした声の二重奏。いつもながら聞き慣れたそれは、三十歩蓮美と吉平恭子だ。

香苗とノンネも挨拶を返し、四人は立ち並びながら話す。ノンネ

並に伸ばした黒髪を惜しげもなく流している蓮美と、ショートボブの恭子、それに巻き髪の香苗が並ぶと、さながらファッション誌のグラビアのようである。化粧品には興味がないが髪型には関心のあるノンネは、三人が居並ぶ様を見るのが本当に楽しみであった。

四人で仲良くなったのは高校に入ってからだが、蓮美と恭子は中学のときから香苗と仲が良かったそうだ。香苗とクラスが同じだったノンネが輪に加わった形である。

学校に着くと、蓮美と恭子は違うクラスなので早速分かれる。とはいえ隣の教室なのですぐに話に来る。

二人は窓際の席にカバンを置くと、すぐにまた話し始める。そこへカバンを置き終えた蓮美と恭子もすぐに合流した。

入学当初は友達が出来ると不安だったが、喉元過ぎれば熱さを忘れるもので、すっかり今の日常が板についてきた。高校入学どころか、それよりも昔から一緒にいたかのように、四人はそれぞれに馴染んでいる。

このまま四人の関係が、少なくとも高校卒業まで続く。少なくともノンネはそう思っている。しかし出来れば一生ものの付き合いにしたいものだとも、ノンネは考えていた。

今では自慢である銀髪も、幼いころのノンネにとっては呪いに近いものだった。無邪気な子供がそれほど奇抜なものに興味を引かれないわけがなく、何かと嘲弄の種になったものだ。少しばかり大人になってから鑑みれば、応じる意味も根拠もない馬鹿げた言い募りだったが、幼いノンネにとってはそれが全てであり、世界だった。今でもこの銀髪が注目されているのは、身に沁みて分かっている。時たま心無い言葉を貰ったりもするが、友人のいる状態ならそれも耐えられる。自分のことを尊重し、自分もまた尊重できる友人がいるだけで、ノンネは自分の身体的特徴を好意的に受け止めることが出来た。

それに目立つというのは、悪いことばかりではない。ノンネのよ

うにハーフで銀髪でしかも美人となれば、何かと放っておかれないことが多い。事実、ノンネはこれまでに男子生徒から告白されたり手紙を貰ったりすることが少なからずあった。友人には気恥ずかしくてあまりその手の話題は振らないし応じもしないが、心のうちではやはり誇らしく、どこかこそばゆいものを感じていた。

しかしそのどれも、ノンネは丁重に断っていた。今はまだ、恋愛ごとにあまり関心が沸かないのだ。

恋愛ことは、まだ無くてもいい。今は友達導同士で遊んでいたのだ。

## クセフェヴゴ・イロアス：？

カルツォは一人、東京の街を歩いてきた。まだ部屋を辞してから十分と経過していない。このような超常現象は、魔術師としての力を以ってすれば何のことはない芸当に過ぎなかった。彼は召喚魔術の応用である転送魔術を用い、自らを太平洋上の島から瞬時に東京へと移動させたのだ。

予めメガロスを呼び出して襲うというのも趣向としては面白いだろう。外洋から寄り来る不吉な影を見て逃げ惑う下民どもを想像すると、どこか胸がすくような心地がする。しかしせっかくならば、間近でその様を観察してみたいとカルツォは思うのだった。その切迫を自分が煽っているのだという実感は、魔術師と魔術師ではないもの、自分とそれ以外との隔絶を確かなものとして知らしめてくれる。

そういう瞬間にこそカルツォは、魔術師になって本当に良かったと思える。

カルツォは適当な場所を見繕う。なるべく人の雑多なところがいい。そのほうが、より多くの人に驚いてもらえる。自分の魔術を見てもらえる。道端で無造作に立ち止まり、静かに瞑目する。慣れているとはいえ、メガロスほどの巨大で緻密な術式を行なうとなれば、練達の魔術師と言えど一応は集中も必要になる。

「sparri 《撃て》、mio cannonne 《我が砲塔》」

二小節の呪言が紡がれると、間を置かずカルツォを中心として光の帯が地面を走る。それは複雑に入り組み、幾何学模様を形成していく。メガロスの起動術式に加えて召喚魔術をも組み込まれた魔方阵の上に、カルツォから放散されたエーテルが凝縮していく。すると光の帯は勢いを増し、水面に垂らされた油滴の如くに大きく、そして素早く拡大していく。

メガロスを呼び出すのに適宜な大きさまで広がった魔方陣の眩い  
燐光が徐々に輪郭を確かなものにし、金属特有の堅い煌きが覗くま  
でになる。

者の数秒ほどで光の中から現れたのは、四つ足の上に砲台を乗せ  
た、まるで節足動物のようなメガロスだった。これこそカルツオの  
所有するメガロス『ティラトローレ』の姿だった。

「行くぞ、ティラトローレ！」

突如として街中に現れた巨影に、人々はぼうっと眺めてしまう。

しかしそれも一瞬のこと、現れたのがメガロスであると見て取るや  
否や、叫喚しながら一目散に逃げ出す。二十年前から散発的な魔術  
テロに見舞われている日本では、この辺りの対応は実に迅速である。  
まだカルツオがティラトローレを呼び出してから十分と経っていない  
のだが、近くにあった学校からは早速非常ベルが鳴り響き、生徒達  
の避難が始まっている。車に乗っていた者達は拳つて降り、走つて  
その場から逃げていく。緊急事態下では、車などの交通機関は思い  
のほか機能しない。それよりは徒歩のほうが確実なのだ。こうした  
魔術的緊急事態への対策がこれだけ民草に浸透しているというのは、  
国などの公共機関やレメゲトンが取り組んできた対策の賜物だろう。

日本の優れた魔術への対策意識に感嘆しつつ、カルツオはティラ  
トローレの巨体を聳やかして悠然と歩を進める。

スパイクの付いた節足が家屋を押し潰し、道路を踏み割る。乗り  
捨てられた車も砕かれ、中の燃料が引火、誘爆を引き起こすが、ま  
るで一顧だにせず街中を我が物顔で進む。

この高い視点は、いつ見ても心地がいい。特に自然物ではなく、  
人工物を眺めるとなれば格別だ。この全能感は、メガロスに乗らな  
ければ味わえない。そしてビルもかくやという手足。力強く、猛々  
しいその様は、まさに魔の所業。

「クツ、クハツ、アーハツハツハツ！」

カルツオの哄笑を受けて、ティラトローレの前脚部装甲が縦に爆ぜ  
割れる。現れたのはずらりと整列した坊主頭 弾頭直上に備え付

けられた策敵装置を納めたシーカーが、足元の爆炎を跳ねて瑞々しく照り輝いている。エーテル推進型地对地ミサイルにいちいち狙いなどつけない。目に付いた建物を悉く破碎するために、申し訳程度に着弾分布を広めに取っておく。

テナントビルも高層マンションも学校も公園も平屋も郵便局もデパートの関係ない。一切合財叩いて潰す。それがゆるされるのは、魔術師だけだ。

スイッチも何もない、ただ漫然と座るだけのコクピットで、カルツォは自分の指を高らかに鳴らした。それを合図として、前脚部ラックから怒涛のようにミサイルが発射された。噴煙の尾をたなびかせて進むそれらは、さながら獐猛な鮫の群れだ。シーカーで獲物を的確に定め、爆炎の牙で跡形もなくなるほどに貪る。後に残されるのは食い散らかされた滓だけだ。

周辺にばら撒かれたエーテル推進型対地ミサイルは、テイラトーレの前面を扇状に焼き払った。崩れかけの建物には、須らく炎が纏わりついている。遠目から見るとそれは血みどろに汚れた腸と大差がない。

全く以って酷い有様だ。少しばかり撒いただけでこうも崩れる、こうも汚れる、こうも壊れる。ほとほと魔術に因らぬことの脆弱さに、カルツォは落胆を禁じえない。先ほどの感嘆など、今の彼には毛ほども残ってはいなかった。それもそのはず。彼は魔術師。超常の理に身を置く逸脱者である。その心の動きなど、常人のそれとは比べるべくもなく異常なのが必定だ。

全力で感じ入り、全力で嘆じる。その振れ幅こそが魔力として顕現し、現実を暴虐に犯し尽くす。そこに手を抜くことなど出来ないのが、カルツォの性情であった。

「さあ、早く来い。ゲーティア！俺が日本を焼いちまう前にな」  
今度は中央部から砲門を迫り出し、四方に向けて乱れ撃つ。今度もまたろくに狙いなどつけていない。目に付いたものなら建物だろ

うが人間だろうがとにかく当てる。カルツォはゲーティアが現れるそのときまで、とつくりと均し作業を楽しむ心算であった。

それは、余りに唐突だった。

どくりと、体が膨れ上がるような悪寒。自分で鑑みても恥ずかしいほどの身震いに、ノンネは心当たりがあった。彼女はときたま、こつした震えに襲われる。

魔術師ではなくとも、人間というのは大なり小なり魔的素養を備えている。その度合いが大きいと、先ほどのノンネのように、周囲で行使される魔術から放散したエーテルに体が何らかの反応を起こすことがある。魔術師の家系の出である母を持つ彼女が優れた魔的素養を生まれながらに有しているのはむしろ必然と言えた。

気がつけば教室がざわめいている。ノンネだけではない、他の生徒にもエーテルの放散を受けた者がいる。中には吐き気を催して必死に堪えていたり、昇る寒気に耐えかねたように体を擦っている。エーテルの影響は様々な形で現れる。甚大なものではショック死さえ起こるケースもあるという。現れる症状は放散されるエーテルの総量と濃度。彼我との距離。そして受け取る者の魔的素養の度合いで決まる。そういった意味では、ノンネの症状は比較的軽い部類に入った。それは必然、彼女の魔的素養の希薄さを物語っていた。

母であるメディナは魔術師の家系に生まれたが、魔術師ではない。ロン家の後継は兄であるエグゾルだったため、彼女は魔術師としての英才教育は受けていない。一昔ではそのような半端に魔術を齧ったという人種は少なくなかった。魔術の秘奥を授けられるのは弟子や子供の内の一人のみである。

現在のように魔術の広がった社会であれば、魔道技術者という道も開ける。実際メディナは魔術師にはなれなかったが、魔術師管理機関であるレメゲトンのオペレーターとしてその能力を遺憾なく発

揮している。

しかし、それでも ノンネは母の心に思い致さずにはいられない。

母は口では言わないものの、ノンネに魔術師になってほしいのだということがありありと感じられるのだ。自分がなれなかった分、魔術師への憧れがあるのだろう。

母の時代には、才能に恵まれた一部の人間しか魔術師になれなかったが、現在は技術や研究が進み、社会に魔術が浸透し、魔術師もまた数を増やしている。母が過ごした時代よりは魔術師になりやすい環境が整っている。

だからといって、ノンネがなれるという保障はどこにもない。「おい、何だあれ？ 光ってんぞ」

近くに居た男子がまず騒ぎ出し、ついで雪崩れ込むようにしてクラスメイトが窓際にへばり付いていた。騒がしいのを嫌ったノンネは、そこまでで益体のない回想を打ち切った。もはや授業の様相を呈していない。担任教師は生徒たちの勝手な振る舞いを咎めせず、校内に通した電話を何やら神妙な面持ちで聞き込んでいる。

皆が皆慌てるのも仕方ないのかもしれない。既に窓の向こうでは、真昼間だというのにナイターの野球場のような太い光が地上から立ち上っている。十中八九、先ほどの魔術による発光現象だ。太陽光を上回るそれは、しかし胸を締め付けて不安を助長するような怪しさを帯びている。遠く離れてみているはずなのに、ノンネの喉もとつとつ吐き気らしきものを感じていた。

それは恐らく直感ではない。確かな実感だ。魔術師の生み出す魔力、そしてエーテルとは個々のものである。そこに込められるのは当人の性質そのものだ。つまり他人の不安を増長させるような性情の持ち主が魔術を行使しているということだ。

「皆さん、授業は中止です。これから避難を始めますので、落ち着

いて行動してください」

校内回線を聞き終えた担任教師は、努めて平静を装いながら通達する。皆もすでにその可能性には思い至っていたので、それらしい混乱などなく整列しつつある。

「ひ、ひあ、ひあああ!」

そのとき、最後まで窓にへばり付いていた男子生徒が、口角泡を飛ばして教室を横切っていった。彼の行いの意味するところなど、既に高校生となった彼らにとっては瞭然であった。しかし悲しいかな、もはや残された猶予はそんな思案すら許さず

ノンネの体が、ハレーシヨンの如き光に飲み込まれた。直後に体を襲った衝撃は、彼女の意識を寸断して余りあるものだった。ああ、多分皆がこうなんだろうなああと、ぼんやり思い浮かべるまでが、彼女の限界であった。

何故、起き上がったのか。ノンネ自身にもとんと理由など図れはしなかった。深海から沸き起こった泡の一つがたまさか海面まで来られたように、彼女の意識も再び浮上することが出来た。その幸運をかみ締める暇はない。それだけを確認して、彼女は目を開ける。

魔的素養に優れた者は、一概して常人よりも勘が鋭くて聡い。大気中を漂うエーテルを無意識下で受け取り、直感力を底上げしているのだ。

今度ばかりはその素養を、ノンネは余すところなく憎悪した。目の前の光景はそれほどに、彼女の常識の埒外における出来事だった。無造作に転がる机、椅子、教科書、床、天井、壁、窓。どれをとっても滓だらけ。まともなものなど一つもない。どれもこれもがぼろぼろに壊れ、ぐずぐずに爛れている。それはそのまま、人間にも当てはまる。

理解できないがために、ありのまま見たのをただ観察していられる。自分でも薄ら寒くなるほど、ノンネの心は動揺していなかった。もしくは突然のショックで心臓がびたりと動きを止めてしまうように、動揺さえ出来ないほど心が止まってしまったのかもしれない。

「逃げよ、ノンちゃん！ 逃げよ！」

幸いなことに、ノンネの右隣にいた香苗は五体無事だった。所々火傷を負ったり、切り傷も見られるが五体は保っている。こちらはむしろ動揺のほどが限界まで達し、視野が狭窄したことで周りが見えていない。

「ノンネ、香苗！ 大丈夫！？」

隣のクラスから飛んできたのだろう。恭子が血相を変えて教室に入ると、未だ倒れているノンネの脇を抱え、半ば強引に立たせた。

同じく現れた蓮美が香苗に肩を貸す。二人とも努めて教室の様相には目を配らず、とにかくこの場から脱出する。友達に抱えられて、ノンネは初めて自身の傷の程を窺うことが出来た。とはいえ大したものではない。下半身が赤黒く変色しているが、大半は折り重なって倒れていた他の生徒のものだ。彼女の傷はといえば額を大きく抉る一箇所だけである。恐らくは飛んできた机の角が直撃したのだろう。それのおかげでノンネは今の今まで気を失っていられた。

教室の外は藪を突付いたような有様だった。生き残りは何もノンネだけではない。むしろ先ほどの攻撃が直撃したノンネのクラスと下のクラスぐらいにしか、直接的な被害はないようだ。

どの階段にも人が群がり、すし詰め状態である。幾らか教師の誘導に従う者もいるが、大半は今の爆発を目の当たりにして理性を完全に手放し、我先にと前へ進むことだけしか頭にないようだった。

むしろ爆発をモロに受けたノンネたちは、その様を冷静なまでに受け止めることが出来た。

「どうしましょう、これじゃ避難出来ません」

こちらも至極落ち着いた様子で居る蓮美の懸念通り、降りられる

場所が見当たらない。だが表面に出さない分、緊張を張り詰めているのは付き合いの浅いノンネにも窺い知ることが出来た。

「たしかホースって、ロープ代わりになったよね」

ノンネは右の足を引きずりながら、消火栓の扉をこじ開ける。既に誰に肩も借りずとも動くのに支障はなかった。

「ノンネ、動けるの？」

恭子の問いにこくりと頷き、引つつかんだホースの束を渡す。恭子は皆まで聞かず、ホースを括りつけるのに適当な場所を見繕うべく走り出した。

教室を支える柱。そこへ小さな窓からぐるりとホースを通し、幾重にも重ねて縛り上げる。最後に足で踏ん張ってその縛りの程を確かめると、恭子は大きな声でノンネに呼びかけた。

「いいよノンネ！ ホース降ろして！」

恭子に言われ、ノンネは窓からホースの束を放り投げた。長さは十分で、先の金属部分がごつんと中庭の土にぶち当たっていた。

「ノンネと香苗が先に下りて」

戻っていきなりそう言った恭子が、早く早くと手つきで急かす。ここではいちいち順番を決めている時間すら惜しい。ノンネは短く礼を言うと、重い体を引きずって窓の外へと乗り出した。

三階だけあって、高い。こうして下を見つめていると、自分はどうして今までこんな高い所で授業なんぞを受けていたのかと、不思議な心地になってくる。何ら風など吹いていないのに、誰かに揺らされているような錯覚さえ感じてしまう。

しかし今は、ここから脱出しなければならぬ。ノンネは慎重に後ろを向き、堅いホースを掻き抱くようにして、ゆっくりと窓から足を出していった。

あまり力の籠もらないと思っていた足が、自分でも驚くほどの力強さでホースに絡みつき、落ちようとするノンネの体を支えてくれ

る。ろくにスポーツをやっていたわけでもない自分にこれほどの力があつたのかと、ノンネはまたも新鮮な驚きを感じていた。これが世に言うところの、火事場の馬鹿力なのだろうか。

もう下は見れない。見れば体が竦み、降りるところではなくなってしまう。そうなれば後に続く四人の降りる時間が遅くなってしまうのではないか。まだ安全だと、誰も言えないこの状況で。

上を見れば、香苗も降り始めていた。このアングルでは、彼女の可愛いキヤラもの下着が丸見えである。男子ならば羨むことなのだろうかと、ノンネは頭の片隅に思い浮かべていた。そのくらのことを考えられる程度には、彼女も心に余裕が持てるようになっていた。

やがて地に足が着くと、ノンネは思わずその場にすんと腰を下ろしてしまった。四肢は分かりやすいほど震えており、先ほどまでの力強さが嘘のようである。

安心して気が抜けてしまったのだろう。校舎の壁に手を付いて立ち上がる作業に必死でいると、後ろで「キャッ！」と可愛い悲鳴が聞こえた。

どうやら香苗もノンネと同じく、地に足をつけたところで腰を抜かし、尻餅をついてしまったようだ。

遅れて到着した恭子と蓮美とともに、四人は中庭から裏門に向かった。とりあえず今は学校から少しでも離れる。誰から言うでもなくお互い手に手を取って、並び立って走っていた。

もうすぐ、もうすぐ校舎を出られる。そんな確信が、ノンネの直感を捻じ伏せる。良からぬ妄想さえ許すまじと、隔絶した態度で切り捨てる。

実際、脳が下したその判断は秀逸と言えただろう。でなければノンネは、頭上より聞こえてくるしゅうつと鋭く風を切る不穏な音と、真っ向から対峙する羽目になっていたからだ。そんな残酷な現実よりも、逃避の甘い妄想のほうが幾倍もの救いがあった。

二度目に衝撃を被ったとき、ノンネは気絶できなかつた。後ろからどんと強く押され、そのまま自分の体が、自分の制御下から遠ざかる感覚。有体に言えば無重力状態。突き上げられる衝撃で放物線を描いている最中、ノンネはその感覚をまざまざと味わうことになった。

そのまま柔らかい花壇に頭から突っ込んで、声など上げられるはずがなかつた。まだ自分の身に起きたことさえくすくすっぽ把握できていないのである。これがコンクリートの上であつたら首の骨が折れて即死だつただろうが、今日のノンネは妙なところから強運を發揮するらしい。

そして、妙なところまで追い詰められなければ、気がつくことさえ出来ないらしい。

もはや自分の背後がどうなっているのか、ノンネには分かつていたはずだつた。つい十数分前に教室での惨状を味わつたのである。よほどの鶏頭でなければ憶えている。憶えてしまつていて、忘れられるわけなどない。だからといってノンネは、振り向く自分を止められなかつた。それこそが自分の責務であるように思えたのだ。

甚だ大げさで仰々しい決意でもつて、ノンネは網膜に一生刻みつけて離れないであろう映像を、直視することとなつた。

ただ、爆発の跡。よくテレビで見ると同じだ。中東の戦争を映すとなれば大体こうというのが映像を掠める。人並みにテレビを視聴するノンネにとって、それは意外でも何でもない光景だつた。ただ、現象としては唯一無二で、残虐非道を誇張して余りある。

爆裂した土くれの中に転がるのは、たくさんの肉。ぱつと見て数えただけでも勘定が合わない。ここにいたのはノンネと香苗と恭子と蓮美だけだ。だからノンネを引いて三つあれば事足りる。なのにまだ、十も二十も余つてしまつていた。

そんなにたくさんあつたら、困つてしまう。誰も喜ばない。

誰も、そんなお肉は欲しくない。

「ああ、あああ……あああああああああ！！！」

クラスメイトの死体で凍りついた心は、親友の死体を見て解凍された。そして瑞々しいまでの感情を振り絞り、口角からあらん限り吐き出させた。

かろうじて形を留めている香苗に、ノンネはにじり寄る。

「香苗、香苗！」

うつ伏せの香苗を揺り起こして、ノンネはまたも叫び上げることとなった。

顔の左半分が焼け爛れ、欠損している。可愛らしい香苗のもの、いや人間のものなのかと疑ってしまうほどに、それは赤黒くて汚らしい。

こみ上げてくる吐き気に抗えず、とうとうノンネはその場に胃の内容物を吐瀉してしまった。なるべく香苗にかけたくないという心遣いから口を手で塞いでみるが、それはまるで無駄な抵抗だった。抑えても溢れる黄色い泥が頬の端からも鼻の穴からも漏れて、だからと香苗の体に降りかかる。

立て続けの取って付けたような絶望が、靦面にノンネを打ちのめした。むしろ絶望にとっては、行く先々で立ち会う奇妙な奴だと、ノンネは思われているのかもしれない。

胃酸で喉が焼けたからか、もう泣き声さえ出はししない。涙も吐き気と共に収まっていった。もっと泣いて、もっと悼んで、もっと悲しみたいのに、体がそうしてくれない。

とりあえず、ノンネは立ち上がった。そうして虚ろな足取りで、その場を後にしようとする。

だって、もう何も出来ないから。ここにいたって何も出来ない。香苗はもう起き上がらない。蓮美はもう口を利かない。恭子はもう走り回らない。ノンネの友人の誰もが、もうこの世には居ないのだ。だから逃げる。離れる。遠ざかる。その何が悪いのか。あの場

でひたすら悲しみにくれていると、誰かが助けてくれるのだろうか。それとも、そうしないと誰かが許してくれないのだろうか。誰かがノンネの行いを裁いてくれるのだろうか。

助かりたいという欲求で友情を押し殺しながら、ノンネは歪なまでに顔を歪めて校庭を目指す。いつそあのまま親友達と一緒に砕けていれば、こんなに苛まれなかった。そんな、つい沸き上がる思いすら叱りつけ、押し留める。体中の痛みより、葛藤によって今正に食い破られている心が、ノンネの顔を歪ませているのだ。

立ち止まりもせず、急ぎも出来ず、ノンネはずるずると足を引きずり、開けた校庭を目指していた。

リナーシタ：？

入ったそば屋は、酷く寂れていた。お昼時だというのに、自分以外の客がない。元より人気の希薄な町だ。むしろ客がいるということのほうが珍しいかもしれない。

「……いらっしやい」

亭主はニユースの眺めながら、漫ろな様子で形だけの挨拶をする。それを聞き流して、鍵次はテーブル席に腰掛けた。

とりあえず無難にざるそばを頼み、一心地つく。てつきり黒つばい割りそばが出るものと期待していた鍵次だったが、いざ並べられたのは真つ白なもりそばだった。

いちいち指摘する胆力もなく、むしろ許してやるくらいの態度で不満を飲み込み、鍵次はそばに箸をつけた。

コシも何もあつたものではない、茹で過ぎのそば。薄すぎるつゆ。薬味さえくれない。

八ヶ岳の麓は清らかな雪解け水を使ったそばが有名だと言うので入ってみたが、どうやら名産と言えども十把一絡げに見るべきではないらしい。しかし実のところ、鍵次は心地が良かった。注文の取り違えも劣悪なサービスも、今の自分には相応しい。虐められ、理不尽を押し付けられている間だけ、彼は自分の境遇を忘却の彼方に追いやることが出来る。

とはいえそれも、瞬時に戻ってこれるほどの距離でしかない。

店内で点けられていたテレビ番組が俄かに慌しくなった。どうやら緊急速報へと切り替わったようだ。つい鍵次も興味を惹かれ、テレビ画面の方を見遣った。

それによれば、何と首都圏にて魔術テロが発生し、メガロスが破壊行為を行っているのだという。

今どきここまで直截的な手段での魔術テロも珍しい。だが非常に

有効である。自衛隊やレメゲトンが出勤する時間までに首都機能を破壊することなど、熟練の魔術師とメガロスがあれば不可能なことではない。

東京を離れていたのが功を奏したたと、ニユースを見ていた鍵次にはその程度の感慨しか起こらなかった。しかしまたそばを食べようとしたり、思わず鍵次は割り箸を取り落とししまった。つゆ入れを持っていたら、今ごろ盛大にこぼしていたことだろう。それほどに鍵次の動揺は顕著だった。

ニユースの画面に映っている学校に、鍵次は見覚えがあった。それは記憶違いでなければ、鍵次の娘 ノンネの通う学校だった。

思わず立ち上がり、食い入るように見つめる。店の主人が訝しむのも気にならない。

(何で、何でそんなところに!?)

言葉にならないまま、ニユース画面を観察する。どうやら既にメガロスによる破壊活動が始まっているらしく、周辺はほぼ廃墟と化している。学校の校舎もまた被害を受け、二階の辺りが大きく抉れている。

ノンネは今では高校一年か二年生となっているはずだ。順当に考えれば一階か二階の教室にいるはずだ。だとすればノンネは、あの大きな抉れに巻き込まれたかもしれない。

さすがに具体的な教室までは分からないので、今の鍵次には確かめようがない。このまま画面を眺めていても、徒に不安を掻き立てられるだけのことである。

メガロスは節足を持ち上げ、学校の方向へ一歩、大きく踏み出した。ずしりと重い一踏みの響きに合わせて、鍵次の体もびくりと跳ね上がる。

(行くな、行くな、そっちに行くな!)

今にもテレビに食って掛かりそうな勢いで、鍵次は歯を向いて見つめている。そんな鍵次を嘲笑うようにメガロスは学校へと歩を進

める。まるで自分のことを見透かされているかのようだ。

偶然か。それとも鍵次の素性を調べたのか。だとすればノンネを人質に取るつもりか。

「ノンネ、ノンネ！」

もう、辛抱できない。自分を抑えられない。素性がばれたのだの、もう世捨て人になるのだといった覚悟は、鍵次の頭の中から綺麗さっぱり消え去っていた。今は自分の血を分けた娘の無事を確かめたい思いと、それを脅かそうとしているメガロスへの憎しみしか沸いてこない。

そうした詭弁性もまた、心の力にて戦う魔術師、それもメガロス乗りには必須の技術であり、青春期をメガロスによる戦闘行為に捧げた鍵次にとっては、呼吸するが如くに自然な能力として身につけていた。

「ごちそうさん！」

千円札を荒々しくテーブルに叩きつけ、食べかけのそばをほっぽって、鍵次は店を飛び出した。

今さら自分が行って、どうしようというのか。そんなことは、鍵次の眼中にない。今は迷う時でもなく、二の足を踏む必要もない。とにかく行くのだ。向かおうという気概こそが大事なのだ。

とはいえ、まさか徒歩で向かおうなどとは鍵次も考えていない。今この場よりすぐにでも当該地へ向かう方法に、彼はちゃんと心当たりがある。

そば屋から走り出していた鍵次は、近くに丁度開けた畑を見つけ、その真ん中に踏み込んだ。他人の畑だろうと、今は気にならない。せっかく耕した柔らかかな土を踏み荒らし、邪魔な作物を蹴散らして適当な場所に陣取る。

右手を掲げ、集中を高めたのは一瞬。右の掌を空に向かって翻し、力の限り伸ばした。

「我、鍵にして拳ならず！ 我、拳にして剣ならず！ 我、剣にし

て鍵ならず！」

畑の真ん中で突然叫びあげる鍵次を、訝しげに通行人が見遣る。だがそんなものは、一切気にならない。

「頭れよ、ゲエエエエティアアア！」

口訣が紡がれると同時に、光が鍵次の足元から溢れ出した。それは線に見えるほど束ねられ、蛇のようにうねりながら入り組んで広がっていく。

鍵次を中心に拡大する魔方陣が、生き物のように脈動する。その文様はゲーティアの転送魔術であった。

鍵次が現役だったころ、ゲーティアの操縦技術が円熟してきた彼は、新たな技術を開発した。

それがメガロスの転送魔術である。元はゲーティアに備わっていた小鍵機関の精霊召喚機構を応用したものである。精霊の代わりに、メガロスを任意の場所に召喚するのだ。

通常のメガロスであるなら、魔術師の魔術によってその場で構成するため、転送魔術を使用するメリットは殆どない。しかしゲーティアは通常のメガロスと違い、その場で魔術によって構成するわけではない。魔術によって造られているものの、その魔術の構成を解くというようないことが出来ない。

そのためにパウロスのような輸送メカが必要になったのだが、巨大なゲーティアを運ぶための輸送コストは馬鹿にならない。さらには迅速さでも、魔術師によるメガロス召喚には及ばない。

転送魔術は、輸送コストと迅速さの課題を一挙に解決した。現場には鍵次一人を向かわせれば、あとはそこから鍵次がゲーティアを呼び出せば準備が整う。輸送メカのコストも浮き、一人一人を運ぶだけなので早く安く済む。

鍵次の背後から、ぐわりと何かが起き上がった。白く磨き上げられた鋼の塊が競り上がってくる。

それはゲーティアの頭部だった。まるで水面から浮かんでくるよ

うに、畑の上の魔方陣から巨大なメガロスが現れる。

やがて質量化したゲートエアが、畑に降り立った。まばらな通行人は皆一様に啞然とその偉容を見上げていた。

胸部装甲の上でポーズを取っていた鍵次は、早速コクピットへと滑り込む。

実のところ、ここまで上手くいくとは鍵次も思っていなかった。

ゲートエアを降ろされてからこの転送魔法を行なったのは、今回が初めてだった。それに右手の小鍵機関による魔術的サポートも存在しない中、既にゲートエアに乗らなくなって久しく、その実力も著しく低下しているものとはかり思っていた鍵次は、まさかこれほど見事に転送魔法が発現するとは思っていなかったのだ。

ぶつつけ本番の駄目元だったが、いちいち成功を喜んでいる暇は無い。今この瞬間にも、あのメガロスはノンネの通う学校へと歩を進めているはずなのだ。

操縦端末に手を添え、鍵次はまたも集中を高めていく。今度は先程の逆を行えばいいのだ。呼ぶのではない。自分が行くのだ。

学校の場所は、既に頭の中で描き終えている。再びゲートエアに乗り始めた頃、もしかすればメディナと復縁できるのでhないかと不埒な考えを抱いていた鍵次は、今度こそ娘のことを調べていた。なので勿論、彼女の通う学校のことも了解していた、そして、娘会いたさに何度か周囲を巡回したものだ。

約定を取り付けて会うのは、何とはなしに気が咎めるし、気後れしてしまう。偶然を装い、気さくに声をかければいっそ易く話せるのではないかと淡い期待を抱いて学校の周辺をうろついていたものだが、ついぞノンネに会うことは出来なかった。

何のことはない。いざ下校時間となる段になって、鍵次はそそくさと学校周辺から引き上げてしまったのだ。不審者と思われる危険を避けたのであり、そんな情けない姿を娘に見せないためでもあり

娘と会う気概を、やはり持てなかつたためだった。

それが、こんな形で叶うなんて

どうせ転送するのなら、相手の虚を突き、痛打を与えられる位置取りであることが望ましいだろう。狙うのは直上、コクピットが潰せなくても動きさえ止めれば、それだけ大きく時間が稼げる。そうすれば自衛隊やレメゲトンの魔術師も、さすがに発進準備が整うだろう。それまで、自分が時間を稼ぐ。

これ以上、あの学校を壊させてたまるものか。

「ガアアアアアアアアア！」

直立不動のゲートイアが唸りを上げる。高圧をかけられて循環器系を流れるエーテルの脈動だ。体中のそこかしこに彫られた溝に、エーテルが充填される。程なくして発動するのは、メガロスという魔術的大質量を瞬時に当該地へと向かわせるための転送魔術。

現れたときと同じく、音も前触れもなくゲートイアの姿は掻き消えた。後に残されたのは、僅かなエーテルの残滓のみである。鍵次が畑に入った辺りから事の次第を見ていた通行人は、終始呆気に取られたままだった。

今自分がどこにいるのか、鍵次には知れない。彼の空間認識は、彼自身が行使した魔術によって暴虐なまでに奪い去られ、天も地も右も左もなく、ただ”移動”という現象の只中にゲートイアごと身を放り投げたのだ。異なる二つの地点を定め、互いの三次元的空間における位置関係を魔術的に解体し、時間も空間も判然としないその場所へ対象を突入させ、任意のタイミングで再構成する。移動する対象自体ではなく、移動するという行為を魔術によって恣意的に作り変えてしまうのだ。

一歩間違えば、魔術によって恣意的に崩壊させた場所をさ迷うことになる。しかしそこは時間と空間が解体されているため、そのことを嘆き苦しむ時間的・空間的余裕は存在しない。

つまりは彼我の距離など実在せず、そこに掛かる時間も幻想だ。



「受け継ぐ、だあ？ 寝言こくなよ、白けちまうぜ」  
メガロスは一代限りのもあるが、弟子がいる場合、受け継がれることもある。

「奪ったんだよ。俺が、イタロからな！」

社会通念など屑ほどにも思っていない魔術師であろうと、親友や師弟の契りというのは存在する。それも常識的なものでは決してないが、彼らは彼らなりにそれを守り、粛々と続けてきた文化なのだ。それさえも打ち払ってみせる魔術師など、鍵次は生まれてこの方出合ったことがなかった。

あるいは鍵次の若かった時代とは、魔術師の中での文化も変容しているのかもしれない。

「どうせなら自分で作ればいいだろ」

「もことからこれ目当てで弟子になったのさ。寝首搔かれるほうが馬鹿なんだよ」

けひつ、と如何にも下卑た声を上げて、カルツォは笑った、まるで自身の武勇伝を開陳するような 事実彼にとって、それは人生に刻み込まれた武勇なのだろう。

「イタロ……」

鍵次とイタロは知らぬ仲ではない。かつての第一次メガロス大戦にて、幾度も戦線を共にしたことがある。歳がちょうど同じくらいなので、彼とは気が合ったのをよく憶えている。

短く目を瞑り、イタロへの弔いの意を済ませる。時の移ろいの中で価値観が変わろうと、友を殺され、娘を危険に晒され、自国の領土を破壊されても、腹を立てるなという法はないはずだ。

だから目の前の男に鍵次が何を向けようとも、誰も咎めることは出来ない。

「お前の理屈なんて、知ったことじゃない。俺の友人を、俺の娘を、お前は害した」

「だからどうした？ 殺すか？」

「調子こくなよ、ガキが。メガロス乗ってんだ、殺すに決まってるだろ」

「くくっ、げひひひ」

わざわざオーブンスピーカーで下卑た笑いが響く。イタロの死を思えば、なおのこと耳障りで腹に据えかねる音声だ。

「知ってるか？　そういう言葉を吐いた口から出る命乞いってのは、格別なんだぜ」

笑い声も卑しいならば、出てくる言葉もそれに準じる。そんな先輩がイタリアを代表する魔術師のメガロスに乗っているかと思えば思うほど、鍵次の内圧は限り知らず上昇する。

「そうかよ。だったら、聞かせてもらおうじゃねえか！」

自身の言葉が自身の心を喚起する。心がさらに言葉として弾け出る。それを受け取るゲートエアが、魔力をエーテルに変換して体に満たす。増幅作用によって魔力の生成が促進される。

ゲートエアに再び乗れるようになってから感じたことが無いほど魔力を充溢させて、鍵次はティラトールに向かって一直線に飛び出した。

リナーシタ：？

メガロスには珍しく、ティラトールは人型ではない。遠距離からの精密な魔術砲撃・爆撃を可能とするその機体は、重厚な四足の上に砲台が載るといふシンプルなデザインとなっている。

本来はこのような接近戦を行う機体ではない。それはカルツオも承知しているようで、ティラトールの兵装の多くが近接戦闘用の兵器類に換装してある。

広範囲制圧を目的とした対メガロスショットガンに、FETグレネード。地对空エーテルマシンガンにエーテル推進ミサル。

この機体を相手に対して、遠距離攻撃を挑めば趨勢は明らかだ。しかもゲーティアは精霊を司る小鍵機関と右腕を喪失している。ここは接近し、砲撃の射程の内側へ潜り込むしかない。

余計な小細工で軌道とエーテルを無駄遣いしている場合ではない。ただ正面から最短距離で懐を取るのみ。

驚進しながら生み出される衝撃波で家屋を瓦礫に変えながら、ゲーティアは距離を詰める。

「馬鹿が！ それじゃただの的だぜ！」

ティラトールの前脚部に展開していたラックが、一斉に扉を開いた。ざっと見ただけでも、地对空エーテルマシンガン二十門。エーテル推進ミサル三十門。まずはこの弾雨を避けねばならない。

まず到達するのはエーテルマシンガン。今日日軍用エラヒストスにとつては標準的な装備だが、無論こうした装備を考案し使い始めたのは、メガロスを駆る魔術師。それもイタロのような魔術砲撃・爆撃を得意とする魔術師である。

エーテル粒子を細切れにして銃身から撃ち出す。いちいちエーテルで銃弾を製造するよりも遥かに安易で迅速である。今回の制圧射撃には欠かせない機構だろう。

エーテルマシンガンの砲門は一斉にゲーティアを追い、加速したエーテル粒子を街中にばら撒く。しかし照準が僅か遅いらしく、ゲーティアの背面を舐めるように過ぎていく。そしてそれは、エーテル推進ミサイルにも言えることだった。巨体ながらも高速で運動するゲーティアと紙一重の場所に落ちるばかりで、一向に当たる気配を見せない。

勿論、鍵次の超絶技巧による回避も功を奏している。メガロスという巨大構築物を数ミリ単位で動かすことを可能とするその才能が、エーテルマシンガンの照準やエーテル推進ミサイルのシーカーを絶妙に欺瞞している。だがそれでも、本来のティラトールならば確実に当ててくる。そうして鍵次の確信は、かつてティラトールのパイロットであったイタロと共に戦い、その手管を知り尽くしているからこそ真に迫っている。

しかしそれが当たらない。まるで機械のように画一的な拳動と発射。直感的操作を搭載しているメガロスにおいて、火器制御でさえこのようなことにはならない。

となれば、答えは一つ

(こいつ、自動照準にしゃがったな)

どうやらカルツォは、エラヒストスに採用されているようなコンピュータ制御を、メガロスにも組み込んだのだろう。AIほど高性能でなければ、ある程度までの親和性は損なわない。確かにメガロスの操縦には多大な集中力を有する。それを補う形で火器制御等をコンピュータに一任するのは決して悪いことではない。

むしろ鍵次にとっては、腹立たしい上に喜ばしいことだ。

イタロは、火器制御の全てを自身で行なっていた。当時はまだメガロスに乗せられるような制御機構が発達していなかったが、それとは関係なく、彼は魔術によって砲撃や爆撃を行なうことを何よりの身上としていたのだ。

魔とは人の心。魔術とは即ち心の使い様。その人間の僅かな機微

さえ現れる。それで火器制御を行なえば、どうなるか。

勘、経験、予測、閃き。そうして表出することのないほど淡いものさえ、弾道に現れるようになる。それはもはや第六感などという域を超え、未来予知の魔術に匹敵する。

淡く微妙で不確か、だからこそ精密。だからこそ確実。当たらざるに当て、届かざるに届かせる。まさに魔弾と称すべき遠距離射撃。使い魔を用いた魔術的な自動追尾も採用していたが、イタロがテイラトールを長距離砲撃専門のメガロスとして確立させたのは、未来予知を前提として行なわれる的中確実の大規模魔術砲撃である。それを弾核によっては二万キロメートル

地球の円周の半分ほどに相当する射程距離は、地球上の如何なる場所をも射程内に収めていることを意味している。

法外な射程と精妙を極めた砲撃精度。前者はともかく、後者は機械的な手段では決して獲得し得ない。

機械による照準の限界。人間の絶妙な勘を度外視した画一的な射撃など、鍵次の超絶技巧には掠りもしない。

イーテルミサイルの追跡やマシンガンの照準さえ欺瞞する絶妙の操縦技術。メガロスほど巨大な構築物をミリ単位で動かし、それを察知する経験と感覚が、ここへきて十二分に発揮される。

「戻った、戻ったぞおおお!!」

転送魔術を成功させたことから分かるように、ここへきて鍵次は往年の操縦技術をようやく取り戻し始めていた。このまま懐を取れるかもしれないと期待する中、テイラトールの中心部が旋回を始める。

そこに収まっているのは、一際大きい砲身。本来ならば長距離イーテル滑空砲を備えていた場所に、今はイーテルショットガンが付けられている。

あんなもの、イタロが付けはしない。彼はテイラトールの機能を十二分に発揮させるための長距離装備で固める。

それをカルツオは変えた。改悪した。改悪され、鍵次にとっては憤ろしくも怨めしい代物が、エーテルを爆裂させて銃身から巨大な弾核を高速で押し出す。

エーテル合金で構成された弾核に純粋なエーテル体の弾子を封入して発射。然る後に爆散させる。例えエーテル壁などを展開しても、丈夫なエーテル合金の弾核で守り、至近距離で爆散させることも出来る。榴弾の構造に近いが、その様相からと目的からエーテルショットガンと称される。

既に瓦礫と化していた一帯が、ショットガンの流れ弾を受けて完全に消失する。その着弾分布、実に五十センチ四方。メガロスのサイズを考えれば異常極まる。先のエーテル推進ミサイルによる爆撃を上回る徹底振りだ。

どうやら少なくとも、ゲーティアを破壊する気はあるようだ。しかし着弾分布を広げないことが仇となった。既にゲーティアは飛び上がり、ショットガンの散布界から離脱している。

ゲーティアは引き絞った左拳を、ティラトールの頭頂部へ突き降ろした。エーテルを漲らせた鋼の拳が、合金ごと拉ぐ。

反発するエーテルが暴発し、激しく爆裂する。衝撃の余り、ゲーティアは飛びついていたティラトールの頭部から弾かれてしまった。しかし当のティラトールは未だ噴煙を吐いている有様だ。

戦果を上げたと見えて、しかし鍵次の頭は混乱を極めていた。鍵次としてはあれほどの爆発を起こすような性質のエーテルは込めていなかった。その上、あの程度の攻撃で易々と装甲が抜けてしまうティラトールではない。

「……!？」

今さらながら左手に痛みを覚えて確認すると、ゲーティアの左拳が見事に欠損していた。手首から先が丸々消し飛んでいる。

「くはは、だはははは！ 馬鹿が、馬つ鹿野郎が！」

鍵次がまじまじと左腕を見遣る様が可笑しいのか、ティラトール

が体を揺すって笑っている。

「ロートルがまんまと掛かりやがったぜ。マジであんなふぬけた弾あ撃つわけねーだろ。てめーを釣る餌だったの、気づけよなジジイ！」

砲門が一気に集中し、照準がゲートイアを射竦める。その殺気が、同様の只中にある鍵次を覚醒させてくれる。

ゲートイアは片膝をついた状態のまま噴射口を右に集中し、無理やり射線からずれる。下半身で瓦礫を舐めながら、手首から先の失せた左腕で地面を叩いて無理やり前転し、低いアパートメントを背中であらに均しながらようやく立ち上がる。

さらにアームラックから迫り出した回転砲座式のエーテルランチャーが追跡し、榴弾を吐く。可燃性の高いエーテル混合のナパーム弾が、ゲートイアが先ほどまで居た場所を焼き尽くす。

まだ二体が接触して五分と経っていない。しかし既に辺りは地獄絵図と呼んで相違ないものとなっていた。

ただ移動するたびに、何十何百という単位で人が死に、何千万と掛かったであろう建築物が一瞬で瓦礫と化す。魔術兵装が発揮されれば、地形すら容易に変容するほどである。

これが市街地でのメガロス戦闘だ。年に数回の頻度でこのようなテロ行為が起こっていけば、二十年前の戦争の破損すら日本国政府が修復し終えないのは道理と言えた。

「ぐあっ！」

コクピットへの激しい振動と、腰の辺りが焼き鏝に当てられた感覚が、同時に鍵次を襲う。とうとうエーテル推進ミサイルがゲートイアの体を捉え始めた。そうなれば後は立て続けであった。一発でも当てれば動きが鈍る。あとは地対空エーテルマシンガンの弾幕に晒され、榴弾の中身がぶちまけられて総身を炎に彩られるってしまった。

さらに繰り出された攻撃は、完全に鍵次の意中の外であった。

「おらあ、なに固まってるんだ？ さっきの威勢はもう無ねのかよ！」

そちらこそ威勢良く叫んだカルツォは、あろうことかティラトールを突進させてきた。

「んな！？」

またも動揺を被り、鍵次の反応が数瞬遅れる。そのときにはもう、ティラトールの姿が直近に立ちはだかっていた。さらに勢いをつけた前足が振り上がり、ゲーティアを掬い上げる。

その瞬間、ゲーティアの腹部が爆発した。蹴りの勢いに爆発の威力も加わり、ゲーティアの巨体が高々と宙を舞う。

（しまった！？）

今さら気づいても、とき既に遅い。ゲーティアの軌道はノンネの学校へと向かっていた。

何とか違う場所へ落下しようとするスターを吹かすが、今しがた食らわされた蹴りで一時的にエーテル循環器系が麻痺を起こし、スラスターの噴射が機能しない。せめて中庭の方へ僅かに移動させるくらいしか出来なかった。

それでも十分ではなく、上半身がモロに校舎を直撃した。背面に衝撃が走り、鍵次もまた痛みで体を麻痺させる。頂垂れるゲーティアの首が、だらりと後ろに傾いだ。

そして、鍵次の全てが停止した。

目に入ってきたのは、月光を編み上げたような銀色だった。

母のそれを忠実に受け継いだ銀髪。しかし瞳の色は父と同じく鳶色掛かっている。

幾度と無く夢で見て、既に懐かしい。初めて見るはずなのに、もはや見慣れてしまっている。

その姿は、見間違えようはない。確かに鍵次の娘　ノンネだ。

「さっきのは俺のオリジナルの魔術。名づけて、エーテル・リアクティブアーマーだ！」

ああだの、ううだのと呻きながら、鍵次は堪らずゲーティアのコクピットから飛び出した。ハッチを開き様にアンカーに引っ捕まり、瓦礫の上に降り立つ。

「ノンネ、ノンネエエエエー！」

足を引き摺りながら進んでいた娘に、鍵次は泣きじゃくりながら飛びついた。

「よかった、よかった。本当に、よかった……」

見たところ無傷ではない。だが生きている。五体満足でノンネはここにいる。それだけで鍵次の心は分水嶺を飛び越して溢れかえる。

「ノンネ、分かるか？ お前の父親だ！ 鍵次だ！ お前のパパだよ。助けに来たんだ、分かるか？」

まだ抱きすくめられたことにさえ気がついていなかったようで、ノンネは虚ろな様子で鍵次を見上げる。

「パ……パ？」

「そうだ、パパだよ！ 助けに来たよ！」

危ういほど薄弱なノンネの返事を打ち消すように、鍵次は己を奮い立たせるような声を重ねる。

「こいつを常に維持すんのはキツいんだぜえ。装甲の下に炸薬となるエーテルを精製しておいて、敵の攻撃を受けたときにその一帯を自分で吹き飛ばす。なかなか神経を使う作業なんだ。おかげで火器制御は殆どコンピューター任せになっちまったよ」

鍵次は虚空を見据え続けるノンネを抱き締める。そのまま抱え上げてコクピットから垂らされたアンカーを引き上げる。その間、彼はカルツォが言うところのエーテル・リアクティブアーマーなるものの講釈を請けることになった。

「反応装甲のように複雑な構造を常に維持し続けるのは、魔術師のあんたなら結構大変だって分かるだろ？ ああ、そっぴやあんたは魔術師じゃなかったんだっけな。じゃあ分かんねえか。だははっ！」

かっと思を見開いたままぐったりと弛緩しているノンネの体を予備シートに固定し、鍵次は再びゲーティアのコクピットに腰を据え

る。

比較的冷静にノンネの救助を行っていた鍵次だったが、もう限界が近かった。色々と心から発散しなければ内臓の辺りが焼け付いてしまうほど、得体の知れない何かが滾っている。

「魔術だって進化してんだよ。てめーみたいな時代遅れが今さら出てきたって、何にも出来やしねえのさ」

カルツォはまだくどくどと、自分の魔術をひけらかしていたらしい。しかもその間に攻撃しないとは見上げた根性だと、鍵次は素直に感謝していた。

この蟠りを正しい対象にぶつける機会を与えてもらい、自分は本当に幸せなのだと実感していた。

鍵次はゆったりとゲーティアを起き上がらせ、ティラトーレの前に立たせる。

「おいおい、まだやる気なのかよ。諦めわりーなあ、そういうの、今時流行らないぜ」

その台詞はむしろ、鍵次の憐憫を買った。どうやらこのカルツォという若者、この程度の損傷で勝てるような、そして諦めるような魔術師しか相手取ってこなかったらしい。だとすればそれは、二十年前の戦争を生き抜いた鍵次にとっては憐れみに相当する。

ここまで戦ってきたところを見れば、その才の非凡であることは惜しみなく伝わってくる。性情に問題もあるうが、むしろそれは彼の才能を助長することとなっているであろうことも容易に想像がついた。

故に、惜しい。あの程度で制圧できるような相手しかない世に生まれてしまった彼が惜しい。

。そうでなければ、ゲーティアを仕留め損なうことはなかったのに。

この分かりやすい状況に感謝したい。感謝した上で、あの下種野

郎をぶち殺したい。

「死んじまいな、ゲーティア！」

狙い済ました地对空エーテルマシンガンの弾雨が、ゲーティアに集中する。流れ弾がもうもうと瓦礫を土を掘り返し、噴煙として沸き起こしている。ほどなくそれはゲーティアの巨体さえも包み隠してしまった。

そこでようやくカルツォは射撃を中断した。自分の放ったエーテルで何がどう壊れたのか、じっくりと眺めたい衝動に駆られたのだ。果たして煙を割って、ゲーティアが現れる。先ほどと何ら立ち位置を変えることなく、校舎の前に立ちはだかっている。

どちらかといえばその校舎のほうに粗方消え去っているというのに、弾雨の只中に立っていたゲーティアには、傷一つ無い。

「う？ え？ な、はあ？」

分かりやすいほど狼狽するカルツォを置いて、鍵次は一步、ゆっくりと踏み出した。

「だったら、こいつで吹き飛ばせ！」

エーテルショットガンの巨大な砲身がゲーティアを睨みつけ、巨大な弾核を発射する。

ゲーティアの目前でばら撒かれた弾子が、このとき驚くべき拳動を取った。装甲に触れる以前に、まるで見えない境を忠実になぞるかのように、悉く弾子が消え去ってしまった。

「な、何い！？」

その一部始終を見ていたカルツォが、信じられないといった様相でみっともないほどの大声を張り上げる。

エーテル弾が到達する前に蒸発してしまっている。どうやら周囲に濃密なエーテルが漏れているようだ。それはエーテル力場のように確固たる方向性を持たせられたものではない。明らかに意図せず、制御せずに垂れ流されているだけである。

それでいて、エーテル弾を掻き消すほどの質量を持っているらし

い。

さらには目に見えるほどの速度で、失われたはずの左手が生える。どろりとしたエーテルがすぐにアクチュエーターや循環器系を構成し、黒い構造部を白いエーテル合金で覆う。

突如として行なわれる大規模なエーテルの運用。勿論エーテル圧もぐんぐんと上昇していく。確認している今この瞬間にも数値が物凄い速度で修正され、高まっていく。

これは明らかに異常である。魔術に精通しているカルツォでさえ、このような現象は見たことがない。

あんな状態、長くは保たない。だがそれはこちらも同じこと。あんなものをまともに向けられたら、長くは保たない。

とはいえティラトールには、対接近戦用攻性装甲『エーテル・リアクティブアーマー』が備わっている。またも接近して打撃しようものなら、その箇所ごと吹き飛ばしてくれる。

仮のその膨大なエーテルでもって遠距離からエーテルバスターなどを放ってくるのなら、それこそティラトールの独壇場だ。元よりこの機体は遠方からの直接火力支援を主な任務としている。遠距離戦闘でティラトールに勝てるメガロスなど存在しない。

「うるあああああ！」

たったの一飛びでティラトールに肉薄するゲートティアに、カルツォはまたもエーテルショットガンをぶちかます。ただし弾核は爆散させず、エーテル合金に封入したままぶつける。

今のゲートティアを包んでいる濃密なエーテル力場を突破するには、魔術的に質量の高い物質を高速で衝突させるしかない。ゲートティアの力場に入った瞬間、エーテル合金がどろりと蕩ける。しかしそれより、弾核をぶつけるほうが早い。

弾核がゲートティアに到達した瞬間、とうとうエーテル合金が耐久を失い、中の弾子を至近距離でばら撒いた。

リナーシタ：？

至近距離で炸裂する装弾。<sup>ショットシェル</sup>全九個のエーテル弾子は殆ど散布することなく、ゲーティアの装甲に到達して激烈な反応を起こす。

ラメでも混ぜたように煌めく噴煙は、蒸発したエーテル合金だ。エーテル弾子は過たずゲーティアのエーテル合金装甲に到達し、反応を起こして爆発したのだ。拡散のタイミングをいじり、エーテル合金弾核が崩れるぎりぎりのところまで待った甲斐があったというものだ。

これでゲーティアの上半身は確実に吹き飛んでいる。カルツオのそのような期待は、またも裏切られることとなった。

健在する左手が噴煙を引き裂き、中からゲーティアが覗いてくる。これで少なくとも左手と頭部は損傷が無いことが窺えた。

「くそが！！」

悪態を叫びつつも、カルツオはやはり類稀なる魔術師であった。もはや得体の知れない敵に対して無策で飛び込もうとはせず、撓めた節足で大きく後方へ跳び退る。超重量のメガロスを着地した先のコンクリートは受け止めきれず、まるで氷の上でも滑るように節足が地面を掻く。巨人の足跡は軌道上にあったビルやら家やら高架道路やら諸々を引き裂き、殆ど平坦に均してしまった。

その途上では車かガス管が分からなくなるほど爆発が連続し、まるで滑走路の誘導灯のように真昼の東京で火炎が赤々と立ち昇る。

未だ避難の途上であった人々への配慮など存在しない。ただその銃口は一点　ゲーティアだけに向けられている。

「rompere armatura《我が鎧にて粉碎せん！！》」  
唱えられた口訣は、追加装甲の召喚魔術。予め自身の記憶の奥底にパターンナイズしておいた装甲の図面を引き出し、エーテル合金として焼結させる。数秒と経たずにティラローレの周囲に現れたエーテル合金群を巨大なボルトにて打ち付ける。追加装甲の生成から装

着まで合計十秒と掛かっていない。

カルツォの魔力によって出現した分厚い装甲。明らかに二倍から三倍近く質量が増大していた。

状況に応じて召喚やエーテル装甲の生成によって形状を変化させ、機能を変化、あるいは強化させる技術は、第一次メガロス大戦にて確立された。

昔のメガロスはとにかく大火力、重武装を目指しており、巨大化の一途を辿っていた。しかしゲーティアのように装甲を召喚・変化させ、状況に応じて機能を変えるメガロスが出現すると、そのタイプのメガロスが主流となっていた。

メガロスは単に運用するだけでエーテルを大量に消費する。それが大きくなればなるほど、ランニングコストが膨れ上がっていく。その無駄なエーテルを出来るだけ抑えるため、状況によって最適な火力と武装を選択的に取り出す。浮いたエーテルをトルクに変えたり、必殺魔術を撃つためのエネルギーに回せば、より高い戦果が期待できる。

ティラトールの場合、超遠距離砲撃支援を確立させるため、機動力を度外視して装甲と武装を増やしていた。

敵が同じ遠距離型ならば、敵の砲撃に耐えながらこちらの砲撃を当てることになる。メガロスの中でも、ティラトールほど砲撃支援に傾倒した機体は存在しない。同じコンセプトのメガロスならば、まず負けるはずがないという自信があるからこそその戦略である。

そして接近戦や中距離戦でも、その戦略は変わらない。分厚いエーテル合金の塊が砕かれるまでに、敵メガロスを撃ち落とす。

これを発動させれば、今のゲーティアなど恐れるに足らない。右腕の小鍵機関も失せ、操縦者も四十近いロートルだ。これまで幾人もの魔術師とメガロスを屠ってきたカルツォとティラトールが恐れる要素は何もない。如何に不合理なほどのエーテルを運用していよ

うとも　否、だからこそカルツオの勝利への確信は揺るがない。

あのような無理は長く続かない。つまりこれだけ理不尽にエーテルを自身の中から吐き出せば、必ずその反動を被ることになる。極端な話、カルツオは何もしなくてもいい。ただゲーティアをやり過ぎ、急激なエーテルの枯渇で機能を停止するまで凌げばいいのだ。今しがた作り上げた巨大な鎧で耐えながら、自滅を待てばそれで済む。

突如、ティラトールが設置している地面が鈍い音を立てて大きく沈んだ。耐えかねたように地面は大きく断ち割れ、ところどころから下水と思われる泥水が打ち上がり、焼け石に水とばかりに火災を僅かに鎮火する。

増加した装甲分だけ重量が増し、コンクリートの下の地面すら耐えられなくなったのだ。地下のインフラさえも踏み引き、ティラトールは装甲とともに増やしたミサイルや砲門を開放する。

「さあ、コイツで終わらせるぜ」

ティラトールの偉容を見てもなお、ゲーティアのエーテルに恐れる様子は見られない。というよりは身じろぎ一つせず、ぬうつと佇んでいる。まだ蒸発したエーテル合金が噴煙を吐いているが、それと並行して装甲の修復が行なわれている。焼け爛れた白銀の上をだらりとエーテルの粘液が覆い、エーテル弾子を食らう前と寸分変わらぬ姿を顕す。

その迅速すぎる修復でさえ、膨大なエーテルを食らう。その一拳手一投足によつて、目の前のメガロスは死に近づいているのだ。

「死にやがれ！」

エーテルショットガンの砲門に弾核を形成し始めた瞬間、ようやくゲーティアが反応した。振り下ろされる砲門から逃げるように身を屈め、またも地面を舐めるほど低空から突進する。

まずは牽制のためのエーテル推進ミサイルとエーテルマシンガン各四十門が襲い掛かる。その弾幕はもはや冗談じみた質量を持って

おり、まさにこの東京を灰燼に帰するだけの実力を髣髴とさせた。

「おおおらあああ！！！」

顎で地面を舐めるほど身を低ませて、ミサイルとマシンガンの雨に後塵を拝させる。背面と腰部脚部から吹き上がるエーテルスラストの方向を目まぐるしく変え、複雑に遷移してゲータィアは着実にテイラトールへ接近する。真つ先に風を切る頭部の兜は音速に近いのか、断ち割るような衝撃波が焼け焦げた街の炎を吹き飛ばし、燃えていた残骸をさらに砕いて巻き上げていく。

さながら地上を泳ぐ鮫のように瓦礫の飛沫を上げて、テイラトールの後方へ回り込む。装甲を増加したことで動きの鈍さも増したテイラトールの旋回速度では到底追いつけない。

「ガアアアアアア！！！」

猛り狂う循環器系が咆哮を吐き散らし、エーテルのフレアを伴ってゲータィアが左腕を突き上げた。その拳が向かうのは、テイラトールの右後脚部であった。

カルツオはまるで意に介さず、鍵次の攻撃を静観していた。例え殴られたとしても、エーテル・リアクティブアーマーにて吹き飛ばされるのは先ほども証明したとおりだ。

テイラトールの右後脚にゲータィアの左振り上げが命中した瞬間、エーテルの閃光が爆裂した。そうしてからようやくテイラトールは旋回を終え、ゲータィアと正対した。

エーテル・リアクティブアーマーが問題なく発動し、ゲータィアの体が爆煙に包まれる。まず間違いなく、その左腕が吹き飛んでいくはずだ。

自身を庇うように突き出されているゲータィアの左手には、既に拳は備わっていない。きつちり手首の辺りから先が欠損している。やはりエーテルの出力が上昇しても、エーテル・リアクティブアーマーならばゲータィアの装甲を粉碎できると言う構図に変化は無いようだ。

己の攻めが通じた高揚からきたカルツォの笑みはしかし、すぐに引きつりへと変化する。彼が見ている前で爆煙を掻き分けて、ゲーティアが再び左腕を振り上げたのだ。

確かに修復は開始されているが、まだようやく粘液状のエーテルが分泌されただけである。左手を形成するにはまだ大きく足りない。だがゲーティアがそんなことに頓着する様子はなく、中身の剥き出しになった左腕を今度はティラトールの右前脚に捻じ込んだ。くぐもった爆発の音響が上がるなか、それでもゲーティアの左腕が装甲の中程まで食い込んでいる。

「あくああああ！」

ティラトールの右前脚に相当するカルツォの右腕に、鮮烈な激痛が走る。間を置かず右前脚のテンションが落ち、関節部がだらしなく伸ばされる。

右に大きく沈み込んだティラトールに、ゲーティアが踊りかかる。「なめるなっ！」

コクピットのある中枢を狙うゲーティアの胸に、旋回させた砲門を突きつける。カルツォの認識と同時に発射されるエーテルショットガンが、超至近距離にて放たれた。

まず砲身内のガス圧がゲーティアを押し返し、次いでエーテル合金の弾核自体がゲーティアの胸部装甲に命中した。弾核の軌跡に倣って、ゲーティアは大きな放物線を描いて吹き飛ばされていく。その途中で弾核は爆ぜ割れ、エーテル弾子が打ち上げ火花よろしく昼の空に瞬いた。爆発の影響でゲーティアはさらに高く舞い上がり、新たな放物線を描いている。

見事ゲーティアを打ち落としたティラトールだったが、やはり無傷ではない。まず右前脚がゲーティアによって破碎されている。そして今しがたゲーティアを吹き飛ばした巨大な砲門は、花弁のように裂き分かれてしまっていた。ゲーティアに押し付けながらの無理

な射撃だったため、高まったガス圧に砲身自体が堪えられなかったのだ。

急ぎ砲門だけでも修復するが、その間にゲーティアは態勢を整えて地面に着地し、弾かれるように飛び出した。そして左腕をエーテルの靄が包んだのも一瞬、中からずるりと五本の指が飛び出し、手首から先の修復が完了していた。撃ち抜いたはずの胸部装甲に至っては何の欠損も見られず、着地するより前に修復が完了していたらしい。

ティラトールの方は、まだ砲身の修復さえ終わっていない。右前脚に至っては全く手付かずの状態だ。身じろぎ程度の旋回すら行なえない。

「Lo spari《撃て》！」

あえて呪文を介して紡がれた命令は、搭載してある火器管制システムの解除　つまり全火器兵器をコンピューター制御ではなく、魔術的恣意の制御下に戻したのだ。その上でエーテルマシンガンにエーテルミサイルまで、全弾を惜しみなく発射する。

カルツォという稀代の魔術師による照準が、ゲーティアに向けられる。勘も含み、経験を前提とし、予測も交えて閃く。それは避けえぬ弾道。淡く不確かで微妙であるからこそ、『必中』と呼ぶべき特異点を見出す。それ自体が既に魔術の域に達した照準。

これはもはや避けられない。そう判断したのは、カルツォだけではなかった。

「だらあああ！」

鍵次の叫びが、ゲーティアのエーテルを励起して、数ミリ秒のうちに左手に膨大なエーテルを集約させる。それは照り輝きながら漏れ出て、まるで小さな太陽のようにゲーティアの掌に収まる。

左の掌中に凝らせたエーテルを、振りかざして解き放つ。以前、『イガーサ』への宣戦布告の際に行なったものとは比べ物にならないほどのエーテルバスターである。

凝縮されたエーテルバスターは熱波を伴って都市を渡り、地面に

飴状の軌跡を残して猛進する。そのうちマシンガンの粒子やエーテル推進ミサイルさえも吹き飛ばし、ティラトールの装甲を激しく打撃した。

もはや分厚いエーテル合金を纏っているティラトールの装甲は、たった一発のエーテルバスターくらいでは揺るがない。しかしちよつと修復中の砲身に命中してしまい、勿論のこと修復が滞ってしまった。

その間にゲーティアは間合いを詰め、再びティラトールに肉薄する。その姿を見咎めたカルツォが、何の策も講じぬわけにはいかなかった。

カルツォは急ぎ残りの三脚で機体を立て直し、テンションの落ちた右前脚を薙ぎ払うように振るった。ゲーティアを迎え入れるように振るわれた右前脚が、もう幾度か分からないエーテル反応による爆発でもって打ち据える。

関節が用を成さなくとも、エーテル・リアクティブアーマーは機能している。蹴りつけられたゲーティアの左肩部装甲は大きく抉れ、アクチュエーターが垣間見えるほどだ。

カルツォは今度こそ勝利を確信した。これまで幾度も覆されながらも、やはり彼の中で自分の勝利は揺るがない。その詭弁性こそ、メガロスに乗る魔術師として必須の素養である。条理を捻じ曲げ法則を踏み潰し、己の欲望を現実と摩り替える傲慢さは、たかが二度三度確信を覆されたところで変わりえない。

しかし鍵次が懸念したように、やはりカルツォのメガロス戦闘の経験は、些か希薄であった。故に、彼はまだ実感できていなかった。相手もまた現実を拒み、己の心象を現実に顕現させることを得意とする魔術師《メガロス乗り》であることを

血のように蛍光色のエーテルが漏れるなか、しかしゲーティアはその場に踏み止まっていた。

「おおおおお！！！」

そこへ張り上がる、ゲーティアの咆哮。

ぶち当てた右前脚　それも今まさにエーテル・リアクティブアーマーが発動した部分を狙って、ゲーティアが左拳を突き上げる。終わってみればぐしゃりと、いつそ紙でも破るような呆気の無さで、高く突き上げられたゲーティアの拳が、ティラトールの右前脚を串刺しにしていた。

エーテル・リアクティブアーマーが発動した箇所を、間髪いれずにもう一度叩く。先ほど右前脚が砕かれたのは、今回のようにエーテル・リアクティブアーマーが発動し、通常の装甲と変わらなくなったところを狙われたためだった。

エーテル・リアクティブアーマーを排したとはいえ、ティラトールの装甲が重厚であることに変わりはないのだが、そんな無理を押し通したのは、今まさに膨大なエーテルを充満させているゲーティアならではの芸当だ。自身の拳足が吹き飛ばうと一切構わない、膨大なエーテル量を言わせた力押しである。

勿論、正気の沙汰とは言えない。幾らエーテルによって修復できるとはいえ、メガロスの感覚は常に搭乗者にフィードバックされているのだ。つまり自ら進んで左手を差し出し、それを何度でも吹き飛ばされてもいいという覚悟を固めて、初めて行なうことを許される。もはや作戦とも言つことの出来ない無謀だ。

その様に、ようやくカルツォは戦慄を覚える。かつて師匠であるイタロを相手取ったときでさえ浮かんだかもしれないものが、彼の背を這い回っている。

「ギイイイイイイ！」

ゲーティアの体内を駆け巡るエーテルが高音域の唸りを上げて、さらなるトルクを捻出する。今度は何だと身構えたカルツォを襲ったのは、突然の浮遊感だった。

ゲーティアは左腕一本で、ティラトールの巨体を振り上げていた。備え付けてあったスパイクが未練たらしく地面を伴うが、そんなも

のにゲーティアも鍵次も一切構うことなく、大きく弧を描いて浮き上がったティラトールを、そのまま頭から地面に叩きつけた。

音よりも一瞬早く、ティラトールを中心にして巨大なクレーターが現れた。それからすぐ世界は慌てふためいたように、その膨大な物理現象の振り戻しをあわせるべく、周囲の瓦礫が噴煙のように立ち昇り、キノコ雲を形成した。

直下型どころか地表を震源とする巨大地震が、東京の街を揺さぶる。無論、周囲で運良くメガロスの戦闘を免れていた建造物は、これによって完全に止めを刺された形となった。クレーターは元よりその周囲には無傷で立っている建造物など皆無となっていた。

リナーシタ：？

とてつもない轟音で、ノンネは目が覚めた。といつても、今まで眠っていたわけではない。目は開いていたものの、周囲を認識していなかったのだ。

皆、皆死んでしまった。焼けて、砕けて、汚らしい肉片に変わってしまった。あの光景が焼きついて離れてくれない。そして、その情景から目を背けて逃げようとしたことが、いつまでも頭の中を漂っている。そのことを考えるだけでノンネの頭は満たされて、他のものが入り込む余地など無かった。

「うらあああ！」

がなり声が、耳を劈く。目の前で男が一人、叫んでいる。楽しそうで、それでいて怒つてもいて、まるで思いの丈をぶつけるのが目的のような、それこそが目的だとも言わんばかりの形振りの構わなき。

その男は、お父さんだと言っていた。

ノンネは、父を知らない。三歳の頃まで一緒だったらしいが、まるで覚えていない。母が写真などの関連する類を悉く処分してしまったせいもあるだろう。

ようやく記憶を探れるだけの余裕が出てきたノンネは、おぼろげながらに思い出してきた。突如現れたメガロス。そして父を名乗る男に抱えられて、そのメガロスに乗せられたのだ。

メガロスのコクピットは、多くの場合全周囲モニターを採用している。傍から見れば、何も無い空間にぼっかりとシートが浮かんでいるように見えるだろう。そのモニターにノンネは直接腰を下ろしている。

まるで空中に放り出されたような場所。ノンネが手を置き、腰を降ろすそこからは、無残に砕かれた街の残骸で埋め尽くされている。

たくさん、砕けている。たくさん、潰れている。この瓦礫の下には、一体どれほどの人が死んでいるのだろう。考えずには、いられない。巨大な戦闘を支える屍に、ノンネは思いを馳せずにはいられない。

そんななか、テイラトールを投げ落とした衝撃で舞い上がった瓦礫の中の一つが、ノンネの視線を釘付けにして離さなかった。

白塗りの壁は、ノンネの通っている学校のそれと同じものだった。それを見つけてからは他の瓦礫など霞んで見えない。校舎だけがゆったりと、まるでその姿をノンネに見てほしいと言わんばかりに、ゆるやかに落ちていく。

ごろごろとサイコロのように回転する校舎から、ふりかけのように何かが落ちていく。それは学校の内容物。机や椅子などの学習に欠かせない要素たちだった。勿論、学習の主体となるものたちも、一緒にたになって落ちていく。

逃げ遅れた、あるいは逃げられなかった生徒達が、頭となった教室から放り出されていく。僅かな黒点にしか見えないはずを、ノンネの霊的素養が的確に取得し、解像度を増幅して脳内に現してくる。

「いやああああッー！」

喉が張り裂けるほど、ノンネは叫んだ。そのまま破れて、自分もあの残骸の一部になってしまったかった。隙間に埋もるほど細かく粉碎されたかった。

何故自分がそうなっていないのか。地に均されている死と、空より降りかかる死。そのどちらもノンネは被ることなく、全てを見届けられる近さでのんびり寝転がっている。そんなことをしたいなどと、思っていないかったのに

分からない。知りたくない。それでも考えてしまふ。思考さえ自分の思い通りにならない。

ただ救われたことを受け入れられるだけの即物的思考を持ち合わせていなかったノンネは、その差異を埋めるべく、ひたすらに心を

磨り減らしていくばかりだった。なけなしの良心は一条の亀裂となつて、ノンネを断ち割る。

「だあああああッ！！」

ノンネの叫びを掻き消すほどに、鍵次が吼え猛る。左手で刺し貫いていたティラトローレの右前脚はとくに拉げて千切れ、未練たらしくゲーティアの腕に括り付けられている。左腕を大きく振るつてそれを捨てると、盛大な音を立てて町の一角が廃墟へと変貌した。

街の惨状など見向きもせず、ゲーティアがティラトローレに迫る。小鍵機関を失っているゲーティアには、エーテルの応用方法がエーテルバスターくらいしかない。ゲーティアに搭載された高いエーテル変換効率のパワーを最大限に活かすには、拳が届くほどの接近戦以外に無い。幾度離れようと、ゲーティアは目の前のメガロスを破砕せしめるまで何度でも前進する。

「くそが、くそが、くそがあああッ！！」

右前脚が取れ、不恰好な三脚姿となったティラトローレが、直つたばかりのエーテルショットガンの砲身を構える。これまで幾度も外し、防がれているものの、今のカルツオにはこれ以外に策が無い。

「死にやがれえええ！！」

怒りも、恐れも、プライドも、全てを弾核に注ぎ込んで放たれるエーテルショットガン。エーテルの燃烧ガスによつて高速で打ち出される巨大な弾核がゲーティアを襲う。その瞬間、燃烧ガスが漂う砲身内に再び弾核が生成される。

今のゲーティアは一撃で殺し得るものではない。高密度のエーテル弾子を二度三度と至近距離で浴びせかけるために、カルツオは弾核の発射から間髪要れずにもう一つの弾核の生成を開始していた。

直後、激しい振動がティラトローレを見舞う。正面に来たゲーティ

アに至近で弾核が命中し、その衝撃波を煽ったのかとも思ったが、そうではなかった。

何故ならゲーティアが、ティラトールに組み付くほど懐近くまで入り込んでいたからだ。

コクピットのモニターをゲーティアが席卷する。そこから伸ばされた左手が、ティラトールの砲身にずっぽりと入り込んでいる。

発射されたはずの弾核を、ゲーティアは左手が押さえつけていた。先ほどの振動は弾核を思い切り左掌で押さえつけた際のものだった。ここへ来てようやく、カルツォの背には寒気らしきものが這い寄ってきた。もはや弾核を命中させるどころか、発射することさえままならない己の現状に、エーテルの活性が濁り始める。

間髪入れず、ゲーティアは掌からエーテルバスターを放つ。勿論、弾核を握り締めたまま

引き裂かれた弾核内のエーテル弾子がエーテルバスターに反応し、瞬時に碎け散る。その過程で生み出される高熱が砲身内の空気を膨張させるが、正面からのエーテルバスターが蓋の役割を果たし、逃げ場を与えられない。

必定、膨張空気とエーテルバスターの板挟みに耐え切れず、ティラトールの砲身内でエーテル弾を満載した弾核が爆裂した。

爆発は砲身どころか中枢部まで及び、ティラトールの体が大きく吹き飛ぶ。ゲーティアの方も左腕が肘まで消え失せるが、すぐにとりとしたエーテルが飛び出して補填する。

「ゴアアアアアアア!!!」

叫びがエーテルを励起し、回転させ、奮わせる。生のままのエーテルが左腕に充満し、所々の装甲が弾け飛ばして放散する。紫電を為すほどに束ねられたそれが、高々と掲げられる。まるで見せ付けるように、今まさに振り下ろされんとする破壊の象徴から目を逸らすなど言つように。

「ああ、うああ……」

残された魔力を総動員して、ティラトールがゲートティアを見上げる。もはやメガロスと言う巨大構築物を動かすくらいにしか、カルツォのエーテルは役に立たない。

無残に中身を晒すティラトールに止めを刺すべく、ゲートティアの左拳は振り下ろされた。

鍵次はてつきり、消えてなくなっているものだと思った。それほどの必殺性を込めたエーテルナツクルは、その実何の効ももたらさなかった。ただゲートティアの左拳が、突如現れた巨大な掌に受け止められている。

拳を引き、素早く離れたゲートティア。混乱をきたしていたからこそ、得体の知れないそれからまずは距離を取る。

全体像を納めて眺めたそれは、見れば見るほど奇怪な代物だった。初めて見るようできて、吐き気を伴うほどの既視感を、鍵次は最近味わったような気がした。

「いやはや、こちらの不始末で申し訳ない」

やはりと言うべきか、オープンスピーカーで喋る巨人の声に、鍵次は聞き覚えがあった。

「それがお前のメガロスか、イステカーマ」

「親父のにそっくりでしょう。わざわざ真似たんですよ。ガイマツて言います」

そういつて見せつけられた機体は、たしかにイステカーマの父、スライマンのメガロスであるアグロスと酷似していた。違うのは細部と色だけである。

「お前といいそいつといい、『イガーサ』にはロクな奴がないな」  
「我ら魔道を歩む者なれば、外道左道に逸れるのは道理。性、けんかい狷介なるのも已む無しでしょう」

相変わらぬの慇懃な物言いに、鍵次のこめかみが疼き始める。し

かしここで短気を起こして突っかかれるほど、鍵次の性情は単純ではないし、そもそもイステカーマの操るガイマが放つ気配が、彼の前に出させない。

「これでお前ら、世界を敵に回したぜ」

明確な形での日本国に対する魔術テロ行為。これによつて日本、並びに国連の武力行使が行なわれるのは確実となった。如何に及び腰の日本政府も、ここまで直截的な手段に出られたら、それ相応の対応を示さなければまず国民が黙ってはいないだろう。

そもそも魔術師管理機関であるレメゲトンが、今回の魔術テロを看過しない。既に都市部の甚大な被害を許してしまつたからこそ、その根本を全力で断ちに行く。魔術で被つた借りは、魔術で返すのがやはり魔術師の筋と言うものだ。

「虎の威を駆つて……。最強のメガロスの名が泣きますよ」

「そんなもの、俺は名乗つたことないぜ。てめえらが勝手に言つてるだけさ。魔術師じゃない奴がメガロス乗れるのが、よほど悔しいんだな」

両者とも退くところがないものの、前に出ようともしない。互いに牽制しながら、相手の出方を探っている。

「まあ、それはさておき。お待ちしていますよ、導師と共に。どうぞお誘い合わせの上、お越しく下さいまし」

ガイマが徐にテイラトーレを抱え上げると、その姿がエーテルの靄に隠されていった。既にメガロス二体分を移動させる大規模な転送魔術が行なわれている。

鍵次は敵が正に退こうと言つのに、止めようとさえしなかった。彼のゲーティアはエーテル循環器系の過剰な酷使で全身が悲鳴を上げており、思い出したように警告音が鳴り響いている。それに鍵次自身、心魂の限りを吐き出しつくして疲弊しきつていた。正直なところ、やり合わずに済むのならそれに越したことは無い。

そして最後まで慫慂な口調を崩すことなく、イステカーマはテイ

ラトローレを伴って消え去った。

メガロスによる戦闘行為が終了し、鍵次はようやく自分の心臓が早鐘を打っていることに気がつく。耳はふさぐことが出来ず開きっぱなしのはずだったが、間近で響く鼓動すら彼は知ることが出来なかった。だから後ろから忍び寄る睨り泣きなど、聞こえる道理など持っていなかった。

自分が助け、そして乗せたということも忘れて、今さらながら鍵次はノンネの存在に気がつく。その声が、先ほどまで早退していたティラトローレやガイマ以上に、彼の心胆をぎりぎり締め上げていた。戦闘行為という免罪符を使い切り、やっと正面から向き合えるというのに、何をどうしたらいいのか全く浮かばない。彼女が何故泣いているのか、存在さえ戦闘の最中に忘却できる凶太い神経の鍵次が、思い至れるはずもない。

「ノンネ、大丈夫だ。もう大丈夫だよ」

せめて寄り添い、上滑りの言葉で慰め、腕の中に包むことくらいしか鍵次は出来ない。一向にノンネは泣き止まないが、やめるわけにもいかなかった。鍵次の貧困な父親像では、その程度が限界だったのだ。

自分が今まで父親という責務を放棄し続けてきたことをまざまざと見せ付けられる。押っ取り刀で駆けつけた自衛隊のエラヒストス部隊に回収されるまで、鍵次は必死にノンネを抱き止め、言葉を掛け続けていた。ノンネを慰めると言うよりは、自分に言い聞かせるため。重圧に潰れそうな自分の内圧を保つため。

今さら許しを請うように、鍵次は父親の振りをする。誰に通じずとも、して見せる。

レメゲトンに着いた鍵次は早速別室に連行され、査問が行なわれ

た。

「勝手にやめて、勝手にゲーティアを持ち出して、一体何を考えているのかね。君はメガロスのパイロットとしての自覚がないのか？」  
「大体、警備部は何をしていたのかね。魔術師の管理は警備部の仕事だろう」

「それをいうなら、人事部の評価査定が適当なんじゃないのかね？  
ウチは人事部で決定された適切な人員を配置していた。警備体制だって何の手落ちもないのだよ。大体私は、彼のようなイレギュラーを呼び戻すのに反対だったんだ。おかげでこちらの警備体制にまで響いているのだぞ。そのことについて人事部はどう責任を取るつもりなんだ」

鍵次の査問はあつという間にレメゲトンの組織批判へと摩り替わり、この場ではまるで意味のない議論が延々と垂れ流される。

こんなことをしている時間など、鍵次にはない。ノンネの様子を一刻も早く確認したいのだ。

とはいえ、勿論鍵次にノンネと直接会う気概などあるはずがない。あのときは緊急事態であつたために止むを得なかったが、こうして戦いの場を離れた後では、自分が久し振りに娘と会って、優しく抱き止め、言葉を掛けたことが信じられなかった。

信じられなかったが、それまでだ。何のことはない。娘の窮地に気が動転して、大胆な行動に出れただけのことだ。今ではその肌に触れることすらおこがましいとさえ思っている。何を尻の青いことをと自分で嫌になるが、まさかそんな感情で沸き起るほど鍵次は若くない。

怖いのだ。恐ろしいのだ。親でさえなくなった状態で子供と面と向かうということが、堪らない恐怖なのだ。これまでだって親らしいことなどしたことはない。というよりは面識さえろくにないというのに。だからこそ、会って話すことが怖くてしかたがない。

それに、今は会えない。ゲーティアから降ろされてすぐ、ノンネ

は担架に乗せられて面会謝絶となっていた。外傷はないが、極度のストレスによる心的外傷後ストレス障害と、ゲーティアのコクピットに長時間いたことによるエーテル酔いで、深刻な状態らしい。

会いたい。会って確かめたい。いや、違う。まだ会っていないから、もしかしたら元気なんじゃないかと思いたいだけなのだ。自分のせいで心の壊れてしまったノンネを、認めたくないだけなのだ。

未練がましい。こんなときでさえ、自分の娘が苦しんでいるときでさえ、責任の在り処を探すことに終始する自分が憤ろしい。

査問の内容など、鍵次はまるで耳に入っていないかった。ただ査問の終了を告げる声に促され、その足でふらふらとノンネの病室へ誘われるように向かってしまった。

行ってどうするかなど、やはり鍵次は考えていない。ただ他に、行く場所が思いつかなかったのだ。行きたくないと思いつつ、誘われるまま、虫の如く一律的に、せこせこ歩く。

ついにノンネが運ばれた病室の前へと至った矢先、中からすすり泣く声が聞こえた。コクピットで聞いたノンネのものに似ているが、少し押さえ気味で低い。

引き戸をそろりと開け放つと、そこにはかつての妻　メディナがいた。ノンネの眠るベッドの傍らに置いたパイプ椅子に蹲り、入ってきた鍵次にも気づかずひたすらすすり上げている。

鍵次は黙ったままメディナの横まで歩き、ノンネの顔を覗き込んだ。

血色はいい。外傷は大したものではなかったようだ。だが問題なのは、心のほうだ。突然被ったメガロスによる攻撃の恐怖。友人を目の前で亡くした絶望。そして追い討ちのように濃密なエーテルに当てられてしまい、心の平衡はもはや立て直せないほど崩れてしまった。

前半の原因はともかく、エーテル酔いについては鍵次にも責任がある。

緊急時だった。仕方がなかった。ならあそこでコクピットに回収しなかったら、どうなっていたのか。そんな正論を、鍵次は吐きにきたわけじゃない。

ようやくと鍵次の存在に気がついたメデイナが、急いで顔を拭く。その僅かな所作が、まだ自分の前で取り繕ってかれているように思えて、不覚には鍵次には嬉しがってしまった。

「やっぱり、君に似てるな。そっくりだ」

先ほどまでは直視できないのではないかと心配していたくらいなのに、いざ目にしたらいつまでも見ていたい衝動に駆られてしまう。銀色の髪、白磁のような肌、化粧のいらぬほど彫深くメリハリのあふ顔つき。母であるメデイナの若い頃を思い出させて余りある。

「今さら、何しに来たの？」

「顔を見に来た。それも、駄目かい？」

鍵次は、ノンネの顔から寸分も視線を外さなかった。外せばどうしても、メデイナのほうを見てしまう気がしていたからだ。

「わたしはやっぱり、あなたを許せない」

独白のようにして、メデイナが静かに答え始めた。

「この子を捨てて逃げたくせに、勝手に戻ってきて、こんな目に、逢わせて……」

しかしあつという間に感情が心の嵩を溢れてしまい、最後のほうは言葉になっていなかった。

涙を拭いたハンカチで口を押さえ、荒げてしまう呼吸を必死に抑えている。

「でも、ありがとう。助けてくれて。この子が死んだら、私は生きていられなかった」

それは全くの冗談を含んでいなかった。父も母も亡くし、兄さえも第一次メガロス大戦で亡くしたメデイナにとって、血の繋がった家族というのは殊更に大切な存在だ。ノンネが生まれて間もない頃、メデイナはしきりにそのことを鍵次に話していた。

「あなたは、どう？」

問いかけられてから、鍵次はメディナの顔を見た。泣きはらした  
瞼は腫れぼったく膨らみ、赤く充血している。

彼女の設問がどのような意味を含んでいるか、鍵次にはわかりかし  
早くに察せられた。さらにはどんな答えを望んでいるのかさえ、見  
通せてしまった。

「多分、生きていられる。耐えられるよ」

だから驚くほどすると、言葉が出てきた。言って初めて、そう  
なのかと気づかされるほどであった。しかし思い当たる節はきちん  
と彼の中にある。実際に鍵次は、ノンネの養育費を支払う義務を放  
棄して失踪しようとしていた。そんな自分が、娘なしでは生きてい  
けないなどという台詞を口に出来るはずがない。

「それは耐えてるんじゃない、逃げてるんですよ」

「同じことだ。結果は、同じだ」

ふと鍵次は、メディナの対応が自分の思っていたのとは違うこと  
に気がついた。そもそもこんなにすんなりと病室に入れず、罵詈雑  
言を浴びせかけられた上で門前払いを食らわされるとさえ覚悟して  
いた。

それがやんわりとした口調で嫌味を言うくらいで、ずいぶんとし  
おらしい。その乖離に、鍵次は思い至るところがあった。

どうやら鍵次は、メディナを勘違いしていたらしい。別れて十数  
年経つのだ。人柄や性格を覚えていなくても不思議はない。例え妻  
だった人物であろうと、例外ではない。

「あのときの……俺をもう一度ゲーティアに乗せたときの、あれは  
嘘だったんだよな」

月日が流れる中で、鍵次は自分の中のメディアを思い違えてしま  
ったのだろう。それが連れ戻された際の問答によって拍車が掛かっ  
ていたようだ。あの厳しい言い様がなければ、メディナへのイメー  
ジもまた違ったものだったのかもしれない。

「ああ言えば、あなたは乗るでしょ」

「そうだな。確かに、乗ったよ」

何だかんだと文句を言いながら、結局は志田やメディナの思惑通りにゲーティアへ乗ってしまった。彼らの狙いは、見事的中したといえる。

「もう、これきりにしてね」

どこか脅すような、不穏な声音でメディナは言う。

「もう、ノンネに会わないで」

改めて言葉にされると、胸が詰まってしまう。分かっていたはずなのに、自分はそもそも会う資格はなかったはずなのに、いざ聞かされることを覚悟していなかった。

つくづく都合の悪い事を考えようとしなない自分の性情に嫌気が差し、鍵次は強く目を閉じた。

了承も否定もせず、鍵次はメディナに一瞥もくれず、逃げるように病室を後にした。

## 魔術師、集う：？

突如現れたメガロスによる東京西部襲撃とイガーサの関連が、レメゲトンによつてその日のうちに正式に発表された。

レメゲトンは国会の要請を待たずして国公魔術師に召集を掛け、独自のエラヒストス部隊も編成し終えていた。既にいつ出動がかかっても応えられるよう、万全の態勢が昨日から維持されている。

そしてレメゲトンと同じ各国の魔術管理機関は協力を表明し、提供する戦力を整えつつあった。

対イガーサの動きは全世界的に広がり、各国の魔術師管理機関とは別に、世界的にも著名な魔術師がレメゲトンに集結したのは、テイラトールによる襲撃が行なわれてから丸一日経過したころだった。既に五、六人ほどの魔術師が集められた中央戦略発令室は、緊急時のひりつくような雰囲気はまるで消え去り、単なる同窓会と成り果てていた。

集まった魔術師は鍵次と同じく第一次メガロス大戦にて共闘した者ばかりであり、打ち解けるのに殆ど時間を有さなかった。共に魔術飛び交う戦場を駆け抜けた者同士の絆は時を隔てた今も瑞々しく解凍され、魔術師たちの間で酌み交わされる。

彼らの殆どが国公魔術師として活躍し、それに留まらず魔術以外の分野　国政や工業などでも地位を確立している者までいる。魔術師以外の職を持つ者は、そうした職務・公務をおしてまで駆けつけてくれたのだ。

魔術師だからこそ、イガーサのやり方は許しがたい。さらにイステカーマ　スライマンの息子という存在が、彼らの危機感を煽つたのだらう。それほどにスライマンの名は、魔術師にとって忌み名であった。

「ヘイ、ケンジ。久し振りだな！」

聞き覚えのある声に、鍵次は驚きに目を丸くして振り返った。まさか彼がこの場に現れると、果たして予想したものがいたのだろうか。

野太い声で話しかけてきたのは、カーター・バロウズ。海兵隊の特殊魔導部隊《SWF》で鍛えた体は今でも筋骨隆々で、並の魔術師ならばその腕力だけで薙ぎ倒してしまいそうだ。

軍を退役後はFGWにおけるアメリカの魔導国防政策担当として辣腕を奮い、幾つもの魔術テロを未然に防いできた。現在はコネチカット州知事を務めており、二期目の半ばの多忙なスケジュールを縫つての凱旋である。

その後ろにいる金髪碧眼の細長い男は、デュルタル・カルル・ユイス。ドイツの魔術師管理組織の副長官に就任し、魔術の工業利用による経済的発展事業を推し進めている革新派だ。

隣にいる女性はユリファス・リ・レヴィ。イギリス国立の魔術師養成学校『アンディビジョン』初の女性校長として一躍有名となり、魔術関連のコメンテーターとして世界中のメディアに毎日のように出演している。

第一次メガロス大戦を生き残った魔術師のなかでも出世頭の三人については、世事に疎い鍵次でも少しは聞き及んでいた。自分とは比べ物にならないほど活躍する彼らを見るたびに、劣等感を助長されたのは言うまでもない。

鍵次個人としては出来れば会いたくなかったが、わざわざ自分たちの仕事を置いてまで協力してくれる以上、無碍に扱うわけにもいかない。その辺りの矛盾が鍵次の態度に表れて、「あ、ああ。久しぶり、だな」と、少しどもりながらの返事を返すに至った。

「お前さん、パイロットをやめたんじゃないのか。でも俺は、また戻ってくると思ってたぜ」

「その、なんだ、成り行きでさ。また乗せられちゃったんだ」

「自分の意思で戻ってきたんじゃないの？ 相変わらずレメゲトンのやり方って強引よね」

「それだけ事情が逼迫しているのでしょう。若年の魔術師の質が低下しているのを、レメゲトンは軽視していないのかもしれませんが」  
「ホント、困っちゃうわよ。ウチの学校にも最近はその類の苦情が多くて」

「俺もよく相談されるよ。でもそれは無理な話なんだ。俺達のとくみみたいな緊張感で魔術を学んだことのほうが異常なんだ。彼らの世代のそれを強いるのは酷だと思っぜ」

「ですが、そうしてもらわないと困ります。現にスライマンの息子を名乗る魔術師が現れ、明確な魔術テロ行為を実行したのですから」  
デュルタルの発言を受けて、皆が押し黙る。当を得つつも直截に過ぎた物言いは、若かりし頃と変わらない。

さらに彼の台詞は、その背後にある可能性を想起させて余りある。  
「大戦が、繰り返されるってこと？」

「それについては、鍵次さんにお尋ねしたい」  
いきなり水を差し向けられて、鍵次が言い淀む。焦りはするのだが、どこか懐かしくもある感覚だった。

デュルタルの頭の回転に、いつも鍵次は追いつけず、彼の言わんとするところを正確に読み取れたことは殆どない。

「どうだ？ お前から見て、そのイステカーマって奴は？ スライマンほどの傑物だったか？」

なるほどイステカーマのことを聞いていたのかと、カーターに訳してもらってようやく鍵次は飲み込むことが出来た。

「間違いなく、スライマンの息子だよ。若いから多少違うが、根っこのところは同じ感じがした」

そこで一拍置き、不敵に頬を吊り上げて笑う。鍵次がこのような遠慮のない表情が出来るのは、権田や彼ら魔術師仲間の前だけのことである。

「まだ底を見せてもらってないけど、正直、スライマンほど怖くはない」

「お前が言うなら、間違いなさそうだ。実際にスライマンを倒した男だからな」

「俺じゃないって。倒してくれたのはエグゾルなんだよ」

「だからといって楽観は出来ませんね。こちらの不安要素が多すぎる」

「デュルタル、その不安症はやっぱり治らないんだな」

「性格ですから。もう、変えられませんか」

わざとらしく咳払いで話題を切り替え、デュルタルは全員を見渡す。この辺りの弁論術は政治家になったことで磨きがかかったようである。

「まず最強のメガロスであるゲーティアの戦力が、かつての頃に比べて著しく低い。小鍵機関の喪失に伴い精霊召喚も不可能になっています。そして若手魔術師の質と、僕らベテラン魔術師の質」

「若手はともかく、俺らもかよ」

「カーター。あなた、最後にメガロスに乗ったのはいつですか？」

これにはカーターも言葉を詰まらせ、苦々しく顔を顰める。それはレヴィや他の魔術師も同じくらいに心当たりがあるらしく、にわかにはざわつき始める。

「ちなみに私は十年前です」

「何だ、お前だつて乗ってないんじゃないか」

「当然よ。今時メガロスを運用することは、世界的に見ても風当たりが厳しいんだから。そこら辺が大らかなのは日本くらいなものよ」  
日本の場合はメガロスやエラヒストスの産業が重要な外貨獲得源となっていたり、魔術テロの頻度が多いなどの事情もある。

「そうだな。案外またメガロスに乗れる口実が出来たつてことで来た奴もいるんじゃないか？」

「あなたもその口じゃないの？ カーター」

「おいおい、州知事の口から何を言わそうつてんだ。にしても若手か。せめてあの賀茂の息子くらいは、ルーキーの中じゃ筆頭だろう

よ

「どうでしょう。この間の出勤でエラヒストスに落とされたと聞きましたが」

よくその情報を知っているものだ。鍵次が感心し、デュルタルに目線を向ける。確かそのことは権田の件共々、内々に処理していたはずだった。

鍵次とデュルタルの目が、そこで徐に重なり合う。そんなにきつい目線を向けられれば、如何に鈍感な鍵次でもデュルタルが何を聞きたいのか察せられた。

「確かに落とされた。でも、あれは仕方ない。ゴン爺の作ったものだから」

「ミスタ・ゴンダが作ったエラヒストス!? そんなの聞いてないわよ!」

レヴィが素つ頓狂な声を上げるのも無理はない。権田の設計するエラヒストスというのは、それだけで驚愕に値する事態である。現在のエラヒストスの構造理論の基礎を作った人物であり、その影響は魔術師にさえ大きく波及している。

「公的な発表なんて出来やしないよ。ゴン爺は敵方　つまりイガーサに利用されちまつたんだから」

「いやはや、何に驚きやいいんだ? ミスタ・ゴンダの死の真相が、実はイガーサに回ったことによるものだったことか。エラヒストスがメガロスを落とすほどに進化したことか」

「当面は後者でしょう。ミスタ・ゴンダの造ったエラヒストスのデータが相手方になれば、量産されているかもしれない」

「私だったら、一も二もなく量産するわ。ミスタ・ゴンダのエラヒストスで、しかも実際にメガロスを落としているとなれば、これを使わない手は有り得ない」

「それはこつちでも想定した。この後に、実際に戦った俺と賀茂くんでレクチャーする」

「つてことは、具体的な作戦内容が既に立案されてるつてことなんだな」

「当然さ。それにシナリオ作りだけならイガーサが現れたときからやってるよ。元々レメゲトンは魔術に関しちや日本国から独立した権限を持つてるから、国の承認を待つシナリオと独断で動くシナリオの両方を用意してたんだ。あとは集まってくれた魔術師の戦力を鑑定して、組み直すだけ」

「つくづく手回しがいい」

「別に俺がやったわけじゃないよ。ドクターと志田長官だ」

「志田さんも長いよな。お前がここに入る前から、だよな」

「ああ。だからもう二十年以上、ここの長官を務めてることになる」

「よく不満が出ないな」

「さあ？ 俺はもうこのことの関係が薄くなった人間だから、耳に届かないだけかも」

「世界を救った英雄なのに、相変わらず言うことがしょぼいわよね、鍵次つて」

「デュルタルのと同じで、性格さ。それに俺は英雄だの、最強だのと名乗った覚えはないよ。そんなものにありがたみはなかったし」

世界を救った英雄でも、最強のメガロス乗りでも、そのことで鍵次の生活がよくなったことなど一度も無かった。むしろ今もこうして、それに人生をかき回されることの方が多いくらいだ。

自分が世界を救っていなければ、ゲーティアに乗っていなければ、今の自分なんて居やしなかったのに。若い頃もそうした葛藤はあった。しかしその頃ならば容易に決断できた。自分の持つ力と責任を自覚し、真つ向から見据え、信じるところを貫くだけの強さが、昔はあった。だからそんな葛藤は、湧いては刈られる雑草のように、こまめに刈り取られていた。

その例えでいけば、今の鍵次の心は手入れを怠り、雑草の類で埋め尽くされた庭だ。面影も薄っすらと残ってはいるが、果たしてそ

れを取り戻すだけの気概が、庭の主にあるのかどうか。

「あなたになくても、僕らにはありますよ。魔術師ではないのにメガロスを操り、しかも、強い。一等、強かった」

神妙な面持ちで、デュルタルは混ぜ返した。

かつてドイツ政府からの命令で実際にゲーティアに襲い掛かり、返り討ちにあつたことのあるデュルタルならばこそその言葉だった。全盛期のゲーティアと鍵次の強さを、その身で味わつたのだから。

強いメガロスへの憧憬は、魔術師ならば普遍的に備えているものだ。それぞれが一騎当千の精霊を七十二も自在に召喚し、魔力の封印と開放を司る小鍵機関を備え、非常に優れたエーテル変換効率を誇つたゲーティアは、操縦者が魔術師でないことを差し引いても最強の名に恥じない。

むしろ魔術師ではない鍵次が乗つたからこそ、その強さが磐石になつたとも言える。魔術師と同じ力を有しながら魔術師であることに縛られない奔放な精神は、良い意味で魔術師の予測を裏切り、そこに生じた隙を鍵次は常に拾い上げてきた。

しかし鍵次は、常にこうも考えてきた。もし、自分が魔術師なら、と。実際、魔術師でもないのに魔術師の象徴であるメガロスを操り、闘争の場に割り込んできた鍵次を面白く思わない魔術師は多かつた。面と向かつて揶揄されたり、影で口汚く罵られていたのも、今では思い出の一部である。

いつそ魔術が使えたら、その道だけを進めばよかつたのか。そうすれば自分も、今の彼らのように輝かしい活躍が出来たかもしれないのか。

「でも、今は、そんなに……」

三人の目が何故か厳しくて、鍵次はそれ以上遜れなかつた。

## 魔術師、集う：？

レクチャーの時間を迎えた中央戦略発令室は天井の照明が落とされ、魔術師たちが囲んでいる底面スクリーンと壁面にある大型スクリーンだけが煌々と輝いている。

その大型スクリーンの前に一人の男が歩み出て、深々と礼を拝した。

「お集まりの皆さん。レメゲトン長官を務めております、志田と申します。と、型どおりの挨拶はここまでにしよう。知ってる顔ぶればかりだから、肩が凝らなくて助かるよ」

志田なりのユーモアか、これ見よがしに肩を回して凝りをアピールしている。所々でくすりとした笑いが起きているところを見ると、どうやら好意的に受け取られているようだ。鍵次はと言えばこの手の冗談には疎く、早く進めればいいのにと少しばかりいらつき始めていた。

「今回の作戦目標は、イガーサを名乗る魔術結社が作った島だ」

「その島には名前があるのですか？」

カーターが茶化すような声で言うが、志田はもつともらしい思案顔を見ると「それじゃあ、『霞の島』とでもしようか」と言った。「いやそれなら、『茨の島』でいきましょう」と他の魔術師が提案する。

たかが島の名前如きと思われがちだが、魔術師と言うのはこういうものに敏感だ。極論すれば名称を付けるということから、魔術による戦いは既に始まっているのだ。どのように験を担ぎ、相手を貶めるかで、魔術の牙えは違ってくる。なので傍目下らない事柄にも目敏くならざるを得ない。

「それでは作戦名は『フォルセティ』にしよう」

いつのまにやら作戦名の話に移っていたらしく、志田の声に反論

するものはいなかった。結局、島の名前はフリースランドとされた。作戦名の『フォルセティ』は北欧神話に出てくる法律と秩序の神である。そしてフリースランドとは、フォルセティが法律をもたらした島の名前だ。

その昔、フリースランドは幾つもの部族がひしめき合い、争いが絶えなかった。そこで島の年長者たちはそれぞれの部族に存在する掟や法律をまとめて一つにすることを考え出した。多くの部族の掟を集めた十二人の年長者たちは、フリースランドから離れた小島にてじっくりと協議することをにした。しかし小島へ渡ろうと船を漕ぎ始めた途端、嵐に見舞われて彼らの船は難破しかかった。彼らは必死に神に祈りを捧げる。すると見知らぬ十三人目の男が船上に現れ、荒れ狂う波間を縫う見事な舵で小船を小島に接岸させた。

この見知らぬ十三人目こそフォルセティの変じた姿であり、彼を交えた会合にて年長者たちはそれぞれの部族の掟を一つにまとめることが出来、フリースランドに平和と秩序がもたらされた。

「なら私たちは、さしずめ年長者アセガイルですね」

デュルタルもこの手の話題は好きらしく、しみじみとした口調でそう言った。無法者の島、フリースランド。そこに秩序をもたらす十二人の年長者とフォルセティ。まるで一昔前のアメリカだなど、当のアメリカ人であるカーターが皮肉った。言われてみれば確かにそうだなと、鍵次はぼんやり思い浮かべる。ただアメリカの場合は押し売りに近いのだから、呼ばれてから来たフォルセティのほうが慎重深いと言えるだろう。

これから彼らは、秩序を押し付けに行く。再び世界を乱そうとする不埒な奴らの集まる島に、メガロスという名の斧を突き立て、平和を沸き立たせる。崇高にして献身的な行いだ。例えそれがどれほど暴虐的で圧倒的な振る舞いであっても、それ自体に善悪は関与しない。

ただ鍵次は、彼らと目的を共有していなかった。平和だの何だの

と言うことは、とつくに彼の頭の中から転げ落ちている。ノンネをゲーティアのコクピットに乗せたときから、ポジティブなお題目は選択的に脳内から除外するよう彼は努めていた。

そんなものに騙されて、自分の不埒な性情を見失いたくなかった。自分の犯した罪を、他に肩代わりさせるわけにはいかなかった。無論、彼の言う罪は、東京の都市を壊滅させたことではない。ただ一人、娘の心を壊してしまったことによる罪だけにしか眼を向けていない。

娘を酷い目に合わせたイガーサを許さない。ただそれだけの矮小で低俗な動機が、鍵次を動かす。もしくはそれは、高邁なお題目など必要ないほど、鍵次にとって巨大な存在なのかもしれない。

間違つても年長者などとは名乗れない。娘一人さえ守れず、他の罪からは目を向けようとせず、罪を恣意的に選んで自慰的な自傷に耽る者が、賢い年長者であるはずがない。

相変わらず、鍵次は魔術師からは除けられてしまう。何も共有できない。受け入れたくもない。

それでも、メガロスには乗る。共に戦う。ほしいまま 恣に、勝手気ままに魔を扱う。その我儘にこそ、魔が宿る。

「それじゃあ敵の戦力について確認しておこう。賀茂くん、小中くん、説明してくれたまえ」

志田からマイクを受け取った賀茂の後ろに続き、鍵次はスクリーンの前に陣取る。

「ご紹介にあずかりました、賀茂栄修です。それでは早速本題に入りたいと思います。現在確認されているイガーサの魔術師、及びメガロス、エラヒストスは以下の通りです」

賀茂の合図に合わせて、鍵次がリモコンを操作すると、スクリーンいっぱいティラトールの姿が映された。

「皆さんご存知かと思いますが、あのティラトールです。現在はイタロ・スカルツアルーピの弟子、カルツォという男が操縦しており

ます」

賀茂が予め用意されていた内容をすらすらと読み上げる。鍵次の場合、顔見知りとはいえ不特定多数に語りかけるのが苦手なため、スクリーンの操作に甘んじていた。

「カルツォ。イタロの弟子か。まさか師匠を殺してメガロスを奪うとはな」

「ティラトールはイタロが使っていた頃と兵装が大幅に換装されている。超長距離エーテル滑空砲の代わりに、中距離制圧用のエーテルショットガンを使用していた」

「ここでようやく鍵次が説明らしい説明をする。このように付け加えるぐらいの緊張感が彼には丁度良かった。

「せっかくの長距離戦闘を捨ててるってことか」

「恐らくは、な。じゃなかつたらティラトールが直接行動すること自体ナンセンスだ。奴の好みに変えてしまったんだろう」

ティラトールの超長距離エーテル滑空砲は、地球の裏側にいるメガロスのコクピットすら射抜いてみせる。そのアドバンテージを捨ててまで載せるべき兵装だったかと言えば、鍵次としては首を横に振るほかない。正直に言えば、あのカルツォが乗っていたからこそあの程度の被害で済んだのであり、そもそもゲーティアに乗っていた鍵次はあの場で瓦礫の一部となっていたことだろう。

「あれが付いていないティラトールなんて、ただの移動砲台だ。接近してしまえばこちらのものだ」

「それもすんなりとはいかないだろう。カルツォは新しくエーテルリアクティブアーマーというのを装甲の全面に展開していたんだ」

「そういつて鍵次がリモコンを操作する。今度は画像ではなく、三分ほどの映像であった。

「エーテルの爆発力で敵の攻撃を防ぐというものだ。これを接近戦で用いられると、こうなる」

映像の中では、ゲーティアがティラトールの頭部を殴りつけ、直

後に起きた爆発で吹き飛ばされる一連の動作が収まっていた。遠方から撮影されたカメラの解像度をいじり、倍率も上げているのだから。所々映像に荒いブロックが入るものの、何が起きているのか読み取るのに支障は無かった。

「うわ……」

「これで手首まで持っていかれた」

「よく勝てたな」

「勝ってはいないけど。まあ、カルツオの奴が腰抜けで助かっただけだ」

おどけるでもなく鍵次が言うと、皆は繰り返されるゲーティアとテイルトーレの映像を食い入るように見つめている。さらにゲーティアとカルツオの交信履歴とコクピットからの主観映像も交えながら一通りの戦闘を当人の鍵次が解説する。時折挟まれる二人の罵りあいや鍵次の叫びが聞こえるたび、鍵次は分かりやすいくらいに赤面し、どもりながら説明を続けていく。

「えっと、ここでその……」

そこで「うおおおおお！」という叫びが轟いて、鍵次は自分の声で説明を切られてしまう。

メガロス戦闘の報告は、交信履歴と主観映像が必須だった。主観映像は元より交信履歴などの音声データは、常にアナライズされているパーソナルデータと共に、戦闘時のパイロットの精神状態を確認するのに必要不可欠な要素であった。魔術は精神の為せる業。その精神状態を把握することが、メガロス戦闘の分析と言っても過言ではない。

その分析の作業が、鍵次はあまり好きではない。するのも、されるのも。

自分の性情を赤裸々に語り、それを良しとする風潮が、若いころから嫌だった。今になって久しぶりに体験してみると、まさに自分の中の羞恥を掻き毟られる思いだった。むしろ年を取っている分、

上手くやってみせると攻め立てられているように感じられて、先ほどのリラックスしていた説明とは裏腹にたどたどしさを増していく。

## 魔術師、集う：？

「えっと、まあ、テイラトーレに関してはこんなとこです」

ようやく鍵次は自分の担当する説明を終え、マイクを賀茂に渡す。公開の羞恥プレイに心魂枯れ果てた鍵次は、たまらずスクリーン脇の台に寄りかかった。

その間にも賀茂は淀みなく話を進めていく。

「それでは次に、例のエラヒストスについてお話したいと思います」  
鍵次が画像を呼び出すのに合わせてゆったりと間を取ってから、

再び賀茂は口火を切る。

「こちらのエラヒストス、名称は便宜上『ハジャ』といたしました」  
画像には赤く刺々しいエラヒストス　ハジャが映されている。

人型形態と巡航形態の二種類があらゆる角度から分析されている。  
朱雀、そしてゲートティアとの戦闘シーンも交えながら。

そして賀茂は説明を切り、しばらく皆に画面を注視させた。ここは言葉を尽くすよりも、映像の説得力で十分だと心得ているからだ。  
「ここまで来たのか、エラヒストスは」

誰ともなく、魔術師の一人が呟いた。

「まず、とにかく速い。最大戦速では朱雀でも追いつけませんでした」

「しかし装甲は薄いはずだ。これほどの高速機動は、限界まで施した軽量化とミスタ・ゴンダの組んだ絶妙な機体剛性の賜物だろう」

「はい。分析したところ、エーテル合金は装甲ではなく駆動部に多く使用されていました。装甲自体は戦闘用エラヒストスの水準にさえ満たないと思われれます」

「分かりやすいくらい的高速機動型。おまけに巡航形態への変形機構つきで、攻撃力はメガロスが不覚を取るほど」

「お恥ずかしい限りです」

賀茂が恭しく頭を下げるが、皆は何の反応も寄越さない。それを

どのように受け取っていいのか　謙遜なのか冗談なのか本気なのかの区別がつかないほど、ハジャというエラヒストスはメガロスに匹敵していた。

ハジャの脅威を十二分に説明し終えた賀茂からマイクを受け取り、今度は鍵次が話し出す。

「そしてこれが、スライマンの息子　イステカーマだ」  
スクリーンが移り変わり、一人の男が映し出される。それはかつて建築現場で鍵次を襲った男　イステカーマであった。

メンバーの多くから、息を呑む音が聞こえる。彼らのなかには実際にイステカーマの父であるスライマンを目撃したものもいる。その記憶と照らし合わせて、なお息を呑んだのだ。

「確かに、似てるな」

「メガロスまで、似てやがる。アグノスの同型機だ」

ティラトールを助ける際に現れたメガロスも同じく映っている。それは知っている者が見ればスライマンのメガロスであるアグノスの色違いでしかない。

「あともう一つ。どうやらイガーサのトップは、イステカーマじゃないらしい」

「じゃあ、やつぱりスライマンが!？」

「導師モアツウエズと、イステカーマは言っていた。そいつも十中八九魔術師だろう」

イガーサという組織自体の容貌が明らかではない以上、不確かながら少しでも多くの情報を伝えておくに越したことはない。

「戦力として判明しているのはそんなところだ」

「いえ、まだです。未確認ですが、各国の魔術師がイガーサに協力しているそうです」

突如割り込んできたドクターは、淡々とした口調でとんでもないことを言い放った。

「どうということだ？　ドクター」

「イガーサの宣言以降に行方不明となった魔術師が、イガーサに加担しているかもしれないのです。実際、魔術師でもない権田さんが協力していたくらいですしね」

などと言いつつドクターは皆が座る席まで移動し、なにやら配り始めた。

「こちらがリストになります。一応、目を通しておいってください」リストまで作っていたなら事前に教えてくれればいいものを。と混ぜっ返したところで話が進まないの鍵次はそんな言葉を飲み下す。天才のやることはよく分からないと流すほかない。

「こいつら、落としていいのか？」

当然そういう質問がくるということ予想していたのか、実に滑らかに、悪く言えば決まりきった口調でドクターが答える。

「対応については、レメゲトンの一任で決めるわけにはいきません。それぞれの機関にお任せします」

その一言に場内がどよめくのを、鍵次はため息交じりに聞いていた。

他国の魔術師は、その国、ひいては魔術師管理機関によって保護されている。その権限を魔術師管理機関側が放棄しなければ、逮捕・拘束などは行なえない。ましてや殺処分などよほどのことである。だからこそレメゲトン側から一方的に、他国の魔術師の処分を通達することは建前上行なえることではない。

必定、その判断は各々に割り振られることになる。無視するもよし、殺すもよし、その判断にレメゲトンは関与しないということである。そんな判断のもたらす責任を、レメゲトンは負いたくはない。実に真つ当な理屈だ。勝手に抜けた魔術師をどうしようと、それはそれぞれの魔術師管理機関が決めるべきだ。そんな重大な責任をレメゲトンが一身に受け止める必要性などない。

「それで、作戦内容はまだ何も聞いちゃいないんだが」

カーターの意見を受けて志田がああと唸り、急いでスクリーン前

まで歩いてきた。

「これはすまない。作戦名の前に話すつもりだったんだがな」と頭を掻いていかにもおどけながら言う。こういう真似がいちいち様になる愛嬌と貫禄が同居しているから、この男はたちが悪い。

「メガロス輸送機にてゲーティアを運搬するのだが、その輸送機にて他の魔術師たちも作戦区域へ移動してもらおう」

「降下地点は？」

「予定は島中央部。迎撃を受けた場合はぎりぎりまで島に接近した後に降下を開始。その後は敵性メガロス及びエラヒストスを排除」

「イステカーマとモアツウエズは？」

「殺処分だ。塵も残すな。禍根は全き断たねばならない」

強く言い切った後、志田はぐるりと皆を窺う。

「何か質問は？ 無いようであれば解散！」

魔術師たちに質問はないようで、威勢良く立ち上がる。とはいえず戦前のメガロスのメンテナンスといった殊勝な行いうするものは少ない。殆どは先ほどの同窓会の続きを始めたくてうずうずしているような手合いだった。

鍵次はといえば、作戦前にメガロスの状態を確認をしようという殊勝で稀有な人種であった。

そもそも他の魔術師連中が自らの武器であるメガロスの整備などにあまり関心がないのは、基本的にメガロスがメンテナンスフリーだからである。魔術師の意識下にある設計図を現実無理やり起こしてその場で顕現させるメガロスに、通常の機械に見られる疲労は有り得ない。しかしそれでも中を流れる循環器系が濁ってしまったり、関節がときたま歪んだりといった現象はどうしても起こる。

それを大半は無視してしまうのだ。取るに足らないことと割り切つて戦うのも、戦略の一つである。何せ心の状態がそのまま強さになつてしまうのが魔術師である。そんな彼らが何より万全にしなければならぬのは精神なのだ。心の在り様さえしっかりしていれば、

他の魔術師など恐るるに足らない。このように傲慢で増長した考えが罷り通るのも、魔術の世界である。

しかし鍵次の場合は、少し事情が違う。彼の乗るメガロスであるゲーティアは、多くの面で他のメガロスとは一戦を画している。その最たるものが、顕現したままの状態だということだ。通常のメガロスのようにエーテルを解いて還元するといったことが行なえず、通常の機動兵器のようにその巨体は存在し続ける。

エーテル供給が断たれている状態でも存在し続けることは便利なようでいて、何かと不都合が多い。鍵次が格納庫に向かっているのもその辺りに起因する。

エーテルを介した出し入れの出来ないゲーティアは、とかく場所を取る。そして他のメガロスよりも故障の頻度が高い。それこそ通常の機動兵器と変わらない。そもそもレメゲトンはこのゲーティアを全面的にバックアップするための組織だったことから、ゲーティアのメンテナンスがメガロスにしては煩瑣であることを逆説的に示している。

何かと気苦労の絶えないゲーティアは、作戦前に隙あらば確認しなければならぬ事項がごまんとある。他の魔術師連中のように宴会紛いに騒いでもいられないのだ。なにせ通常の確認作業すら煩わしいというのに、今回は新兵器が搭載されているのだ。

格納庫に出た鍵次は、ゲーティアの巨体を仰ぎながら歩いていった。そんなゲーティアの背中には、新たな装備が装着されている。

それは以前落とされたパウロスを改修して造られたエーテルスラストである。スタビライザーを収納できるようになっており、バックパック程度の大きさでメガロスほどの物体を航行させることが可能だという。

急造品ではあるが、今回の戦闘は航行能力が必須になる。途中までなら輸送機にて空輸してもらえ、そこから迎撃された場合、あとはメガロス単体である島に乗り込まなければならない。その場

合、海の中を移動するよりは、空から向かったほうが迅速だ。それに恐らく出てくるであろうハジャに対して、空が飛べなければ戦いにすらならないのは以前に鍵次が身を以もって理解したことだった。問題は本当に急造品で、テストを行っていないということだけだ。

「間に合ってよかった、のかなあ……」

正直なところ、稼動試験云々を抜きにしても考えても、まだ鍵次は覚悟を固めきっていない。娘であるノンネが被った被害を考えればやはり腸が煮えくり返り、イガーサに加担する者共の首を片っ端から捻じ切ってやりたいと思える。その一方で、未だ目の覚めないノンネを置いていっていいのか、と問う思いもまた存在する。

娘を守れなかった時点で、養育費の支払い義務を捨てた時点で、はたまたメデイナと離婚した時点で、とっくに鍵次は父親ではなくなっていたのかもしれない。そう考えてしまえば、いつそ楽だ。四十間近だというのに未だ幼稚な自分の性情の、逃げ道を作ってもらえた気になってくる。

ならば、とことん逃げよう。以前と同じように、遠ざかるう。それで一応はうまく回っていたのだから、これからもそうするべきだ。文字通り逃げるようにして、鍵次はゲーティアのコクピットへと滑り込む。朝までここにいれば、あの同窓会には巻き込まれないで済むだろう。

マジア・ポレモス：？

明けの明星が輝き始めた頃、レメゲトンの基地から一機の輸送機が飛び立った。カーゴスペースに載せられているのはゲーティア一体だが、それは実のところ、総数二十体に及ぶメガロスの大隊と換算して相違ない。

召喚魔術をかつてのようには使えるまでになった鍵次だったが、ゲーティア以外の部品まで転送・召喚することは難しかった。予めエーテルスラスターを付けずに発進したならば、鍵次は空の飛べない状態で戦場に放り出されることになる。その上、万が一ゲーティアを呼び出せなかったならばそのまま水面に叩きつけられ、四散することになるだろう。予めエーテルスラスターをゲーティアに着けて輸送してもらえば、あとは落としてもらうだけがいい。

他の魔術師は輸送機内で待機だが、鍵次だけはゲーティアのkokピット内での待機が義務付けられている。他の魔術師はその場で自分のメガロスを構成するだけでいいが、鍵次の場合は乗り込む手間が掛かる。ならば多少不便でも最初から乗っておいたほうが安全だろうとの判断だ。

敵には未だ超遠距離戦闘の専門家であるティラトールがいる。装備を中距離装備に換装していたとは言え、超遠距離砲撃がやってくる危険は常にある。それほどにティラトールの魔術砲撃は驚異なのだ。

他の魔術師も鍵次がそれ以上に緊張している。つい数時間前までの宴会などまるで意中になく、ただ戦場へ赴くための精神状態のメンテナンスに余念がない。

「久しぶりだな。この空気」

戦場へと通じるまでの、日常と非日常の間。魔術師の住まう場所と、そうではない場所。今まさに彼らはその境界を渡っている。

張りつめるのか、それとも緩むのか、どちらともつかない曖昧で危うい雰囲気をおおしむように、カーターは背を伸ばして深く息を吸った。米軍の特殊魔導部隊という、魔術師の職においても特に苛烈な部類に入る仕事に従事していたカーターにとって、この空気はほかの魔術師たちよりもなじみの深いものなのだろう。隆々とした筋肉を揺すりながら鍵次の横――ゲーティアのコクピットの端に座っている。

まだ作戦区域にさえ入っていないため警戒態勢ではなく、鍵次、カーター、デュルタル、レヴィは開かれたゲーティアのコクピットを囲むように屯っている。緊張の中にまだ弛緩を残している。それとも残っているのは、数時間前までの宴会で呷った酒の類かもしれない。まだ四人は世間話に興じるだけの余裕があった。しかし言葉を交わすのは鍵次を抜いた三人ばかりで、昨日に酒を入れなかった鍵次はシートに背を預けて物思いに耽っていた。

ノンネと離れて意気消沈するかと思いきや、刻一刻とイガーサに近づくにつれ、鍵次の体から沸々と何かがこみ上げてくる。顔にこそ出さないものの、今まさに自分の中から魔力が湧き出てくるのがあるありと読みとれる。喜びと言うには醜すぎる。憎しみと言いつたのは綺麗事だ。

単なる魔だ。鍵次の内に巣くう魔が、いよいよもって姿を現し始めたのだ。

この際、何でもいい。いかなるものでも顕現があるのなら、それでいい。とにかくこれを、イガーサの連中にぶつけてやりたい。

「お前、メイナと別れてたんだって？」

自分の魔力の充実ぶりばかりに目が行っていた鍵次は、いきなり振られた話に付いていけずにいた。

「……………ずいぶん昔の話だよ」

正直言って、聞かれてうれしい話ではないし、口にするのも億劫な話題だ。

「俺は今聞いたよ。レヴィから」

鍵次の無然とした答え方が楽しいのか、カーターはその四角く大きな顔のぐわりと歪ませている。レヴィもまた眠るように細めた目を撓ませて鍵次の対応を見守っている。

そういえばレヴィは、メディナとも親交があったのを鍵次は思い出した。レヴィもまたメディナと同じく魔術師の家系に生まれ、幼少の時より魔術師になるべく育てられた、言わばエリートである。魔術師の家系に生まれながら兄がいるために魔術師として大成できなかったメディナにとって、彼女は自分の憧れを形にしたようなものだ、いつかに話してくれたものだ。

「でも扱いは戻したんだろ。レメゲトンにいるってことは」

「いや、戻してないよ。あんまり口も聞いてない」

「何だよ、それなのにお前、別れた女房のいる職場に戻ったのか？」

「戻されたんだよ、無理やり」

「断ればいいだろう」

全くカーターの言うとおりだと、鍵次は観念するように諸手を上げて同意した。断れるものなら、すっぱりと断りたかった。

「娘を、人質にされたんだ」

今となつてはそれもブラフだったと分かっているが、当時はそんなことなど見抜けず、まんまと志田の口車に乗ってしまった。

正式に契約が交わされてしまったあとでは詮無きこととはいえ、頭に血が上るのは否めない。それがまた魔力となつて力を宿すというのも、魔術師イーメガロス乗りらしい皮肉だ。

内圧を高めつつある鍵次の肩が、ふいにどさりと強くたたかれる。見上げればカーターが太い笑みを向けていた。

「それだけの価値が、お前にあつたってことじゃないか」

一瞬、きよとんと顔から表情の失せた鍵次だったが、すぐにくふりと、力なく笑った。

根っからの楽道家であるカーターは、本当に何事も積極的に解釈

してしまう。その精神はいかなる絶望的な状況でも快活な魔力を呼び起こし、数多くの作戦行動にて多大な戦果を上げてきた。

そんな彼だからこそ、今回のイガーサ強襲作戦にてリーダーを務めることになったと言える。

「そうか。そうとは思わなかったな」

「お前、そんなことで悩んでたのか？」

「そんなことって……いやあ、それだけじゃないけどー」

「娘さんのことですね」

デュルタルが小さく、それでいて鋭く割り込む。大人しそうで霸気のない見た目から寡黙で誠実そうなイメージを相手に与えるデュルタルだが、実のところ人の噂を聞くのも話すのも大好きという下世話な性格を持っている。

それが高じてが、ドイツの魔術師管理機関は各国の諜報機関とパイプが特に太い。

「娘さん、この前の戦いに巻き込まれたそうですね。まだ治療を受けているから、それが気がかりなのでしょう」

どうやら鍵次の娘のことまで承知しているらしい。しかし肝心なところまで掴んではいないようだ。

「そうだな。父親なのに、娘を助けられなかった。それが気がかりなんだ。俺は、父親なんかじゃない」

どこかおどけた風に言っつて、鍵次は肩を竦める。こうして人に話せる程度には冷静に見計れるようになった。

「じゃあこれからイガーサの連中を倒して、父親らしく娘を守つてやつたらいいさ。そしたらお前は、父親になれるだろ」

うん、それがいい。自分で勝手に納得しながら、またもカーターは鍵次の肩を無遠慮に叩く。それを嫌がるでもなく、鍵次はまたも放心したようにカーターの顔を見上げていた。しかし今回は、驚きから来る空漠ではない。重大な示唆を得たが故に、外に視線を向けていられなくなったのだ。

そのような発想は、鍵次の中に微塵も浮かんできたりはしなかった。父親というのは一度放り出したらそれで終わりだと、そもそも自分にその素質が備わっていたかすら怪しいとさえ思っていたのだ。ならば取り戻せるなどと、どうして思いつけるのだろうか。

しかしカーターの言葉に気付かされたのも事実だ。もう自分は父親になれないと、勝手に思っていただけに過ぎない。

やはり一人で考えすぎると、人は気をやってしまうらしい。

「そしたら、かあ」

ようやく視線を思索から戻し、甚だ自信なさげに鍵次は呟いた。

口にすれば少しは実感も沸くかと思っただが、彼はそれほど素直な性情を有してはいなかった。

今はそれでいい。実感などなくていい。今は、希望が提示されただけで十分だ。

「なれるかな？ 俺が」

「難しく考えるな。ただ愛してやればいい。抱きしめてやればいい。それだけで十分だ」

大きな顔で何度も頷きながら、カーターは鍵次の肩を叩いた。自身も五人の養子を育ててい彼だからこそ、納得させるだけの力ある言い方が出来たのだろう。

「ありがとな、カーター。気が楽になった。帰ったら、そうするよ」

カーターに礼を言い終わると、カーゴスペースの天井スピーカーから慌しい声が漏れ出てきた。

「敵影確認。魔術師は直ちに出勤してください。繰り返します」

「おう。とうとう来たか」

カーターは二メートル近い巨体でひらりとゲートティアから飛び降りると、すぐに降下口へと走っていった。

「待ってくださいよ。カーターさん」

デュルタルはそれに追いつこうと、運動不足の体で何とか後に続いた。

「それじゃあ、私も行くところかしら」

レヴィは猫のように大きく伸びをすると、ゲーティアの腕を滑り降りていった。鍵次もコクピットで

「鍵次！」

下に降りたレヴィが、声を張り上げた。呼ばれた鍵次がコクピットの脇から覗くと、

「死なないですよ。ちゃんとメディナと投げ戻しなさいよね！」

なかなか無茶な注文だが、ここでそれをいちいち覆すほど鍵次も野暮ではない。

「分かった、そうするよ！ お前も死ぬなよ！」

そうして言葉を交わしてからは、レヴィは振り返ることなく颯爽とした足取りで降下口へと向かっていった。

「ゲーティア、降下準備に入ります」

ようやく自分の番が来たかと、鍵次は待ちわびた心地で通信に答えた。

「ゲーティア、起動開始する」

「起動を確認後、降下を開始します」

「いや、降下中に起動させる。このまま落してもらって構わない」「了解。ゲーティア、降下」

固定ハーネスが爆ぜ割れ、ゲーティアの体がレールに従って滑り降りる。メガロス一体をぎりぎり収容できる程度のスペースである。滑り出したらすぐに足が浮遊感に襲われ、コクピット内は一面の青空に包まれた。

周りを見れば、既に降下した魔術師達が各々のメガロスを呼び出し、近づいてくる敵を迎え撃つべく準備を始めていた。

「行くぞ、ゲーティア！」

循環器系にエーテルが送り、各部位を励起する。鍵次の神経とリンクしたゲーティアは、器用に体を捻って敵方へと体を向けた。

「パウロス？、起動！」

叫ぶと共に背中へ意識を集中する。鍵次の意識と同義であるエー

テルが増設巡航ユニット『パウロス?』に流し込まれ、彼の意のままに変形し、翼とスラスターを展開する。

まずは起動に掛けた時間の分だけ落ちた高度を回復すべく、ゲイティアはぐつと頭を上に向けた。自然、背中のパウロス?の機首も鋭く上を向く。

エーテルブースターが放出した燃烧ガスが、ゲイティアの巨軀を斜め上に引き抜いた。

「うおおお!？」

予期せぬ加速に目を回しながらも、鍵次は何とかゲイティアを立て直して味方を縫うように進んでいく。

形こそ小振りだが、パウロスと同じだけの性能を実現しているようだ。

「鍵次! 早く持ち場に付け!」

カーターの怒鳴り声を受けて、すぐさま味方メガロスの群にゲイティアも加わる。

「敵影はハジャと確認。数五十。未だ増加中。相対距離およそ五千。いずれも有人機にて疑似直感的操作を搭載。楔型陣形を取りつつ巡航形態にて接近。兵装はエーテルマシンガン二機搭載の標準型が三十。大型エーテルガン一機搭載が二十。スラスター増設型が十」

今度はデュルタルの音がコクピットに響く。まだ敵方が芥子粒ほどにしか見えない状態での細かな分析は、彼のメガロスである『モノリス』の面目躍如である。

分析と諜報に長けるといふ、メガロスの中でも異色の作りであるモノリスの広域探査術式『オールドニング・ヴァイスハイト』は、本来のメガロスなら半径十キロメートル圏内ほどでしか行えない探査及び分析を、およそ半径一万キロメートル圏内まで広げることが出来る。

相手の詳細な情報が戦いを優位に進めるのに必要な事項であることは、魔術師にとっても変わらない。

二十体近いメガロスの集団の後方に浮かぶ円柱に、幾つもの光が静脈のように複雑に走る。機能も異色なら形も異色のモノリスは、高さ五十メートル、半径二十メートルほどの円柱形をしている。関節などのアクチュエーターを一切廃し、純粹に諜報と探索の魔術だけを内蔵している。

ある種もつともシンプルにモジュール化されたメガロスであるとも言えるモノリスは、装甲表面にこそ満載している各種レーダーを走らせる。

「敵影、中央に集結。いけますよカーター」

「よし。全員散開！ 半分に減らすぞ！」

カーターの下知を受けて、メガロスたちは互いに大きく距離をとって散らばる。そして全員が、エーテル循環器系をフル回転させ始めた。

自身が持つ最大射程の魔術にて先制する。単純だが非常に強力である。何せ二十体以上のメガロスによる魔術を一方的に被ることになるのだ。

「天開け、この上なき輝きなる目の眩む光ありて、我が頭脳全体に流れ込みたり！」

レヴィのメガロスであるスキウイアスが、長大な魔杖を高々と掲げる。女性型らしくほっそりとした機体にローブのような装甲を被るその姿は、まさに正統の魔術師らしい出で立ちである。

魔杖の先に着々と光を漲らせ、レヴィは呪的高揚を高まらせていく。

他のメガロスも似たようなもので、自らの体から迫り出した砲身にエーテルを充填させていたり、火やら水やら雷やらを溜め込んでいる。

賀茂栄修の駆る朱雀は浮星を集結させ、巨大な花卉を形成している。一つ一つが小さなエーテル加速器である浮星三十個分が朱雀から分け与えられるエーテルを高速で振り回している。

ゲーティアはエーテルの純粋な球体を左手に形作り、エーテルバスターを放つ準備を進めている。他の魔術師たちのように複雑な魔術を行使したくとも、右腕の喪失がそれを許さない。生のままのエーテルを左掌に集中させ、凝縮させておくことしか出来ない。

「総砲撃までカウント。五、四、三、二、一……」  
「発射！」

その瞬間、光と音が途絶えた。そのようにしか認識し得ない、膨大な魔術が空間を蹂躪した。

極太のレーザーとビームが、火炎や氷や雷撃が、名状しがたい力の塊が、純粋なエーテルがフリースランド近くの上空で炸裂する。その全てを凝縮された空域は、閃光と爆煙に包まれる。

そして数秒後、ようやく空気を伝播して轟音と衝撃波が訪れる。穏やかだった海面はにわかには白い波濤を立て、すぐに国連軍の戦艦を飲み込むほどの大波が四方に広がった。爆心地に近いフリースランドは、その海岸線が大きく後退している。数々のエネルギーが競合し相反した結果として現れた熱エネルギーが、島の形を変えるほどにごっそりと地面を抉っていったのだ。

核爆発にも匹敵する二十あまりの魔術は、この地球上で行なうことすら危ぶまれるほどの破壊力であった。イガーサ討伐という大義名分がなければ各国からの批判を免れなかつただろう。しかしそれだけの魔術を行なった彼らに、残念ながら気を抜く暇などなかつた。「敵影、二十、いや二十三。後続がどんどん到着しています」  
「半分以上減ってるなら上出来だ。総員、近接戦闘準備！」

撃ち漏らしのハジャが巡航形態で突っ込んでくるのを、今度こそ迎え撃つ。近接戦闘を行なえるメガロスは各々武器を取り出したり、先ほどまで取り出していた遠距離攻撃用の兵装をしまいこみ、スラストターを吹かして散開する。

ゲーティアも遅れまいとしてパウロス？のスラストターから爆炎を吐き、近接戦闘組に加わる。エーテルバスター以外に遠距離攻撃が

ないのだから、明らかに接近戦にしかゲーティアに活路はない。

最初に来たのはデュルタルの言っていたスラスター増設型の三体。七本だったスタビライザーまで倍に増えており、朱雀顔負けの刺々しさである。

速度も機動の自由度も段違いのそれらが、三体で編隊を組んでやってくる。

マガア・ポレモス：？

増設したスラスターの威力を見せ付けるように、複雑に入り組みながら接近する。既に巡航形態を解いたというのに、その速度には殆ど変化がない。つまりスラスター増設方は巡航形態と同等の速度を保ちながら、人型形態らしく三次元空間を十二分に活用した戦闘を行なえるということだ。

スタビライザーの先から白い帯雲をたなびかせて、ハジヤは列を組んでのエネルギーマシンガンの水平射撃を行なってきた。両腕に二門ずつ備えられたマシンガンの弾幕が、近接戦闘を得意とするメガロスたちに真つ向から浴びせられる。

他のメガロスたちが防ぎ、あるいは避けるなか、何を思ったのかゲーティアが一人で前に出た。

「鍵次、勝手に出るな！」

全体の指揮を行なっているカーターの怒鳴り声に目を瞑り、パウロス？のスラスターを全開にして一直線に突っ込んでいく。

愚行の誇りを免れない突っ込みだが、鍵次とて勝算がないわけではない。他の魔術師たちと違って、鍵次は一度ハジヤとの戦闘を経験している。その経験の蓄積が、明らかな勝機を叫んでいた。

ならばもう彼は、前へ出るしかない。

目の前に、赤く刺々しいエラヒストスの機影が迫る。音速に近しい速度で動けるハジヤに向かっていっているのだから、相対速度はさらに跳ね上がっている。霞んでしまいそうなほどの高速機動の最中であって、それでもスタビライザーから伸びるエネルギー刃の輝きは目の眩い。それだけ視認できれば、あとは勘と経験を活かすのみ。数え十四本のエネルギー刃の中へ飛び込むかと思われたゲーティアだったが、僅か接触するかどうかの間際に切り返し、上空へと退避してしまった。

いきなり仲間が一機減ってしまふことにならず、安心に肩を撫で下ろすカーターだったが、すぐにその目は驚きに剥かれる。

ゲーティアが激突しかかったハジヤのほづが、背中から煙を吐いて切り揉みのまま海面へと落下していった。

「おいデュルタル。今何が起きた!？」

思わずカーターは観測班のデュルタルに問い質す。すると彼もまた少しばかり息を荒げて答えた。

「恐らく、蹴り付けたのでしよう。すみません、よく観測出来ませんでした」

どうやら退避したと思われたその瞬間に、ゲーティアは一撃を加えていたらしい。音速で迫る相手に自身も突進しながら、絶妙の見切りで寸前に切り返し、僅かに背中へ蹴りを入れる。

互いに高速で運動しているのだから、たとえ僅かな接触とはいえ甚大なエネルギーを帯びることになる。それが元より脆い設計のハジヤにゲーティアのエーテル合金が当たれば、どちらが打ち勝つかは明白だ。要するにあのハジヤは、音速でゲーティアの装甲に突っ込んだのと同義なのだ。

高速機動を旨とするハジヤの特性を逆手に取った対抗手段だ。強力な魔術など行使しなくとも、高速の機動を見切り、僅か機体を接触させる技巧を有していれば、ハジヤなど恐るるに足らない。

言うには易いが、行なうは難い。事実カーターは、その戦略を行なえる自信がなかった。

この戦略は、高速機動を見切る感覚が大前提である。無論、魔術的な手段で人体の視能力を向上させることは可能だが、それだけでメガロスやエラヒストスの高速機動は見切れるものではない。そこには勘、経験からくる予測と、自分の思い通りにメガロスを運動させる器用デクスタヒリティが必須になってくる。

つまりは魔術を用いずにメガロスやエラヒストスと戦い、メガロスを数ミリ単位で運動させるほどの技巧を持つ鍵次だからこそその芸

当と言えた。

恐らくは先のハジャとの戦闘で、その傾向とタイミングを体得していたのだろう。でなければあのような無謀な行いが出来るわけがない。

「腐っても、最強か……」

小鍵が無くなったことで、カーターは正直言っただけでゲイティアは戦力としては過小に評価していた。他の魔術師たちとてそれは同じである。七十二の精霊を自由自在に操り、魔術の封印と開放を司る兵装は、まさに最強のメガロスに恥じない威力を有していた。

しかしそれはどうやら、ゲイティアの一側面に過ぎなかったということを、今さらカーターは思い知らされた。

どれほど強力な兵装を積もうと、大規模な魔術を行なおうと、それを操るのはメガロスに乗っている魔術師自身なのだ。魔術師の資質次第でメガロスは強くも弱くもなる。

ゲイティア、もとい鍵次は他のメガロスや魔術師と違い、それとことんまで突き詰める必要があった。彼自身は魔術師ではなく、大規模な魔術など行なえない。行なえたとしてもそれは、ゲイティアに備わっている兵装を前提としたものに限られる。

ゲイティアの最強は兵装だけでなく、魔術師ならぬ身で魔術師同士の戦いに身を投じなければならなかった一高校生が、苦悶と窮地の狭間で編み出した操縦技術にこそ支えられていたのかもしれない。「全機、ゲイティアに続け！」

まずは一機落としたゲイティアを皮切りに、他のメガロスも負けじと前が出る。

ゲイティア、朱雀と並んでレメゲトンの預かりであるメガロス『胴太拔』は、草摺型の腰部スラストから噴煙をはためかせ、腰の鞘から刀状の兵装『斬魔』を取り出す。

「わしの斬魔と貴様らの破邪、どちらが上かのう！」

齢六十近いベテランの魔術師である染岡佳辰は、そめおかかしん凄絶な笑みを浮

かべながら大型エーテルガンを搭載したハジヤに切迫する。

当然、その身を銃口へと晒すことになった。既に充填を済ませてあるエーテル粒子が、極太の柱となって吐き出される。

スラスターの方向を変え、急制動をかけた胴太拔は機体の前に斬魔を掲げる。しかし刀一本では、巨大なメガロスの全身を覆うには至らない。

「受ける、斬魔！」

染岡の喝を受けて、斬魔が励起される。漲るエーテルが刀身から浮かび上がって、湯気のように立ち昇っている。

そこへ無慈悲なまでの迅速さで、エーテルバスターが襲い掛かる。斬魔から立ち昇る刀気も、胴太拔の体さえも飲み込んで進む。

しかしどれほど経とうとも、光は胴太拔のいる辺りで止まっている。とつくに装甲も機構も焼き払われているはずだというのに、エーテルバスターは胴太拔の手前　斬魔の位置にて完全に減衰してしまっている。

「ぬおおお」

刀でエーテルバスターを受け止めながら、胴太拔が前進する。滝を昇る鯉のように、エーテルの流れを辿ってハジヤの許へ向かう。

「せや！」

とつとう懐に入った胴太拔が、エーテルバスターを防いでいた斬魔をそのまま横に尻ぐ。大型エーテルガンごと、ハジヤの脚部を切断する。頑強なエーテル合金で構成されたそれらに対して、まるで豆腐に沈む箸のような気軽さで斬魔が侵入していく。

寸前にハジヤが離脱していたことで機能停止には至らなかったが、大幅に弱体化させることが出来た。

すかさずフォローに入るもう一体のハジヤから放たれたエーテルマシンガンを、胴太拔は再び斬魔を掲げて掻き消し、刃囲に捉えるべくスラスターを吹かす。

エーテルバスターを無効化し、エーテル合金を易々と断ち切って

みせた芸当は、特殊質量兵器『斬魔』の術式を十二分に發揮した結果だった。

斬魔は単にエーテルによって編み込まれているわけではない。刀身の内部に大型の解呪装置ディスベレイザーを搭載している。しかもその威力は軍用モデルの比ではない。刀身から一メートル周囲のエーテルならば、例えエーテルバスターほど加速されたエーテル粒子や高密度のエーテル合金さえも結合を解き、消し去ってしまう。

メガロスである胴太拔もまたエーテルによって構成されている以上、扱いには細心の注意が必要だが、理論上エーテルで構成されているものなら装甲や魔方陣も断ち切ることが可能である。対メガロス・エラヒストス戦闘においては攻守共に多大な効果を發揮する。「しぶといが、今のゲーティアでさえ落とせたのだ。わしにやれん道理はなかるう」

手応えを得た染岡は、さらにハジヤを追って前に出る。

「よし。俺も行くぞ！」

カーターもまたメガロス『ランバック』を揺すり上げ、肩部装甲を召喚する。増設された肩は大きく円形に膨れ上がり、まるでアメリカンフットボールの防具を誇張したようなデザインである。

「ファーストダウンだ。道を開ける！」

オープンスピーカーを受けたメガロスたちが、ランバックの正面から一斉に離れる。残されたのは離脱し損ねたハジヤたちだけであった。

「レディ……ゴー！」

気合の声とともに、ランバックが爆発した。そう形容できるほど瞬間的にスラスタを全開まで吹かしたのだ。

前方に押し出されたランバックは先ほど呼び出した肩部装甲を迫り出し、ハジヤへと猛進していく。当然警戒したハジヤは退いて距離を置こうとするが、それさえもカーターの思惑のうちであった。

「ランバック、ファーストダウン！」

半球状をした右の増加装甲の淵が開き、中にある噴射口が高速で

回転を始める。とぐるを巻くエーテルの光が密度を増して、ランバツクの体を巨大な流星と成してさらに速度を増す。

高速の機動でランバツクの突進を避けたハジヤを、回転するエーテルの尾が撫でていった。胴体の中ほどへ直撃したエーテル流による擦過で装甲はおるか構造部までをも削ぎ取られ、上半身のみがスラスターで上空へと引っこ抜かれていった。

ランバツクの生み出すエーテルの渦は遠心力と衝撃波でさらに広範囲に広がり、大きく避けたはずのハジヤたちを巻き込んでいく。

エーテルスラスターと同じ原理をもつ大型のエーテル流発生器を突進と共に使用し、周囲を薙ぎ払いながら進むランバツクの必滅兵装『ファーストダウン』である。

戦端は完全に開かれた。あとは魔道秘術の限りを尽くして押し潰すのみ。

三体の活躍に他のメガロスたちも喚起され、近接戦闘を得意とする魔術師たちがさらなる魔術を執り行う。

近接戦闘組が攻め進む一方、レヴィやデュルタルのような後衛組にもハジヤの攻撃が届き始めていた。

その内の一体、太陽を背に直上を取ったハジヤが、モノリスめがけて急降下を開始する。大型スラスターに重力落下の勢いも加え、弾丸のように落ちていく。

モノリスのように策敵に特化したメガロスが目となり、他の強力なメガロスが手足となる。一騎当千のメガロスを団体で運用するに当たっては、このような策敵や諜報専門の機能を持つメガロスが不可欠となる。その広大な視野でもって、かろうじて種々様々で個性の塊でしかないメガロスという理不尽を、一つの方角へとまとめることが出来る。

逆説的に言えば、目さえなくなればメガロスの軍団など単なる烏合の衆。元より団体行動をするようには出来ていないだけに、あとは個々の力を振るうだけに終始する。

メガロスのそれぞれが驚天動地の秘術を宿す魔の集合体だが、それが隊列を組んで侵攻するのに比べれば確固撃破に持ち込めるだけ易いというものだ。

左前腕部に内蔵しているエーテルマシンガンの銃口を突き出す。これで当たれば良し。避けられようとエーテル刃で切断するか、直接体を当てて誘爆に巻き込む。

捨て身の決断に躊躇はなく、ハジヤのパイロットはモノリスただ一体めがけてエーテル粒子を迸らせた。

「Sci vias Domini」《主の道を知れ》

突如、空間に何かが響いた。そこに魔術の作為を感じたときには、ハジヤのパイロットの視界は完全なる暗闇へと転じていた。モニタ―が、ではない。彼の認識が黒く染まってしまっている。目を開いても閉じていても、景色は同じ黒塗りではない。

搭乗者の視界だけに暗闇を投影するほどの複雑な術式を、仮にもエラヒストスに乗っている状態の人間だけを狙い撃ちにするほど精密に行使用するなど完全に埒外の所業である。

堪らず急制動をかけた途端ハジヤのパイロットが被ったのは、全身を揺さぶられるような衝撃であった。

機体のどこかに致命的な損傷を受けたのが分かって、彼にそれを確かめる術はない。間を置いてやってきた爆発の熱風を肌と感じたのを一瞬のこと、黒く染まっていた視界は真の意味での闇となつて、彼の意識は体と一緒に焼き払われた。

マギア・ポレモス：？

スキウイアスの魔杖にてハジヤのコクピット薙いだレヴィは、悠然とした航行で他のメガロスの列に加わっていく。

突如としてモノリスに下降してきた敵の狙いにレヴィや他の魔術師も肝を冷やしはしたが、単機というのはやはり無謀と言わざるを得なかった。モノリスのような策敵専用メガロスを軸に戦うメガロス集団戦闘では、その目を狙うのが必定。

だからこそ、備えておく。強力なメガロスを周りに侍らせて守る。スキウイアスによる『フォスフィン眼閃』は、あらゆる生物の認識 主に視界を暗転させる感染魔術の類である。しかし高い恣意性を持つ代わりに、発動が遅く照準もルーズになりがちである。それを補うのもまた、モノリスの存在だ。

迅速に、確実に、正確に敵性を判定するモノリスの策敵能力があるからこそ、エラヒストスのコクピットヘダイレクトに魔術を行使することが出来たのだ。

「助かりましたよ、レヴィ」

「こちらこそ。相変わらず正確な情報ね」

「それが僕とモノリスの取り得ですから。さあ、一キロほど前進しましょう。彼らばかりに戦わせてはいけない」

デュルタルの支持で後衛を務める十体のメガロスが徐に前へ出る。戦線を押し上げるメガロスの集団に、赤いエラヒストスが殺到していく。

漸う後衛組も本格的に戦列に参加し始めたころ、鍵次は敵陣深くの雲海を掻き泳いでいた。

全周囲モニターの後ろへ目をやれば、四体のハジヤが控えている。

せめて速度が特に強化されたスラスタ増設型がないため、まだ追いつかれずにいる。

刹那、後方からざらりときつい光芒が垣間見えた。咄嗟にパウロス？のフラップをばたつかせ、大きく右へ旋回する。その足先を光の粒がかすめ、がくりと機体が揺らぐ。

先ほどからこの繰り返しである。完全に後ろを取られた形のまま、ひたすら尻を巻いてドッグファイトを演じる羽目となっていた。

高度六千メートルの空に二条の筋雲が伸びる。そのあとを複雑にのたくった雲が追う。比較的直線的に飛ばなければならぬゲートイアを逃がさんとして、入れ替わり立ち代り範囲を広く取って追い詰めていく。ハジヤのほう明らかに航行距離が長くなっているはずなのだが、一向に引き離せない。

ハジヤの複雑な航行を見て、鍵次の虚栄心が刺激される。本来、メガロスというのは機械的な余剰パーツを付けることはない。機械的な手段よりも、明らかに魔術のほう汎用性が高いためだ。しかしそれは魔術師の理屈に過ぎない。魔術師ではない鍵次や、メガロスとして異質なゲートイアには通用しない。

往年ならば精霊の力を借りて、空など自由に飛び渡ることが出来たはずなのだが、今は欠けた右腕の分だけバランスが崩れ、航行能力に支障さえ出てきている。エーテル圧も相変わらず稼動限界ぎりぎり滞留し、こうして必死にスラスタを吹かしている中、いつアラームが鳴り響くかと冷や汗を禁じえない。

それを防いでくれているのが、パウロス？である。左右に開いた両翼が揚力を生み出している分、ゲートイアは浮いていられる。もしこれを単純なスラスタ噴射のみで賄おうとすれば、アラームによる警告さえ間に合わず、ぶつりとスイッチを落とすようにスラスタが切れて、今にも海面に叩きつけられてもおかしくない。

しかしそれもメリットばかりではない。揚力を得るためには当然、強力な気流を翼に当て続けなければならない。つまりゲートイアは

他のメガロスのように空中で制止することが出来ない。加えて急制動や無理な機動をすればたちまち翼が揚力を失ってしまうため、エーテルスラスターによるメガロスの常識外の機動も封印しなければならぬ。

またも煌くエーテルマシンガンの輝きを受けて、鍵次は眼下の雲海に潜り込んだ。肩の辺りを過ぎ去っていくエーテル粒が曳光弾のように雲中を照らす。

水蒸気が装甲に纏わりつき、ぬめつく水の感触が鍵次の体にさえ顕される。そして心なしか、機体が重くなったように感じてしまう。ばふりと布をはためかせるような音が、やはり後方から来る。さらに雲の粒を蒸発させて、エーテルの粒が放たれる。左右の斜めに二体、真後ろに二体、それぞれが二門ずつのエーテルマシンガンが銃口炎を吹く。

「ぐあつ！」

四方向から呼び交うエーテル光がゲーティアの機体を捉え始め、堪らず鍵次はフラップを互い違いにしてぐるりと半回転し、ちょうど背泳ぎのような格好のまま左掌からエーテルを滲ませて弾雨を防ぐ。

わざわざ機体をマシンガンに向けたのは、一重に背中中の巡航ユニットであるパウロス？を守るためだ。ゲーティアと同じくエーテル合金で出来ているとはいえ、メガロスのそれとパウロス？のそれとは剛性が雲泥の差である。

それでいてパウロス？が故障すれば、鍵次とゲーティアは高度六千メートルから海面に叩きつけられることになる。自重を浮かすことさえ出来ない鍵次では、その衝撃を防ぎきれないという保証がない。ならば必定、鍵次はパウロス？を守るためにゲーティアの機体を晒すしかなくなる。

「この、落ちろ！」

悔し紛れに放ったエーテルバスターが、仄明るく雲間を照らしな

がら遠ざかっていく。着弾の手応えは、もちろん無い。

しかし包囲の一角を崩したので、その間にさらに低空へと逃げる。急激な高度の変化を受けて、両耳が締め付けられるように痛む。さらに旋回のGに体が引つ張られる。希薄なエーテル・シヨックアブゾバーが、それらの影響を幾分か鍵次に伝えてくれる。その度に腹の底が揺さぶられ、空にしておいたはずの胃から何かを戻しそうになってしまう。まさか眼下に広がる太平洋の景観を楽しむ余裕など、彼にあるはずもない。

鍵次が十分な状態だったなら、昔と一緒にだったなら、パウロス？も必要ではなく、ドッグファイトに甘んじることなかったはずだ。そのどれもが自分の未熟、怠慢、脆弱を浮き彫りにして見せ付けてくる。

「くそつ、くそつ！」

せめてもの反骨心を掻き集めて悪態をついたときだけ、くんとエーテル圧を示すメーターが上がる。だがそれも長くは続かない。すぐにまた下降を示し、稼動限界の辺りをうろろると彷徨い始める。

このままでは全く埒が明かない。反転して真っ向から迎え撃ちたいが、その方法で五体あまりの敵を落としたのがまずかった。すでに鍵次の戦略を相手は了解し、速度で勝ろうとも決して近づこうとはしなかった。

おかげで攻撃を受ける危険がぐっと下がったが、その代わりにこうして雲の中で嬲られている。

またもエーテルマシンガンが火を吹く前に旋回しなくては。敵の照準から逃れるために先手を打とうとした鍵次の耳を、強かに叩く声があった。

「小中さん、そのまま真っ直ぐ、お願いします」

「賀茂くん!?」

旋回しようとした機体を無理やり持ち直し、鍵次はその通信を反

芻した。

「それじゃあ良いのだ。今度こそ落とされちまう！」

鍵次の訴えに、コクピット内のスピーカーは何も返さない。ただ自分の荒い呼吸が大海をまるごと映す球体のなかに木霊する。

その息遣いすら消し去りたくなるような静寂が、耳に痛い。スラストターの噴射音。巨大なメガロスが風を切る音。激しいエーテルの炸裂音。戦場に溢れる音はむしろ供給過多で、鍵次の耳は拾おうとしない。ただ自己を規定する呼吸の音。これはどうしようもないほど、この場でオリジナリティを主張している。

そんな目立つものを持つていたら、敵に居場所がばれてしまう。正確にこの場所を、撃ち抜かれてしまう。

詮無き妄想とはいえ、それを鑑みる猶予など鍵次は持ち合わせない。そんな考えは幻だと断じられる平静な心など待つことなく、後方から追ってくるハジヤの群れが両腕を前に突き出した。

四体、計八門からのエーテルマシンガンによる集中砲火。今まで何とか切り抜けられてきたが、いつまでも幸運が続くとは考えがたい。

（賀茂くん、まだなのか？）

被捕捉警告音が鳴り響くなか、それでも鍵次が旋回を行なわなかったのは、先ほど受けた賀茂栄修からの通信に縋っていたためだ。

あの言い切り様は、何かを期待させるに余りあるものだ。まさに撃ち落されんとしている鍵次には、否が応でもそれが感じ取れていた。

今、自分に出来ることはない。万事をゲートアと、賀茂に投げ渡すのみである。

端末に添えた手が震えてしまいそうになるのを、歯を食いしばって耐える。賀茂を信じたい自分と、すぐに旋回したい自分とが、顔面の肉を引き合っている。

その緊張をぶつつりと断ち切ったのは、四つの重なった爆発音だ

った。

爆風に押されるなか、何とかゲートティアの姿勢を持ち直し、元の巡航力を保持する。その横に悠々と並んだのは、先ほどの通信の主

賀茂栄修の操る朱雀であった。

「浮星<sup>うきつ</sup>たちを追いつかせるのに時間がかかりました。すみません」

「いや、助かった。ありがとう」

まっすぐ飛べと指示したのは、狙いを正確にするためだろう。要するに鍵次は囿にされたのだ。とはいえ助けられたことに代わりはないので、そんな恨み言はお首にも出さないでおく。

「この前の戦闘が役に立ちましたね。あれが無かつたら今ごろ……」

「ああ。俺もそれがあつたから、何とか逃げ切れたよ」

先ほど賀茂が行なつた精密な射撃も、これまでの鍵次の逃げっぷりも、以前に権田が乗つたハジャとの戦闘データが活かされたものであつた。

クリティカルイミテーションシステム

クリティカルエモーション

ハジャに搭載されている疑似直感的操作は、メガロスの直感的操作<sup>システム</sup>に匹敵する反応速度を生み出すために開発されたものである。主に外科的処置によって機械と人体を無理矢理に繋ぐという、人道に悖る手段を講じている。

まるで人間を機械に食わせるような設計は、もちろん人の尊厳などとつくに度外視している。そのためか、疑似直感的操作に組み込まれたパイロットは、発狂して行動爆発を起こすか、自らも機械のごとくに自我を喪失するかの二つに大別させる。

今向かってきているハジャのパイロットが全て後者であることは明白だ。発狂していればそもそも敵も味方もなく、ただ暴れ回るだけである。そして自我の喪失したパイロットならば、複雑に判断する思考の余裕など持つてはいない。必然、その行動は命令通りのものに単純化され、須く自明になつていく傾向になる。

行動が単純化されている以上、予測の精度はより高まっていく。すでに権田のハジャとの戦闘経験を蓄積してある朱雀とゲートティア

がうまく立ち回れるのは道理と言えた。

「鍵次、大丈夫か？」

「カーター、気づいてたなら助けてくれよ」

「賀茂がフォローに行ったから放っておいたんだよ。それよりこのままじゃ埒が開かないんだ。作戦を変えるぞ」

「このまま前進してくんじゃないのか？」

「いえ、どうやら見通しが甘かったようです。正攻法では苦しいでしょう」

デュルタルの声が割り込んでくると同時に、ゲートニアのモニターに勝手にウィンドウが開いていく。どうやらモノリスから情報が送信されてきたようだ。それによれば現在戦闘に参加しているハジヤの総数は五十強。魔術総砲撃によって半分に減らしたはずなのだが、すでに数は最初に捕捉した時点まで回復しつつある。

「生産力が異常です。おそらく工業系統の魔術師と魔道技術者を数百人単位で順次生産しているでしょう」

「それだけじゃない。情けない話、ハジヤを落とせてるのはお前らくらいなんだ」

鍵次が落としたハジヤが六体、朱雀が落としたのは八体であるなか、他のメガロスは平均して二体ほどに留まっている。どうやら想像以上にハジヤの高速機動に苦しめられているようだ。そして経験の蓄積分だけ、ゲートニアと朱雀がハジヤに対抗できていると言っていることだろう。せめてもの救いは、メガロス側から撃墜が出ていないことだ。

「だから鍵次、栄修。お前たちでハジヤの生産設備を破壊してきてくれ」

鍵次は、自分でもはつとするほどに顔をしかめてしまった。それほどにカーターの提案は彼の気を滅入らせた。四体相手でさえあの様なのだ。それをたった二人でハジヤの群をかい潜り、あの島に向かうなど自殺行為であることは明白だ。

「分かりました。行きましょう、小中さん」

まるで無理だと反論しようとした鍵次の口が、若者らしく清々しい賀茂の言葉でふさがれる形となった。その勢いに押されて、代わりに他の言葉が転び出てしまった。

「え、あ、お、おう！」

何とか取り繕って応えてみたものの、心の動揺は抑え切れない。自分の意思などとは関係のないところで状況が推移していく感触に心がささくれ立つのだが、これというほど表に出すことが出来ない。

鍵次とてその作戦の重要性は分かっている。カーターやデュルタルの言うとおり、このまま正攻法に持ち込んでも勝機は薄い。ならば誰かが、それをやらねばならないのだ。そして得てして、斯様な役回りは自分のところに回ってくると思うことを、鍵次は経験測から知っていた。

そもそもゲーティアのようなメガロスに乗れる資質があつたことも然り。その後のスライマンとの戦いも、成り行きのままに鍵次は関わらなければならなかった。

朱雀がさっそくフレキシブルバインダーをざわめかせ、一気に飛び出す用意を整えている。

「小中さん、捕まってください。僕が引つ張ります」

差し伸べられた朱雀の手を握り、鍵次は覚悟を決める。ここまでくればまな板の鯉だと割り切り、朱雀がスラスターを吹かすのに備えておく。

「戦術陣形、後光輪」

賀茂の下知を受けて浮星たちが素早く隊形を組み始める。フレキシブルバインダーの間に並んでアーチを成す。浮星のスラスターを全て後方に集中させ、推進力を爆発的に高める形態だ。

ただでさえ鋭角なデザインの朱雀にスラスターの群れが搭載されたその姿は、巨大な槍の穂先を思わせる。そこから生み出されるであろう推進力に、ごくりと鍵次は生唾を呑む。万が一にも手を取り

落とさないよう、左手に加える力をさらに強めた。

その瞬間、景色がぶれた。

発進したのかと思ったときには、鍵次の体はシートに縫い付けられて微動だにしなかった。エーテル・ショックアブゾーバーが全く機能していないのかと思うほどに強烈な高Gは、朱雀の発進時加速によるものだ。

鍵次の額を伝う汗が、横に流れていく。まだこれで発進時の加速に過ぎない。ということはこれからまだ速度は上昇していくと言うことだろう。左手を離してしまう云々などもはや意中にならない。まずこの高Gで体が潰れてしまわないよう、全身の筋肉を絶えず緊張させる作業に手一杯だった。

やはりと言うべきか、どうやらこの世は自分が楽を出来るようには作られていないらしい。それを頭の片隅で薄っすらと感じながら、鍵次はモニターを過ぎていくハジヤの影を呆然と眺めていた。

フリースランドにて：？

赤いハジヤの機影や黄色いエーテルマシンガンの光を抜き去って、朱雀が敵陣のど真ん中を突っ切っていく。浮星のスラスターを全て朱雀自身の推進力に変え、ゲーティアを引っ張っているというのに亜音速で飛行している。

みちり、みちりと、少しずつゲーティアの腕が伸展していく。頑強なはずのエーテル合金でさえその勢いには耐え切れず、中の構造部が少しずつ引き伸ばされてしまう。

構造部の進展は、そのまま鍵次の左腕の関節が引き伸ばされるような痛みとして発現する。ゲーティアの左腕だけでなく、感覚のフールドバックを受けている鍵次の左腕さえも悲鳴を上げている。

だが鍵次はうめき声の一つさえ上げず、大人しくシートに収まって身動き一つしない。左腕の痛みよりも前に、首が折れてしまいうなほどの高Gに耐えるので精一杯だった。

しかも時折攻撃を避けるためか、朱雀は旋回を行なう。それがまた強烈な遠心力を生み出し、鍵次の体を右へ左へ上へ下へと大いに揺さぶってくれる。

もはや喉の辺りまで上ってきている胃液が食道をちりちりと焼いているのが分かっているのに、それを吐き出すことが出来ない。嘔吐するにはまず腹部の力を抜かなければならず、そうした瞬間に内臓がさらに痛めつけられることが目に見えているのだ。

胃液に溺れそうになりながら、鍵次は時折咳き込んで口の端から僅かに黄色い反吐を垂れ流すだけに留まっている。

「鍵次さん、島に着きます」

かろうじて聞こえた賀茂の通信を受けて、鍵次は拡大画像を呼び出す。島の海岸線に設置された二本の滑走路から、巡航形態のハジヤが発進していくのが映されており、その先は人工的に作られたの

であろう洞窟へと繋がっている。

「……あそこが、発進基地、なのか」

「小中さん、大丈夫ですか？」

そう思うなら早く落としてもらいたいのだが、そうすると中途半端な位置で置いていかれるのでとりあえずその言葉は飲み込んでおく。

「あの奥が、生産設備かもしれない。俺が、右を叩くから、賀茂、くんは……」

「分かりました。僕は左を叩きます」

快活な声でエーテル圧が上がったのか、さらにスラスタが噴射炎を太くする。当然さらなる加速が行なわれ、鍵次を見舞うGも増加する。

もはや言葉を搾り出すことも出来ない。ゲーティアをスラスタを吹かしてはいるが、推進力では大幅に朱雀が上回っているため、引っ張られるままに任せてしまっている。

ぐんぐんとフリースランドが近づいてくる。敵もこちらを感知して地对空エーテル砲を惜しげもなく向けてくる。

マシンガンのそれよりも大きなエーテル塊が間近を過ぎても、鍵次に来ることはない。誘導してくれる朱雀がひたすら前進している以上、鍵次をそれに引っ張られて従うしかない。

「小中さん、一気に引っ張られてください！」

応じる間もなく、鍵次の左手から感触がするりと消えていった。

これまで溜めに溜めた慣性の限りを使って、ゲーティアが弾丸の如くに投擲される。向かう先は先ほど発見したハジヤの発進基地らしき洞窟だ。

狙いが寸分違わないのは助かるのだが、問題はどうかやってこの慣性を殺し、軟着陸するかどうかである。しかし鍵次の見立てでは、既にそんな安全策を使えるような猶予はなかった。今残っているエーテル圧の全てを前方へのスラスタに回したところで止まるはず

もなく、よしんば制動をかけたところで対空砲火の的になるだけだ。ならば、むしろこれに乗ってみるのも一手だろう。

ろくに頭の回らないまま、鍵次は徐に懐へ手を忍び込ませ、一葉の写真を取り出す。手垢にまみれたそこに写るのは若かりしころの鍵次とメディナ、そして娘のノンネである。

もう一度、自分がここにきた理由を考える。勿論、イガーサを潰すためだ。権田を苦しめたイガーサを、ノンネを苦しめたイガーサを潰すべく、ここまで来たのだ。

ほかにも理由はあったようにも思える。メディナに会いたくもないから、ノンネの近くにいるのがつらかったから、父親の役目を果たせない自分が恥ずかしかったから、ここまで来れたようにも思う。だがそれらの否定的な理由は、イガーサの拠点を目の前にして都合よく霧消してしまった。

自分で自分を騙すこと、その欺瞞は、メガロス乗りに必須の技術である。そうして自分に都合のよいことにしか頭を巡らせず、最大効率で自分の心から魔力を引き出す。

しまい直すことも叶わず、鍵次ははらりと写真を取り落とす。慣性に従って写真が後ろへ流れていったころには、鍵次の覚悟は決まっていた。

スラスターの向きを変え、空中でゲーティアをくるりと前宙させると、そのまま飛び蹴りの要領で右足を突き出させる。足先からは落下の勢いを止めぬようにスラスターの向きを変え、エーテル流を横に噴射する。足先からのエーテル流は衝撃波に従ってゲーティアを包み込み、さながら光の穂先となって地上へと落ちていく。

こうなれば足の一本と引き換えに、イガーサの基地に壊滅的な打撃を与えることが、せめて鍵次に出来ることだろう。

突き出した足先が空気を切り裂き、衝撃波がコーン状にゲーティアを包む。とうとう音速に近い速度に至った機体を弾丸そのものとして洞窟の中に飛び込ませる。

洞窟の入り口にちょうど迫り出してきたハジヤを踏み潰し、地上にぶち当たった衝撃波がエーテル流とともに洞窟を暴虐なまでに食い荒らす。

破壊はそれに留まらず、鍵次は踏みつけたハジヤの機体に乗りながら洞窟の中へと滑り込んだ。未だに亜音速で移動しているゲートエアが巻き起こすエーテル流はさながらのたくる竜のように洞窟内の設備をなで回し、悉く砕いてしまった。

高速で過ぎるゲートエアのモニターに時折巻き上げられた人間が映り込む。恐らくはイガーサに協力している魔術師か魔道技術者だろう。

もしかすれば権田も、ここで作業していたのかもしれない。ここでハジヤの設計を行っていたのかも知れない。

つつと、ふいに鍵次の頬を一条の涙が伝う。流れたのに気がつく、本当にそんな感情を抱いているように思えてくる。

別段、悲しいことはない。鍵次が悪いこともない。このことに関しては天地神明に誓って恥じることはない。それでも、どこかで悲しんでいる。

エーテル流に巻かれて焼かれたり、破砕された鉄くずに押しつぶされる人々に、権田を重ねてしまっているのかも知れない。鍵次の年の離れた友人であり、世界屈指の魔道技術者であり、イガーサに利用されて敵に回った彼のことを思って、泣いているのかも知れない。

自ら権田に手を下した自分に、泣く資格なんてあるはずもないのだが、それでも涙腺は鍵次を無視して水分を抽出している。

コクピットの中だけ、時間がゆったりと流れている。時間が基地を破砕するまでの数十秒、鍵次は涙に暮れるだけの余裕を持ってハジヤの生産施設を壊滅へ追いやった。

フリースランドの中ほどまで続いていた洞窟の終点まで突き抜けた鍵次は、大きく開いた谷から空を見上げていた。洞窟の天井は全て、ゲートエアの突進で吹き飛んでしまっている。

振り返ればそこは、焼け爛れた谷が海岸線まで続いていた。正常な形を持ち合わせているものなど皆無である。唯一破壊の主であるゲートティアだけが、一片の瑕疵すら負わずその威容を保っている。

鍵次はウィンドウを開いて右脚部を精査する。あれだけの衝撃を受け止めたと言うのに、その機構部には僅かな変形すら認められなかった。

それも当然かもしれない。現在のゲートティアのエネルギー圧は必要分を大きく上回っている。カルツオのティラトールと対峙したときのように異常な運用ではないが、昔と変わらぬ感触であることを鍵次は確かめていた。

希薄だったエネルギー・ショックアブゾーバーはコクピットを満たし、構造部にも装甲にも十分のエネルギーが供給され、本来の剛性を取り戻している。空を飛ぶにはまだ心許ないが、こうして地上にいる限りは存分に力を奮える。

突然の強化も、しかし鍵次にとって驚くに値しない。ノンネの写真を見て覚悟を改めたこと、そして権田との件を思い出したことで、鍵次の生み出すエネルギー圧が高まる条件が揃ったと言える。

これならば、戦える。敵地の只中に至ってようやく、鍵次は自分がようやく往年の水準に達しようとしていることを確信した。

「鍵次さん、すごいですね」

こちらも任を果たしたらしく、谷間の上空を差し掛かった朱雀が急ぎ着陸する。差し伸べられた手を取って、鍵次も谷の上へと上がった。

五キロと離れていない地点に併設された生産設備はほぼそのままの形態を残していたが、所々上がる黒煙が破壊の具合を伝えてくれる。

「これで奴らはもうハジヤを作れない。形勢はこっちに有利ですね」  
ああ、と応じようとしたその時、鍵次の直感とゲートティアの感覚が同時に危険信号を放った。

朱雀の胸を抱えて無理やり飛び退かせると、その位置から寸分違わず爆炎が迸る。

ただでさえ壊滅的な生産設備をさらに抉った攻撃の主は、谷を挟んだ向こう岸に悠然と聳えていた。

「ようやく来たか、ゲートイア！ 待ちくたびれたぜえ！」

まだ若い、耳に痛いほど高く卑小な声。明らかにテイラトールを操る魔術師　カルツォ・スカルツァルピーのものであった。

むしろ鍵次や賀茂のほうが、彼にようやくかと言ってやりたかった。強力とはいえハジヤは所詮エラヒストスである。せつかく魔術師を擁しているのなら、その戦力たるメガロスを前面に押し出すべきだと考えていた。

「お前一人か？ 他にもいるだろ？」

「他、ねえ。俺と導師とイステカーマ以外は、みんなハジヤに乗ったか、お前らがついさっき殺しちゃったぞ」

「ま、魔術師をエラヒストスに乗せたのか！？」

反芻する賀茂の驚きは、鍵次も同じであった。わざわざエラヒストスに魔術師を乗せる。その発想の根拠が全くもって不明なのだ。

「集めたはいいが、どいつもこいつも使えなくてなあ。せめてエラに乗りゃあ、少しは役に立ったみたいだな。こうしてお前らを寄越したんだから」

「まるで呼んだみたいな言い方だな」

鍵次の返事を受けて、きひひとカルツォは愉快そうにテイラトールを揺する。

「まさか実力だとも思ってたのか？ 俺が命令したんだよ。お前には手加減しろ、見逃せてな。そしたら案の定だ。まんまと乗り込んできやつたって寸法だよ」

今度こそ堰を切ったように、島いっばいにカルツォの笑い声が轟く。大口径エーテルショットガンの砲身を拡声器のように高々と上げて、かくかくと四足が波打っている。

ここまででは、敵の罠に嵌められていたらしい。カルツオの言うとおりにまんまと味方本隊と分断されている状況では、申し開きようがなかった。しかして鍵次は、心に何の重圧も感じてはいなかった。思惑に嵌ったところまではその通りなのだが、はたしてそれが敵にとって利するのかは、まだ分からない。

「これでやっと、この前の借りを返せるぜ」

その一言で、むしろ鍵次は安心のために長く息を吐いた。元より魔術師というのは、こういう人種なのだ。大局の勝敗など全く関心になく、ただ己の欲するところを行なう。あるいは己の魔の大成という至上目的を前にして、眼前の勝利など取るに足らない。

やられたから、やりかえす。そのために連れてくる。実に明快で魔術師然としたカルツオの倫理は純粹で、今日日では魔術師の間でも珍しいものかもしれない。

「賀茂も同じか？」

「そいつはついでだ。お供がないとさびしいだろ？」

「だってさ、賀茂くん。どうするね？」

音声からしてにやついたカルツオの秀囲気に乗っかり、鍵次も飄げた口調で賀茂に話を振る。

そのような言い方をされて、取れる態度など決まりきっているとでも言わんばかりに、ずいと朱雀がゲーティアの前に出る。

「こいつは僕が潰しますんで、鍵次さんはあつちのほうをお願いします」

朱雀が顎で示した先は島の中央。山と見まごう程に巨大な城郭が聳え立っていた。敵の本拠地。それ以外に解釈のしようがない。恐らくは、いや確実にあそこにはイステカーマがいて、彼が言うところの導師とやらも同じだろう。

真つ当に考えれば、このまま朱雀とゲーティアとで確実にティラトーレを葬り、戦力を整えた状態で向かうべきなのだろう。

しかしその間、鍵次の好調が続くとは限らない。やっと取り戻し

た往年の手応えは、何をきっかけにして無くなるかも分からない。  
鍵次がイステカーマを打倒できるのは、今この瞬間しかないかも  
れないのだ。

そう思えば戦略的な不合理も、飲み込んでもいいような気になっ  
てくる。こうするしかないからこうするのだというトートロジーを  
受け入れれば、自ずから行動は自明となる。

「頼んだ」

短く言い捨てて鍵次はパウロス？のスラスターを吹かすと、大き  
く跳躍しティラトールを飛び越していった。

「てめえ、待ちやがれ！」

回頭し、砲身をゲーティアの背中に向けるティラトールより早く、  
朱雀の式神　　浮星<sup>うきじょう</sup>たちが回り込んだ。

「くうっ」

その狙いが過たず砲身の中に向けられていることを悟ったカルツ  
オは、ティラトールの四足を一気に伸ばして飛び退った。一拍遅れ  
て、ティラトールが居た場所に細待ったビーム痕が幾つも現れる。

「お前ごとき、ゲーティアじゃ役不足さ。俺でもお釣りが来るけど  
な」

傍らに式神を侍らせて、朱雀が構える。ティラトールもまた砲身  
をびたりと朱雀に向けている。

フリースランドにて：？

朱雀は浮星を伴って、再び空へと飛び上がった。鍵次を連れての突貫とは違い、周囲に展開しているエーテル力場によって浮遊しているため殆どスラスターを使わず、悠揚とティラトールの頭上を泳ぎ回る。

今のティラトールの兵装は中距離仕様のもので殆どだ。ならば正直にその距離に付き合うことはない。思い切り近づくか、思い切り離れるかすれば、ティラトールは兵装を活かしきれなくなる。

ならばまずは遠距離で戦おうと、栄修は予め決めていた。元々、朱雀は式神を用いた柔軟な戦法によってあらゆる距離に対応できるメガロスだが、機体本来の脆弱性を考慮すれば自ずと離れて戦うことが多くなる。

ティラトールの前後左右を取り囲んで、浮星が光を吐き付ける。あらゆる距離、あらゆる位置からエーテルレーザーが照射される。栄修のイメージに従い、距離や位置を問わず隙を逃すことがない。式神の扱いに長ける陰陽師らしい戦い方である。

幾条も放たれる細っこいエーテル光が、ティラトールの黒々とし地金の削り取っていく。

ティラトールの装甲は、普通のメガロスに比べて非常に分厚く頑強である。式神単体のエーテルレーザーでは、関節部や機構の隙間の特に脆弱な部分をよほどの確な位置から撃ち抜かねばならない。しかしそれは相手として把握している。一見して鴨撃ちにあっているように見えるティラトールだが、関節部や機体の裏面などには決してエーテルレーザーを食らわないし、小さな式神を一機たりとも侵入させていない。

このまま装甲表面を焼いたところで、まさに焼け石に水である。時折放たれるエーテルミサイルや対空砲火を冷静にいなしつつ、朱

雀もまたこれという攻め手に欠いていた。

しかし装甲が厚いからといって、匙を投げる栄修ではない。彼の生家 賀茂家陰陽師に伝わるメガロス操縦術は、この程度の困難を乗り越れないほど柔なものではない。

「戦術陣形、砲穿火！」

コクピットからの賀茂の叫びを受けて、浮星が一斉にティラトールから距離を置いた。そのまま互いを巻き取るように輪を描いて繋がり、刺々しい大輪の花を中空に咲かせる。

浮星最大の特徴は、拡散と集中の動きにある。一片が一メートルほどの扁平な八面体を計三十二機。これを空間にばらまいて包み込み、これを接合させあらゆる形状を形作る。

それはさながら野犬の群れによる狩りに似る。散って、解け、大きく緩やかに敵を覆って逃がさず、ここぞというときには一気呵成に喉笛を引きちぎる。

集結したエーテル発振装置が、一つの方向に集中する 狙いは言わずもがな、ティラトールだ。

フリースランドの地上に、かっと眩い光が点る。

三方から浴びせられる極太のレーザーが、ティラトールを飲み込む。余波を浴びた木々や地面が一瞬にして蒸発し、煙となって吹き飛ばされていく。

膨大な光の波に悲鳴を上げる大気が、このときさらなる金切り声を発した。

「なっ!？」

突如、巨大な爆発がティラトールを中心にして起こり、その余波で式神たちの陣形が崩れてしまった。遠くにいた朱雀までもな衝撃破に煽られ、わずかにバランスを崩す。

しかし先程の爆発は、メガロスの最後と取って相違ないほどのものであった。大方自爆に巻き込もうという魂胆だったのだろう。

フレキシブルバインダーを器用に操って姿勢を整え、朱雀は爆心地から浮星たちを引き上げる。傍らに待てる式神と共に見遣るクレール

ターからは濃密なエーテルの噴煙が舞い上がり、さながらメガロスの墓標のようだ。

賀茂の儂い感傷を打ち破ったのは、彼とその身をエーテルによつてつなく存在　朱雀であった。

爆心地の煙から、一条の光が放たれる。それはエーテル含有の燃焼ガスによつて押し出された、エーテル合金の弾核ショットシェルであった。

（ショットガン！？）

急ぎ朱雀を弾道から回避させる。ほぼ純粋なエーテル体を飛ばす攻撃ならばともかく、エーテル合金ほどの質量は彼のエーテル力場では相殺しきれない。必定、なるべく距離を置いて被弾確率を下げるしかない。

その涙ぐましい努力も空しく、猛然と突進してきた弾核は彼の目の前で炸裂し、一気に拡がってしまう。朱雀の高速機動を持ってしても、咄嗟には避け得ない広範囲だ。

仕方なしに賀茂は、その弾丸の雨を受けることにした。今度こそエーテル力場を存分に発揮し、少しでもダメージを軽減する。

しかしそれは容易に受けきれるものではなく、濃密なエーテル力場と相殺しながら、いくつかが朱雀の体に直接届く。

一つ一つが十メートルほどの濃縮エーテル体である弾子は、接触したエーテル合金と激烈な反応を起こし、食い破りながら膨れ上がる。

下腹部で起こった爆発に煽られ、朱雀の体がもんどりうって地面に叩きつけられた。

高速機動、エーテル力場、式神。それら優秀な装備と能力を持つ朱雀は、よほどのことがなければ地面には落ちない。類稀な攻撃能力の代わりに装甲を犠牲にしている以上、戦闘の最中に朱雀が降りる、或いは落ちるということは、ほぼ敗北を意味していた。

よほどのことがなければ地面に落ちない。ならば落ちたときこそ、朱雀の命運が尽きる時。

まるでダウン慣れしていないボクサーのように、賀茂の心は惑乱していた。一度ハジャに落とされているとはいえ、あの時は空で仕留められた。その後気絶し、鍵次が助けて地面に降ろされたときの記憶はない。なのでころほど明確に落とされた経験が、賀茂にはなかった。当然、その場合の対処法など浮かびもしない。

ただ恐々とした頭の中を、落ちた、落ちた、落ちたという声がぐるぐる巡っているだけである。脳はただ言葉を回す機械に成り下がり、現状を的確に判断する力を喪失していた。操縦者のイメージそのままに戦うメガロスは主の心中を的確に察し、項垂れたままに佇んでいる。

「おい、陰陽師」

ぞんざいに投げかけられた言葉に顔を上げると、巨大は砲身は再び発射態勢に入っていた。

マズルフラツシユがテイラトールの姿を覆いつくし、発射の衝撃だけで周囲の木々を扇状に打ち倒す。ショットガンというよりは榴弾に近いそれが、真っ直ぐ朱雀に向かってくる。

今度は正面ではなく足裏にエーテル力場を集中させ、地面と反発させて機体を無理やり上空へ引っっこ抜く。

それでも足先に数発掠めたらしく、朱雀は錐揉みしながら巡航態勢に移行する。気がついたように浮星を周囲に侍らせ、エーテル力場内でエーテルを供給する。

最初に被った不自然な爆発は、砲穿火によるものではないことに賀茂は思い至った。上空から見ればテイラトールは傷を追うどころか、あの砲撃の最中に装甲を召喚していたということが今さらながらに分かる。

あれが鍵次の報告にあったエーテル・リアクティブアーマーというものだろう。まさか砲穿火を押しつけて、式神さえ吹き飛ばすほどの爆発を起こすとは思っていなかった。

あるいは鍵次との対戦を経て、急ピッチで改造したのかもしれない

い。遠距離攻撃は分厚い装甲で防ぎ、近づけばエーテル・リアクティブアーマーの爆発で蒸発させる。

朱雀の遠距離攻撃では埒が開かないのは、これまでに試したとおりだ。増援のあてがあるなら時間を稼ぐだけでいいのだが、他の魔術師達はハジヤの相手で手一杯だった。いつどれほどの増援が来るかの見込みが立たないうちは行なえない。

遠距離は駄目。増援は見込みなし。となればあとは一気に接近し、砲撃を掻い潜って一撃を加える戦法しかない。

遠距離での戦闘が得意とはいえ、朱雀は決して接近戦をこなせない機体ではない。むしろ本来は距離を選ばず、遠間と近間の激しい出入りで相手を揺さぶりながら戦うのが朱雀の主な戦法であった。

「戦術陣形、帷子」

またも下された指令によって、浮星たちがにわかに活気づく。全身の至る所に浮星が纏いわりつき、細身だった朱雀の体が少しばかり重厚さを増す。拡散させていた浮星を自らの体に集中させ、朱雀の機能を底上げする陣形である。

こうなれば、覚悟を決めるしかない。安全策で通る相手ではないことは十分に知れた。あとはただ、己の魔を顕すのみ。

「落としてみせる、<sup>タイラトル</sup>射手！」

エーテル力場によるレビテーションとフレキシブルバイナード、さらには浮星のスラスターを上乗せし、ただでさえ高い機動力がなおも極むる。無論、強化されるのは単純な速さだけではない。

早速放たれるエーテルショットガンが朱雀へ向かう。そして再び地に落とさんとして中の弾子を吐き出した。

その刹那、朱雀の体が真横にずれた。まるで見えない手に引き寄せられるように、エーテルショットガンの散布界から遠ざかり、ついには後ろへ回り込んで完全に事なきを得た。

先ほどとは明らかに異なる回避は、朱雀の向上した旋回性能の賜物である。体に張り付いた浮星があらゆる角度へと噴射を行なえる

ため、速度、旋回、そもその反応までもが根底から増幅されている。

そして、朱雀の特徴である攻撃もまた然りである。

後詰に放たれるエーテルミサイルが四方から朱雀に群がる。しかし朱雀は今度こそ避けるでもなく、思い切り体を開いてそれらを迎え入れた。

「放て、浮星！」

賀茂の叫びに同期して、朱雀の全身から光の線が幾重も迸り、ミサイルの一つ一つを過たず撃ち落としてみせた。

さらに追撃のエーテルショットガンを全身から放たれる幾十も束ねたエーテルレーザーが先んじて飲み込み、到達する遙か以前に爆裂させてしまった。

先程の砲穿火よりも、レーザーの出力が増大している。遠隔操作による燃料の別個搭載という枷が無くなり、今の浮星は朱雀のエーテルをほぼそのまま出力に変えて放出することが出来る。

上空から複雑に遷移し、朱雀が最大戦速でティラトールに迫る。

地対空エーテルマシンガンの迎撃など、前面に展開されたエーテル力場に容易く打ち消されてしまう。

「でやあああ！」

左腕部フレキシブルバインダーを真横に伸展させ、表面からエーテルを高速で噴射させる。激しく流出する細かなエーテル粒子が対象物を削り飛ばしながら裁断するエーテル刃である。

狙いは装甲の無い関節部。そこならばエーテル・リアクティブアーマーは置いておけない。何故ならただでさえ循環器系や駆動装置などの複雑な機構を持つ関節部に、さらに複雑なエーテル・リアクティブアーマーを張り重ねるなど出来るはずが無い。

間違つてエーテル・リアクティブアーマーの場所を切り裂こうものなら、至近距離である爆発を被ることになる。そうなれば朱雀の戦闘不能は確実だ。

幸い、ティラトールは装甲を増やしたことでなおさら動きが鈍っ

ている。今の朱雀の機動ならば一撃目を幻惑に使い、二撃目で関節部を切り裂くだけの余裕がある。

まず左前脚に振り下ろすのは“見せ”だ。本命は右腕のエーテル刃による左後脚の切断である。

左腕を振り下ろす動作を途中で無理やり捻り、下から右腕のフレキシブルバインダーを伸ばす。干渉する地面などあつてないが如くに、エーテル刃は一直線に迫り上がり　朱雀の右腕が、爆発した。閃光と轟音の中にあつて、それでも右腕の激痛は鮮やかに賀茂の感覚を暴き立てる。爆風で吹き飛ばされ、地を跳ね回っている最中でも、彼の注意は自身の右腕に縫い止められていた。

やがて勢いを失い、朱雀の体がだらりと地面に伸べられる。そこで確認すればやはり、朱雀の右腕、その二の腕の中程から先が消失していた。

右腕が、有るのに無い。この不可思議な感覚の齟齬は、しかしメガロス乗りにとっては日常茶飯事である。メガロスの傷を我が身の傷と誤解しながら、魔術師は戦わねばならない。

「げはは。ゲーティアと同じで片腕になつたな」

いやらしく言葉尻を上げてカルツォが笑う。しかし賀茂はそれを不快には思わず、ただただ彼の魔術に畏敬の念を禁じ得ない。

同じ魔術師である賀茂にとつても、その所業は途方もないことであつた。

メガロスは、魔術によつて生み出される。つまりはあらゆる部品や機構を、自分の魔術一つで賄わなければならないのだ。

機体それ自体が巨大であつたり、機構が複雑になるほど、魔術師への負担は加速度的に高まり、メガロスそれ自体の剛性にも影響をきたす。

色々な機能をあれやこれやと詰め込めば、それだけでメガロスが強くなるわけではない。それを許容できるだけの魔力量。複雑な機構を寸分違わず、いつ如何なる状況下でも生成できる磐石の精神。

それらが伴って初めて、メガロスを運用することが出来る。

ことに関節部というのは、コクピットのある中枢部に次いで構造の複雑な場所である。柔く滑らかに造ろうとすればトルクが伝達しにくく、トルクの伝達を重視すれば重く堅い関節となり、拳動は遅くなる。

曲がりなりに動く関節を作るだけでも、実のところ一大事なのだ。そこへさらに、装甲の下にエーテル炸薬を搭載したエーテル・リアクティブアーマーという複雑怪奇な機構を装着するなど、途方も無く緻密で精妙な作業だ。

「まさか関節部にも付けるとはな……」

「だははっ！　んなもん着けられるわけねーだろ。よく見てみるっつんだ」

カルツォの言葉に要領を得ない賀茂だったが、より詳しくティラトローレを精査した。機体構造の透過図を確認した時点で、鴨はようやく彼の言葉の意味を理解した。

ティラトローレの関節が、存在していない。本来そこに収まっているべき可動機構の代わりに、重厚な装甲が奥深くまで浸食している。要するに現在のティラトローレの体は、エーテル合金で形作った彫像と化している。

つまり脆弱な関節部それ自体が偽物。可動機構を廃し、動かなくなった代わりにエーテル・リアクティブアーマーを設置したのだ。

賀茂が当初に考えていたことよりも魔術としての難易度は劣る。

しかし方向性は違えど、それもまた正気の沙汰ではない。

焼け爛れた部分をエーテルのかさぶたで覆い、朱雀は再び立ち上がる。先ほどまで力の抜けていた体だったが、カルツォの話聞き、ティラトローレの正体を知った途端、またも体から魔力が溢れてしまったのだ。

まだ勝ち目が消えていない。それだけ分かれば十分であった。

もはや賢しく立ち回って勝てる相手ではない。自分の根限りを振

り絞り、まるごとぶつけるような気概で行かなければならない。これまで培った秘奥の限りを尽くして、敵の魔術を打ち砕く。

「戦術変形、朱雀」

静かな、慎ましやかとさえ言える落ち着いた声音が、朱雀の体を揺さぶった。

ばきばきと、束ねた木々を押しつぶすような音が幾つも重なる。そのたびに朱雀の形状が、少しずつ元の形を失っていく。ティラトールの装甲召喚と異なる変身。朱雀を形作る機構部そのものが、彼の魔術によって変形させられている。

焼け爛れた右腕さえも無理矢理伸張し、激しい変化についていけず装甲が断ち割れる。それをさらなるエーテルが漏れ出て補填するを繰り返している。他の部位も同様、機構部の変形に追いつくべく新たな装甲が逐次成形される。フレキシブルバインダーもまた数を増やし、至る場所から筈のように生えていく。

頭部はより長く前にせり出し、背から腰にかけては緩やかに屈んでいる。踵は大きく伸張し、あまつさえ足は三方に分かれた鉤爪を備えるに至った。

ものの数秒で人型を失った朱雀は、赤い鳥型へと姿を変じていた。伸びた腕はもはや翼となり、フレキシブルバインダーの一枚一枚を羽根のようにはためかせる。

それはまさに名の通り四神の石柱、朱雀の顕現であった。

変容はしかし、姿形だけのことではなかった。今の朱雀は全身に火炎を毛皮のように纏っていた。

それは本物の火炎ではない。これまで球形に広げていたエーテル力場である。およそ朱雀の重心から半径五十メートルほどの球として展開していたエーテル力場を、機体表面一メートルにまで絞り、濃密さを増したのだ。

ばさりと翼を一つはためかせると、朱雀は瞬時に上空へ舞い上がった。雲を過ぎ、蒼弓が紺碧を帯びるころ、ようやく朱雀が身を翻して滞空する。

地上よりは宇宙に近いそこから、芥子粒のようなテレトールに狙いを定める。これより行う大魔術を、間近で見せつけるために

フリースラントにて：？

「ギキイイイイ！！」

フレキシブルバインダーを羽根の如く広げ、朱雀が一気に急降下を始めた。真つ赤なエーテル光が極彩に照り輝き、長い飾り尾のようにたなびいている。

無論、ティラトールもただまんじりと朱雀を待ちはしない。最低限残してある関節部で砲台を回頭し、エーテルショットガンを高く掲げる。

弾子、成型。弾薬、装填。弾核、鑄造。これまで幾度も繰り返したルーチンの通りに魔術を遂行する。

「お前を落として、俺はゲーティアをぶち殺す！」

エーテル含有の炸薬が銃身内で迸り、巨大な弾核が秒速三キロメートルで上空に押し出される。音速を優に置き去りにした砲口初速で、ティラトールの周囲が大きく抉られて裏返る。

カルツォが渾身のエーテルを込めた放った弾核は、重力による減衰などものともせず突き進み、朱雀はそれに真つ向から降下してくる。朱雀の軌道がぶれない以上、二つの衝突はまず確実と言えた。どうやら朱雀は推進力に落下エネルギーを加えた体当たりで、起死回生を狙ったのだらう。しかしその代わりに旋回が行なえないほど加速してしまっているらしい。

それならば散布させるまでもない。エーテル弾核をそのままぶつけて中の弾子をもろに被るのが相応の末路だ。

こちらも音速などとうの昔に過ぎ去って、翼をはためかせながら朱雀はひたすら降下する。

「ギイイイイイ！！」

嘴から漏れる嘶きさえ遠く捨て置き、空気を真つ先に切り裂いて進む頭を、賀茂は弾核の中心に寸分違わず突き刺した。

そして何事もなかったかのように、朱雀は弾核を過ぎる。まるで音と同じく、追いつくに値しないとばかりに

朱雀が弾核に接触した瞬間、賀茂は何か対策を講じるでもなく、むしる羽ばたいてさらに速度を増していた。そうして突っ込ませた頭で、弾核を真つ二つに切り裂いたのだ。

機体表面一メートルにまで絞ったエーテル力場によって重厚なエーテル合金さえも融かし、一度沈み込んだ機体ですっぱりと結合を解いてしまった。

気がついたようにばらまかれた弾子が、今さら爆発を始める。朱雀の機体に触れはしても、エーテル弾子が反応し爆発を起こす頃には、既に朱雀は遙か下方へと降りてしまっていた。

「な、にい!？」

渾身のエーテルショットガンが何ら効果を示さなかったことに、しばしカルツォは動揺を呈した。

エーテル弾子の反応さえ間に合わせない圧倒的な速度で、メガロスという大質量を地上に落とす。ただそれだけの単純な魔術を前に、自分の砲撃はその役目を果たせない。

あれはさながら一本の剣だ。自身の魔力の全てを注ぎ込み、切れ味と速度だけをひたすらに追求した、まさしく常道の埒外にある魔の所業だ。

もはやカルツォの進退は窮まっている。あと三秒と掛からず朱雀は雲海を抜けて落ちて来る。エーテル弾核を行儀よく作っっている時間は無い。

あの陰陽師は文字通り自身の底を曝け出して見せ付けてきた。ならばこちららも、秘奥の全てを照覽せしめるほかにない。

「うおお、うおおあああ!！」

弾核を作るはずだったエーテル。弾子を作るはずだったエーテル。弾薬になるはずだったエーテル。その全てを、銃身の底から衝動のままに吐き出した。

ティラトールが極太のエーテルバスターを打ち出し、雲海を抜けたばかりの朱雀を迎え撃った。

エーテルの操作において基本中の基本であるエーテルバスターこそが、カルツオの秘中の秘であった。全く加工や変成をせず、その分だけ損耗のない、何の混じり気もないエーテルそのものの力を相手にぶつける。

それはまさに、自身の心をぶつけるがごとき直截なる魔術であった。

カルツオの覚悟を見て取ってか、賀茂は光の柱に真っ向から朱雀を飛び込ませた。急流を切り泳ぐ若鮎のように、進むエーテルの中、身をくねらせてぐいぐいとティラトールへ迫る。

しかし、それも長くは続かない。落下エネルギーを使い果たした朱雀は、徐々に朱雀が押し返され始める。限界までスラスターを吹かせ、エーテルを吐き出しているのだが、それでもなおティラトールのエーテルバスターを穿つには至らない。

「落ちろ、陰陽師！ 落ちろ！」

まるで無尽蔵を思わせるように、カルツオの砲撃は勢いを全く止めない。

今にも機体が焼き払われようかという状況で、しかし賀茂はゆったりとシートに背中を預けて一息ついた。

間近に食らってみて、賀茂はカルツオの実力を余すところ無く感じていた。エーテル操作の基本であるエーテルバスターをこれほどまで昇華せしめた技量に畏敬の念さえ抱いていた。

だが、このまま掻き消されるのを受け入れたわけではないし、攻勢を諦めたわけではない。

まだ、朱雀の底は尽きていない。

「戦術変形、鳳凰」

満を持して紡がれた口訣が受理され、命令が朱雀の機体に数ミリ秒の内に染み渡る。光の柱に吞まれていた朱雀が突如として舞い上

がり、エーテルバスターを逃れて飛び立った。

「逃がすか！」

すかさず回頭して追うティラトール。雲をまるごと引き裂く光の柱を振り回し、一羽のメガロスを追い詰める。

そこへ近づくと、もう一羽。

「なっ!？」

カルツォが混乱を呈する中、もう一体の朱雀がティラトールに突進してくる。

二体のメガロス。その現象をどのように解釈すべきか、動揺したカルツォは集中を乱し、エーテルバスターの出力にまで影響が出始めた。

その僅かな隙を見逃す賀茂ではなかった。エーテルバスターを逃れた一体が、その砲撃を迂回した角度から侵入する。

連続する発射音を上げてエーテルミサイルが追尾する。しかしもう一体の朱雀はまるで避ける仕草を見せず、エーテル力場を貫通して機体を抉られてもその軌道を譲ろうとしない。

「ギイイイイ!!」

嘶きを上げてほぼ真上から、朱雀の片割れが鋭角に衝突した。エーテル・リアクティブアーマーの爆発がティラトールを包み込み、その機体が大きく突き飛ばされる。

既にエーテルバスターを放つ余裕の無くなったティラトールの砲身が、上面から大きく抉れて中身を曝け出している。

朱雀の捨て身の体当たりは、エーテル・リアクティブアーマーを貫通してティラトールの機体を直接破砕せしめた。

「陰陽師め。やりやがったな……」

先ほどの突進を見て、カルツォはこの怪異なる現象の正体を見破った。

二体のメガロスを生み出す魔術は、式神を用いた分身であった。装甲や機関部の形状を変化させる魔術を用いて、身に纏っていた式

神の形状を変化させ、朱雀と寸分違わぬ姿を取らせたのだ。

殆ど中身の無い写身とはいえ、それは本来の朱雀並の推進力と切れ味を有していた。それが我が身を省みずに突っ込んできたのだから、ただで済むわけがない。そしてそれを、見逃すわけがないのだ。まだ朱雀は、もう一体いるのだから

ティラトールのコクピットに、けたたましい接近警報が鳴り響く。カルツオの感覚がそれを捉えたときには、既に赤い炎が横のモニター全体に迫っていた。

「……!?!」

メガロスの中でも拙速である朱雀を二体相手にして、毒づく暇すら本来はなかったのだ。それに気づかされたときには、ティラトールの装甲を朱雀のエネルギー力場が切削していく。

賀茂の魔が、カルツオの魔を削り食らう。エネルギー・リアクティブアーマーすら発動させぬほど迅速に

これほどの速度を維持して接近を許した時点で、カルツオに出来ることは無かった。そんなことにさえ思いを馳せる間もなく、朱雀はティラトールの中枢を自らの体でまるごと削り取って過ぎ去った。程なく、遅れて反応したエネルギー・リアクティブアーマーが爆発し、搭乗者を失ってエネルギーの塵へと還元されつつあったティラトールを残らず消し飛ばしてしまった。

爆心地に降り立った朱雀はその姿を人型に戻し、一通り走査する。万が一カルツオを仕留め損なっていないかと探しているのだ。

それさえも終わると、朱雀はクレーターの真ん中に膝つき、ぐったりと頂垂れた。機体のテンションを保つエネルギー圧を故意に賀茂が抜いたのだ。

戦術変形、鳳凰。鳳と凰。番の瑞鳥に肖ったその技は、まさに朱雀の体を二つに分かつ妙技である。片方は賀茂の乗る本体。もう一方は主に式神によって形作った空蝉。しかし互いの有するエネルギー

総量にほぼ差など無い。姿形によって欺く意味でも、そこに差があつては明らかにそれと知れてしまう。

二身に分かれた際に生じる混乱。その一瞬を鳳と鳳の二連撃で即座に突いて決着する。それがこの魔術の運用思想である。

空蝉の構成と操作を限りなく迅速に行ないながら、自らも格好の攻撃位置を確保し、最大戦速で敵を貫く。それらの作業に費やされる魔力と集中力は甚大だ。本来ならばメガロスの顕現すら解いて魔力の回復に専念しなければならぬほど、この魔術は使用者の精神を食い荒らしていく。

エーテルの消費を抑え、最低限メガロスを維持するだけに留め、少しずつ回復に努める。ここが敵地の只中である以上、メガロスを切らすわけにはいかない。

しかし希望はある。カーター率いるメガロス部隊が到着しても、ゲートティアが敵の首領を倒しても、朱雀は救われる。その間だけ保てば良い。

城の正面に降り立ったゲートティアは、しばしその全容を見入っていた。

まさに西洋の城そのものの作りだ。中世ならぬ現代には居様としか映らない。魔術的恣意が介在しているのは見るからに明白だ。

門扉は丁度メガロスが通るのに適宣な高さに詭えてある。わざわざこのようなところからメガロスを出入りさせようとする発想に、素面では付き合いきれない。元より魔術師というのは常識の埒外に身を置く超常の輩だ。正気の沙汰など望むべくもない。

鍵次とてとづくに、正気と嘯くことがでないのだから。

ゲートティアは門扉の前に立つと、徐に振り被った左拳をその中心に叩き込んだ。十二分なエーテル圧をトルクに変換された拳は、一撃で蝶番を砕いてしまう。当然、門扉は支えを失い、訪問者を招く

ようにゆったりと時間をかけて床に倒れた。

砕けた扉が荘厳な音を立てて、ゲーティアを招き入れる。中の空間は、外からは伺い知れないほどの広大さを有していた。天井は差す影に隠されて見えないほどであり、それを支える柱もまたゲーティアが大きく頭上を仰がねばならないほどである。床面積はといえば、明らかに外から観察した状態よりも広がっており、ちょうど島の半分ほどを占有しているかと思われるほどだ。

これなる超常の理も、鍵次には驚くに値しない。次空間操作の魔術で城の中の限られた空間に、さらに広大な空間を押し込めたのだらう。

ここは魔術結社の本拠地。この程度の魔術など、むしろ空気のように存在しているのが当然なのだ。

「まさか正面玄関から入っていただけとは。存外、行儀がよろしいんですね」

堂の中心に佇んでいた人影が、ゲーティアのスピーカーに直接語りかける。魔術師イステカーマとそのメガロス　ガイマである。

「もうお前が出張ってくるのか。何だ、イガーサは人手不足なのか」「皆さん、ハジヤに乗ってもらいましたので」

そういえばカルツオがそんなことを言っていたのを思い出し、特に気にした風もなく鍵次は得心した。

「それで、俺と導師とやらを会わせてくれるのか？」

「はい。そのように承っておりますよ。しかし」

返事をしながら、ガイマがゆったりとした歩調で近づいてくる。

「以前にもお伝えしましたが、私の目的は、あなたなのですよ」

ガイマの体を覆う丸みを帯びた装甲の隙間から、紫色の霧が立ち昇る。搭乗者の心象をそのまま顕したようなエーテルは、剣呑な殺気に充ち満ちている。

「導師の言いつけは守らないのか？　困った弟子だ」

「柔軟と言って下さい。それに私は魔術師。つまらないしがらみな

どに囚われない存在ですのぞ」

「約束も守れないちっぽけな存在だとは、考えないのか？」

悠然と歩み寄るガイマに対して、ゲーティアは足を肩幅に開き、左腕を緩く前に突き出して構える。

「それは人の理。魔術師に当てはめてもらっては困りますな」

挑発じみた台詞を返して、ガイマがいきなり前に飛び出した。噴射炎がまっすぐに伸び、地を舐めるような突進しながら右の拳を引き絞っている。

負けじと応じる鍵次は、ゲーティアのスラスターを絞って噴射する。まるで鏡合わせのように、こちらは左の拳を引き絞る。

フリースランドにて：？

沁みのない漆喰のような装甲が、毒々しい紫のみどろを交えた装甲とぶつかりあう。拳面の境界で互いのエーテルが鬨ぎあい、波紋のように広がって空間を揺さぶる。

「おや？ 力の勝負がお望みですか？」

膨大なエーテルを拳の注ぎこんでの押し合いに、涼しげな声をイステカーマが挟む。

「舐められたものですね、私も。それとも私の父を、あなたは舐めて」

その後の言葉は、平衡を失ったガイマによって掻き消された。瞬時に天地を逆さにしたガイマが、ゲーティアを見下ろしている。

「ゴアアアア！！」

今や下を向いているガイマの頭部を、ゲーティアの左脚が打ち上げた。腕の振り、腰の捻り、足首の返しと、全てを寸分違わずに連動させた見事なメガロスの運用であった。

ガイマはそのまま激しく回転し、近くにあった柱の叩きつけられる。重厚なメガロスの質量を受け止めて、天井を支える柱には幾条ものひびが入った。

拳で押し合っている最中、ゲーティアが僅かに拳を引いたところまでは確認できた。しかしその次の瞬間には、イステカーマの感覚ごとガイマが中空に浮いていた。

あれがゲーティアを最強たらしめている搭乗者 小中鍵次の操縦技術だ。魔術師が魔術を修め、その習得に腐心するように、彼はメガロスという巨人の操縦だけを追求した。魔術を持たぬ身で魔術師との戦いを生き抜くために。

その結果、メガロスを生み出す魔術師以上の精度でメガロスを操縦する技術を獲得した。我が身のようにか、もしくはそれ以上の精

妙さで、彼はメガロスを動かすことが出来る。

鋭敏な感覚は接触の際に伝わる力の流れを余すところ無く把握し、絶妙の入力がそれに対する的確な解を導き出す。

押し合っていた拳面を引くことで相手の重心を崩し、引き込んだ腕を基点にしてぐるりと回す。人間であれば倒れるだけで済むであろうそれをメガロスの怪力で行なえば、同じメガロスであっても無防備に中空へ投げ出すことが可能となる。

そしてこの操縦技術の利点は、それだけに留まらない。

堂内に響くエーテルの流れる音。高圧で噴射されるエーテルが、ゲートイアを押し出す。

こちらもスラスタを吹かして移動するガイマ。そのすぐ後に過ぎった拳が、ひび割れていた柱をととう打ち壊す。

拳の衝撃に引かれて、下の柱が根元から倒れる。上の柱も斜めに傾ぎ、一層にひびを大きくしている。

メガロスを操縦する超絶技巧はつまり、メガロスが持つ力を最大限まで引き出すことが出来る。如何なる魔術師よりも精度の高い操縦が、メガロス運用の最大効率を的確に導き出し、かつそれを現実に顕す。

魔術とはまた違った意味で、常識の埒外の所業である。

互いに着地した二体のメガロスは、間髪入れずに飛び出す。またも振りかぶった拳を打ち合わせ、さらなる拳足へと繋いでいく。

左拳を引いた勢いでガイマが右拳を繰り出す。それを肩越しに空かしながら、ゲートイアが前に出た。

側頭部を削られながらも突進するゲートイアが、ブレードアンテナが突き出した額をガイマの胸部装甲にぶち当てる。削られて脆くなった側頭部から額にかけてはつくりと断ち切れ、ブレードアンテナが砕け落ちる。

ガイマのほうも装甲の欠片を散らしながらたたらを踏んで下がる。手頃に離れたその間合いへ、ゆるりと膝から引きつけて振り上げた

左の上段蹴りが見舞われる。

高々と上げられた膝から一気に伸展し、斜め上から切って落とすようにガイマの首を刈る。

ゲーティアの足の甲から、ガイマの装甲を押し潰す感触が鍵次に伝わる。人間の首と同様にセンサー類の集中させた頭部と胴体とを繋ぐ首は滑らかな可動部とセンサー類などを備えねばならず、自ずと他の部位より剛性が低くなっている。

メガロスのトルクを十分に発揮して的確に首を蹴りつければ、精度次第ではざつくりと断ち切ることも可能であり、感覚のフィードバックだけで敵魔術師を昏倒させることさえある。

会心の手応えのまま地面に叩き付けんとして振り抜かれるはずだった蹴りが、半端なところで止まってしまふ。

首を歪に曲げ、体を左に大きく沈ませながら、ガイマは踏ん張って耐えていた。法外なエーテルを足と首に回し、蹴りの勢いを相殺してみせた。

打ち抜けない蹴りをすかさず戻そうとしたゲーティアだったが、その足首をガイマに捕獲される。

今度は開いた右足で蹴り付けようとしたそのとき、ゲーティアの体が引っこ抜かれる。ガイマはまるで布切れか何かのように、ゲーティアの機体を片手で振り上げている。

そもそも単純なトルクからして違いすぎる。絶妙の精度で命中させた蹴りを耐える踏ん張り。片腕でメガロスを振り回す腕力。いずれも魔導の申し子であるメガロスをして異常なトルクである。

鍵次がティラトールと戦ったときも似たような現象を起こしたが、それとは根本的に違っている。鍵次のそれは諸々の状況が重なり合っただけ偶発的に生み出されたものだったの対し、ガイマのそれは自然なものに過ぎない。

ごくナチュラルな状態で、鍵次が出せる限界以上のトルクをイステカーマが生み出しているということだ。

背を海老のように仰け反らせ、ガイマのエーテル循環器系が唸りを上げる。ゲーティアの足首が狭まるほど力む右腕が振り下ろされると、ゲーティアの機体が真っ直ぐに柱へ向かって投擲された。

槍の如く打ち出されるゲーティアの眼前に林立する柱の一本が迫る。全身を絞られるのに似た感覚が襲うなか、鍵次は僅かに腰を屈めてゲーティアに命令を入力する。

鍵次の直感を忠実に受け取ったゲーティアは、飛んでいく勢いに逆らって無理やり体を入れ替え、背中から激突するところだったのを足を広げた獣のように這いつくばって柱の側面に着地する。

体の前面が打ち付けられ、先ほどの投擲も相まって鍵次の意識が一瞬だけ遠のく。わざわざ顔面から突っ込むような形での着地なので、ダメージのフィードバックでもろに頭を揺さぶられたのだ。

ゲーティアの背中には航行用ユニット『パウロス？』が装着されている。これもエーテル合金で作られているとはいえ、メガロスのそれに比べたら格段に構造が脆い。

魔術以外で造られたものを装備する場合は、こうした配慮も必要になる。既に空戦が主な戦場ではないとはいえ、徒に使い潰している装置ではない。

ようやくベクトルを殺しきったゲーティアがアラームを打ち鳴らす。その方向へ首を巡らせると、ガイマを包んでいた紫の靄が収斂を始めていた。明らかなエーテルバスターの気配に、こちらも即座にエーテルを左手へ充填する。

アメーバのように蠢きながら集まる紫の靄と、空気を爆裂させる緑色の雷電が、共に一つの柱となって放たれた。

性質を異するエーテル同士がぶつかり、互いに相反し合っている。漏れ出る余波が床を裂き、柱を砕くが、それでも二体のメガロスはお構いなしにエーテルを注ぎ込む。

優に五秒は続いた拮抗が、ついに臨界を迎えて暴発する。緑と紫の相まつた光が堂の天井まで明るく照らす。

「ダアアア！！」

その光を掻い潜り、ゲーティアがガイマに向かって落ちる。突き出した右足にエーテルを漲らせて

「ウゴオオオオ！！」

渾身の飛び蹴りを迎え撃ったのは、ガイマの左拳であった。またもぶつけられるエーテル同士が反応し、二体の巨人は爆風に煽られて離される。

再び間合いが開いたものの、今度は即座に飛び掛るようなことはせず、鍵次は落ち着いて姿勢を整えて地面に着地した。

こうして見れば見るほど、イステカーマのガイマは、スライマンのアグノスに瓜二つだ。尋常な魔術師のそれを軽く上回る装甲と出力もまた、アグノスも同様に有していたものだった。

だからこそ、その姿はスライマンとの戦いを想起させずにはいられない。やはり最強最悪の魔術師を父に持つだけに、一筋縄で終えられる戦いではないようだ。

それは無論分かっていた。というよりは、望んでいたというべきだろう。今の鍵次の胸中に渦巻く激情をぶつけるには、それに見合う丈夫さが必要なのだ。憎み、怨み、踏み躪るに足りる強い敵こそ、鍵次は欲しいのだ。

全て奴のせいなのだ。奴が悪い。何もかも元凶だ。ノンネが未だに起きないのも、穎田が怪我を負ったのも、権田がハジヤに乗せられたのも、全部、目の前にいる魔術師が悪いのだ。

真実など問題ではない。他人の事実も必要ではない。要は自分がそれを信じられるかどうか。自分を騙しおっして、現実として顕すかどうか。

「おお、おおお、うおおおおお！！」

身を震わせるほど、喉から叫びを搾り出す。感情が叫びを溢れさせ、叫びが魔力を励起する。溢れるエーテルが装甲の隙間から漏れ、ほの暗い堂の中でゲーティアの姿を浮かび上がらせる。

充溢したエーテルで飛び出したゲーティアが　顔面を思い切り床に叩き付けた。

頭部をめり込ませたまま三十メートルは前進して、ようやくその勢いを弱める。

メガロスが転ぶ。操縦の初心者ならばメガロスの巨体と自分の体との差異に頭が着いて行かず、このような仕儀となることは珍しくない。事実、鍵次も始めの頃は直感的操作に馴染めずにいたものだった。

しかし、それが今この場で現れるというのはどういった訳か。すつころんだ鍵次こそが分からないでいた。

混乱のあとで遅れてくる鈍痛は、右の足からであった。痛むというよりは痺れるような搔痒だ。だが感覚のフィードバックを受けている鍵次の右足までも突っ張ってしまい、思い通りに動かせない。

詳しく見れば、ゲーティアの右足がじくじくと泡立ち始めていた。「こ、これは!？」

実際に目にしたこと認識してしまい、足裏が焼け爛れる感覚に堪らず鍵次は呻きを上げる。非常に優れた耐食性を有するエーテル合金を溶かすには、王水の中にも漬け込むか、もしくはそのような魔術を行なうほかない。

「これがお前の、魔術か」

聞かれたイステカーマはくすりと笑わず、大仰な動作でガイマに礼を拝させた。

「その通り。これが私の魔術　感染魔術でございます」

感染魔術。接触物に対して半永久的に、かつ高い恣意性でもって望むとおりの状態へ顕す魔術である。若しくは接触魔術と呼ばれることもある。その影響もまた多岐に渡り、極めれば接触しただけで如何なるメガロスも即座に破壊するどころか、意のままに操ることさえ可能になるといふ。

多種多様な魔術の中にあつて、感染魔術の恣意性は抜きん出てい

る。接触という過程を踏む分、より濃密に魔術を相手へ顕現させることが出来るのだ。接触したメガロスの足を溶かす程度、ガイマとイステカーマにとっては造作も無いのだろう。

煙をあげて解ける装甲が垂れ落ち、豆腐のように崩れて床に広がる。これは溶解というよりは腐敗というべきだろう。

足の痛みの深度によって、鍵次は腐敗の進み具合をまざまざと見せ付けられている。感覚のフィードバックが、まるで自分の足が生きながらに腐っていくのと同じ心地を与えてくれる。

右足だけを浮かせて何とか器用に立ち上がり、鍵次は近くの柱に左手を突いて寄りかかった。

こんなもの、昔のそれに比べたら物の数ではない。そう嘯けるものなら、鍵次は是非そうしたかった。だが結局のところ彼は、このたった一つの魔術ですっかり先ほどの勢いを失ってしまった。

確かにこれ以上の致命的な攻撃を、鍵次は被ったことがある。腹から入れられた貫手で直接コクピットを握り締められたこともあるし、胴体を斜めにずっぱりと断ち切られもした。

それは憶えている。思い出せもする。だがそんな思い出の中の代物より、今自分自身が被っている激痛のほうが度し難い。

所詮それらは過ぎ去った痛みだ。上手く使えば自身を奮起させる材料となる。しかしそれも限度がある。自分で自分を騙すのにも、限度があるということだ。

あるいは騙すにも、種類があるのか。敵を屠るため、ノンネを傷つけてしまった己の咎を覆い隠すためならば幾らでも騙せても、ただ一度食らわされた痛みには、鍵次自身も騙されてはくれなかった。「さあ、まだ始まったばかりですよ。さあ、さあ！」

振るわれるガイマの拳を、大仰に距離を取って避ける。激しい拳動についてこれなかったのか、腐りかけていたゲーティアの右足首が付け根から取れ落ちてしまった。まだ腐敗の程が浅かった構造部も、蕩けた装甲と一緒に紙細工の柔さで潰れてしまった。

これで隻腕だけでなく、破足にもなってしまった。断たれた右腕と腐った右脚を引き摺って、ゲーティアはひたすら回避に専念する。ガイマの腕が、脚が霞めるたび、ぞわりと鍵次の背筋が怖気を走らせる、まるで漏れ出るエーテルが装甲を撫でていく感触まで伝わっているように、皮膚が敏感に反応してしまう。

もはや一触たりとも許されない。特に中枢に近い部分は触られたら、腐敗がコクピットに早く浸透してしまう。そうならば中の鍵次もろとも右足首と同じく蕩けてしまうのだ。

フリースランドにて：？

腐り落ちた足首からは、エーテルがとるとと滴り落ちる。本来ならすぐに傷口をエーテルが覆ってくれるのだが、それは一向に行なわれない。どうやら治癒を阻害する呪いまで付与されたらしい。

嫌だ、嫌だ。そんなのは嫌だ。まだ自分はこの島に来て、ハジヤの生産施設を壊したただけだ。東京を襲い、ノンネにトラウマを与えた者たちに、まだ何の返礼もしていない。そんな道半ばで止まることなど、想像したくもない。

考えたくないから考えないでいられるほど、人は単純ではない。死ぬかもしれない。殺されるかもしれない。それもとびきり苦しく、惨めな過程を経て

「はあ、はあ……」

自分の息が冷たく感じる。ゲーティアを動かすたびに、体と心の熱が取られていく。本来ならここでむしろ精神を発起し、需要以上の魔力を生み出して対抗するべきところのだが、鍵次の脳裏に浮かぶのは自分の腐り果てる様子だけであった。

重圧がむしろ己の潜在能力を引き出し、メガロスの能力を爆発的に向上させるほどの魔力を生み出すという事例は、確かに存在する。鍵次がベールクを撃退したり、ティラトールを退却させたのも、その爆発力のおかげである。

しかしそれは、常に良い方向　自身の望む方向へ向かうとは限らない。精神という身近にして最大の魔を飼い慣らすのは、一般人であれ魔術師であれ、あるいは魔術師ならぬメガロス操縦者であれ、容易ならざることなのだ。

たまたまそれがネガティブな方を向いただけだ。たったそれだけで、メガロス操縦者は死ぬことが出来る。

無造作に繰り出される蹴りを、けんけんの要領で何とか体位を入

れ替えてやり過ごす。下がるゲーティアに、前に出した足を降ろしてガイマが踏み込んで右の拳を放つ。

鍵次のそれと比べれば動作も大きく、何ら技巧らしきものを感じさせない粗野で荒々しいパンチだ。避けるのはまるで苦ではない。向けられることそれ自体が苦なのである。

これほど危険な魔術の発動した拳を向けられて、鍵次の心は分かりやすいほどに縮み上がってしまったている。

そんなはずはないと、否定する自分がいる。目の前の男は、以前に自分を殺そうとした男だ。最強最悪の魔術師の息子で、その父を殺した自分を殺しに来たのだ。こちらを殺しに来ているのだから、殺してしまつていいはずだ。同じだけの殺意を向けて応えても、誰にも迷惑はかからないはずだ。

だのにエーテル圧を示す針は一向に振れない。むしろちょんちょんと下を向き、下降を示す勢いである。

この男は、ノンネにひどいことをしたのに、権田にもひどいことをしたのに、だから自分が殺してもいいはずなのに

何もかも揃つていて、お膳立ては揃つているはずなのに、まるで進展しない。エーテルは一向に冴えず、超絶技巧の精妙なる操縦で何とか避け得ているが、徐々に動きも鈍りつつある。

ガイマの掌が屈んだ背の後ろを過ぎていくのを、鍵次は間近に感じる。霧のように撫せていくエーテルの他に、ごおっという音が後頭部の辺りで発生したような気になる。

やはり、段々と近づいている。

「くあ！」

鍵次は呻くようにエーテルを前方に噴射し、ガイマから大きく離れる。触れられさえない距離に身を置けば、とりあえずは安心だ。「全くあなたは、逃げるのが本当にお好きなようだ。しかし、今回は援軍が来ますかね？」

逃げるゲーティアを追いもせず、ゆったりとした足取りで遠巻き

に眺めている。

そして徐に、右の掌を頭上へと掲げた。その瞬間に鍵次が感じた怖気は、これまでとは比べ物にならなかった。

暗く、濃く、致命的な魔の気配。高度な恣意性を持つ魔術が、匂い立つようだ。分かりやすいほど命を脅かす妄想の具現が、すぐそこまで迫っている。

背に走る怖気に押されて、鍵次はガイマに向かって飛び出していた。しかしその道程は、ガイマが掌を振り下ろす動作に比べて明らかに長く遠い。

「あはは。そう慌てずともいいんですよ。すぐに楽になりますから」  
ふわりと、子の頭を撫でるような柔さで、ガイマの掌が床に舞い落ちる。

瞬間、魔術が空間に炸裂した。

床に染み込むエーテルが、電流に近い速さで走る。幾つもの蛇がのたくったように複雑な幾何学模様は、ガイマの手のひらを中心にして壁や柱、天井にまで広がり、薄暗かった堂の中がまばゆくも毒々しい紫の光で満たされる。

その光の直中であって、ゲーティアはびたりと体を止めている。溶けた右足も床に下ろし、足も肩幅ほどに開いた半端な中腰の姿勢だ。

僅かな身動きすら起こさず、足裏が吸い寄せられているかのよう  
に微動だにしないでいる。関節だけではない。各部のスラスターまでも完全に沈黙している。

端末から幾ら入力しても、ゲーティアは全く反応を寄越さない。とはいえその信号も、殆ど心胆を寒からしめる恐れから出た震えが殆どだった。

対象メガロスの指揮系統へ瞬時に掌握せしめる。メガロスに乗っている魔術師にとって、これは命を直に握られるのと大差ない。

メガロスと言うのは、それ自体が巨大で緻密な魔術の集合体であ

る。その全てに生み出した魔術師の魔力が込められている。

魔力、そしてエーテルは基本的に人の精神から生まれる。その性質は当然、一人一人違うものである。百人いれば百種のエーテルが発生する。そしてそれらは、決して相容れない。条件によってはある程度までの親和性を発揮するが、完全なる一致というのは、他人では在り得ない。

つまり魔力同士、エーテル同士というのは、まず混ざるようなこととはなく、それ自体が敵性魔術への対抗策ともなる。メガロスのような大魔術に対して魔術で干渉し、さらに操作してしまうというのは、魔力の量や魔術の質で圧倒的に上回るしかない。

鍵次はシートに背を預けることも出来ず、半端に浮かせたまま堂の中を睥睨する。彼の視界に広がるのは、紫の光を帯びたおびただしい幾何学模様である。

果ての見えない異次元空間の端まで書き込まれているであろうそれは、いわゆる魔方陣というものだ。

霊媒や召喚、魔除けや結界など多岐に渡って使用される魔方陣は、描画の複雑さと量次第でその機能を如何様にも変えることが出来る。

ならば今まさに発光している魔方陣は、どれほどの力が込められているのか、所狭しと書き込まれた複雑な模様。床と壁と柱と天井の全てを埋め尽くす広大さ。質にしても量にしても、第一流に属するものであることが窺い知れる。

恐らくその機能は、ガイマの接触魔術を拡充させるものなのだろう。方陣の中心に据えた掌から充ち満ちる紫のエーテルに当てられ、完全に挙動を沈黙させるゲートィアを見れば、ガイマの接触魔術に捕らわれたことは明らかだ。

床を介した魔方阵によつて感染・接触魔術の属性を広げ、そこに接した者全てにガイマの魔術を干渉させる。直接接触しなければ発動しないというディスプレイアドバンテージが完全に払拭され、遠く離れているにも関わらずゲートィアはガイマの魔術に囚われている。

「はは、そう怖がらないでください。エーテルが濁ってしまいますよ」

魔方陣で感染魔術を維持して、イステカーマは笑いながら鍵次に話しかける。出来ることの無くなった鍵次は、黙ってそれを聞いているしかない。

生殺与奪権を握られていつまさに今、自ら気を吐かねばならないというのに、心は心臓と一緒に締め上げられて全く奮わないでいる。その様を見てさらに悦に入ったらしく、イステカーマは語尾を上げて喚き散らす。

「そんなに怖がって、死ぬ気ですか？ だったら殺しますよ。父を殺したあなたを、私がこの手で殺しますよ！」

弾ける哄笑が堂の中で反響し、鍵次の耳を包み込む。幾つも重なって届く声が、四方から鍵次の体に沁みてくるようだ。

いつそ清清しいくらいに、イステカーマは楽しそうに笑っている。ゲーティアを床に縫い止めて何の抵抗もさせない様が、本当に嬉しいようだ。

それも当然かもしれない。考えてみればこのイステカーマは、鍵次が敵対してきた最強最悪の魔術師、スライマンの息子なのだ。言わば鍵次は彼にとって親の仇である。

親の仇への復讐が成就する。それを喜ぶのは当然の心理だ。鍵次だって今しがた、権田やノンネのためということまで心を奮わせていたのだから。

目の前の男の父親を殺したのだと言うことを、鍵次は今さらながらに気がついた。正確にはスライマンはエグゾルが封印したのだが、そんなことはイステカーマには関係の無いことだろう。

スライマンの起こした功罪と、自分が被ってきた理不尽が、それらをマスキングして鍵次に気がつけなかった。敵もまた鍵次と同じかそれ以上に、怨み辛みを抱えているのだと言うことを

「俺は、違う。俺は、こ、殺して、ない……」

気づかされた鍵次は、これまでにないほど言葉という言葉をつき尽くしたい気分だった。そんなことは関係ないのだと想いながらも、言い募らずにはいられなかった。

「そうです。それこそ、私が欲しかったものですよ！」

かあつと熱いエーテルの息を吐いて、イステカーマが甲高く叫ぶ。完全に自分の世界に入っており、鍵次の言い訳などまるで吟味している様子は無い。

「もっと、もっとです。許しを請うてください。運命を嘆いてください。何なら抵抗してもいい。服ろうことなく抗いなさい！ 外聞など気にせず命乞いをしなさい！ 何が何でも死にたくないと願いなさい！」

まるで呪文のように、一語一句ごとにイステカーマの魔力が波動となってゲーティアを打擲する。もしかすれば彼は、これを言うためにこの魔術を成立させたのかもしれない。

広い堂の隅々にまで魔方阵を敷き、そこに鍵次が無警戒に踏み込んだ時点で、イステカーマの魔術は成功したも同然だった。その発動を遅らせたのも、発動させた後ですぐに殺さずにいるのも、全ては彼の欲求を満たすためだ。

純粹にして真性の魔だ。己が欲するところのままに力を振るうその様は、まさに魔術師の所業だ。

声に煽られて震え上がる鍵次の姿が、さらにイステカーマを滾らせる。休息にエーテルが萎え衰えていくゲーティアに対して、ガイマはまるで己の分身のように大きなエーテルのかすみを背負っている。

「心からの願いを踏みにじってこそ、復讐は完成を見る。そうは思いませんか？ 相手のしてほしくないことを、とことん、とことんまで突き詰めて、この世から消し去る。それが復讐というものでしょう！ そうではありませんか？ そう思うでしょう？ そうなのですよ、小中鍵次！」

相変わらず返事を必要としない語りが、エーテルの余波を伴って残響する。

果たして自分はこれほどの精神的質量を持って事に臨んでいたのだろうか。テロリストのくせに、テロリストの息子のくせにと、心の内ではイステカーマを詰りはするが、それは表に顕れる前に露と消えて跡形も無くなる。

これまで心を占めていた権田やノンネへの思いもまた、霧消して見当たらない。脳どころか体中に行き渡っていたというのに、すっぱり抜け落ちて漠とした空虚を残している。

自分の空洞を浚っても、魔力になりそうなものはない。生存本能さえ鳴りを潜めて慎ましかに、そして恐々と隅のほうで大人しくしている。

自分さえ、自分に味方しない。いやそもそも、鍵次に味方などいたのだろうか。賀茂は助けてくれはするが、それはレメゲトンの任務が前提だ。こんな危ない状況に巻き込んだレメゲトンは、それ自体鍵次の敵と形容してもいい。平穩に暮らしていた彼を再びゲートイアに乗せ、魔術師との戦いに巻き込んだのは、他ならぬレメゲトンなのだ。

権田もノンネは、敵でも味方でもない。彼らのためにと心を奮わせたときもあつたが、今では何の顕現もない。死にゆこうとしている鍵次を、誰も助けてはくれない。

魔術師に命を脅かされるこの状況こそ、鍵次の敵ではないのか。こうなることを、自分は望んでいたのか。

(望んでなんか、いない)

強く望んでいたのなら、建築会社になど入っていない。どうやっても、何をやっても、ゲートイアと共にいたはずだ。それがなかった時点で答えは出ている。何もかも決まっている。

分かっていたことだった。だがやはり、鍵次は巻き込まれたのだ。魔術師とメガロスと戦いとレメゲトンは否応なしに彼を巻き込んで、

絡め取って、運命に剥き身を晒させるのだ。

「さあ、そろそろ腐りましょう。大丈夫、まだ死にません。メガ口スと一緒に腐るだけです。たったそれだけ、それだけ……」

地に付けた右手ではなく、空いた左手を見せ付けるようにして掲げる。禍々しく開かれた五指の中に、一際眩く照り、おどろしく蠢く軟体が見える。まるで意思持つそれは時折身を揺すり、方陣へ流れ込むのを今か今かと待ち受けている。

「ゆっくり、ゆっくりです。静かに、優しく、ささやかに、あなたを殺す。私が殺す。いいでしょう？ いいですよ？ 殺しても、いいでしょう！」

本当にゆっくりと、ガイマの左手が高々と掲げられる。もしかすればそれは、死に際に発揮された走馬灯のようなものなのかもしれない。だから鍵次の体も、ゆったりと寛いで動かないのかもしれない。

動かないんじゃない。動けないんだ。動きたくないんだ。動こうと動かなかろうと、何も変わらない。

死ぬ。溶けて、死ぬ。腐って、死ぬ。魔力も奮えず、願いを踏みじられ、何も出来ずに死ぬ。

紫の光が尾を引き、床に押し付けられて　左腕が、くるりと宙を舞う。

舞い飛んでいるのは、左手だけではなかった。腰の辺りから切除されたガイマの体が、同じように飛んでいる。鍵次が口を開けて阿呆そのものの様相で見守る中、それらはもはや光の失せた床の上に落ちていった。

そして気がついたように、斬り残された下半身と右腕が、ばつたりと倒れる。

「あ？ え？」

混乱を呈するイステカーマの通信が漏れ聞こえる。鍵次と同様に

すっぱりと抜け落ちた感覚に、自身がまだ追いついていないらしい。「悲しい、悲しいなあ。イステカーマ」

かつんと高い足音。固い床を踏む固い音。それは声同様、突如として闇の中から浮かび上がってきた。

魔術によつて隠蔽されていた姿を晒したのは、やはりというべきか、メガロスであつた。黒い地金の構造部を灰色の装甲が覆っている。そいつは携えていた杖、もしくは二又の矛らしきものを振るい、刃先にこびり付いていた紫のエーテルを払った。

「ど、導師……」

導師と呼ばわれたメガロスのパイロットは上半身のみで寝転がるガイマの、その胸部装甲に何の躊躇も無く二又の矛を突き刺した。

するりと自然な所作で貫通した刃先がガイマを床に縫い止め、導師のメガロスは自身の矛に寄りかかり、覗き込むようにしてガイマを見つめている。

「父親の仇討ちが全てだったのか。すまなかつたな、イステカーマ。気がついてやれなくて」

イステカーマは黙して答えない。そもそもガイマの胸を刺されているのだ。直感的操作を搭載しているメガロスは、機体のダメージを搭乗者にフィードバックしてしまう。

まさに胸を背中から貫かれた痛みで、ろくに喋れもしないのだから。さらには腰と左腕と右腕も断たれているのだ。本来なら痛みにもたうち回っても仕方の無い負傷である。

「なるほど。それは、仕方がない」

イステカーマの沈黙をどう取つたのか、灰色のメガロスが刺し貫いたガイマを高々と掲げる。鉾はさらに深く食い込み、中の構造物がぎちぎちと悲鳴を上げている。

「邪魔を……邪魔をするな！ こいつは私が殺すんだ！ こいつを殺す、父を殺したこいつを私が殺す！ それが私の――」  
「駄目だな。そんな願いは叶わないよ」

気の抜けるような優しい声で、導師は矛に僅か力を加えて回す。

頑強だったガイマの装甲が煎餅か何かのように乾いた音を立てて割れていった。

鉾を伝ってガイマから液状のエーテルが垂れる。何とか抵抗しようと思じろぎを繰り返すのだが、よほどの確に急所を貫かれたのだろう。必要なエーテル圧が確保できず、ガイマの残された腕の端は痛々しい痙攣を繰り返すばかりだ。

「もう、いいだろう。そんな願いは。疲れただろう、苦しかっただろう。君がそれだけのものを抱えていたなんて、私は気がついてあげられなかった」

だから、と続けて、二又矛の刃の付け根がぱかりと割れる。そこには何故か、手が隠してあった。黒い構造部を白い装甲で覆った、それはメガロスの腕であった。

その手は競りあがって、浸りとガイマの胸に当てられる。

「まず最初に、君を救うべきだったんだなあ」

導師は低く抑えた声音で、空恐ろしいほど優しげに語り掛ける。

そして同じ口で、魔術の詠唱を続けて吐き出す。

「我、鍵にして拳ならず。我、拳にして剣ならず。我、剣にして鍵ならず」

ガイマに差し向けられた手が、眩い光を放出する。傷口から滲んでいるイステカーマのエーテルとは違った色の光が、迸るように四方へ広がっていく。

押し当てられていた掌は徐々に形を失くし、解け、伸びて、再構成されていく。もはや五指などではない。扁平な剣先を幾つも連ねたように、伸び伸びと育つ若木の枝のように、それはガイマの胸の中へと沈み込んでいく。

節の一つ一つから滲む光は、繭糸の如くガイマを包み込む。逃げ惑い、振り払う抵抗をもともせず、押しさえ込み、瞬く間に楕円形の球へと納めてしまう。

「小鍵機関、展開」

さらに続く詠唱と所作で、導師は矛をぐるりと左に半回転させた。途端、嚴重な金庫を開くような重苦しい音が、堂を砕かんばかりに鳴り響いた。

スウラキダ  
「封印」

最後の詠唱は短く、あっけなく 強力であった。

すぐさま縮退を始めた繭は、一瞬にしてその場から消え失せてしまった。矛の先に付いていたガイマの半身は、影も形も残ってはいない。

当然だ。今の魔術は、そういうものなのだ。メガロスだろうと何であろうと、あらゆる魔術呪法を問答無用で一切合財消し去ってしまうのだ。

その威力も、その光も、その呪文も、その姿も、全て、鍵次は知っている。実感を伴って理解している。

二又の矛も、そこに付いている手も、灰色のメガロスも、全て鍵次の記憶のうちだった。

とつくにイステカーマの魔術は解かれ、腐敗していた傷口さえ治癒を始めていたと言うのに、鍵次は寸毫たりともその場から動けずにいた。

勿論それは魔術によるものではない。彼の心が、記憶が、関係が、全身を縛り付けてその場所に固着させたのだ。

記憶が身を震わせて襲い掛かり、競りあがるに任せて、鍵次はその口から迸らせる。

「エグゾル、エグゾルウウウー！」

エーテルを伴う叫びが広がり、堂内を軋ませる。

「よう、鍵次」

渾身の雄叫びを打ち消す、涼しげな声。懐かしく思い出を喚起して、問答無用で引きずり回す暴虐的な回顧。

スライマンとの最終決戦、そこでの出来事が、鍵次の頭の中で空転する。無二の親友を失った感触が、粟立つ皮膚の上を走り抜ける。

ゲーティアは、突如としてその場に蹲った。もはやメガロスの体を支える作業すら行なえないほど、鍵次の神経は他のものに占められている。

立ってなど、いられない。そして頭を上げたゲーティアが灰色のメガロス　ゲーティア「プセマを見上げている。」

二又矛「バルダギスンシス」の先にゲーティアの右腕　小鍵機  
関を掲げて、エグゾルは鍵次を見下ろしている。

## 超越偽典：？

「エグゾル、エグゾル！」

制御しきれない感情が叫びとなり、発せられるたびにエーテルの衝撃波を伴う。それでもゲーティア＝プセマ エグゾルは気にする素振りもなく、悠揚とゲーティアに歩み寄る。

「本当に、久し振りだな」

いかにも落ち着いたプセマの足取りとは対照的に、鍵次は顔面を蒼白にしたまま、浅い呼吸を繰り返している。そのくせ感情は際限なく高まり続けており、先ほどまで稼働限界の70%を下回っていたゲーティアのエーテル循環器系は、今や稼働率120%を維持している。

挨拶をしても何の反応も返してくれない鍵次に、エグゾルは仰ぐようにして嘆いてみせた。

「また会えたんだ。喜んでくれるよな、鍵次。それに、メディナ」  
何らオペレーターとしての役目を果たさず、ただゲーティアの通信越しに状況を窺っていたメディナは、中央戦略発令室のオペレータートブースで言葉を失っていた。二十年以上前に消えた兄の出現に、心の均衡が限界を迎えているらしい。

それは中央作戦戦略発令室に詰めていた他の面々も同じようで、志田はわざとらしいまでに大仰に驚き、表情など滅多に表さないドクターでさえ眉尻を高く上げて瞠目していた。

「聞きたいことがありそうだな。いいぞ、時間はある」

鍵次だけでなく、通信を聞いているレメゲトンの面々全てに語りかける、ゆるやかで噛みふくめるような声。

「どうやって、戻ってきたんだ？」

一頻り感情を吐き出しつくした鍵次だったが、それでもまだ体は先程の興奮を引きずっているらしく、声音が緊張で震えていた。

プセマは鍵次の問いに答えるためか、携えていた矛を掲げ、その先に取り付けられた腕　ゲーティアの小鍵機関を見せ付けた。

「これで封印されたんだ。出るときもこれを使えばいいのは、道理だろう？」

かつて、第一次メガロス大戦の末期に行なわれた鍵次とスライマンとの最終決戦において、エグゾルはその身を犠牲にしてスライマンを封印した。ゲーティアに備わっていた小鍵機関を肘ごと切り離し、ゲーティアの模造品であるプセマによって小鍵機関の必滅奥義『封印』スラキタをスライマンに行なったのだ。

その際エグゾルはスライマンとアグノスを封印の範囲内に納めるべく、自らもその只中に留まり、共に封印された　はずだった。

「封印が出来るなら、その逆　開放を行なえばいい。それで俺は戻ってきた」  
「そ、それなら　」

「今度はどうして戻ってきたか？　だろ。それはもう答えてあるじゃないか」  
矛をゲーティアの、肘から先が失せた右腕に差し向ける。

装甲の隙間から覗くプセマの目が、いやらしく歪んだように思えた。  
「世界を救う。そのために俺は帰ってきた」

それはイガースの宣言と同一のもだった。イガースの首領である導師モアツウエズの正体がエグゾルだとしたら、それも当然なのだろう。

「スライマンの息子を引き込んでいて、言う台詞じゃない」

「獅子身中の虫というのは、どこにでもいるさ。そうそう潔癖ではられない。でもな……」

含みのある言葉を引きずって、プセマは二又の矛　バルダギス  
ンシスを肩に担ぐ。

「これからは、綺麗でいられる。何も気にせず、何にも囚われずに

「いられるんだ」

「それがお前の、救済か？」

我が意を得たりとばかりに手を叩き、エグゾルは寿ぐ。

「にしてもそのナリで、よくここまで来たな。しかも精霊もないじゃないか」

「右腕がないからな。当たり前だろ」

鍵次にそんなつもりはなくとも、ついあてつけがましい言い様になつてしまふ。エグゾルはくるりとバルダギスンシスを回し、後ろ手に隠してしまつた。

「返さないぞ、これは」

「……… だったら、奪うまでだな」

突然エグゾルは、嬉しそうにくつくつと笑う。

「お前つて、よく分からないところで強気になるよな。もう四十になるつてのに、変わらない」

「まだ三十八だ。四十はお前だろうが」

「そうだった。周りが若いのはっかりになつてたから、少し忘れていたよ。ところでお前、メディナと別れたんだつてな」

「何でそんなこと知つてんだよ」

「探らせたんだよ、魔術師を使つて」

「相変わらず下世話な野郎だ。勘弁してくれよ」

滑らかに、つらつらと、鍵次の口から言葉が転がり出てくる。つい先ほどまで噤んで動かなかった口が、エグゾルの前では自分でも意外なほどに流暢になつていた。

いつの間にか二人は、青年時代に親しかった頃の隔たりの無さで語り合っている。ここは敵地で、今しがた部下を消し去つたといふのに、そんなものなど二人の間にないように、逸らして話す。

「娘も生まれたんだつてな。俺の血統が出てるから、美人だろう」

「ああ、そうだな。全くだ」

「欲情したか？」

「……ブチ殺すぞ、じじい」  
「二年しか変わらないだろ。相変わらず青臭い奴だ。結婚したんだから、これくらい流せよ」  
「もう別れたって言うてんだろ。それに今のはさすがに胸糞悪いぜ」  
「ああ。そっぴや俺の姪っ子、寝込んでるんだっけか」  
娘の話になってから険しくなっていた鍵次の顔が、さらに深く沈みこんでいく。

「誰のせいだと思ってやがる？」

「お前以外の誰でもないよ。お前が出てこなければ、あんな大事にはならなかった」

「俺のせいだつてののか!？」

「そう言うてるだろ。お前の来る前に起こしたカルツオの被害なんて微々たるものだった。避難が完了するまで待っていたからな」

「お前の姪の学校で、何人も死んだんだぞ」

「多少は出る。それはいい。問題はお前の」

「良くないだろうがッ!!」

エグゾルの言葉を遮り、ようやくゲートティアは立ち上がる。腐り落ちた右足は元の通りに治癒し、

「まあ聞いてくれ、鍵次。俺の話を」

「兄さん」

「またも話を切られても、エグゾルは気にすることなく、「メディナ……」と長年生き別れていた妹の名を、万感込めて呼ばわった。

「もう、こんなことやめて。せつかく、せつかく兄さんのおかげで世界が平和になったのよ。それを、壊さないで」

「娘が大変だつてのに、世界平和を説くのか。我が妹ながら泣けてくる」

「いい加減にしてくれ、エグゾル!」

「ああ、もういい加減さ。この世界は」

「これまで幾人もの魔術師と出会ってきた鍵次の直感が、危険なま

でに囁いている。

エグゾルの考えていることは、常人の理解を超えた所業だ。狂気を孕んだおぞましい代物だ。

「なあ、メデイナ。世界が平和だなんて、本気で思っちゃいないだろ。じゃなきや鍵次が出戻ってきたりしないものな」

本当に、魔術師を使って探らせたのだろう。エグゾルはこちらの事情を、何もかも承知しているようであった。

「皆、心が揺らいでいる。その揺らぎが波紋となって、世界の形を歪めている。もうそろそろ、いいだろう。何もかも終わりにしたいって、心の奥では皆思っているはずさ」

「世界を破滅させるのか。安易だな」

鍵次の反駁を、プセマが肩を竦めて答える。まるで覚えの悪い教え子を諭すようにして、エグゾルが応える。

「破滅じゃない。それどころか、逆さ。封印するんだ。世界を、この手で」

そう言ってプセマが、バルダギスンシスの先に取り付けられたゲ―ティアの右腕を指で示した。

「この地球ごと、封印をかます気が!？」

「有り体に言えば、そうなるな。そしてみんなを、あっちの世界に連れて行ってあげたいんだよ」

恍惚と悦に浸りきった調子で、プセマはあるうことが、その場で踊り始めた。諸手を広げて世界を丸ごと抱きしめるように、くるくるとあてもなく回る。

「あっちの世界はいいぞ。何もない。何もないんだ。なーんにもなくなるんだぜ、素敵だろ？　なあ、鍵次」

「エグゾル……」

「そこには世界がない。封じられているだけ。認識もない。だから他もない。観測できない。だから何も起きない。静かで、平穩で、

澄み切った所なんだ」

お前はそういう場所に、何もかも送りつけていたのさ。これ見よがしに小鍵機関を掲げながら、エグゾルは言った。

もはや鍵次の友であるエグゾルは、あるときに果ててしまったらしい。今ここに現れたのは、エグゾルの形をした、全く別の何かだ。そうとも思わねば、とてもではないが鍵次はやり切れなかった。「お前は、帰ってきてない。帰ってきてないよ、エグゾル！ お前はあるとき死んだんだ。そうじゃなきゃ、こんなことが出来るはずが無い！」

「そう思いたいのなら、そういうことにしておけ。封印されれば、お前も考え方を変える。俺が正しいのだと、実感できるよ」

「そんな実感、いるかよ！」

鍵次の強い拒絶に、むしろエグゾルは喜色を浮かべた。

「そうか、なら困ってしまふな。お前だけは、封印の向こう側に連れて行けないかもしれないよ」

殊更残念そうに、それすら大仰な演技のように、プセマは額に手を当てて大いに嘆いてみせる。それが搭乗者の心象なのだろう。

「俺の計画には、お前が不可欠なんだ。お前のゲーティアが無くては、立ち行かないんだよ」

「小鍵を、操れていないんだな」

「そうだ。よく分かったな。褒めてやろう」

冗談染みた言い方で、エグゾルはバルダギスンスから生えているゲーティアの右手を弄う。それは本当に繋がれているだけらしくて、まるで無抵抗の小動物のようにされるがまま、関節をきりきりと鳴らして遊ばれている。

「こいつはとんと我儘でなあ。やっぱりお前とゲーティアが良いらしいんだよ。俺は偽物だからなあ、それなりにしか操れない。世界を救うなんて、とてもとても……」

だから、とエグゾルはまたも言う。

「お前の力、俺にくれよ。俺を、本物にしておくれよ。そうすりゃ俺が世界を救う。土壇場で救い損ねたお前の代わりに、また俺が世界を救ってやるから」

今度こそ、本当に。まるで忘れ物でも取りに来たかのように気安く、気負わず、気さくに言葉にする。

世界を、救うということ。

鍵次は、世界を救っていない。世間　魔術師たちの風評として

では、鍵次は見事に悪の魔術師スライマンを倒し、世界を平和に導いたということになっている。結局のところスライマンを封印したのが、鍵次が操るゲーティアの小鍵機関だったので、その解釈は間違っていない。

間違っていないが、正確を期していない。本当に世界を救い、スライマンを倒してのけたのは、目の前にいる鍵次の親友、ロン・ミツダ・エグゾルなのだ。

その彼が、再び世界を救うのだと言う。少なくとも鍵次には、真つ当な物言いに聞こえていた。その方法論には大いに問題はあるとはいえ、エグゾルが言うのならばと、エグゾルにしか言えないだろうと、心のどこかで諦めていた。

自分は、世界を救ってなどいないのだから。ただ成り行きで巨大なロボットに乗って、戦いに巻き込まれて、気がつけば終わっていたのだ。その過程には存外、鍵次の意思は介在していなかった。彼の正義感、義務感、責任感は、運命の甲斐甲斐しい従者に過ぎなかった。

むしろゲーティアを降ろされた後のほうが、鍵次の人生は自分の意思に充ちていた。建築の仕事に着いたのも、人間味の薄い生活を続けたのも、ただの成り行きではない。全ては自分の意思だった。

ならば、再びゲーティアに乗ったのは　言わずもがな、彼の意思などではない。思惑を束ねた奔流が、またも鍵次の体を撫せていったからだ。

だからだろう。鍵次は間違っても、「世界を救った」などという言葉を口にする事ができなかった。そんな恥知らずで現実を捻じ曲げた虚言を吐きたくはなかった。

周りがそう思っている以上、自分までそれを認めたら、本当にそうなってしまうような気がした。

それが、恐ろしかった。まるで自分が英雄か何かのように扱われるのが、怖かった。今も、怖いのだ。だからそれに類する言葉を、素直に受け止める事が出来ない。

そんな恐れを抱く自分に、エグゾルの発言を翻させる事は出来ない。

「だけど、と鍵次もエグゾルに倣って口にする。

言葉は、消せないけれど　エグゾルは、消す事が出来る。

「俺は、貸さない。お前になんて、協力しない。俺は、世界を救わない」

ぐげ、とか、ごが、とか、意味を為さない呻きがプセマから漏れてくる。それは関節の軋みなのかもしれないが、もしかすれば、鍵次を笑ったエグゾルの声だったのかもしれない。

「大げさに言うなよ、恥ずかしいぜ」

「お前こそ、少しは憚れよ。恥ずかしいったらない」

そろそろ、いいかな、と断りを入れて、エグゾルはバルダギスンスの間から飛び出していた小鍵機関をしまい、切っ先をふらりとゲートエアへ差し向ける。

「俺は世界を救いたくて、お前は救いたくない。もうこれは、戦うしかないよ」

「俺は元より、そのつもりで来てる」

「さっきまで縮み上がってたくせに、言うじゃないか。お前のそういう滅裂な強気は、大好きだよ」

「嫌いじゃない、に留めてくれ。吐き気がする」

「悪いな。久しぶりに友達と会えたから、距離感が分からなくなってるな。そんなもんで」

エグゾルは手持ち無沙汰に「又矛をくるくる回して弄び、

「命に届いても、おかしくないなあ」

などといちいち、友人のよしみで忠告してくれた。

## 超越偽典：？

振り上げられた二又矛　バルダキスンシスが、穂先の間からエーテルを噴き出す。それごと斬り下ろされる光線を、ゲーティアが僅かな機を逃さずに避け得た。

何の遠慮呵責もなく、前振りも前説も前兆も無い、無垢の一撃。避けたというよりはそのいい加減な振り方に救われて、凡そ外れてくれたと言うほうが正しい。

のっぺりと薄暗かった壁から、横一線に外界の光が差し込んでくる。魔術によつて構成された城を貫通し、島を飛び出し、海をも断ち割ったそれは、バルダキスンシスが持つ本来の刃　エーテルザンバーである。

「おいおい避けるなよ。加減は難しいんだぜ」

メガロス一体を両断するのに適当な長さまで出力を調節したエーテルザンバーを肩に担ぎ、相変わらずの軽口を崩さぬままエグゾルは語りかけてくる。

出力調整によつて如何様にも形を変えるエーテルザンバーは、先程のように術者の魔力の続く限り伸展させることも出来、あるいは切り離して銃撃のように飛ばすことも可能である。ゲーティアとは違ったアプローチだが、ゲーティア「プセマもまた優れたエーテル操作機構を備えている。」

ぞんざいに構えているプセマの右腕が、不意に下段へと走った。それに伴い、エーテルザンバーがずるりと伸びる。

まずはゲーティアの戦力を削ぎ、然る後に力を借りる算段らしい。

またも城の壁を焼き切った刃だが、ゲーティアの装甲には届かない。鍵次はまるでエーテルザンバーを渡り歩くほどの僅かな見切りでこれを飛び越え、前方に向かって突進する。

ガイマの魔術で身動きが出来ず、心が竦みあがっていたことなど

都合よく忘れて、鍵次は持ち前の超絶技巧を發揮し、プセマとの間合いを潰しに掛かる。

途端、伸び来る棘がゲーティアの右肩を掠めた。衝撃で錐揉みしながら、柱に手をかけて無理やり姿勢を立て直す。

エーテルザンバーは、不定形のエーテルをかるうじて保持し、仮初めの形を与えているに過ぎない。単なる刃と違って向かえば、先程のように瞬時に変形し、敵メガロスを破壊するのに最適の攻撃形状を選択する。

鍵次はようやく、自分が冷静でないことに思い至ることが出来た。この力を自分は間近で見えてきたはずなのに、今の今まですっかり忘れてしまっていた。

自分は今、エグゾルと戦っているのだ。

かつては、というより初対面の彼らも、戦っていた。親元を離れ、スライマンに弟子入りしていたエグゾルは、魔術結社『バビロン』からの刺客として鍵次と戦った。ゲーティアの偽物　ゲーティア　「プセマを駆つて。」

鍵次は彼の妹であるメディナの助けを大いに借りて、辛くもエグゾルに勝利した。その後エグゾルはレメゲトンの預かりとなり、鍵次と共にスライマン率いる魔術結社『バビロン』を打倒することを誓った。

そしてその通りに、スライマンを封印した。つまりスライマンとの最終決戦に相応しいと判断されたのが、鍵次のゲーティアと、エグゾルのゲーティア「プセマ」だったのだ。

偽物プセマなどと遜ってはいるものの、その力は十分に互するものである。違いと言えば、ゲーティアにしか備わっていなかった小鍵機関と、プセマの携えているバルダギスンシスだろう。

ならばその二つを備えている今のプセマは、間違っても偽物などとは呼べない。少なくとも右腕が取れているゲーティアには、言う資格が無い。

さらに振るわれるバルダギスンシスが、ゲートィアに狙いを定めている。穂先をぴたりと据え、槍による突撃のような構えだ。

すぐに次の攻撃が何かを察したゲートィアが、スラストアーを全開にしてその場から横に飛び退く。

「エーテルウウウ、バアアスタアアア！」

躁じみたエグゾルの叫びごと、巨大なエーテルの丸太が発射された。

エーテルザンバーが持つ形態の一つ。穂先から伸びるエーテルを切り離して放つ砲撃、つまりはエーテルバスターである。

「おらあ、逃げるな！ 死にゃあしねえぞ、ビビンじゃねえ！」

一目散に逃げ回るゲートィアを追って、プセマがバルダギスンシスの穂先を振り回す。矢鱈滅法にエーテルバスターが飛び交い、壁に巨大な空洞を幾つも生じさせるが、エグゾルにそれを気にする様子はない。

確かにプセマの放ってくるエーテル光は、見た目の派手さとは裏腹に希薄である。破壊ではなく、行動の停止を目的としているからだろう。だとしても食らってよい代物でもない。エーテル光と衝突して動けなくなっている間に、協力を強制されてしまうだろう。

いや、協力と言う表現は優し過ぎる。エグゾルの欲するところは、そこではない。彼が欲しているのは詰まるところ、小鍵機関の制御機構であり燃料。鍵次の魔力こそ、エグゾルの欲するものだ。そこで鍵次は、小鍵機関のためのエーテルを吐き出す貯蔵庫程度にしか扱われないだろう。

「ふふ、ふはは」

我知らず、鍵次の口元が綻ぶ。自分の命が脅かされ、尊厳も踏みにじられようとしているのに、彼の心は無尽蔵に魔力を精製し続けている。

先ほど、ガイマに襲われたときにこれが出来ていればという思いさえ、もはや鍵次の中には存在しない。彼の意識はかっちりと、エ

グゾルに定められている。

「エグゾルウウウ！」

左手に充ちたエーテルが、柱となって駆け抜ける。プセマのいた場所を焼き払われ、焦れた煙を上げている。

突き出した左手を戻さず、そのままエーテルを充填して再びバスターとして放つ。

どれだけ魔力を放出しようと、鍵次の精神は全くもって萎えるところを知らず、メーターをとくに振り切ったエーテル圧は、堪らず装甲の隙間から排出することで何とか保っている。それさえも無くなればゲーティアは、自身のエーテルで融解を起こしてしまっているだろう。

心が、奮い立つ。何だかんだと言いながら、鍵次は友人に会えたのが嬉しいらしい。もう死んだと思っていたエグゾルが、変わり果ててしまったとはいえ、戻ってきてくれたのは、彼にとって吉報だったのだ。

だから、そこだけが重要で、エグゾルの考える救済だの、ゲーティアの協力だのというのは、本当に瑣末なことへと墮してしまった。今はもうとことんまで、己が魔を無二の親友に叩きつけることしか頭に体に心に浮かんでこない。

エーテルバスターの撃ち終わりを狙って、エグゾルが真下から向かってくる。

それをむしる避けようとせず、鍵次は背部のスラスターで、ゲーティアの巨体をプセマに向かって降下させた。

鋭く突き出された左足の装甲から、緑の蛍光色をした炎が噴出し、瞬く間にゲーティアの全身を包み込む。フリースランドに到達した際、ハジヤの生産設備を壊滅させたエーテル流を伴う蹴りである。

こちらもバルダギスンスの二又矛にエーテルを漲らせ、プセマはスラスターで伸び上がる力を使って突き上げる。

鍵次のエーテルとエグゾルのエーテルが、真っ向からぶつかり合

う。相容れないエーテル同士が食らい合い、弾き合い、溶け合っては吐き出される。

二又矛の刃先に、一本足でゲーティアが立つ。それをプセマが支えている。

「何だ、やるじゃないか、鍵次」

「お前こそ、封印されていたんだろ？ 全く衰えてないんじゃないか？」

「おいおい、別に褒めちゃいないぜ。やるにはやるがよう……」

ゆつたりと言い聞かせるような声。耳どころか空間そのものに沁み込んで、鍵次に届いてくる。

「お前も俺も、初老なんだぞ」

噛んで含める言葉の後を、強烈な閃光が継いだ。

鍵次の目の前が、光に包まれる。咄嗟に庇った腕を掻い潜り、ゲーティアの全周囲モニターが焼きつけを起こす。さらに襲う衝撃波と熱波を、ゲーティアが鍵次に余すところ無く伝えてくれる。

恐らくあのとき、プセマはバルダギスンスに溜めておいたエーテルを球形に広げ、その範囲にゲーティアを巻き込んだのだ。

言うなれば、エーテルスフィア。

モニターが回復し、鍵次が周囲を確認すると、エーテルスフィアによって大きく削られた城が、今正に崩れようとしているところだった。

今までもさんざ柱や床や壁を砕いてきたのだから、それは仕方のないことなのだろう。

降り注ぐ破片を避け、あるいはエーテルバスターで弾きながら、ゲーティアは倒壊の外へと逃げる。背負ったパウロス？にエーテルが迸り、爆ぜ割れるように展開する。

数秒で可変翼と大型スラスタを露出させると、ゲーティアは背中エーテルの火を付けながら疾走する。

破片を掻い潜りながら、やがて揚力を確保した機体が浮き上がる。

すかさず鍵次が足に力を込めると、ゲーティアが大きく跳ね飛んだ。やがて崩れ落ちた城を眺められる位置まで上昇したゲーティアは、周りを見渡す。

まさかエグゾルがこの倒壊に巻き込まれて、死んだなどとは夢想不到にしない。彼とゲーティア「プセマ」は、そんな柔な相手ではない。

そんな彼に応えるべき反応は、すぐに現れた。被捕捉警戒音は、どうやらゲーティアの直上を示している。

鍵次は相手を正面に捉えることよりも、パウロス？を吹かしてその場から離脱することを優先した。その辺りの逃げ腰は、強気になっても変わらない。

しかしこの場合、その対応が功を奏した。落ち来る巨大な火球の熱が、飛んで逃げるゲーティアの装甲を撫でていく。

それは瓦礫と化した城の中心に落ち、瞬間、油を水に垂らしたように赤い炎が四方に広がっていった。炎は海面に達しても勢いを緩めず、島を囲んでいた国連の海軍戦力の全てをよく飲み込んでしまった。

この不自然なまでの延焼は、魔術　それも鍵次が知るものであった。

ハポリュムの松明。火炎による地獄を表現するそれは、術者の認識の許す限り、あらゆるものを燃やし尽くす。城も、島も、海水も、船も、その例外とは成り得ない。

上昇しながらようやく振り向いたゲーティアが、雲を背に佇むプセマを捉える。拡大表示されたその姿は、先程のものとは細部の装甲が異なっている。

機体が、全体的に膨らんでいる。いや、増強されているという表現が正しい。太いところはより太く、鋭いところはより鋭く、マッシブな量感も遠方でも威圧となって顕れる。

ゲーティアの七十二精霊に連なる者からの攻撃が行なわれた時点で、鍵次にはきちんと予想が立っていた。むしろゲーティアの右腕

を持ち出したときから、可能性として当然ながら考慮すべきことだったのだ。

テオルギア。小鍵機関の精霊制御システム『シエムハムフォラシユ』の制限を解き、七十二精霊の同時召喚・並列使役を可能とし、装甲に変化させた七十二精霊を着用する、ゲーティアの最終戦闘形態。

その状態のゲーティアこそ、最強のメガロスと謳われるに相応しいものだった。その一体一体が一騎当千の精霊を七十二も使役し、かつそれらを纏うことでメガロスとしての能力を爆発的の向上させ、あらゆる状況と心象によって最適の形態変化を行なう。

理不尽を罷り通す魔術師たちをして、夢のような、冗談のような、不条理な存在と言わしめたメガロス。

それが鍵次の目の前に在る。さらに言えば、その形状はすでに変化している。

全身に蛇の意匠を詠えたそれは、蛇<sup>アラギ・フィズィ</sup>変化。蛇の属性を有する精霊を活性化する、テオルギア・ゲーティアの持つ戦闘形態の一つである。アモン、ポティス、バシン、ハポリュム、アスタロト、アスモダイ、フルフル、マルコシアス、ヴィネ、バラム、オリアス。主にこれらの精霊を強く顕して戦う。

同じ系列であるゲーティア『プセマ』であれば、ゲーティアと同じように精霊たちを操れるのは当然の摂理と言えた。

単なるテオルギア状態がメガロスの機能を底上げた汎用型ならば、変化状態は相手や戦況、自身の心象に合わせた特化型と評することが出来る。この場合、蛇が意味するのは死と再生、無限の生命力、そして永劫。

蛇変化時の特徴的な循環器系『ウロボロス』は、一つ一つがうねりくねってエーテル圧を倍化させていく構造となっている。最初の入力を倍化し、さらにそれを倍加していくのだ。エーテル循環器系

の構造的限界はあるものの、理論上この状態のゲーティア「プセマ」が運用できるエーテルに制限はない。

七十二柱の精霊で強固となった構造が、エーテルを高めていく。もはやその巨体にさえ収まらないエーテルが、束となって機体近くを迸る。

## 英雄救済：？

プセマの膨大なエーテルに、召喚された精霊が指向性を加える。掲げた左手から迸ったのは、幾重にも絡まった雷であった。ゲートイアを飲み込んで余りある電撃が、エーテル合金の装甲を呵責なく打ち据える。

「ぐあああああ！」

叫びを漏らす暇はあっても、端から避ける動作は間に合わなかった。

直感的操作のフィードバックが襲うなか、鍵次はゲートイアを雷の中から離脱させる。幸い、身を挺してパウロス？は守っていたため、巡航に支障がない。

自分を助けるための機械を守って、自分が傷つくのは何だかあべこべのようだが、この飛翔機関が無ければ、鍵次は今のエグゾルと同じ土俵にさえ上がれない。

否、これがあつたとて、同じ土俵とは言い難いのかも知れない。片や七十二柱の精霊全てを従え、小鍵機関さえ備えたメガロス。片や右腕が喪失し、飛行さえ他の機械に頼らねばならないメガロス。

勝負の趨勢を予め語るのに、それらは十分な要素と言えるだろう。ならばと、ここは戦略的撤退を選択するべきか？ 敵わないから帰りますと、そんな台詞の吐ける状況か？

鍵次とて、そんなことをするつもりは毛頭無い……無いが、やはりそうした弱音というのは、頭のどこかしらで過ぎるものである。フリースランドの上空には、二体のゲートイアしかない。どうやらまだ他の魔術師たちは到達しておらず、朱雀もそちらのサポートに回つたらしい。

ならば今このテオルギア・ゲートイア＝プセマを止められるのは、自分とゲートイアを置いて他にいない。そして敗北すれば、エグゾ

ルはゲーティアから奪ったその右腕で、この地球自体を封印する腹積もりだ。

封印の向こう側など、鍵次は知らない。知りたいとも思わない。そこが天国かも、地獄かも分からない。

エグゾルの言を信じるなら、そこには何も無いらしい。故に彼にとつてこの行いはむしろ解放であり、救世なのだろう。この世の諸々から地球と、そこにある全ての命を解放してやるのだろう。

全くもって迷惑極まりない行いだ。さすがは第一次メガロス大戦において、魔術師中最強の名を恣にしただけのことはある。ゲーティアを操縦できる以外は、至つて普通人である鍵次にとつて、そんな思考回路は及びもつかない。

続けて放たれるフルフルの雷撃を時たま食らいながら、鍵次も負けじとエーテルバスターを放つ。エーテル流が雷を四方に散らすのだが、エーテルバスターもまた減衰してプセマまでは届かない。

中空に止まったままのプセマを、ゲーティアが周遊している。恐らくは精霊から空中浮遊レビティションの魔術を行なっているのだろう。揚力を得るために空中では一時たりとも止まれないゲーティアを悠々と見送り、ウロボロスで無限に倍加させたエーテルバスターやフルフルの雷、ハポリュムの炎を際限なく投げ込んでくる。

蛇変化状態は無限のエーテルを生み出す代わりに、拳動も性能も融通が利かない。無限倍加工エーテル循環器「ウロボロス」を崩すことなく運用しなければならぬため、本来は超大規模魔術を発動させるための魔力炉として使うものである。

こうして単に雷やエーテルバスターを放つ分には、単純な魔術砲台に過ぎず、緻密で恣意性の高い魔術は望むべくもない。

最初の一撃こそ直撃されたものの、その後はパウロス？で絶え間なく巡航し、なるべく的を絞らせず、徐々に周回の輪を狭めていった。

再び放たれた雷を、ゲーティアはスラスターを左右で互い違いの

方向へ噴出し、急激に旋回して避けた。そのまま機体ごと回転させるバレルロールで雷を潜り、周遊する軌道をプセマへ一直線に向かうものへと変化させた。

無理な挙動で揚力が減衰した分、スラスター光を大きく閃かせてゲートティアが飛ぶ。相変わらずの猪戦法だが、蛇変化以上にエーテル操作のバリエーションに乏しい今のゲートティアがもっとも力を発揮できるのは、拳の届く接近戦である。

テオルギア状態のプセマに対抗できる可能性は、彼の内懐にしか存在しない。

「グオオオオオー！」

唸りを上げるゲートティアがエーテルバスターを跨ぎ、降り被った左の腕から蛍光色の炎が伸び出てくる。装甲の隙間から漏れていたエーテルの圧を無理矢理上昇させ、スラスターに転用したのだ。

圧縮されたエーテルが押し出され、反作用でゲートティアの左腕は瞬間、音速を突き破るほどに加速される。

より空気抵抗を少なくするため、左手は貫手の形で固められる。

それでも衝撃波で指の装甲が抉れ、付け焼き刃のエーテルスラスタに耐えきれず、他にも前腕から肘にかけての装甲も弾け飛んでいく。

「うおおあああ！」

自分の左腕が割れて碎けていく感覚のなかで、鍵次は端末への入力をさらに強める。痛みに紛れていく左腕の存在を確かめるように、もはや不要な右手まで添えて拳を突き出す。分厚い大気を手繰るように、刹那の間にゲートティアの左手を伸ばし　その指先が、痺れる。

あとは済し崩しに、プセマの装甲をゲートティアの指先が抉り、手の辺りまで沈み込ませる。もう少し進ませれば、プセマのコクピットさえ潰せそうである。エグゾルのエーテルと　鍵次のエーテルとが混ざり合い、滴り落ちる。

その僅かに、鍵次は届かない。構造部にまで至った破碎によって左腕の感覚は甚だ怪しく、エーテルによる修復は遅々として進まない。

「本当に、出来ることは限られているようだな」

胸を刺され、コクピットまで僅かなところまで迫っているというのに、その声はいかにも楽しげで、恐怖に圧されているのとは明らかに異なつた上擦り方をしていた。

「やはり俺では、変化の幅も少ない。だが、要は使い方だろう」

優しく指を這わすような、気のそぞろ立つ声音。あるいはそれは、鍵次の心を囚える呪いの声だったのかもしれない。

「捕まえたよ、鍵次」

くしゃりと、紙を潰す音。少なくとも鍵次には、そのようにしか聞こえなかつた。

けたたましく響くアラーム。煮え立つように慌しいエーテル・シヨックアップゾーバー！

そんなものは、毛ほども気にならない。今鍵次は、包まれている長い間離れていた戦友に。幾度も命を救い、勝利をもたらしてくれた相棒に。全てを封じ込め、全てを解き放つ鍵に。

小鍵機関の掌で、ゲーティアのコクピットが握り潰されていた。かつて自分の右腕も同然だったそれに、鍵次は体ごと命を握られている。

しかし、すぐにそれも意識の外へと追いやられる。

遅れて溢れたのは、痛み。胸と、足と、右腕が、鍵次の全身を痛みで覆いつくす。

「いぎゃあああああああー!!」

獣に似た咆哮が、鍵次の口から迸る。しかしそれは間違つても快潤なものではない。激痛を音に変換するだけの、単純で不埒な叫び。そんな叫びでも、エーテルは喚起される。

渾身以上の頑張りでようやく左の貫手を刺した鍵次をあざ笑う易

さで、バルダギスンシスの二又矛が、ゲイテニアのコクピットを貫き、背部飛翔機関であるパウロス？までも串刺しにした。

そしてちょうど二又矛に挟まれる形となったコクピットを、矛の付け根に収納してあったゲイテニアの右手が捕獲していた。もはや逃げる気も起きないよう、死なない程度に潰しつづ

「が、ごああ、あぐう……うづう」

ようやく叫びが呻きにまで収まり、鍵次の頭も多少は冷静さを宿す。

驚くべきことに、鍵次はまだ生きていられた。握り潰された拍子に両足はモニター等の部品に押しつぶされ、太ももの辺りから機械に食われている。上半身も同様に掌握の煽りを受け、拉げたモニターの破片に胴体を串刺しにされている。

大腿と胴体からの出血は、潰れたコクピットに泉を作るほど溜まり始める。破れた内臓からは糞尿の匂いが垂れ込め、肺腑は血の泡を傷口に浮かばせる。

それでもなお、生きている。痛がれる程度に意識が保たれ、状況を鑑みることが出来るほど、鍵次は健常であった。

「ごめん……鍵次。ごめんな」

かろうじて残っている通信機能が、爽やかな男の声を拾う。

「でも、いいだろう。これでお前は、世界を救う英雄になれるんだから」

死にかけてモニターの向こう、自らを串刺しにするプセマをにらみ付け、あまつさえ鍵次は歯噛みする。

致命的な傷を物ともせず生存していられるこの現象は、明らかに魔術。それも敵であるエグゾルによってもたらされた魔術だ。

コクピットを割られた時点で、非常に高い恣意性を封入しておいたエーテル・ショックアブゾーバーは霧散している。搭乗者の生命維持において最大の力を発揮するエーテル・ショックアブゾーバーが無い以上、搭乗者は致命的な損傷を自身の魔術で治すしかない。

しかし鍵次は、魔術師ではない。魔術など毛ほども行なえない。かすり傷一つすら魔術で治せない彼が、大量出血に内臓破裂に呼吸困難に脚部切断と、致命傷の博覧会と化した自分の命を保てる道理はない。

必定、その生命維持は間近にいるエグゾルの魔術だと考えるしかない。

鍵次はエグゾルに貫かれ、包まれている。

「あまり痛くはないだろう？ 痛覚も遮断しておいたよ」

「そいつは、ありがたいな」

口にしつつ、鍵次は微塵の有り難味も感じてはいない。その意図に思い至っている以上、それは敵対する鍵次に利するものではないのだ。

抑えられていた痛みが再び、前触れも無く体を満たす。

「うげごがああがあがあああ！！」

人間とは、魔なる存在である。その奔放さは、ある意味で神や悪魔と呼ばれる存在さえ凌ぐだろう。

魔を作り、魔を纏い、魔を喚び、魔を従え、魔を討つ。

その心によって魔を精製し、その知性を持って魔を統制し、体は魔を顕現させる。

存在自体が魔の貯蔵庫。魔の制御機構。魔の原拠。

ならば、魔術的構造物を動かすのが目的なら。それ以外には用途が無いとしたら。制御と顕現を行なうに足るシステムが既に確立されていたら。ただエーテルを吐き出すだけで良いのだとしたら。

人間は、魔の詰まった袋と化す。

エグゾルに必要なのは、鍵次の魔力。小鍵機関を十全に動かすためには、この世界で唯一ゲーティアを動かせる存在である鍵次の、魔力だけが必要なのだ。

それ以外はむしろ、邪魔になる。

「おんぎゃあああああああああ！！」

自分でも驚くほど、叫びが続く。これほど叫んだことなどなかつ

た。その都度に鍵次の体から魔力がフレアのように浮かび上がって目の前の小鍵機関に吸い込まれていく。

致命傷を負わせながらそれをぎりぎりまで治癒し、痛覚の遮断と開放を断続的に行なうことで無理やり精神を揺さぶり、魔力を強引に搾り取る。

人をただの魔力庫と見做す、古典的でさえある拷問方法。それがどうにも鍵次には、有効であった。

こん、こん、こん。地底を巡り巡った水がここぞと湧くような、微かで力強く、荘厳な音色。鍵次の魔力から精製されたエーテルが、さらなり力の呼び水となっていく。

何度聞いても、激痛の中で聞いても、それは心地よく鍵次の心根を打つ。

鍵が開く音。全てを封じ込め、全てを解き放つ鍵が、始まる。

「もつと、もつとだ！ まだ足りないぞ鍵次！ 世界を救うんだろう？ もつと気張れ、もつと叫べ！ 何もかも振り絞って、お前を出し切れ！」

言われずとも、鍵次は叫び続け、魔力を放出し続けている。否、放出させられ続けている。痛覚の覚醒と遮断を断続的に行なうことで常に瑞々しいまでの激痛を提供し、その信号によつて喚起される魔力を小鍵機関がたちどころに貪る。

まだ希望はある。全てが終わったわけではない。例え敵の思惑の中であろうと、鍵次が生きているのは確かなのだ。

望みはある。勝機はある。機会はある。まだ死んでいないのだから、待っていていれば、いつか

そのいつかが、果たして小鍵機関の起動よりも早いか、鍵次には分からない。というよりは、分かりたくもない。

いつそ、ここで舌を噛み切つて、小鍵機関の起動だけでも阻止するのが良策だろうか。我が身を賭して戦うならば、その結末こそ相応しいのだろうか。

死ぬべきだ。まだ待とう。いやしかし

優柔にして不断な思考は、ただでさえ痛覚による麻痺を間に挟み、ろくな進展を見せない。

漫然と、まんじりと、鍵次は世界を救うときを待つてしまっていた。諦めることさえ出来ず、しかし抗う術もなく、時間と、魔力だけが抜け落ちていく。

「……パパ」

瞬間、鍵次は叫ぶことをやめていた。時間と魔力だけではない。痛みさえ、彼の中からそっくりと抜け落ちてしまった。

それほどの衝撃。それほどの脅威。それほどの、声であった。

断続的に襲う激痛のなか、震える手で何とか通信ウィンドウを呼び出す。画面も割れ、エーテルの散逸した状態で起こせたのは、ノイズの甚だしい絵であった。

しかしそれでも、鍵次にも分以上だ。そこに微かに見える銀髪は、以前にも見たことがある。既にくすみが見えるメデイナの髪ではない。若々しい気力を充溢させた、娘の髪の色だ。

「ノンネ……」

それは娘にかけた言葉ではない。むしろ自分に向けたものだ。自分の中にあるものを、確認するための言葉だ。

## 英雄救済：？

どれだけ目を逸らしても免れない、純然たる事実を、鍵次はようやく受容した。

自分と同じ血が流れる人間がこの世にいる。これほど心強いことはない。自分に子供がいる、家族がいる、守るべきものがある。

いや、それはあつたのだ。ずっと前から存在していたのだ。それから鍵次は理屈をこねて逃げ回り、目を背け、認めようとはしなかつたのだ。

自分が、父親であることを

「パパ！」

言葉が、鍵次の中で弾ける。彼を中心として、エーテルが波紋のように大気を振るわせる。痛覚による魔力の生成などでは到底望めない純度と総量を持った魔力が、瞬間的に彼の体から飛び出した。

その波紋を至近で受けた小鍵機関が、がくりとその挙動を止める。今度こそ鍵次は、諦めがついた。事此処に至ってようやく、彼の中で決心がついた。

自分はもう、助からない。ならば最後に、世界を救ってやるうじやないか。ただそれだけの投げやりな心意気を捻出するまでに、とうとう二十年近く掛かってしまった。

単なる少女の声が、鍵次の内側を暴力的なまでにこじ開けてくれる。その後押しのおかげで、鍵次は死ぬ。その声のせいで、鍵次は死ぬ。

ただの小娘のために、別れた女の娘のために、何で自分が戦うのか。ただそこにいるだけでいい。生まれてきてくれただけでいい。これから生きていくという確信が、期待だけでもいい。そう思わせられるだけでいいんだ。

それだけで、俺は救われる。その奇跡が、俺に力を与えてくれる。俺に娘がいるという理不尽は、俺が父親であるという奇跡は、魔

術なんて及びもつかない。

「おおおおおおおおおおあああああああああああああ！  
！」

叫びと共に、鍵次の体が発火する。眩い緑色の炎がゲーティアの  
コクピットから立ち昇り、隙間から荒々しく吹き出てくる。

それらは瞬く間に小鍵機関へと流れ込み、止まっていた右手甲の  
鍵穴を高速で習動させる。もはや耳に心地よい蔽かな音ではない。  
エーテル合金さえも擦り切れてしまいそんな金切り声だ。

順調に小鍵機関が起動を開始するなか、もつともそれを喜ぶべき  
存在 エグゾルが、やはり顔を愉悦に歪ませていた。

「そつだ、もつと回せ。世界をまるごと包むほど、鍵を回せ！」

「ごうごうと流れ込むエーテル。高周波の唸りを上げて回る小鍵機  
関。それら全てが、エグゾルの行なう世界封印術式『スフラキタ・カタフィギオ封印聖域』の  
顕現を促進している。

あとはただ一言、その術式を呼ばわるだけだ。

「さあ鍵次、一緒に世界を救おうぜ！」

「いや、まだまだよ。まだ俺は、世界を救えない」

返事など期待してもいなかったエグゾルが、ここで初めて、ま  
もに鍵次を見遣った。

「謙遜するな。もうすぐエーテルは必要十分だ。あとは俺が、鍵の  
形を決めるだけ」

「だから、まだまだと言ったろう。エグゾル、俺は」

割れたコクピットから、我が身を燃やす緑の炎を纏って、鍵次は  
睨む。自分の乗るゲーティアに良く似た偽者を、その目に焼きつけ  
る。

「出し切っていないんだ。命も、人生も、未来も、希望も、まだ俺  
は出し切っちゃいないんだよ！！！」

コクピットを握り済める小鍵機関の掌に、鍵次は体を寄せた。よ

り直接的に、小鍵機関が魔力を吸い上げていく。

ここで初めて、エグゾルの顔色が曇る。本来ならば動くことすらままならない。そのように体を傷つけ、かつ治癒魔術にて生かしておいたのだ。それがこれほど自分の意思を表して行動するだけでも、十分に想定外の範囲外だった。

ましてやその口が 激痛に喘ぐのみしか猶予を与えていないはずだった口が、口訣を紡ぐなどというのは、魔術師である彼の理解の外である。

アポリトス・アベレフセロス  
「絶対開放」

エグゾルの逡巡など捨て置いて、鍵次は世界を救うべき言葉を紡ぐ。荘厳な音色が、太平洋の中心に響きわたる。

ゲーティアの右腕である小鍵機関は、瞬時にその形を無くして、本来の形態へと戻る。全てを解き放ち、全てを封じ込める鍵に戻る。一本一本が剣に似た鋭さを持つ節が五指から伸び、さらに分かれて腕の装甲さえも引き裂く。分かれ分かれて幾千幾万にも増殖した節は、互いに絡み合いながら筒上に整えられ、コクピットごと握られていた鍵次は、枝節の筒に囚われる。さらに延びる小鍵はゲーティアの体を、その背面までも貫いた。

今度こそ貫通されたゲーティアの機体はどろりと蕩けて形を無くし 寸でのところで留まった。

鍵次を包んでいた緑色の炎が、ゲーティアの全身となっている。中枢も、構造部も、関節も装甲も全て純粋なエーテルに変換され、かろうじて人らしき形態を残している。

アポリトス・アベレフセロス

絶対開放。ゲーティア自体を犠牲にして対象を封印する絶対封印

アポリトス・スフラギタ

と対をなす必滅奥義。それが行なうのは絶対の開放。対象の全てを解き放ち、この瞬間に発露させる必滅必死の最終奥義。

人格、感情、知識、本能、過去、未来 人間に備わった膨大な属性をまるごと力に変えてしまう不条理。ただ単に死ぬには留まらない。時間や空間の概念からも取り外され、存在自体をこの世から

消去されることの約束された瞬間である。

何もかもを失うことを前提とした、悪魔との契約にも似た取引だが、鍵次は躊躇うことなく紡ぐことが出来た。

自己犠牲で世界を救う。自分の我儘を押し通す。実に最強のメガロス乗りらしい、救い様ではないか。ゲーティアと同じエーテル炎に包まれて、鍵次はにんまりと破顔する。

死ぬる。どころか、消えられる。さあ、目を瞑ろう。ノンネを救えるという事実だけを見て、他のことには目を瞑ってしまおう。存在が消えるということは自分はノンネの父親ではなくなるということも、目を逸らして忘れてしまおう。

今や純粋なエーテルと化しているゲーティアの中で、突き刺さったバルダギスンシスと右腕の小鍵機関だけが確かな質量として浮かび上がる。

「許さないぞ、鍵次！」

どこか軽薄で、飄げた雰囲気をもたなかったエグゾルが、柳眉を立てて叫ぶ。

「世界を救う前に消える気か！？ させんぞ、そんな勝手は許さないぞ！」

「だったら、どうだというんだ？」

「小鍵機関、総展開！」

鍵次の挑発に、エグゾルは呪文でもって応える。

エグゾルの口訣を受けて、小鍵機関が再び蠢く。鍵次に奪われた小鍵の支配権を奪うべく、指令が下される。

既に節を延ばしていた小鍵が、スラキタ・カタフィキオ とも高速で回転を始める。

「封印聖域！！！」

ついに万感込めて唱えられた術式によって、小鍵を構成している節がばらりと解ける。ゲーティアの体から飛び出す光の触手は、入り組んだ幾何学模様を空に　ゲーティアとゲーティア＝プセマの周囲に展開する。

「な、ひ、広がらない、のか！？」

エグゾルの構想では、膨大なエーテルを注がれた小鍵の節が世界を覆い尽くし、全てを封印するはずであった。しかし魔術を顕現させてみれば、包まれているのはエグゾルと鍵次の二人だけであった。

驚愕に目を剥くエグゾルが、さらなる恐慌に陥ることになる。

すでに節を解きつつある小鍵に、ゲートティアの左手が添えられる。緑色の炎と化した掌は、小鍵と繋がれたバルダギスンシスを餌のようにとろけさせ、胸に突き刺さった右腕を勢いよく引き抜いた。

続いて響く口上は、件の小鍵の先から発せられる。

「我は鍵にして剣ならず、我は剣にして拳ならず、我は拳にして鍵ならず」

左手で引き抜いた小鍵機関を、天頂に向かって掲げる。引き摺られて飛び出したゲートティアのコクピットの中で、鍵次は小鍵機関の掌の上に包まれている。

そこから唱えられる命令は、より直截的に小鍵機関へと伝達される。

それは世界を封じる封印聖域スフラキタ・カタフィギオほどの威力を持たない。しかしゲートティアの代名詞の一つにして必滅の奥義である。

「スフラキタ  
封印」

左腕が突き降ろした小鍵機関が、過たずプセマのコクピットを貫いた。

封印聖域スフラキタ・カタフィギオを行っていた小鍵機関が、翻って収束していく。突き刺されたプセマに幾何学模様の蔦が絡まりあい、巨大な機体をかみ砕くように圧縮してゆく。

魔術的に封じ込められつつあるプセマの　そして閉まりつつある鍵の中で、二人の男が抱き締め合っていた。

プセマのコクピットシートに収まっているエグゾルの上に、鍵次が覆い被さっている。その脚と言わず背と言わず噴き出す血が、エ

グゾルを赤いベールに包んでいる。

いや、血を噴き出しているのは、鍵次だけではなかった。エグゾルもまた腹と言わず背と言わず血を流し、自らを赤く染めている。鍵次の胸や腹を貫通した破片たちが、エグゾルの体にも突き刺さっていた。

封印の一撃によって貫通した小鍵は、その勢いそのまま筒の中心にいた鍵次をプセマのコクピットに叩きつけていた。小鍵の節はエーテル合金のような魔術的構築物ではない。それは全てを解き放ち、全てを封じ込める概念である。中に包まれた鍵次は小鍵と共にプセマの装甲を透過し、エグゾルの直上に顕現、然る後に衝突した。

治癒魔術の名残と、絶対開放によって僅か生き永らえていた鍵次は、エグゾルとの衝突の時点でもはや幾ばくも猶予はなかった。

「世界を、救えたのに。お前なら、救えたのに……」  
名残惜しそうに、胸の上の鍵次の頭を掻き抱いて、エグゾルは呟く。

「救われてるよ、もう。ノンネがいるというだけで、この世界は、救われてるよ」

「他は、どうだっていいのか？ ノンネ以外なんて、くず同然か？ お前にそんなことを言える、資格があるのかよ？」

途切れ途切れなエグゾルの糾弾に、鍵次が返したのはくすぐったそうな笑い声であった。

「己の欲するところを、行なう。それが、魔術。資格なんて、関係ない。そんなものさえ、煩わしくて、魔術師《お前ら》は、ずる《魔術》をする」

血の気の失せた死相でも、まだ鍵次は朽ち果てない。小鍵が閉じるそのときまで、絶対解放の効果が彼を生かし続けてくれる。

「いいじゃ、ないか。俺にだって、俺だって、少しは、使っても、いいじゃないか。我俣を、通しても、いいだろう？」

こん、こん、こん。彼らをぐるりと覆う小鍵が、徐々に回転を抑え始める。

鍵が、閉じる。全てを解き放ち、全てを封じ込める鍵が、閉じようとしている。鍵次を苛んでいた痛みが、とうとう消える。絶対解放がその役目を果たそうとしている。鍵次の因果が解き放たれ、末端から散り散りに解けて消えていく。

こん、こん、こん。一つ鳴る度に、自分が消えていく。感覚の消失がそのまま存在の消失として、鍵次には感じられる。

世界を救った自分も、救い損ねていた自分も消える。ゲイティアを降ろされた自分も、再びゲイティアに乗った自分も、その戦いの日々も消える。

ノンネを捨てた自分も、ノンネを受け入れた自分も消える。父親になりきれなかった自分も、消えてくれる。

何もかも、消えて失せる。自分の過去も未来も、罪も活躍も一切合切、区別無く消し去る。

それでも、残るものはある。この世界にたった一人、いてほしい人がいる。

限りなく鈍る鍵音が、妬ましい。いつそ呵責も猶予もなく閉じてくれれば、こんなに悩まずとも済んだのに。

こんな言葉を吐くことも、なかったのに  
「ノンネ」

重なる轟音が、鍵次の全てをかき消した。

ノンネは、立ち尽くしていた。呆と見上げる先には、いつもと変わらぬ雄姿を見せるメガロス　ゲイティアがいた。

太平洋上の島　フリースランドと名づけられた、かつて魔術結社『イガーサ』によって作られたという島で発見されたメガロスを、ノンネは見上げている。

日本の魔術師管理機構であるレメゲトンの預かりとなっているゲイティアは、格納庫の中で佇んでいる。ノンネはエレベーターに乗

って、その様をゆっくりとねめつける。

このメガロスが何であるかは、誰にも分かっていない。魔術結社『イガーサ』と魔術師連合軍との総力戦の際、フリースランドに現れたのである。その後は研究者達によって散々分析されたのだが、結局これといったことは判明しなかった。実のところ、メガロスかどうかすら怪しい代物である。

ゲーティアの胸部まで至ったノンネは、装甲の裏にあるレバーを押し、コクピットを開放した。斜めに走る洞の奥目掛けて身を滑らせ、コクピットシートに体を収める。

搭乗者の存在を確認し、自動的にゲーティアが起動する。閉められたコクピットにはエーテルが封入され、次第に機器の類も立ち上がる。

このゲーティアに乗れるのは、今のところノンネだけであった。他の魔術師を乗せる実験も行なわれたが、結果は一般人を乗せたときと同様、まったく起動の兆しを見せなかった。

魔術師ですらないノンネにしか操れないメガロス。不可解で不合理で不安定なメガロスだが、その力は絶大だった。

「ノンネ、準備はいい？」

コクピットに響く声を受けて、ノンネは改めて機器に表示されている数値を確認する。

「起動終了。いつでも」

言葉短いその返事で十分だったのか、通信の奥で微かに頷くような音がした。

「カロ・コティクス暗号参照、アンドレアルフス」

ノンネの声を受けて、ゲーティアの右手甲にある鍵穴が一人での回転を始める。一周ごとに精霊アンドレアルフスの力が励起され、ゲーティアの背部に顕現する。

広い格納庫の中、ゲーティアは背中から生えた翼を目一杯に広げる。鳥の翼を持ち、空を自由に飛び交う術を持つアンドレアルフス

の力を顕したゲーティアが、今にも羽ばたかんとして翼を撓めて  
いる。

「発進、良ろし」

撓めていた翼を今度は上に持ち上げて、ノンネは叫んだ。

「ゲーティア、行きます！」

翼の羽ばたきが、ゲーティアの巨体を真上に引っこ抜き、ノンネ  
は一気に五千メートル上空まで舞い上がる。そのまま目的地 沖  
縄周辺に現れたメガロスによるテロ行為を鎮圧するべく一路南へ向  
かう。

魔術結社『イガーサ』が活動を停止させたあとも、魔術師による  
テロ行為は後を絶たない。例え得体の知れないメガロスでも、戦力  
になるなら駆り出されるのが現状であった。

魔術師でなくてもメガロスを操れるならと、ノンネはレメゲトン  
にメガロスパイロットとして雇用された。レメゲトンで働いていた  
母には複雑な顔をされたが、それでもノンネには、ゲーティアに乗  
りたいという確固たる意思があった。

フリースランドで発見されたゲーティアは、特に中枢部の破損が  
ひどく、まるで抉られたように中身が曝け出されていた。

その回収の際に発見されたという写真を渡されたとき、ノンネの  
人生は決定した。

三歳くらいの自分と、まだ若い頃の母が、遊園地のアトラクショ  
ンを背景にして映っている。

自分とは何の縁もゆかりもない謎のメガロスから、自分の写真が  
出てくる。その事実を、ノンネは未だに理解し切れておらず、受け  
入れることが出来ずにいた。

だからこそ、ゲーティアに乗る。

このメガロスが自分にとっての何なのか、自分はこのメガロスに  
とっての何なのか、全ての決着を見るためにはゲーティアに乗るほ  
かなかった。

ノンネには、父親がいない。母親に聞いても、分からないと言う。彼女の言い様では、いつのまにか身ごもっていたと言う。まるで処女懐胎のようだが、しかしそんなおとぎ話を聞き入れるほどノンネは子供ではない。

そこに現れたゲーティア。このメガロスからもたらされた写真の不可解は、彼女の中に一つの疑問を浮かび上がらせるには十分な魅力を秘めていた。

ゲーティアには、父親が乗っていたのではないか？

その如何がゲーティアに乗って分かるのなら、乗ることが戦うことと同義なら、それでも構わない。それで自分のことが分かるのなら、乗ってみせる。

ゲーティアに、父親の影を感じてみせる。

眼下に見える映像を拡大すると、一体のメガロスが沖縄に向かっているのが見えた。太平洋を悠々を航行し、今にも上陸しようとしている。

メガロスによる地上・市街地戦闘は可能な限り避けるべきだ。無駄な人死に出すのはノンネの主義に反する。

だからこそ、一撃で決める。

「小鍵機関、総展開」

高周波を立てて回転する小鍵機関が、滑らかな動きでその機構を解いていく。装甲の継ぎ目に従って、部品が爆ぜ割れて飛び散っていく。

「我、鍵にして拳ならず。我、拳にして剣ならず。我、剣にして鍵ならず」

口訣が紡がれ、飛び散った部品が目まぐるしく入り乱れる。小さなそれらの一つ一つが形を変え、扁平に伸びてゆく。一度は散逸したそれらがもう一度集まり、何かを形作ってゆく。

淡白い光を帯びたものが、今は右腕の代わりとなっていた。握り締めていた拳は既に無く、あるのは長く剣のようになった鍵だけだ。

拳のような、剣のような、鍵のような、小鍵機関の真の姿。ゲート  
ニアの最終必滅兵装。

「でやああああああああああ！！」

右腕を引き絞り、ゲートニアは一直線に敵メガロスへと急降下を  
開始した。

まるで鷹が兔を狩るが如く、大きく翼を広げたゲートニアが敵メ  
ガロスに覆いかぶさり、そのまま海中へと押し倒した。

もはやその姿さえ判然としないほど回転する小鍵機関を、押さえ  
込んだ敵メガロスの中心に差し入れる。

スワラキダ  
「封印！」

対象の魔的構造を小鍵によって解読、然る後に封印する、ゲート  
ニアの必滅奥義。

それ自体が膨大な魔術呪法の塊であるメガロスに行えば、跡形も  
残らず縮退させ、全てをどことも知れぬ彼方に追いやってしまう。

光と共に忽然と消えたメガロスの場所を埋め合わせるように、海  
水がどうつと流れ込む。澄み切った紺碧の中、徐にゲートニアは立  
ち上がる。

小鍵機関を元の右腕に戻して、ノンネはそのまま暫し景觀に見入  
ることにした。

ねっとりとした熔鉄のように沈み行く夕日も、僅か盛り上がる影  
が見える。

その影こそ、魔術結社『イガーサ』によって作られた島　フリ  
ーランド。ゲートニアが見つかった、最初の場所。いつかノンネ  
は、あそこに行かねばならない。確信だけが、彼女の中で膨らみ続  
ける。

そのとき自分は、確かめられるのだろうか。自分とゲートニアの  
関係を、会ったことのない父親の存在を

南海を走る残照を、翼の生えた巨人はいつまでも眺めている。消  
えかけた光の先に、己の欲するところを見出して、いつまでも見つ  
め続けている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2245s/>

---

超魔導機鋼 ゲーティア

2011年9月4日03時13分発行